
L a s t c o l o r

蒼井 紫杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last color

【Nコード】

N1316BD

【作者名】

蒼井 紫杏

【あらすじ】

消えぬ過去の傷、抗えぬ未来への恐怖に怯える16歳の少女ユキ。望まぬ結婚を受け入れ、流されるままに生きるユキの心を動かしたのは…年上の女性だった？

基本的にはユキの成長と恋の行方を綴ったお話し。

基本的には…？

ヴァンパイア要素を含みます。

GL万歳につき、百合要素を多分に含みます。

プロローグ(前書き)

やらしくない、やらしくないよー

プロローグ

「…はあはあ、っはあ」

朝と呼ぶには早すぎる、まだ暗い空気の中に少女の荒い呼吸だけが聞こえる。

「はあはあ……………はあはあ」

まだ、夢から目覚めていない少女の目から止めようのない涙が流れていた。

夜の暗闇と朝の匂いが交じり合う冷やされた空気の中で、静かに灯る室内灯に照らされた綺麗な横顔が何かを堪える様に歪む。

「はあ…うづう、いや……………いやっ!!!!」

荒い呼吸だけを繰り返していた、少女の口から小さな悲鳴が漏れる。

「いや、やあ…はあはあ…いや!!」

拒絶する言葉を繰り返しながら少女はうなされ続けている。

「うづう、はあ、はあ…いや、いやあ…いやああ!!!!」

自分の叫び声で飛び起きた少女は、荒い呼吸を繰り返し、華奢な自分の体を両腕で抱きしめ震えていた。

うっすらとかいた汗でまとわりつく、腰まである長くまっすぐなブルンドの髪が少女の顔を覆い、流れる涙をも隠す。

どれほどの時間がたったのだらう。やがて呼吸が静かになり、抱きしめた腕から少女が顔を上げたのは、空が明るくなり始める頃だった。

少女は小さく周りを見回し、少しずつ明るくなってきた自分の部屋を確認する。

そこは、まぎれもなく少女に与えられた私室だった。

小さな机と、骨董品と言われそうな鏡台と筆筒、備え付けの本棚、少女が寝ていた薄い布団、襖一枚分の押入れと簡素な手洗い場、ただそれだけの殺風景な部屋。

年頃の女の子の部屋とは思えない茶色い色合いの部屋で、少女は小さく溜め息をついた後、ゆっくりと立ち上がる。

立ち上がった拍子に、天井からぶら下がった電灯のつり紐が、少女の頬を掠めた。

平均的な日本人女性からすれば、少女は背が高い。

顔や髪にまわりつこうとする紐を無視し、少女は布団をたたみ押し入れに上げた。

最近になってようやく体に馴染み始めた布団の上げ下ろしが、少女の一日の始まりと終わりを示す。

少女はひとつ大きな溜め息をつき、手早く身支度を整えた後、自分を騙す様に鏡に向かって笑顔を作る。

鏡に映った少女のグリーンの瞳は、とても笑っているようには見えず、暗く沈んだ濁りを見せる。

それを認識している少女は、また大きく溜め息をつき、長く伸ばした前髪で顔を隠した。

少女は静かに廊下に繋がる襖を開け、耳をすませた。

まだ、薄暗い廊下に人の気配はない。

温まる気配も見せない冷たい廊下に静かに足を下ろし、静かに、しかし急ぎ足で廊下を進む。

「ユキさん」

「っ！」

突然、後ろからかけられた威かな声に、少女はびっくりと体を強張らせた後、顔を見ずとも分かる声の主に向かってゆっくり振り向いた。振り向いた先に、小柄な人影が浮かぶ。

ゆっくりと近づいてきた姿は、初老の女性だった。

「おはようございます。千草様」

少女は小さな声で挨拶をし、女性から逃げるように視線を外す。

「ユキさん、今週の土曜日に香山に行きます。予定しておきなさい」

少女の挨拶を無視し用件だけを述べたあと、女性は少女の返事も聞くことなく、廊下の奥に戻っていった。

女性が廊下の奥に消え、姿が見えなくなった後、無意識のうちに詰めていた息を静かに吐き、少女は勝手口に向かった。

勝手口脇の姿見に映った自分の制服を整える少女の顔は、感情を隠し、作り物のように無機質な美しさだけがある。

少女は扉を閉め、ようやく明るくなり始めた空を見上げた。

少女は自分の存在理由を求めている。

少女はまわりに流されることで存在していた。

少女は温もりを求めている。

少女は温もりを失った。

少女は家族を求めている。

少女は家族を救えなかった。

少女は罰を求めている。

少女に罪はなかった。

少女は死を求めている。

少女は死を許されなかった。

少女は…

プロローグ（後書き）

始まりました。

暗いプロローグですが、乗り越えてください！

第1話（前書き）

目標1週間に1話更新…

とかムリムリ！

遅筆ですから！！

シリアスになり過ぎないように気をつけてるんですけどねえ

蘭ちゃんの話し方に違和感があったので修正

第1話

「おはよう」

「おはよう」

毎日変わらない、いつも通りの挨拶が教室に広がる。

自分に向けてかけられた言葉じゃないと分かっていたので、わたしは手元の文庫本から顔を上げることなく、まわりとの壁を作ることにした。

この学校に入学して半年以上が経ち、友達のグループが出来上がっているこの時期に、いつも一人でいるのは女子高生としては希少な存在だろう。

入学当初はクラスに一人はいるようなおせっかいな級友が、なんとかクラスに馴染ませようとしていたようだが、休み時間の度に本を読み、声をかけないでオーラをだすうちに諦めてくれたらしい。

中学の時は声をかけないでオーラが通じず、気取っているだとか調子に乗っているだとか言われてよく女子から絡まれていたが、この学校にはそんな生徒はいないようで助かった。

幼稚園から大学まであるカトリック系の女子校。聖アンテルス女学院。

比較的裕福な家庭環境の子供が集まり、歴史も古く、イギリスに姉妹校があり国際交流学科もある為、留学生も多い。

御婆様から入学する事を決められていたので自分で選んだわけではないが、この学校の校風は気に入っていた。

声をかけないでオーラを出して静かに気配を消していようが、非常に目立つ事くらい自分でも分かっている。

長く腰まであるストレートの金髪。

長い前髪で隠した緑の瞳。

日本人では見かけないような、白い肌。

未だ成長途中の身長と細く長い手足。

わたし自身、自分が目を引く容貌だと認識していたし、それ以外ではなるべく目立たないように気をつけていた。

そんな事をぼんやり考えている間に少女たちの挨拶の声が多くなつた気がして、なんとなく手元の文庫本から顔を上げた。

「あつ、遠野さん、おはよう」

ちよつど前の席の子が登校してきたところだつたらしく目が合ってしまった。

目が合ってしまったからには挨拶をしないといけないと思ったのか、彼女はさらつと挨拶をしてくる。

「…おはよう」

自分にかけられた挨拶を返さないほど人間を忘れているつもりはないので小さな声で挨拶を返す。

彼女は少し驚いたような表情をしたあと、自分の席に座つた。

普段、滅多に言葉を交わすことのないクラスメイトと挨拶できたことに驚いたのかもしれない。

出来るだけ交流を避けているだけで、挨拶くらいは返すのに…
どんな人でなしとおもわれてるんだろう？

「今日は、朝拝はなくて講堂だね」

「…?」

あれ？わたしに言ってる？

前を見ると、少女が座ったままこちらを振り向いている。
まだ会話は終わっていなかったようだ。

「…そうなんだ。教えてくれてありがとう」

こんな時期に全校集会？何かあったかな？

「新しい先生の着任式らしいよー」

あつ、説明してくれた。

「新しい先生？」

こんな中途半端な時期に？

「保健の美智子先生が産休で、代わりに先生がくるみたい」

「それは知りませんでした。ありがとう」

養護教諭の名前が美智子先生だということも知らなかった。

「いーえ、どういたしまして。私、情報通だから、なんでも聞いて
ね」

まず聞きたい。あなたの名前はなんですか？

なんて、同じクラスになって半年以上たつのに聞けるわけないけど…
ましてや目の前の席なのに…

うん、ごめんなさい。やっぱり人でなしでした。

取り合えず、これ以上打ち解けるつもりもなかったので小さく微笑

んで会話を終了させる。

情報なんてものに興味はないし必要性も感じないから、彼女と話す機会はあまりなさそうだ。

わたしは、この学校で誰とも関わらずに静かに過ごしたいと思っている。

だから、わたしに必要なのは情報ではなくクラスメイトとのいい距離感。

名前を覚えてないのは行き過ぎかもしれないけど、他人に興味を覚えることは他人との距離を縮めることに繋がるから、これくらいやりすぎでいいのかもしれない。

半年は無事に過ぎたんだから、このまま誰にも興味を持たず誰からも注目を集めることなく静かに生活していけば大丈夫。

ちよつと日本人離れた容姿かもしれないけど、幸いこの学校には留学生も多いからそんなに目立っていないはず。

誰かと仲良くなるなんて…

そんなの怖い……

だから、誰もわたしにかかわるな。

「……さん」

「……」

「……さん、遠野さん！」

「えっ!?!」

どうやら少し考え込んで、ぼんやりしてたらしい。

何度か名前を呼ばれていたみたいだ。

前の座席の彼女がこちらを見ている。
もう話は終わったはずなのに、まだ何かあるのだろうか。

「…なんでしょうか」

できるだけ喋りかけるなオーラを出しながら質問してみる。

「ねえ、顔色が悪いんだけど大丈夫？」

あー、心配してくれてるのか。

友達でもないただのクラスメイトの事まで、そんなに気を配らなくていいのに。

正直、こういう時はそつとしいてくれたほうがありがたい。

「ええ、ありがとう。少し外の空気を吸って来ますね」

心配してくれてる彼女には申し訳ないけど、このまま彼女と会話を続けると、どんどん気分が滅入ってくるので物理的に会話を終了させるために教室から離れることにした。

さて、いざ教室を出ても特に行く当てはない。

彼女には外の空気を吸いに行くと言ったけど、中途半端な時間だし登校のピーク時間を迎えている校舎周りをうろろろするのは余計にしんどいことになりそうだし……

時間があるなら図書館で一人の時間を満喫するんだけど…
いっそのこと全校集会なんかサボりたいんだけど、なるべく自立たないようになっている身としてはそんな選択肢もないからなー。

うーん、仕方ない。ここは無難に一度トイレに行ってくるか。
顔でも洗って戻ればちょうどいい時間になるだろう。

最近あんまり眠れてないせいで少し頭もぼーっとするし、丁度いいかもしれない。

蛇口から出る冷たい水で顔を洗う。

濡れたままの顔をそのまま正面の鏡に映した。

確かに顔色は良くないかもしれない。

今日はなるべく早く寝てみようかな。

キーンコーンカーンコーン…

顔をハンカチで拭い、トイレから出ようとしたときに予鈴が鳴り響いた。

この学校の生徒は大体予鈴が鳴る前には学校に着いているので、そろそろ廊下を移動する生徒の数も減ってきている。

えーっと、今日は朝拝がなくて全校集会なんだから一旦教室に戻ってみんなで移動すればいいんだよね。
いいタイミングで教室に戻れそうだ。

そんなことを考えながら廊下の角を曲がろうとしたとき前方から小さな影がぶつかってきた。

「つきや！」

「つつ」

衝撃でしりもちをついたユキの上に紙の束がバサバサと降ってきた。

「大変！ごめんなさい！」

恐らく、ぶつかってきた小さな影の主である少女が慌てて起き上が

り驚いてフリーズしているユキに声をかけてきた。

「荷物であまり前が見えなかったもので。私の不注意でした、申し訳ありません」

ぶつかった理由と謝罪の言葉を口にしながら、未だ立ち上がらないユキに手を伸ばしてきた少女の手を避け一人で立ち上がる。

「どこか痛むところはないですか。念の為、保健室に行きましょうか？」

手を避けられたことに気分を害した様子もなく、少女は心配そうな顔で少し俯き気味のユキの顔を覗き込んでくる。

「少し驚いただけです…。怪我もしていませんし、大丈夫です」

少女の目線から逃げるように顔を逸らしたら、廊下に散乱した紙の束が目に入った。

表向きの用紙には「清算書」「報告書」などの文字が見える。

何かの委員会？それにしても凄い紙の量だなー

「遠野さん、顔色が悪いようですが頭を打ったりしたのではないですか？」

あれ？名前を知ってる？

逸らした顔を元に戻し彼女の方を見る。

背は低く、ユキの口元くらいまでしかない。

色素の薄そうな焦げ茶色の髪はウェーブがかかり長く伸ばされている。

万人受けしそうな整った顔立ちは日本人の同級生にしては大人びた印象を与えた。

「大丈夫です。少し気分が悪かったただけなので…。心配はいりませんよ、東條さん」

東條蘭

わたしは少女のことを知っていた。

というか、周りの情報を一切シャットアウトしているユキでも知っている有名人なのである。

入学早々に生徒会から指名を受け生徒会入りし、9月の生徒会役員選挙で副会長となった秀才。

この学校の生徒会は生徒会長と副会長だけが選挙で選ばれ、その他の役員は会長が任命するのだ。

幼稚舎からずっとこの学校で中学の時も生徒会長をしていたらしい。卒業式では卒業生代表、入学式では新入生代表と非常に目立つ存在。学年主席で人当たりもよく、1年で生徒会役員選挙に名前があがるくらい人気がある。

同じくエスカレーター組の生徒たちからの人気も高いが外部受験組、違う学年の生徒からも慕われているので恐らく来年は生徒会長様だろう。

目立ちたくないと思って生活しているユキとは正反対の存在だ…

一緒にいるだけでも注目を集めるのに、廊下に書類をぶちまけた今の状況は全く持ってよろしくない。

登校の時間なんてとくに過ぎて移動を始めてるクラスも出てきたようだ。

なるべくなら早くこの場を離れたいけど、廊下に散乱した書類と東條さんを放置するのは間違ってる気がするし…

「気分が悪いようならお送りしますから、保健室に行ったほうが良いのではないのでしょうか？」

東條さんは、誰に対しても分け隔てなく優しいらしい。

がしかし、この書類が散乱している状況はどうするつもりなんだ？

「……………」

「……………」

ダメだ、保健室に連れて行く気満々で書類が視界から消えている。

「あの…ホントに大丈夫なので教室に戻りましょう」

そう言いながら廊下に散らばった書類を拾いだすと、東條さんもやっと状況を思い出したらしく慌てて書類を拾い集めだす。

「大変！もう移動が始まっているのですね！！」

なんだ？想像してた人物像より人間くさい。

もっと完璧人間を想像していたんだけどこんな一面もあるんだ。

「順番とか関係なく積んでしまいますので、後で整理して下さい」

声を掛けながら自分のまわりに散らばった書類を持ち上げ東條さんの方を見ると、彼女も書類を抱えて立ち上がったところだった。

「ありがとうございます。この上に置いて下さいますか？」

そう言いながら自分の持っている書類を目で示した。

「……」
「……？」

いやいやいや、その書類の上に置いたら目線が隠れるよねっ???

というか前とか見えないよね？

そりゃ人にもぶつかるよね？

はぁー！

思わず溜め息も漏れるよね？

「東條さん…一緒に運んでしましましょう。その方が早く終わります」

「あっ！」

あー、係わりたくないー！

さっさと運んでしまおうと書類を持って先に歩き出すと、東條さんも追いかけてきて横に並んで歩き出す。

目立ってるよー！

「東條さんの教室でいいですか？」

「すみません。そうしてくださると助かります。ぶつかってしまつた上にお手伝い頂くなんて…御迷惑をお掛けしてしまい重ね重ね申し訳ありません」

「…凄い量の書類ですね。一人で運ぶのは無謀だと思いますよ」

「そのようですね。お陰様で自分の限界が判明致しました」

そう言いながら笑つた東條さんは学校のスーパースターではなく普通の女の子だった。

ユキの望む普通がそこにある。

羨ましい…と思うと同時にこれ以上近づいちゃいけないと思った。

東條さんの教室に書類を置くと全校集会の始まるぎりぎりの時間と
なっていた。

今から向かったらぎりぎり…

「一緒に運んで頂けて本当に助かりました。集会には間に合わない
ようですが、先生方には生徒会の手伝いをしていただとお伝え下さい」

間に合わないかー

「分かりました」

取り合えず集会中に堂々と入るのは目立ち過ぎる。こっそり入らな
いと！

こっそり！

こっそり…

「……………」

「……………」

「…東條さんもこのまま講堂に行くんですか？」

「はい、そのつもりなのですが？」

はい、こっそり入っても目立つことが確定しました。

ああ、そんな「何か問題でも？」みたいな目で見られても…

「…では、いきましようか」

「ええ」

講堂の重い扉を静かにゆっくり開き、生徒達の中をこそこそと移動
する。

こついつた全学年が集まる集会では1年生から順に、2年3年と前

から座っていく事になっている。
つまりユキたちの座る席は前方なので、たどり着くまでに嫌というほど注目を集める羽目になった。

そんなにこつちに注目してないで前見なさい！前！！

美智子先生とやらが何か喋ってるよ！！！！

聞いたげてー！！

注目の視線に耐えてクラスの近くまで来たのはいいけど、ユキのクラスは生徒達の前を横切らないといけない。

「通路側の空き席に座りましょう」

小さな声で東條さんが空いてる席を指差す。

2席並んで空いてる気がするんですが…

このまま立ってても目立つだけなので座る方がマシだと思っことしよう。

カタン

……

カタン

やっぱり隣に座るのね。

座れたことで衆目に晒されることはなくなったが、近くに座っている少女達は興味津々でこちらを気にしているのを隠そうともしない。

東條さんも煩わしいと思うんだろうか？

隣を窺うと何事もなかったかのように正面を向き、式に集中している。

なるほど、全く気にしていないんだ。
わたしも東條さんを見習うことにしよう。

正面を向く。いつの間にか離任式は終わっていたようで、結局【美智子先生】がどんな先生だったのかわからずに終わってしまった。続けて着任式が行われ、教頭先生が新しい先生の略歴と紹介をしているようだ。

なんだか寒い

教頭先生が何か話してる。

ぼーっとする。

あー、そういえば体調悪いんだっけ

気がつけば教頭先生の話は終わって、今は女の人の声が聞こえる。

聞こえるけど…何を言ってるの？

体が冷たい

目の前が暗い

周りがざわついている

隣から体を引き寄せられた

寒い

重い

暗い暗い…

そしてわたしは意識を手放した。

第1話（後書き）

ユキ、よく聞きなさい。

蘭ちゃんは普通じゃないでしょ…

普通の少女を目指すなら蘭ちゃんじゃまずいって！

第2話（前書き）

暗い暗い…

って、ホントに暗いわ!!

そろそろ恋愛要素出てもいいんじゃないの？

シリアス小説ちゃうねんけどな…

第2話

暗い暗い…

なんでこんなに暗いんだっけ？

ああ、目を瞑ってるからだ…

誰かの声が聞こえる

誰の声だっただろう

懐かしい声

…ママ、パパ

そうか、これは夢だ

目を開けると車の助手席から振り返るママの優しい笑顔がわたしを見ていた。

ママの隣には運転席から微笑んでいるパパがいる。

…いつもの夢だ

自慢の両親だった。

日本人とイギリス人のハーフで、美人で明るい性格のママ。

日本語は敬語しか喋れないなんて言ってた真面目でお人好しのパパ。将来はパパみたいに尊敬できる先生になりたいって言ったらママもパパも凄く喜んでくれた。

頑張って希望の学校に合格した時はこっそり勤務先の学校から抜け

出についてきてたパパが道の往来で男泣きして、つられたママまで泣き出した。

ママのグリーンの瞳とパパのブロンドの髪。

ユキはママとパパのいいとこばかり集めて出来た奇跡だよって言いながらギュツと抱きしめてくれる二人の愛情を毎日感じてた。

そう、この悪夢の一日が始まるまでは…

休日になると降り出す雨のせいで家に閉じこめられる週末が続いた。元々外で遊ぶことが大好きで活発だったわたしは朝起きて晴れ上がった空を確認するとママとパパにねだり近くの公園に向かったのだ。

車から降りたわたしたちは公園に向かってわたしを真ん中に手を繋いで歩き出す。

この日は朝から久しぶりのいい天気で公園には既に多くの人がいた。

木陰に荷物を置きママ手作りのお弁当を食べる。

学校に持っていくお弁当はサンドイッチとかが多いけど、家族で遊ぶときに作ってくれるお弁当はおにぎりが多い。

小さい頃から家で食べる料理も和食が多かったからわたしはママの作る和食が好きだった。

パパがおにぎりに齧り付く。

あっ、それ梅干し！

そうだ、パパは梅干しが苦手でママはこっそりおにぎりの具を梅干しにしてパパに渡してたんだ。

わたしの前で好き嫌いを言わないパパは眉間に皺を寄せながら、それでも平気ですって振りして最後まで食べる。

そんなパパの姿をいたずらを成功させたママと笑いながら見てた。

小さな子供みたいに無邪気にはしゃぐわたしと、わたしに負けないくらいはしゃぐママ、そんな二人を穏やかに微笑んで見つめるパパ。

大好きな二人

何時頃だっただろうか。

今まで晴れ渡っていたのが嘘のように急に空が暗くなったかと思うとすぐにどしゃぶりの雨が降り出した。

慌てて荷物を片付け車まで駆け戻る。

車の中で濡れた髪の毛をタオルで拭いていたとき誰かの声が聞こえた。

こんな土砂降りの雨の中でも聞こえるくらい大きな声にびっくりして、窓から目を凝らして外を見る。

雨の中傘も差さずに言い争っている二人の人影が見えた。

どうやらカップルのようだ。痴話喧嘩？

特に興味もなく髪の毛を拭く作業に戻る。

しばらくすると少し雨足が弱まり先ほど言い争いをしていたカップルの姿がハッキリ見えた。

真っ黒な髪の毛でアジア系っぽい童顔の少年と白金の髪を長めのウルフカットにした少年より背の高い少女。

優真とファイ。

私は二人を知っていた。

御近所さんで幼馴染み。

人見知りしない性格で誰とでもすぐ仲良くなれたわたしは友達も多

く、もちろん二人と遊ぶことも多かった。

フィーとは学校も一緒だったから親友と呼べる関係だったと思う。

ママもパパも二人に気付いて傘を渡すべきか悩んでるみたいだ。

痴話喧嘩に割り込むのに抵抗があるらしい。

痴話喧嘩？付き合ってるとか聞いたこともない二人だったから違和感を覚える。

口数が少なく少し年上の優真と活発で明るい男勝りなフィー。

わたしと出会うより前から二人は知り合いだったみたいだから不思議ではないんだけど…

そんなことを考えていた間にまた雨が強くなってきたらしく二人の姿を覆い隠そうとしている。

そろそろ止めにはいるべきだと思ったときに優真がフィーを引き寄せ抱きしめたように見えた。

あっ

次の瞬間フィーが優真の頬を勢いよく叩いて何かを叫んでわたしたちとは反対方向に走って去っていく。

ママとパパがあちゃーって顔してわたしのほうを見た。

わたしだってどうしたらいいかわからなかったけど雨の中フィーが去っていったほうを見ながら立ちつくす優真の後姿が声を掛けるのを躊躇わせる。

やがて遠くのほうで雷の音が聞こえわたしは車のドアを開けた。

優真がゆっくりこっちに振り返る。

目が合った一瞬とても辛そうな苦しそうな表情を浮かべた優真に駆け寄り黙って手を引つ張り車まで連れてきてタオルを差し出した。

わたしは優真が好きだったわけではない。

特別な感情はなかったと断言できる。

ただ、優真もフィーも友達だとは思っていた。

友達だから力になりたい。友達だから傷ついて欲しくない。友達だから笑って欲しい。

そんなことが自分に出れると思ってたんだから笑っちゃう。

大切なもの全て何一つも守れなかったくせに…

虚ろな目でぼんやりとしている優真を一人暮らしの家に帰るのが心配でわたし達はそのまま家まで連れて帰ることにした。

ママが上から下まで絞れるくらい水浸しになった優真をシャワールームに無理やり押し込んだ後、ママとわたしでキッチンに立ち4人分の夕食を作り始める。もちろん優真にも食べさせるつもり和食。あまり時間がなかったからママ特製の親子丼とサラダと味噌汁だけのシンプルな食卓。

パパのスウェットを着て出てきた優真をママが椅子に座らせる。

いつも無口な優真だったけど今日の優真は酷い。

フィーと何があったのか知らないけどシャワーで暖められたにも拘らず青白い顔をして、まるでこの世の終わりみたいな暗い顔をしていた。

この様子じゃフィーも落ち込んだりしてそう。彼女も一人暮らしだから心配だし後で連絡しなきゃ。

4人で食卓を囲む。

ママとパパが場を盛り上げようと話をしたけど優真はママの少し甘い味付けの親子丼を黙々と食べてた。

食事は進み優真が食べ終わったのを見てパパが優真に男同士で話をしようとして声をかけ二人で立ち上がりパパの書斎に向けて歩き出す。

ママが優真の後姿に「日本食はおいしかった？」と聞いた時、優真は立ち止まり振り返ることなく頷いた後「懐かしい」と小さな声で言った。

二人が消えた廊下を見ながら、今更優真が日本人なんだーって思ってた…

思ってた…

あれ？

日本人？日本食が懐かしい？優真はいつから一人暮らしだった？

ちょっと待って、わたしとフィーと優真は幼馴染なんだよ？

出会った頃を覚えてないくらい小さな頃から知ってる。

フィーも優真も一人暮らし。

いつから？

そんなわけない。フィーの家族も優真の家族も覚えてないわけないのに…

わたしが会おう前から二人は知り合いだった。

それっていつ？

出会った頃を覚えてないくらい小さい頃から知ってる。

ホントに????

瞬間、頭が真っ白になる。

うそ…

二人の小さい頃の姿が思い出せない…

ブブブツブブツ…

テーブルの上に置いた携帯電話の振動音に我に返って振り向くとマ
マがりんごの皮を剥いていた手を止め携帯をパスしてくれた。
受け止めたと同時に止まった携帯の着信通知を確認する。

ディスプレイにフィーの名前

ママに「フィーのことを知ってる?」って聞いたら不思議な顔で「
当たり前でしょ? 熱でもあるの?」って言われた。

ハハッ、わたしは何を考えてるんだ。大丈夫フィーは存在してるし
優真だって今パパと話してるんだから。

ちよつと昔のことが思い出せないだけで焦ってびっくりしちゃって
バカだな。

そうだ、わたしはバカだった…

もつと早く気付くべきだった。

そうしたらもしかしたら…

ママに電話してくると告げて廊下に出てからフィーのナンバーを呼び出し携帯を耳元に寄せる。

コール音もなくすぐに留守番電話に繋がったのでメッセージを残した。

『優真と喧嘩したの？何が原因か分からないけど相談に乗るから。また連絡するね』

電話を切り再びディスプレイを見るとフィーから伝言メモの通知があった。

行き違いで電話をしていたのが可笑しくて笑いながらも一度携帯を耳に寄せ伝言メモを再生する。

『今家にいるのか！？優真がきてもドアを開けるな！絶対家に入れるんじゃない！！！！』

いつも飄々としているフィーらしくない切羽詰った声に驚きながら思わずパパの書斎の方を見た。

窓を叩く雨の音が強まり遠くで聞こえていた雷も近付いてきているようだ。

イヤな予感がする。一步…また一步と静かに書斎のドアに近づく。

書斎の前まできたわたしの耳には分厚いドアが邪魔をして二人の会話は聞こえない。

ドアに近づき中から漏れ聞こえる声に耳を敬てる。

『……ユキはまだ知らな……フィーに……』

『……覚醒……お前では……』

『貴様の都合……わたしは退色して……』

ところどころしか聞こえない会話の内容は不明瞭だったけどわたしの話をしているのは分かった。
男同士の話じゃなかったの？

パパが貴様と言ったこともフィーのことを呼び捨てにしたことも優真がお前といったことも意味がわからない。

わたしが知らないパパと優真とフィー。

何がなんだか分からなくなっ後退りする様にリビングのほうに移動していたとき書斎の中から何かが倒れるような大きな音がして驚いてリビングのドアノブを握ったまま固まるわたし。

『貴様の思い通りにさせるか！！！！』

パパの怒鳴り声と共に書斎のドアが勢いよく開きパパが廊下に佇むわたしを見て目を見開き怒鳴りながら走り寄る。

『ユキ！逃げるんだ！！！！』

リビングのドアが向こう側から開き状況の分かっているママがパパに質問しようと口を開きかけるがパパがそれを遮りリビングに入つてドアを閉めドアの前に家具を積み始める。

バリケードだ…

ママが青い顔のままパパを手伝いながら短く質問した。

『ユキを？』

『…そうだ』

意味がわからない二人の会話。わたしが何？

どうしたらいいのかわからずただ呆然と立っているとパパが振り向いてわたしの目を見て言った。

『フィーのところに行くんだ』

有無を言わせない真剣なパパの目にわけがわからないまま頷いて動き出そうとした瞬間、突然目も開けていられないような暴風が部屋の中を吹き荒れバリケードにしていた家具が凄まじい音と共に部屋に散乱する。

暴風に飛ばされた体が壁にぶつかり息がつまる衝撃で気を失いそうになったわたしに覆いかぶさる温もり。

暴風が収まり最初に視界に入ったのは苦しそうに肩で息をしているパパ…

何かから庇う様にわたしを背中に隠しているパパのシャツは散乱した家具にぶつかったのかあちこち血に染まっている。

少し離れたところに見えたママも腕がおかしな方向に曲がってる。

わたしの口から悲鳴が漏れた。

目の前にあったはずのパパの背中が吹き飛び勢いよく壁にぶつかり動かなくなる。

わたしは泣きじゃくりながらパパの傍に駆け寄ろうとしたけど横から飛び出してきたママが手を引っ張り玄関に向かって走る。

逃げてるんだ

でも、わたしは知ってる

…逃げられない

リビングからの廊下を進んでいたわたしは後ろから強い力で手を引っ張られた。

右肩に激痛がはしり手をつくことも出来ないまま廊下に転がる。

廊下の床にぶつけて切れた額から血が流れ、激痛を伴ったままの右肩から先は動かすことが出来ない。

痛みに耐え薄く目を開いた先に、人影が見えた。

黒い髪に黒い瞳、少年と呼べる童顔で華奢な体。

優真…

あいつだ…

わたしと同じように廊下に投げ出されてたママがわたしとあいつの間に立ち塞がり手に持ったナイフを胸の前に構える。

ママがあいつに向かってナイフを振り上げ躊躇うことなくそのままあいつに向かって振り下ろした。

そんなんじゃないダメ…

ママはわたしに駆け寄りわたしを抱え起こそうとする。

目の前で起こっている事態を受け入れることが出来ずにただ泣きじやくるわたしを座らせギョッと抱き締めてくれた。

ママとわたしのいる場所に影が伸びる。

悲鳴をあげたわたしの声でママが後ろを振り返った。

あいつはナイフが刺さったまま近づいてきてママの目の前で止まり、自分に刺さったナイフの柄を掴んでゆっくり引き抜く。

引き抜いたナイフから血が滴った。確かにナイフは刺さっていたはずなのにあいつの服にはそれ以上血が広がることはない。

自分の体から引き抜いたナイフをあいつが横に振るった。狭い廊下の床と壁に大量の血が撒き散る。

涙でぼやけた視界のなか斜めに傾くママの姿
泣き叫ぶわたし

スローモーションのようにゆっくりと倒れるママの姿の向こうに
つちを見ているあいつがいる。

その瞳は赤く光り口元から覗く2本の牙

まるで現実感のない映像
B級のホラー映画みたいだ

そう、これは夢…

あいつは座り込んだまま動けないでいるわたしに近づいてきてわたしの目線に合わせるようにしゃがみ込んだ。

わたしの顎を無造作に掴み無理やり目線を合わされる。声は掠れ、涙で顔をくしゃくしゃにしたわたしは自分の死を覚悟した。

ここで殺してもらえると信じていた…

『孤独は死よりもつらいんだ』

今まで一言も発しなかったあいつが小さく呟いた。
意味が分からない。早く殺せばいい。

『家族を奪った僕が憎いか？』

抑えられない感情が沸き起こる。

『…殺してやる』

わたしの言葉を聞いてあいつは満足そうに言う。

『いい目だ。僕は君から死を奪う。君は君で死を見つける』

そう言って口を開いたかと思うとわたしの首筋に口を近づける。

なに？どういう意味？

いや！！やめて！！！！！！

あいつの牙が静かにわたしの首筋に穿たれる…

リビングのドアが激しい音を立てながら開きそこから人影が倒れこむようにあいつにぶつかった。

歩くこともままならない全身血まみれのパパ

ヒューヒューゴフツ

呼吸するのも辛そうなパパがわたしをみて悲しそうに微笑み立ち上がったあいつを睨んだ。

『ゴフツ…これで貴様は満足か？』

『ああ、満足だ。終わらせてくれ』

『……………』

パパが廊下に落ちていたナイフを拾い、抵抗もしないあいつの胸にナイフを突き立てる。

血が広がることもなかったさっきの光景が嘘のように、湧き出す止まらない血の中あいつは笑顔をつくって崩れ落ちた。

ゴフツゴフツ

あいつが動かなくなったのを見てパパが壁に手をつきわたしの傍まで這いずって来てわたしの手を弱々しく握る。

パパが動かなくなって間も無く誰かが乱暴に玄関のドアを開けた。立ち尽くす少女の驚愕の瞳。

フィー…

外の雨音と雷の音、駆け寄る足音と少女の声…

血の気が引き薄れる意識の中で微笑を浮かべたまま動かなくなったあいつを見る。

わたしの首筋を流れ伝う温かい自分の血と、あいつの口元から垂れる自分の血を見た瞬間理解できてしまった。

わたしはあいつと同じ化け物になるんだ…

そこでこの夢は終わる。

嫌な夢…

毎日毎日繰り返される夢…

全部夢………だったらよかったのに

わたしの幸せと呼べた最後の日

わたしを人とは呼べなくなった最初の日

暗い暗い…

上も下もない真っ暗な世界を漂う

暗い暗い…

『ごめんなさい』

『一人はイヤ』

『寂しい』

『許して』

『許して』

虚無の暗闇に自分の言葉だけが木霊する…

『死にたい…』

『……よつぷ』

……なに？

『…大丈夫。私がここにいるから大丈夫よ』

その瞬間ただ暗いだけだった世界が光を取り戻す。

明るい光の中女性がこつちを見ていた。

わたしの目を見て一瞬だけ驚いた顔をしたその女性は左手で震えるわたしの手を握り、わたしの髪を優しく撫でる。

初めて見る温かい夢。女神様が悪夢から助けてくれた。

神なんていないとつくの昔に分かってしまったけど、悪夢から開放してくれたこの女性は紛れもなく女神様なのだと思った。

『安心なさい。私がここで貴女を見ているから怖くないですよ』

眼鏡の向こうの目は少し吊上がった鋭い目をしてるのに、わたしを見る瞳が優しく自分で意味の分からない涙が零れた。

ただその女神様の手が温かくて、かけられた言葉が優しくして何かを許された気がした。

『大丈夫。大丈夫よ』

髪の毛を撫でられたままゆっくりと目を瞑る。

あの日から毎晩目を瞑ることが怖かったけど今は女神様がいるから大丈夫なんだ…

わたしは久しぶりに穏やかな眠りについた。

第2話（後書き）

ユキ…不憫な子

過去の姿が思い出せない…

つて、もっと早く気付きなさいよー！

そして、やっとここ出てきたのか女神様。

いやいやしかし、女神様つて…

ユキ…不憫な子…

第3話（前書き）

出てきましたね女神様：

やっと暗い部分を抜けたー！！

そういえば第2話で記載してなかったけど、「日本語」「英語」という認識で読んでみてください

第3話

温かい…

穏やかな温もりに包まれ、たゆたう意識に身を任せる。

カタン

小さな物音がしてまどろんだ意識のままゆっくりと目を開けると、ぼんやりする視界の先には女神様がいて、手元に下ろしていた視線をわたしに合わせた。

ああ、なんて温かな夢…

『…女神様』

そつと呟いたわたしの言葉に一瞬で顔を真っ赤に染める女神様

「…お、起こしてしまいましたか？」

「????？」

照れていることを隠しているのか早口で質問してきた女神様に一気に意識が覚醒する。

あれ？これ夢だよな？

確かにこんな夢、今まで一度も見たことないけど夢ですよな？

『大丈夫ですか？』

日本語が通じないと思ったのが、女神様が綺麗な英語で質問してくる。

いや、ちょっと待って？

…現実!?

「はあっ!?!?!?」

思わず驚きの声を発しながら寝ていた体を勢いよく起こす。

「くうう…」

急な動きについていけず激しい眩暈に襲われ傾ぐ体を女神様が慌てて支えてくれた。

いや、そもそも女神様じゃないしっ!

『急に起き上がったのはダメですよ』

め、女神様が注意を…って誰……っ!?!?!???

ってか、ここどこ?何がどうしてこうなった?

落ち着いて思い出そう…

えっと、今朝もいつも通り寝覚め悪く起きた。珍しく学校に行く前に御婆様に呼び止められたと思ったたら面倒くさい事を言われた。

うん、ここまでではまあいい。

学校について

いつもと変わらず、声をかけないでオーラで読書をして …… た
けど話しかけられたんだ。

はいはい、段々思い出してきた。

クラスメイトから逃げた先で、よりによって一番目立つ生徒の東條
さんと不慮の事故により不本意な関わりを持ってしまった。
そして仕方なく一緒に全校集会に行つて、離任式で美智子先生の姿
を見て…着任…式…???

ああ、なるほど

『あなたは全校集会中に倒れたんです。覚えていますか?』

『そうみたいです』

今思い出したところです!

人が考えて考えて出した答えを先に言っちゃったよこの人!

『どこか痛むところ、気分が悪いとかはありますか?』

言いながら女がm…女性は手に持っていたファイルを置いた。

『特にはありません。大丈夫です』

自分の置かれている状況を理解するために、あたりを見回しながら
答える。

自分が寝ていたのは白いカバーがかかったベッド。ベッドを囲むよ
うにした白いカーテン。

ベッドを囲むカーテンレールの造りから、隣にはもう一台ベッドがありそうだ。

白い壁に白い天井。窓際の机と白のカーテン。壁にかかっている時計。

見回せる範囲で目に映るのは全体的に白を基調とした清潔そうな部屋。

『保健室……？』

『ええ。集会中に倒れたあなたを病院に搬送しようかとも思ったのですが、呼吸も脈拍も安定していて、一度目を覚ましたあなたの様子から緊急を要する病気ではないと判断したんです』

よ、よかった。病院なんかには運ばれたら大変だった。

『ありがとうございます。少し寝不足が続いていただけですので、休ませていただいて回復しました』

『そうみたいです。顔色が随分よくなって。これ書けそうですか？』

そう言いながらクリップボードに紙を挟んで手渡される。

問診表みたいなものかー。

『書いてある文字が読めなければ声を掛けてください』

そういえば、女性があまりにも綺麗な英語だったから違和感なく英語で喋っていたけど日本語が話せると言うべきだろうか？

伸ばした前髪の隙間から女性を窺う。

さっき置いたファイルを手に取り、何かを書き込んでいた。

落ち着いた雰囲気。日本人の年齢はよく分からないけど二十代後半くらいかな？

整った顔立ちと同姓のわたしから見ても美しいと表現できる。薄く化粧をしているだけだろうその姿は、何故かわたしの目を離せなくさせた。

黒く真っ直ぐな長い髪が少しうつむいた女性の頬を滑る。書いていたペンを置き、髪を耳にかける。

細い指先。手入れされた形の良い爪。

口角の少し上がった唇。高過ぎず整った鼻梁。

細いフレームの眼鏡の奥の少し伏せた目はやっぱりすこし鋭いのに…引き込まれそうな…なんて

『綺麗な目』

ハッ！？

一瞬、自分が声を出してしまったのかと思って驚いて我に戻ると、いつの間にかファイルじゃなくわたしを見つめていた女性の視線とぶつかる。

その瞬間、まるで時が止まったかのように視線を外せなくなる。

『前髪が長すぎるかもしれませんね。視力が落ちてしまいそう。』

そう言いながら手を伸ばしてわたしの前髪を掻き上げる女性の指。動くことも出来ずに固まったままのわたし。

『それに折角の綺麗な目が隠れてしまう』

隠すものが無くなったわたしの視線と女性の視線が正面から絡み合い、女性の視線に囚われて動けなくなる。

何もかも見透かされているような、そんな気持ちになり不安を煽る。

胸が苦しい…

死ぬことのないわたしの胸をしめつける女性の視線……

キーンコーンカーンコーン…

チャイムの音にびくつと体を震わす。

女性がわたしの前髪から指を外し壁掛けの時計を確認した。

『午前中の授業が終わったようですね』

はぁー

何事もなかったかのように動き出した時間にホツとして、いつの間にか止めてしまっていた息を吐き出し固まっていた体から力を抜く。

午前中の授業が終わった？そんなに寝ちゃってたのか。

女性と同じように時計に目をやり時間を確認してから手元の問診表に視線を戻す。

えっと、日本語で記入してもいいのかな？

『あの』

コンコン

ガチャ

女性に話しかけようとした時、いいタイミングで小さくノックの音が聞こえ続いてドアの開く気配がした。

「失礼します」

「あら、またきたの？」

「心配ですので」

「休憩時間になるたびに来なくても心配ないわよ」

女性が扉のある方向を向いて生徒と話をしている。

…けど、この声って

「別に彼女が倒れたのは蘭の所為ではないでしょ」

「それはそうなのですが、集会が始まる前の時点で体調が悪そうだと分かっていたのに、保健室に付き添うこともせず講堂まで連れて行ってしまったのは私の責任です」

やっぱり東條さんでしたか。

…で、何故にそこまで責任を感じておられるのでしょうか。

高校生にもなって体調管理出来ずに倒れたら、そりゃもう自分の責任でしょうに。

「相変わらずの生真面目さね。もう少し緩く生きなさい。疲れるわよ?」

「ふふふ。みちる姉さんは相変わらず息抜きがお上手ですね。そのままでお話になってもかまわないと思いますよ?」

「私のは処世術よ」

さっきの女性がみちるさんだということが判明。

名字としては珍しすぎるので常識的に考えて名前だと思われる。

「それにお昼休みになりましたので、みちる姉さんとお昼を一緒にしようかと思ひまして。保健室で食事をして問題ないでしょうか?」

東條さんのことを蘭と呼び、女性のことをみちる姉さんと呼ぶ。

姉妹?はないだろうけど...

「お昼はかまわないけど、彼女目を覚ましたわよ。今保健室利用の書類に記入して貰ってるわ」

「本当ですか?安心致しました」

あつ、書いてない。

『東條さんが様子を見に来ています。調子が良さそうならこちらの机に移動してみてもどうでしょうか?』

みちるさん?がカーテンを開けながら声をかけてきた。

しかし、日本語と英語でえらくギャップがある気がするんですが気のせいでしょうか。

「顔色がよくなっているようで良かったです」

机に移動すると、予想通り東條さんが椅子に座ってこちらを見ながら安心した顔を見せた。

わたしはその笑顔に軽く会釈することで返し、用紙に記入する作業に戻る。

「矢原先生、彼女はもう食事を済まされたのでしょうか？」

「まだよ。さつき目が覚めたところだから。そうね、彼女も食べられるようならお昼を食べてもらったほうがいいわね」

「あの、矢原先生……？」

みちるさんの名字が矢原だということが判明。

そして、恐らく東條さんはあえて矢原先生と呼んだんだと思うけど、矢原先生は気付いてないのでしょうかね！。

『お昼を食べられそうであれば少しでも何か胃に入れたほうが良いと思うのですが、気分はどうですか？』

『あつ、はい大丈夫ですので教室に戻ります』

体調不良の原因である睡眠は十分取れたし午後の授業くらい出ないと。

「お昼を御一緒にしませんか？」

「そうね、食後様子を見て今日は早退してもらおうと思っていました」

『東條さんが心配して、ここでお昼を食べようと用意してくれたようです。クラスメイトの方が早退用にカバンも用意してくださっているのです、ここで食べましょう』

東條さん……なんてこと言うんですか。

そして、矢原先生……通訳御苦勞様です……

そしてそして、今は早退するほど体調が悪いつてもないんですけど…？

『わかりました。ですが、お昼を食べたら教室に戻ります』

『今日は様子をみて帰るようにしたほうがいいですね。まだ月曜日ですし、担任の先生も御家族にそのように連絡したと話しておられました』

なんですってー！家に連絡しちゃったですってー！！

ああ、御婆様の能面が目には浮かぶ。

『…わかりました。御迷惑をおかけして申し訳ありませんでした』

…渋々ですよ

『用紙の記入は終わりそうですか？』

『もう少しで終わりますので、お二人は先に食べて下さい』

『用意しながら待っていますので大丈夫ですよ』

わかりましたー。サクッと書きます。

「蘭、お弁当なんだけど温めることもできるわよ」

「そうなのですか？保健室なのに電子レンジもあるのですね」

「隣の予備室だけでも、コンロもあるわ」

へー

「矢原先生のも温めましょうか」

「ええ、おねがい」

「冷蔵庫もあるのですか。保健室はなんでも揃っているのですね」
「普通の学校がどうだか知らないわよ？この学校だからではないかしら」

「確かにそうかもしれませんね。生徒会室にも一揃いありますし」
それは、間違いなくこの学校だからでしょう……

「それにしても、蘭はやっぱり自作のお弁当なのね」

えっと、矢原先生のも自作のお弁当にみえるのですが？

「矢原先生のお弁当もおいしそうですよ」

「まあ、あの子の作るものは基本おいしんだけど、何故か乙女弁当なのよね……わたしが作らないから文句は言えないんだけど」

確かに乙女弁当。子供の運動会みたいで可愛いけど矢原先生作ではないということですね。

「…矢原先生」

「どうしたの蘭？」

「いえ、あの…どうしたのと聞きたいのは私のほうなのですが…」
「????」

微妙な空気が流れる中、取り合えず記入し終わったのでペンを置く。

『ああ、書き終わりましたか。温めるものがあれば電子レンジがあるので言ってください…』

『いえ、パンですので大丈夫です』

わたしの記入した用紙を見た矢原先生の言葉が途中で途切れるのをスルーし返事をする。

「あの…。何故お二人は先程から英語で会話をなさっているのですよう」

それには、深くも無い事情がありまして……言うタイミングを逃しただけですけど？

「……遠野ユキ？」

「はい」

「……に……」

に？

「……日本語」

ああ、うんごめんなさい。

「話せます」

「！！！！？まさか、みちる姉さん気付いていなかったのですか!？」

「……彼女の名前を確認していなかったのよ」

「だから口調を直しておられなかったのですね……」

なるほど。矢原先生は公私で口調を変えているのに、わたしが日本語を理解出来ないと思っ込んでいたと。

「……」

「……」

「……」

く、空気が固まっています。

「あの お二人のお弁当が冷めてしまいましたが」

もう、大分冷めていそうですが

「そ、そうですね。いただきますしょう」

東條さんが同意し、半解凍のぎこちない動きで矢原先生もなんとかお弁当に箸をつけた。

「……………」

「……………」

「……………」

非常に気まずいです。

「と、遠野さん体調はマシになられましたか？」

トウジョウサンガンバツテイル

はぁー……。

仕方ない付き合つか。

「はい。御迷惑をお掛けしました。少し睡眠不足が続いていただけです。大丈夫です」

「睡眠不足？テスト期間でもないのにですか？」

「…少し…眠りが浅くて」

「身体の不調があるようでしたら、矢原先生に相談してみると良い

「かもしれないよ」

「養護教諭に期待はしていませんし、あまり関わりになりたくありません。」

「遠野さんは着任式の途中で倒れてしまわれたので聞いておられなかったかも知れませんが、矢原先生は本来内科の御医者様ですので、たとえ医者だろうと期待はしていませんし、関わりになりたくありません。」

「ありがとうございます…。ところでお二人は御親戚ですか？」

「あっ、しまった。話しを逸らしたつもりだったのに知りたくもない質問をしてしまった。」

「…叔母と姪の関係です。私の父の妹が矢原先生ですね。別段、隠しているというわけではないのですが」

「大丈夫です。吹聴したりしません」

「というより、なんで聞いちゃったわたしー」

「遠野さん、今日は早退されるのですね？」

「そうなるかと思えます」

「明日もあまり無理をなさらないように」

「そうですね。ありがとうございます」

「いい子だなー」

「蘭、そろそろ予鈴が鳴るわよ」

あれ？矢原先生は仮面被ったバージョンを諦めたのか？

「いけない。次の時間移動教室でした」

そうだった。意外とすっかり屋の東條さん。

「それでは、お先に失礼します。遠野さん、気をつけて帰って下さい。やはらせん…みちる姉さんも移動後初日頑張って下さいね」

東條さんも隠すの諦めましたか…

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。蘭も遅れないように行きなさい」

東條さんが保健室を出た行っただので、必然的に矢原先生と二人きりとなる。

「……………」

「……………」

「ですよー」。

「あの…わたしもそろそろ帰宅します」

こういう時は早々に退散するに限る。

「…そうね。念の為に帰宅後学校に連絡を下さいね」

「わかりました。御迷惑をおかけして申し訳ありません。では失礼

します」
「気をつけて」

いつも帰ってくる頃には真っ暗になっているはずの自分の部屋は、いつもとは異なり昼間の明るい日差しを受けている。

「はぁー」

そんな、明るい部屋に入ったユキは大きな溜め息をついた。

なんでこうなったかな……。昨日までと同じように過ごさずだったのに……

まあ、今日のことはイレギュラー過ぎる出来事だけだし、時間が巻き戻るわけでもないんだから……諦めよう！

明日から、またいつも通りに過ごせば大丈夫！！

結果……大丈夫じゃなかった……
この状況はなんでしょう。

右を見る……東條さんが卵焼きを食べていた。

前を見る……矢原先生がたこさんウィンナーを食べていた。やっぱり
乙女弁当……

わたし…コンビニのパンをかじってます。

いつも通り静かに過ごすとした火曜日。

朝の登下校時間クリア。

朝拝クリア。

1 時間目数学クリア。

2 時間目歴史クリア

3 時間目体育クリア

4 時間目英語クリア

昼休み…強制イベント発生

いつも通り、教室の自分の席でお昼を済ませようとしていたわたしに來客の知らせ…

とてつもなくイヤな予感がしたわたしの予想を裏切ることなく東條さんでした。

お昼を誘われました。衆目に耐えられず断れませんでした。

そして、現在強制イベント中…

「遠野さん、今日も放課後は図書館に行かれるのですか？」

「そうですね」

なんで知ってるんでしょうか？

「私は最近生徒会の方が忙しく、なかなか行けなくなってしまいました」

東條さんも図書館通いしてたのかー。

「そういえば、凄い書類の量でしたね」

「選挙が終わって三年生の先輩方がおられなくなった分の負担が増えてしまって、事務雑用が追いつかなくなってあの状況です」

「うわーご苦労様です。」

「それで、今日も今から生徒会室に行かなくてはならなくて。お誘いしておいて申し訳ないのですが、お先に失礼しますね」

そう言つて、東條さんは慌ただしく保健室を出て行った。

「……………」

本当に…なんで誘つたんですか……………???

この状況、昨日の二の舞で居た堪れないのですよ???

「遠野さん、今日も顔色があまり良くないわね」

「えっ?」

「また眠ることが出来なかったのかしら?」

「…そうですね。睡眠が浅いのかもかもしれません」

えっと、確かにいつものように家でとつた睡眠は仮眠と呼べるくらいのものであったと思うけど、そんなに顔色悪いってこともないはず。さすがは医者ってことかな。

「放課後はいつも図書館なの?」

「話しがとぶなー」

「そうですね。閉館ぎりぎりまでいると思います」

「放課後、適当に本を持ってここに来なさい」

「はっ??」

「眠れそうならここで寝なさい。眠れなさそうなら本を読んでいれ
ばいいですよ」

なんで、そういうことになる??

「いえ、先生のお邪魔になりますし」

やんわり拒否

「本を讀んでいようとベッドで寝ていようと邪魔にはならないわ」

拒否を否定

「」

「」

「……わかりました。お言葉に甘えさせて頂きます」

強制イベントの結果

…敗北……

第3話（後書き）

みちるさん、名前が出てきてよかったね。

女神様：m9）、）、プププ

第4話（前書き）

少し短め。

第3話とがっちゃんこししょうか悩んだ少し中途半端な話し。

第4話

金曜日 ……

長い一週間だった…

月曜日の朝登校した時は予想も出来なかった。

いつもと変わらない一週間になるはずだったのに、気がつけば目立つ生徒代表の東條さんと関わりを持ってしまっなんて…

しかも

「お待たせ致しました。行きましようか」

ヒソヒソ……

何故か毎日一緒にお昼を食べる流れになってます。

クラスメイトの好奇の視線が痛いのですが、東條さんは気がついてないのでか……？？

「ユキさん、どうかされたのですか？」

ザワザワ……

東條さんがわたしの名前を呼んだ瞬間、ヒソヒソだった周りの声がザワザワになった。

「東條さん……」

「?????」

なんの悪意も持たない目で見返されてしまいました。

「……………いえ、なんでもありません。行きましょう」

「ええ、そうですね」

その何にも隠されていない眼差しは卑怯ですって。

…はい、そうですね。わたしはこの目に負けて名前で呼ぶことを承諾しました。

「みちる姉さん、お待たせしてしまつてごめんなさい」

「お待たせしました」

そう言いながら開けたドアには【保健室】と書いたプレートが嵌め込まれている。

「急がなくても良いのよ」

窓際の席から立ち上がりながら矢原先生が声をかけ、用意していたのであるうお茶を3人分机に置いていく。

そう、わたしたちは何故か保健室でお昼休みを過ごすという難度の高いイベントを連日続けているわけだ。

こ、これがNOと言えない日本人の血なのね……！！！！

というかそもそもですね、東條さんに声をかけないでオーラが通用しない。

クラスも違うし、接点という接点もないはずなのに……

東條さんがわざと人の嫌がることわたしをしてるのだとしたら、こっちも

相応の態度を取れるのだけど、そんな気は一切なさそうだ。つまり悪意もなくわたしの壁を破ってくる…厄介すぎる。

「ユキさん、最近放課後の図書館通いはお止めになったのですか？」

「えっ!?!…えっと、図書館には行ってますよ」

…ウソはついてない。

「そうなのですか？昨日久しぶりに行ってみたのですが、お会い出来なかつたので」

「ふえ!!あぁーと、お手洗い？」

「閲覧室にしばらくいたのですが…行き違いになってしまったのでしょうか…」

そういうことをお願いします。

「蘭：遠野さんと仲良くなったのね。人見知りの蘭がこんなに短期間に誰かに懐くなんて」

矢原先生…もしかして話を逸らしてくれた？
ありがとうございます。

しかし、東條さんが人見知り？

いやー、そんなことはないでしょう。

「そう… かもしれませぬね」

えっ? そうなんですか!???

「どつという風に表現すれば良いのか分かりませんが、ユキさんと」

緒にいるのは…ラクなのです。ユキさんはお一人で過ごされるほうが好きなのかもしれませんし、私が勝手に懐いてしまっているのですが、仲良くしていただきたいと思っております」

「は、はい……よろしく願います？」

何がよろしく願います？

「嬉しい よろしければ名前でお呼びください」

なんか、取り返しのつかないことになっていますが？

「やはりご迷惑でしたでしょうか…」

ああああー！！その目は止めてー！！！！

悪魔祓いの力でもありそうなその眼差しは、穢れたわたしの身を淨化しそうな勢いです。

「……………」

「……………」

「……… 蘭…さん」

「はい」

敗北……

「それで、放課後はどちらに？」

えっ！？その話し終わってないの??

「はあー！。蘭、分かっている聞いてるのね？」

「分かっている、というわけではありませんよ。あくまで推測です」

何が???

「すみません。水曜日の放課後に保健室へ入っていかれるユキさんをお見かけしていたもので。昨日図書館でお会いしなかったのも、もしかしたら保健室に行っておられるのかなとは思っておりました」

正解です…

さあ、どうやって誤魔化すんだわたし

「あの……それは……」

「そうよ」

そうなんです。

つて!!!!ええええ!!!!!!

「体調が悪いのを放っておけないでしょ。顔色が良い日がないもの。図書館で本を読むだけなのであれば保健室で読みなさいと言ったわ」

あ、あっさり……

「確かに、今日もあまり顔色が良いとは言えないですね」

「そうでしょ?」

矢原先生は……よく分からない。

毎日昼休みに訪れるわたしたちを邪険に扱うこともなく受け入れてくれるけど、公私で言葉遣いを変えてくるくらいなんだから、どちらかというと静かに一人で過ごしたいんじゃないのかなと思うんだけど。

「いえ、あの…体調は悪くないです」

「…睡眠不足？」

「そう…ですね…」

睡眠不足？この体に睡眠なんて必要なのか？

…よく分からない。

睡眠はとるけど睡眠不足で体調不良になるほど繊細な体ではないから、きつと、顔色はそもそもそんな感じの色なんではないだろうか？

「遠野さん、今日もパンだけなの？」

「確かに、ユキさんは毎日パンだけですな」

「そうですね…。手軽なのでパンで済ませてしまいますね」

料理が出来ないわけではない。朝起きられないわけでもない。部屋に調理をする場所がないし、する必要もない。

「毎日パンだけなんて成長期なのに、明らかに栄養不足すぎるわ」

「…そうですね？」

栄養不足？食事を必要としないこの体に、それは考えられない。

何も食べることなく半年過ごした時点で、食事を絶って死ぬことは諦めた。

今も一日の食事が、このパンだけだなんて言ったら2人はどんな顔をするんだろう。

「睡眠不足だけでも身体に悪影響なのに。せめて野菜を採りなさい」

そう言いながら小さな容器が差し出された。

「えっ？」

「食べなさい」

目線を蓋を外された容器に戻す。
サラダ？

「みちる姉さんが作られたのですか？」

「サ、サラダくらい作れるわよ」

これは予想外です。

矢原先生もわたしと同じで、あまり人と関わりを持ちたくないのか
思っていたのに。

「うふふ、みちる姉さんが積極的に誰かをお構いになるなんて珍し
い」

「…食生活が気になっただけよ」

「ユキさんの前で取り繕うことも無くなりましたね」

「……………」

あれ？

これもまた予想外です。

どうも、矢原先生は「公私」の「私」の方にわたしを分類しようと
しているらしい。

「…ありがとうございます。いただきます」

その優しさを返せなくてごめんなさい。

わたしは2人に心を開くことは出来ません。でも……

「おいしいです」

「そう？良かったわ」

……嬉しいです。

放課後、わたしは保健室にいた。
これも、火曜日からずっと続いていること。

少しでも家にいる時間を少なくするために始めた図書館通い。
この学校には図書室ではなく、まるまる一棟を書籍の為に使用した
建物がある。

公立図書館以上に多岐分野の図書を擁し、広く綺麗な閲覧室には個別ブースまで設置されたお嬢様学校でしか許されない贅沢使用。
毎日通って定位置となったブースで、非常に有意義な放課後を過ごしていたはずなのに……

強制イベントで新しい定位置が出来ました。
最初に目が覚めたときに寝かされていたベッド……

そのベッドの上に半身を起こし本を読む。

最初は矢原先生の存在が気になって、放課後の読書タイムが罰ゲームでしかなかったけど、矢原先生は言っていた通り、わたしが本を読んでいようが寝ていようが気にしてないみたいで、そんな距離感が心地よかった。

眠ることはなかったけど、こうして人目を気にせず静かに過ごせる時間は貴重で、穏やかにわたしの体と心を癒した。

パタン

読み終わった本を閉じて目を瞑る。

目を閉じていても分かる、部屋に入り込む暖かな夕日…

遠くから聞こえる部活をしている生徒の声…

自分という存在を包む空気はこんなにも暖かい。自分に不釣り合いなくらいに…

「…眠れない？」

目を開けると窓際の机で事務作業をしていた矢原先生が、こつちを見ていた。

……珍しい。

火曜日から毎日来ているけど、入退室時以外で矢原先生が声を掛けてきたのは始めてかもしれない。

「眠くないです」

「そう」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙の後、矢原先生は手元に視線を戻し仕事の続きを始めたようだ。

不思議な女性だなー。

決して気さくなわけじゃなく、声を掛けやすいわけでもなく、どちらかといえば取っ付き難い雰囲気的女性。

鋭いというのか涼しいというのか目元が冷たい感じで、その上笑ったところも見たことがない。

…… あれ？

それなのになんで、わたしはここにいるんだ？

「どうかした？」

視線に気がついた矢原先生が顔を上げる。

「この空気は優しいですね」

えっ!???

意識せずに答えてしまった言葉に驚いてしまった。

自分自身が思っているより、この空気に癒されていたらしい。

「薬品の匂いしかしないわよ？」

「そうですね」

匂いの話ではないんだけど、この感覚をつい言葉にしてしまった
恥ずかしさに説明なんて出来ず、曖昧に答える。

「少し寒くなってきたわね」

「もう11月になりますから」

「寒いのは苦手だわ」

「そうですね」

「でも、人の温もりが一番わかる季節ね」

「……そうですね」

人の温もり…わたしには遠い言葉だ。

全てを失ったあの日から、人との関わりを絶つてきた。

わたし自身が不幸の種ならば、誰にも関わっちゃいけないでしょ？
わたしがわたしでなくなる日が、いつかくるかもしれない。

あいつみたいに……

「寒い？」

「！！！！！！？」

いきなり近くから聞こえた言葉に驚いて顔を上げる。

「手が冷たい」

いつの間にかベッド脇まで近づいてきていた矢原先生の手がわたしの左手を包み込む。

「あ、あの…」

「温かいでしょ？」

「えっ？」

「人の温もり」

人の…温もり……

冷えたわたしの左手に伝わる矢原先生の温もりは、わたしを拒絶することなく少しずつわたしの手を温める。

さっきまで、わたしにはあんなに不釣り合いだと思っていた暖かい空気が、受け入れてくれていたかのようだ。

胸が苦しくて切なくて、こぼれそうになった涙を隠すために俯き目

を閉じる。

この暖かい時間がずっと続けばいいのに…

家につき、ドアの前でギュッと左手を握る。

いつもと同じように冷たい指先は矢原先生の手を覚えていて、少しだけ温かい気持ちにさせた。

勝手口から中に入ると薄暗い廊下に人影があった。

「御婆様…」

「……………」

「…ただいま帰りました。千草様」

遠野千草^{ひぐはのちぐさ}

ママの母親で、正真正銘血の繋がった御婆様。

とは言っても、わたしはママとパパが生きている間に日本に来たことはなかったなので、両親が死んでから初めて会った。

天涯孤独のパパと、遠野家の御令嬢だったママが駆け落ちして出来た子供がわたし。

御婆様はわたしを孫とは認めず過ごしてきたのに、両親を失ったわたしを引き取らざるをえなかった。

つまりわたしは厄介者。

左手をギュッと握る。

「ユキさん、覚えているかしら。明日は香山に向かいます」

「はい」

「10時に家を出ます。用意しておきなさい」

「わかりました」

用件を述べた御婆様は、そのまま廊下の奥に戻っていく。

「あなたの母親がやったことを、くれぐれも忘れないように。きちんと汚名を晴らしなさい」

途中で歩みを止めた御婆様は、振り返ることもなく静かな声で告げた。

「…はい」

わかっています……

16歳で許婚と結婚することが決まっていたママ。ママを愛し、一緒に逃げたパパ。

今年16歳になるわたし。

決められた結婚。

わたしは明日、2カ月後に結婚する相手に会いに行く。

自分の部屋に戻り、握り締めていた左手を開く。握り締めていたことで冷え切ったわたしの指先…

矢原先生の温かな手を思い出したかった…

第4話（後書き）

千草御婆様…

いくら節電とは言え、廊下の電気くらい点けてもいいのでは？

第5話（前書き）

ちよつと色々詰め込んでしまつたかな！。

複数に分けるべきやつたか？？

取り合えず、ユキの婚約者が登場です！

第5話

キーツ

「奥様、到着致しました」

静かに停止した車と、運転手の声で閉じていた目を開ける。

暖まっていた車内から出て、冷えた空気の中御婆様の後ろをついて歩く。

遠野の家も屋敷と呼べる大きな家だが、純日本家屋の遠野家とは違い、目の前にある大きな屋敷は洋風の建物だった。

後ろを振り返ると、乗ってきた車が建物前のロータリーから離れていく。

客用の駐車場まで移動するのだろうか。

遠ざかっていく車が木立の中に見えなくなった。無駄に広い私有地だなー…

「ユキさん、落ち着きのない行動はお控えなさい」

「…申し訳ございません」

御婆様の注意に、慌てて顔を前に向けると丁度ドアが開くところだった。

「よつこぞ」

執事だ…

執事と言われてイメージしやすい黒の燕尾服。白いシャツに黒いネ

クタイ。胸ポケットから覗く白いポケットチーフ。手に持っているのは白い手袋。

見事な白髪をきっちりオールバックにして、細い銀色フレームの眼鏡をかけている。

素晴らしい執事っぷりだ。

「お招き頂き有難う御座います。御当主様自らお出迎え頂けるとは思ってもおりませんでした」

.....

執事じゃなかった...

「いえ、申し訳ないのですが仕事がありまして、この後同席することが出来ませんのでね。せめてお出迎えくらいは致しますよ」

そう言つて、柔らかく微笑む御当主様。

どこからどう見ても執事なのに...

「お気遣い有難う御座います」

「そちらがユキさんかな？」

まずい！挨拶もしていない！御婆様の能面から鋭い視線が！！

「あつ、失礼致しました。わたくし遠野千草の孫に当たります遠野ユキと申します」

「ああ、これはどうも御丁寧に。私は香山陽季こうやまはるきといひます。君の義父になるね。だからあまり硬くなる必要はないんだよ」

「有難う御座います」

凄く柔らかい喋り方。緊張で硬くなっていた体から少し力が抜ける。

「父さん。お客様を御案内せず何をしているんですか？」

いつの間にか玄関ホールで立ち話しをしてしまったわたしたちに、ホール奥の階段上から男性の声がした。

「おお、修か。ユキさんが可愛らしくてつい立ち話しをしてみましたよ」

「お話しはお部屋に御案内してからにして下さい」

「全くだ。面目ないね。お二人とも、不手際申し訳ない。お部屋に御案内させて頂きますので、どうぞこちらへ」

そう言つて、エスコートする姿は完璧な執事様。何故執事…。

案内された部屋に入り、一同が席に着く。

陽季様が座る左隣に修と呼ばれた男性。

前の座席に御婆様右隣にわたし。

つまり、修と呼ばれた男性がテーブルを挟んだわたしの目の前に座っている。

となると、この男性がわたしの婚約者ということになるのか…

「ついで早々、申し訳ないことをしてしまいました。ランチを用意させていますので、それまでに自己紹介を致しましょう。父さんもランチを食べていく時間くらいはいいでしょう？」

「ああ、そうだね。それくらいは御一緒しようか」

目の前の二人を見比べる。

そっくりだ…

目鼻立ちのはつきりした顔と、人の良さそうな笑い皺。しっかりと肩幅に180cmはありそうな身長。

「私は香山修こしやましゅうといます。いつの間にか28歳になってしまいましたね。外科医をしています」

「…お医者様？」

思わず小さな声をもらしてしまった。

香山の息子が香山重工の会社の要職についてないということが不思議だったから。

「ええ、香山重工は兄がしっかりしていますし、私は自由にさせてもらっているんですよ。それに遠野家の重鎮方に支えられていますから、香山重工は安泰でしょう」

遠野家は元華族の旧家だったが家柄だけに縛られ廃れ、元々遠野の分家だった香山は、明治時代に起業し実業家として手腕を振るい、今では日本を代表する大会社となった。

今、遠野の家の者たちは、ほとんどが香山の会社に従属している。

「会社のことが全く分かっていない私なんかが出したら、会社の経営に響いてしまいますしね」

「会社の経営はどうかわかりませんが、お医者様としてのご名声は聞き及んでおりますよ。次期病院長としてお声がかかっているとか、御婆様の品定めをするような目線…居た堪れない…」

「千草様、それは単なる噂ですよ。わたしはまだまだ若輩者ですか」

「おや、昼食の用意が出来たようですね」

修様、陽季様：御不快な思いをさせてしまい申し訳ありません。

テーブルに並べられていく料理をゆっくり食べながら、ずっと続く不快な会話をなるべく聞かないようにする。

あー、良い天気だなー

あー、来週の体育祭めんどくさいなー

あつ、これおいしいなー

ランチを食べながら御婆様の質問攻めを受けた修様は、それでも大人の対応でスマートに笑顔を浮かべて答えていく。

修様って、笑い皺があつて人の良さそうな顔なのに、笑っていないときの目が鋭い感じなんだなー

「いやいや、すっかり長座してしまいました。わたしはそろそろ失礼しますよ」

デザートが運ばれてしばらくしてから、陽季様が席を立った。

では解散！とかになりませんか？

「あつ、では」

おっ？

「ユキさん、庭園でも散策しませんか？なかなか見応えのある自慢の庭ですよ」

「違う！！！」

「良い機会です。そうなさいユキさん。私は先に戻ります」

質問攻めで、高評価だったのだろう。御婆様が怖い。

「…はい。御案内頂けますか？」

「もちろん、喜んで」

「…もう少し頑張りますとも」

「千草様、ユキさんは責任を持って御送り致しますので御安心下さい」

「宜しく願います」

御婆様が念を押すようにこちらを見てきた。

汚名を晴らせ…か

「では千草さん、玄関まで御一緒にしましょう」

御婆様と陽季様が部屋から出ていき、修様と二人になる。

後は若いお二人で… ってこと？

まるで陳腐なお見合いみたいだ。現実はお見合いなんて生易しいも

のじゃない。これは単なる顔合わせ。拒否権はない…

「じゃあ、行こうか」

「…はい」

修様の後ろを歩きながら屋敷の中を歩く。

今日初めて修様を見た。実は名前も知らされてなかった。

近い将来、わたしの旦那様になる人。もう決定した未来ではあるけれど、良い人そうで良かった。

暴力的な人だったり、いきなり襲ってくるような人だったら今後の人生最低だなーって。

お医者様ってことは、忙しいだろうしわたしみたいな子供の相手なんてしてられないだろうから、丁度いいかもしれない。

「おっと」

「うわっ！！」

考え事をしながら歩いてたら、立ち止まった修様に気付かず背中
にぶつかりそうになった。

「ボーっとしてちゃ危ないよ」

慌てすぎて体制を崩しているわたしを片手で支えてくれる修様。

「す、すみません」

「……………」

「……？」

「……………」

修様がわたしの肩を支えたまま、じつとわたしを見る。
な、なんでしょう!?

「しゅ、修様？」

「はっ! ああ、すまない」

慌てて手を離して、少し離れる修様。

「あー、様とかいらさないよ。わたしもユキちゃんと呼ばせてもらおうから、堅苦しく考えなくていいよ」

「あっ、はい」

むしろ堅苦しく壁を作りたいのですが…

「……………」

「……………」

「……………」

さっきから、立ち止まったまま先に進んでないんだけど…更にこの無言はどうしますか？

「… あの」

「ユキちゃん!」

突然、覚悟を決めたように名前を呼ばれた。

「は、はい?」

「庭園を見るつもりだったんだけどね、少し込み入った話しがした
いんだ。部屋に案内するから付いてきてくれないかな?」

「…わかりました」

少しホツとしたような顔をした修さんの後について歩く。

いい人だと思ったんだけどなー。期待するなっということか…

どうせ結婚したら抗えないことだし、お医者様だっって言っんだから無茶なこともしないだろうし、有無を言わせず無理やり襲われるってこともなさそうだし…

もう、どうでもいいや……

「この部屋だよ」

ドアの前で立ち止まった修さんが、こちらを振り返って話しかける。

ガチャ

「どうぞ、入って」

ドアを押さえてくれていた修さんが、部屋にエスコートするようにわたしの左手を支える。

強張る体を隠すようにうつむきながら部屋に入った。

「やっぱり、この部屋がいいね。ここに座って」

修さんが示した椅子に座り、震えそうになる体を押さえる。

修さんの大きな手と少し高めの体温で上書きされてしまった左手は、もう矢原先生の手の温もりを思い出すことが出来なかった…

怖いよ

「久しぶりに見たけど、なかなか見事でしょう?」

「……………」

「…うん?…………… しまった!!!そ、そういうことか!

!」

突然、狼狽しだした修さんの声に思わず顔を上げる。

「すまない!!!配慮が足りなかったようだ!」

顔を上げた先に、深々と頭を下げた修さんの姿が…どういうこと?

「いきなり部屋に連れ込まれば不安になるね。脅えさせて申し訳ない」

そう言つて部屋に面して大きく開いてテラスになつている窓を開くと、そこには視界一面に見事に咲き誇るコスモスの鮮やかな色彩が広がっていた。

まさか…???

「今は丁度この部屋からの景色が素晴らしいんだ。庭園を案内することが出来なかったから、どうせならこの部屋で話しをしようかと思つていただけなんだけど、考えが足りなかったようで、すまない」

や、やっぱりそういうこと!?

頭を下げる修さんを見て気持ちが落ち着いてくると、勘違いをしていた自分が段々恥ずかしくなっていく。

「あつ、頭を上げてください。勝手に勘違いしたわたしが愚かなだけです」

ホント恥ずかしいし！！

「いや、勘違いさせてしまった原因は私にある。女の子の体に軽々しく触れたりしてはいけないね」

それは、そうでしょうね

「扉の前に立つと無意識に支えようとしてしまうんだよ。職業病か？」

あー、外科のお医者様…

「取り合えず安心してくれて良い。私は君を傷つけるような事はないと誓うよ」

信じて…いいですよ？

「取り乱して、申し訳ありませんでした」

「いや、わたしに非があつたんだ。謝らないでいいんだよ」

「有難う御座います。…コスモス凄く綺麗ですね」

「今が見頃だね。しかし、窓を開け放しているのは少し寒いか」

そう言いながら窓を閉めて、外の景色が見えるようにわたしの横の椅子に座った。

ちよつと並びあつるように隣に座った修さんと二人で、黙って外の景色を眺める。

「ユキちゃん」

しばらくして、修さんが外に視線を向けたまま声をかけてきた。

「はい」

「……………」

名前を呼んだ修さんは、それでも話し出すことに躊躇いがあるのか、沈黙の間が出来る。

「……………」

「……………」これから君に話すことは、君にとって良い話しではないかもしれない。それでもユキちゃん… 君には話しておくべきだと思う」

しばらく続いた沈黙のあと、修さんは視線を外の景色からわたしに合わせてしっかりとした口調で話し出した。

「君がどんな風に聞いているか分からないが、この結婚は強制ではないんだよ」

「えっ?」

「はあ?????」

突然の展開過ぎて思考が追いつきません!

というか、予想してなかった方向に話しが飛び過ぎです!!!

「ああ、すまない。結論から言ってしまったては分からないね」

「どづいうことでしょうか?」

「まず、そつだね…ユキちゃんは千草様から茜あかねさんの事を何か聞いているかな?」

「母の事ですか…」

とおのあかね
遠野茜

わたしのママだ。

ブラウンの柔らかくウェーブのかかった髪の毛。わたしと同じグリーンの瞳。

パパと愛し合いわたしを産んだ。

汚名を晴らさない……

「香山様との御縁談が決まっていたにも関わらず、駆け落ちしたと……」

汚名の結果、わたしが生まれた。歪な存在……

「そうだね。確かに兄の文哉ふみやと茜さんとの婚約が発表されていたね。では、君のお父様のジョシユア・ウィルソンが香山家の秘書をしていたのは知っているかな？」

「秘書？」

どうということ？わたしは学校の先生をしているパパしか知らない。

「知らなかったかな？ジョシユは文哉兄さん付きの秘書で、いずれは統括秘書にと言われていた香山の懐刀だったんだよ。今日のユキちゃんと同じように香山家に挨拶にきた茜さんとジョシユが出会ったんだね」

ママとの出会いは図書館で一目惚れだよ……

パパのウソつき！

「君と同じように、16歳になる年に文哉兄さんと婚約していたに

も関わらず、駆け落ちした。相手はあろうことが香山の秘書。二人は海外へ渡り子供を産んだ…… ということなんだけど……」

遠野家は香山家の顔に泥を塗ってしまった。

「わたしは、二人の子供として責任があります」

「いや、確かに縁談の話しはあったのだけどね……そもそも、茜さんと文哉兄さんの婚約の話しも遠野家……千草様が持ち出してきた話しで、無理やり結婚させようなんて話しではなかったんだよ」

「えっ？でも、結婚は決まっていたと……」

「そう、千草様がどうしても進めた話しだったんだ。二人の気持ちを無視して進められた縁談は結局うまくはいかなかった」

「父が母を奪い駆け落ちしたからですか？」

「それだけが原因じゃない。……文哉兄さんにも恋人がいたんだ。そして、その恋人が妊娠した」

「それでは駆け落ちがなくとも、文哉様と母との縁談は無くなっていったということですか？」

だったら、駆け落ちしたと言われ続けるママとパパが可哀相だ。

「千草様がね……その恋人のことも妊娠のことも御存知だったんだけど、妻として迎え入れるのは茜さんにしてくれと……恋人のことは黙認するとおっしゃってね」

「……」

「茜さんは、全てを受け入れていたようだ。諦めていたのかな……父さんも会社の事を考えると断れなかったのだろうし、文哉兄さんも恋人とお腹の子供を守るために香山を捨てる事が出来なかった。そんな中、ジヨシユだけが茜さんの幸せを守るために全てを捨てた」

頭がぐちゃぐちゃに混乱して、どういふことなのか分からない。

「ジョシユが動いたことで、茜さんが幸せになって良かった。父さんも文哉兄さんも、みんなが二人の幸せを願っていたんだよ」

汚名ってなんなの？

「と、ここで話しが終われば良かったんだけどね……」

汚名を晴らすって……

「ユキちゃん……わたしたちのことだよ」

「わたしたち……？」

「ユキちゃんとわたしの結婚も決められたものじゃないんだ」

「……」

なんで？どういふこと？

「茜さんとジョシユが亡くなり、遠野家が君を引き取る話しになったときに千草様から縁談の話が持ち上がった」

「両親の責任を取れと……」

「千草様がどういふ思いで今回の話しを進めようとしているのかは分からない。でも、君には何の責任もない。だから、この結婚は強制ではないんだよ」

決められた結婚じゃなかった……？

いや、御婆様の中では既に決まっていることなんだろう。

遠野家のためか……

ママが遠野家との繋がりという役目を果たせなかった。だからわたし
が責任を取れ　　そういうことなんだろう。

じゃあ、やっぱりわたしには選択する道はない。
でも…修さんは選択出来る。

「…修さんは、この結婚を拒絶しないのですか？」
「そうだね…」

修さんは言葉を選ぶように口を閉じ、外の景色に視線を移した。
黙ったまま外の景色を見ている修さんの横顔は、御婆様と話しをし
ていたときの雰囲気とは違い、静かな鋭い目で…

…　その鋭い目が、なんとなく矢原先生を思い出させた。

なんで…矢原先生??
えっ??なんで???

「わたしには都合がいいんだよ」
「へっ?」

いつの間にかわたしの方を見ていた修さんの声に我に返る。

「わたしも文哉兄さんと同じなんだ。好きな人がいる」
「その人のために香山家が必要ということですか?」

「いや、香山家がどうこうなんて正直考えていないよ。ただ…わた
しの場合、世間であまり認められるような恋愛ではなくてね……」

相手の方に事情があるということ?…離婚暦…未亡人…子持ち…不

倫：性関係のお仕事…

「自分勝手な都合ではあるけれど、偽装結婚でも構わないと思った」
「偽装結婚…」

わたしはこの結婚から逃れることは出来ない。
だったら、偽装結婚は好都合なのかもしれない。

「もし文哉兄さんが生きていたら、千草様は君を文哉兄さんに嫁がせたかもしれない。だけど、今の香山家で結婚していない男はわたしだけ。だから、わたしはこの縁談を受けたんだ」

ちよつと待つてくださいい??

「文也様はお亡くなりには?」

「知らなかったのかい?当時の恋人と結婚することなく病気でね。
今は次兄が結婚して香山重工の社長としてうまくやっているし、他は姉妹だからユキちゃんの結婚相手は必然的にわたしということになるね」

「そうだったんですか」

「説明した上で、それでもユキちゃんがこの縁談を受けると言うのなら、わたしは君と結婚するよ」

悪い話ではないと思う…

他人との距離を保ちたいわたしが結婚しなければならぬとするならば、修さんの話しはむしろ好都合だといえるんじゃない?

「すぐに決めないといけないわけじゃないよ。もし結婚するとしても入籍だけで、式自体は君が卒業してからだからね。悩む時間はそんなに長くは作れないけれど、せめて帰ってからゆっくり考えてみ

て」

わたしの答えは決まってる。

この結婚を断る選択肢なんて存在してない…

「わたしは、この御縁談を受けさせて頂きます」

「…なぜ？君にとってこんな結婚なんて必要じゃないでしょ？」

「……修さんの偽装結婚のお話しはわたしにも都合が良いからです」
「ユキちゃん…君は……」

わたしは……

「…わかった。わたしは結婚して君の幸せも探してあげられるよう
努力しよう。だから全てを諦めないでくれ」

「……ありがとうございます」

大丈夫…

大丈夫です…

わたしは幸せなんて望んでないんですから……

第5話（後書き）

あのね修さん、君を傷つけることはしないって言ったとして、偽装結婚は酷くない？

普通の女の子は傷つくって……！

ユキ……都合いいとか言ってないで、ちょっとは傷つきなさい……

第6話（前書き）

思いのほか長くなってしまった体育祭編…

仕方がないので途中で切り分けました。

読みにくくなってしまいました。後編は次の投稿になります。
堪忍ねー（、、；）

第6話

体を回す運動――

秋晴れ！おおー綺麗にうろこ雲が見える。明日は雨かなー。

上半身を大きく回していると、週間天気予報を裏切る晴れ渡った空が視界に入る。

どうやら雨は明日にずれ込んだみたいだ。

両脚跳びの運動――

それにしても、グラウンドに響く無駄に爽やかな声と、視界に入る気だるげに体を動かす少女達との温度差が酷い。

他人事のように言っってはみたけど、その中にわたしも含まれてます。

手足の運動――

大体、高校生がラジオ体操を嬉々としてやるわけ… いや、意

外と運動部系は本気みたいだ。視界の端に鬼気迫る顔で準備運動をしている少女の姿が……

深呼吸――

し、深呼吸なんだから、もう少しリラックスしたらどうでしょう？
あっ、目が合った…

体育祭。

一年に一回行われるスポーツの祭典。

いくらアンテルス女学院が私立の御嬢様学校といえど、体育祭はあるわけですね。

1クラスに大体35人。各学年6クラスだから…600人以上の女子高生の集団か…

アンテルス女学院の体育祭は表向き、点数等で評価するクラス対抗のようなものは存在しない。

勝ち負けによる優劣意識をつけないとかなんとか…ようは順位で個人を評価しないようにしようってことなんだけど、それってスポーツが得意で運動に力を入れてる子からしたら自分を評価して主役になれる舞台が少なくなるってことだよな。

しかもテストの成績上位者10名は発表されるのに…もの凄く矛盾を感じる。

そして、スポーツに力を入れていないわたしでさえそんな矛盾を感じているんだから、運動部のみなさまからしたら、そりゃもう…

「遠野さん聞いていますか!？」

「…はい」

いや、聞いてましたよ?聞いてたんですけどね…

「今年は各学年の3組4組に運動部のメイン選手が多く集まりました。なので打倒白チーム!我が赤チームの勝利の為に一人ひとりの力が必要なのです!」

円陣を組み力説する体育祭実行委員の少女…もちろん運動部

うわー隣の先生の目が怖いです…クラス担任という名の運動部顧問

表向きクラス対抗の存在しないアンテルス女学院の体育祭…
はい、つまりは裏がある。

各学年の1・2組を赤、3・4組を白、5・6組を青として3チーム存在し、非公式に各競技の点数計算がされている。

あくまで非公式なんだけど、これが結構本気のチーム争いになっている。

何故か？

チーム戦を黙認しているはずの先生達が本気だから……もう、黙認でもなんでもない…

そもそも、わたしは何故名前もうる覚えのクラスメイト達に混じって円陣を組まされているのでしょうか…

「点数が入るのは各種目3位まで。運動部であるあなたたちには確実に点数を稼いでもらいます」

そうですね？この円陣運動部ですよね？

「特に遠野さん！帰宅部なのにスポーツ万能の貴女が我がチームのポイントゲッターとなるでしょう」

…運動能力の平均化を促すために、運動部に所属している人とそれ以外の人との同じレースは出来るだけ避けられている……

…誰っ！そんなルール作ったの！！！！

「みんなの獅子奮迅の活躍を期待しているわ！！」

獅子奮迅って…これ表向き作る必要がある？

はあー

やっと円陣から開放されて大きな溜め息をつく。体育祭が始まる前から疲れました。

確かに目立つことは避けてたはずなのに…

「ユキさん、おはようございます。というより、お疲れ様ですね」

振り返ると、蘭さんが微笑みながら立っていた。

蘭さんも隣のクラスだから同じ赤チームだ。

「おはようございます。みんな本気すぎですよ…」

「ユキさんは私とは違い、運動神経がいいですからね」

「わたし、どこの部活にも所属していないんですけど？」

そんな運動神経いいとかアピールしたことは無いはず。

「日頃の体育の授業でもそうなのでしようが、やはり目をつけられた原因はスポーツテストの結果でしょうが」

大分適当にやったはずなのに！

「というか、何故スポーツテストの結果なんて知ってるんですか！？」

「それは、体育祭に向けてどのチームもリサーチをしているからではないでしょうが」

「こ、個人情報悪用です」

「ふふふ、でも私はユキさんと同じチームで楽しみですよ。球技大会ではクラス対抗でしたから、クラスの違うユキさんと同じチームになることは珍しいですし」

そういえば、球技大会も言われるがままに出てたけど、あれも目立つてのかな…

「私は本当に運動が苦手なのでチーム戦だと足を引っ張ることになると思いますが、一緒に頑張りましょうね」

ペアになって行う競技も少ないので、蘭さんと同じチームなのは正直ありがたい。

「わたしも蘭さんと同じチームなのは嬉しいですが…頑張ります…」

ずっとお昼休みを一緒に過ごしている蘭さんとは、普通に会話が続けられるようになってきた。

クラスも違うし、お昼休みを一緒に過ごすだけの関係。友達と呼べるだろうか。友達ってどんなだっけ？

「そういえば、勝手に御弁当を御一緒すると言ってしまいました。ユキさん御家族の方は来られるのですか？」

家族？

能面の御婆様が体育祭見学…ありえない修さん??…いや、来られても困るし。

「大丈夫ですよ。蘭さんはいいのですか？」

「一応祖父には連絡しましたが忙しい方なので…」

「えっ？御爺様??？」

「あら？御存知なかったのですか？私も両親はいないのでよ」

「あっ、ごめんなさい…」

蘭さんの御両親の話しは知らなかった。

「そんなに悲しい顔なさないで。ユキさん、同情ではなく友情でお願いしますわ。それに、わたしたちの事はみちる姉さんが救護テントから見てくださいってると思いますよ」

「…そうですね。矢原先生にいいところ見せれるように頑張りますよ
うか」

「くれぐれもわたしの仕事を増やさないようにね」

「えっ？」

いきなり後ろから聞こえた声に驚いて二人で振り向くと、矢原先生がいつものパンツスーツの白衣姿で立っていた。

いつも保健室の中だけだから、グラウンドに矢原先生がいることに違和感を感じる。

なんだろう。いつもと違う場所で自分の姿を見られてるのも、恥ずかしいといつかなんといつか…

「みちる姉さん、驚かせないでください」

「二人を見かけて近づいたら、いいタイミングでわたしの名前が出てきたものだから声をかけとかないと思っただけ。勇姿を見せてくれるんでしょ？ちゃんと見てるから、頑張ってください」

聞かれてたのかー

「みなさんの足を引っ張らないように頑張りますね」

「頑張ってください…」

頑張らないといけなくなりました…

「そろそろ、集合ですね。行ってきます」
「行ってらっしゃい」

二人と別れて集合場所に向かう。

今日わたしが出場する（させられる…）のは、学年混合借り物競争。同じく学年混合大縄跳び。学年混合綱引き。学年混合リレー。一年生全体競技の棒倒しの5種目。

多い…異常に多いんです…

練習を何度も行うような形式ではなく、一度か二度の練習で本番を行うアンテルス女学院の体育祭は各学年の全体競技と、全学年混合の競技を1から2種目選択するという形式になっていて、一人大体2種目から3種目出れば…
いいはずなんですけど？

競技者を決めるホームルームの時に、おかしいなーとは思ってたんですよ？

適当に余った競技に参加しようと思っていたわたしの思惑は、推薦、他薦という名の妨害にあい破綻しました…

…いや、先生怖いんですって…

取り合えず、目立たないように適当にこなそうと思ってたんだけど、赤チームの勝利に少しは貢献しないといけにのかなーとか、…矢原先生見てくれるのかなーとか…

ちょっと…頑張ろうかな。

わたしの出場する種目は午前の部が借り物競争と綱引きと棒倒し。午後の部が大縄跳びとリレーとなっている。

綱引きと大縄跳びは個人競技ではないから目立ってしまうようなこととはないだろうし、借り物競争は勝てばラッキーくらいのもんだろう。

目立ってしまったいそうなのは、棒倒しとリレー。

特にリレーは要注意だな…

今、召集がかかっているのは借り物競争。

まあ、多分に運に左右される競技だから、勝っても負けても注目を浴びるようなものじゃないし、頑張りますよー。

指定された順番に並び、前の選手の様子を見る。

色んな御題があるようで、ゴールした後の発表を聞いてるとクリップボードとかストップウォッチとか。人っていうのもあるみたいで、メガネを掛けた女性とかジャージの先生とか。

まあ、紙を開いてみるまで分からないけど無難なお題が続いているから、ざっくりグラウンドのどこに何があるか見ておくことにしよう。

出てきそうな御題、水筒・帽子・鉢巻・ボール…大体OKですよ。観客席の方まで見ると、スーツ姿の男性や着物姿の女性までいる。よし、いける。

「鈴木さん、いませんかー！ー??鈴木さーん！」

えっ?名前とかもあるの??

「社会科の先生!せんせい!」

そいつのは勘弁して欲しい…

なんだか、後になるほど御題が厳しくなってますか？

前の組が終わり、自分たちの番になる。

スタートのピストルの音と共に、御題の紙が吊るされた場所まで50メートル程ダッシュ。

一番で紙の所について、迷わず真ん中の紙を取り開いて中を確認する。

……

……戻しちゃダメですか？

他の選手が同じように紙を見て、周りを見回しながら移動したりしている中、わたしは自分の持っている紙の文字を見て固まっていた……

【美人】

…なんですかこれ？

いやいや、そんなバカな御題が出る分けないよね！
もう一度ちゃんと確認しよう!!!

【美人】

……しくしく

と、取り合えず呼びかけて自薦でいいですか？

「遠野さん！どうしたんですか!?!」

応援席の方まで走り寄るとクラスメイトや先生が心配そうな顔でこっちを見ている。

ま、まずい！目立ってる？？

「あの、び…」

「び？」

応援席に向かって呼びかけようとした声を途中で止め、わたしは頭に浮かんだ場所に向かって一直線に走った。

いるじゃないですか、美人！！

救護テントの前に立って競技を見てくれていた矢原先生の姿が大きくなり、驚いた顔をしているのがわかる。

「一緒に、ゴールして貰えませんか？」

目の前に立って、頭を下げる。

「…いいわよ」

「ありがとうございます」

「御題はなんだったの？」

一緒にゴールに向かって走り出した矢原先生が質問してきたので、紙を渡した。

「何これ！？」

「御題ですね」

ゴール前で止まってしまった矢原先生の手をとって、取り合えずゴールしてしまう。

「では、御題を確認します。御題【美人】。おめでとうございます。2着です」

係りの人から2着を示すカードを受け取る。

おっ、意外と良い結果だ。

固まってしまっている矢原先生の手を取ったまま、受付にカードを提出しに行くと、そこに放送部が待機していた。

「2着でゴールした1年1組遠野さん。保健医の矢原先生と一緒にゴールされましたが、ずばり御題は??」

「美人」

「おー！ー！一番難関と言われていた御題が、ここで出ました！」
「やっぱり」

「いつも美しい矢原先生！ネタ御題のはずが笑いではなく正統派の解答となりました！遠野さん矢原先生、二人の美人の競演となりました。」

ネタ御題だったの？そんなの入れないでよ…

「矢原先生、遠野さんお疲れ様です。ありがとうございました」

矢原先生… フリーズ中…
手を取って救護テントに向かう。

「あの…ありがとうございました」

「……………」

怖い…

「なぜ…わたしはてつきりスーツの女性とかかと…」

「本当に…あの御題はないですよね」

軽くイジメですよ。矢原先生がいてよかった。

「…なぜわたしなの？蘭がいるでしょうに！」

「蘭さん？確かに可愛いですけど…。美人という御題なら矢原先生ですよね？」

「……………」

俯いて手を引かれながら歩く矢原先生。

「……………」

「……………」

お、怒っておられますか？

黙ってしまった矢原先生の方をこそっと見る。

俯いて顔にかかる髪が表情を隠し、怒ってるのかどうか読み取ることは出来ない。

けど… み、耳まで真っ赤…………

なに!？

わたし何を言った!？

冗談とかにしてとけば良かったのに、なんで正直に言っちゃったの

!?

まずい！わたしまで顔が熱くなってきた！！絶対赤くなっちゃってるし！！！！

しかも、この状況はなに???

よく考えたら、手を繋いで歩いてませんか???

今更手を離すなんて、意識してるみたいで逆に恥ずかしいし…

落ち着けー落ち着けー

取り合えず救護テントに着けばいいんだ。

わたしは自然な行動を取れているはず！！

大丈夫ー大丈夫ー

「ユキさん、みちる姉さん」

救護テントまでもう少しというところで蘭さんが声をかけてきた。

「借り物競争お疲れ様でした。集合時間まで間があつたものですから、お二人に御声掛けしようと思ひまして」

「ありがとうございます」

「みちる姉さんの参加、おもしろかったです。しかし…それにしても…お二人とも真っ赤な顔をしながら手を繋いで歩くなんて…見ているこちらが恥ずかしいのですが…」

「えっ！うわ／／／」

言われて、慌てて繋いだままだった手を離す。

「こ、これは違うのよ／／／」

「そうです！違うんです／／／／／／」

何が違うのか分からないけど、違うんです！

「みちる姉さんもユキさんも人見知りですから、お二人が仲良くなつて、私は嬉しいですよ」

「そんなことより、集合時間ではないの！」

「ふふふ。そうですね、ユキさん行きましょつか」

真っ赤な顔の矢原先生から逃げるように集合場所に向かう。

次の競技は綱引き。一日に5種目も出場すると慌しい……

綱引き　あまり練習をしていなのであれば、ただ無心で自分の手元の綱を力強く引くのみ！

位置について、用意、スタートのピストルの合図で綱を素早く持ち無心で引く。

ただ無心で……引く……

ただ無心で……引く……

ただ無心で……引く……

第6話（後書き）

ユキ、いい加減に自覚なさい…

貴女は決して地味に生活出来ていない！！
思いつきり目立ってるわ！！！！

第7話（前書き）

体育祭編…三部構成になりました。

詰め込みたい気持ちが文字数に現れました。

ということ、またもや中途半端ですな！

これは、もう…仕方ありません！。

第7話

決勝を含めて3戦全て、無心で綱を引くことで落ち着きを取り戻したわたしは、蘭さんと一緒に応援席で、しばしの休息をとっていた。

「ユキさん、今何時ですか？」

「えっと、11時過ぎですね」

棒倒しは午前の部の一番最後の競技だから、集合時間まで少し余裕がある。

「11時…何か忘れているような気がするのですが……」

「生徒会の？」

「いいえ、今日は生徒会の主だった仕事は全て終わっているはずですよ……」

「御爺様が来られるとか？」

「いえ、そういった感じの話では…あっ！…！」

「ど、どうしたんですか？」

いきなり勢いよく立ち上がった蘭さん。
びっくりした…

「すみません。うっかり忘れるところでした」

「何かありましたか？」

「お弁当です。ついて来て頂けますか？」

「大丈夫ですよ」

お弁当？

確か、今日は折角の体育祭だからって矢原先生がお弁当を一緒に用意するから持って来なくていいと言われてたんだけど？

どうやら正門の方に向かってるみたいだ。

「どなたかが届けてくださるんですか？」

「ええ、和志さんが。11時に正門でと連絡していたのに遅れてしまいました…」

和志さん??

どなたですか？

「あつ、蘭ちゃん！」

正門に近づくと、守衛さんから離れた位置で立っていた男性が手を振っているのが見えた。

「和志さん、お待たせして申し訳ありません」

「いや、僕も今ついたところだよ」

きつと、結構待っていたのでしよう。

守衛さんがもの凄く見てましたから…

「せっかくのお休みの日に、お弁当をお願いしてしまつて…」

「それは、気にしないで。運動会のお弁当なんて、なかなか作る機会がないからね。楽しく作らせて貰ったよ」

運動会…まあいいですけど。

手に持っている風呂敷包みはお弁当ですか？

「あつ、和志さん。こちら友人の遠野ユキさんです」

「…遠野ユキと申します。蘭さんには、いつもお世話になっております」

「ユキさん。こちら矢原和志さん」

矢原？

先生の弟さんかな？

わたしと同じくらいの身長に、保育園の先生とかが似合いそうな優しい顔。

20歳前後かな？大学生とかそんな感じ？

「ああ、貴女がユキちゃんですか。いつも話しに聞いていますよ。噂通り、とても綺麗ですね」

「…ありがとうございます」

どんな噂をしてるんですか…

「和志さん、寄っていかれますか？」

「いや、遠慮するよ。よろしく伝えておいて」

「わかりました。わざわざありがとうございます。みんなで頂きますね」

「感想待ってるよ。二人とも、残りの競技も頑張ってるね」

「ありがとうございます」

和志さんと別れてお弁当を持ち直す。

結構ずっしり…3人で食べるんですよね？

「ユキさん、みちる姉さんの所に寄ってお弁当を置いてから集合場所に向かいますよ。少し急がないといけませんね」

「はい」

お弁当を持って救護テントに向かう。
今日の体育祭は怪我人もあまり出ていないようで、暇そうにしていた矢原先生にお弁当の風呂敷包みを渡した。

「あの子、そのまま帰ったの？」

「お寄りになるかお尋ねしたのですが、みちる姉さんによろしくとおっしゃって、そのまま帰られるようでした」

「それにしても…凄く大きさね……………」

ホントに…

「和志さんの力作ですね」

「朝から大分張り切ってたから…お昼にみんなで食べましょ。その前に棒倒し頑張ってたらしい」

「はい、行つてきます」

本日3度目となる競技集合場所に向かう。

午前の最終種目となる一年生全体競技の棒倒し。

…なぜ御嬢様学校の体育祭で棒倒し？

アグレッシブ過ぎるといふかなんというか、あまりにも校風に似合わないと感じるのは私だけ？

この棒倒し、危険な競技だけに毎年反対意見があるにも関わらず、毎年揺るがず一年生の全体競技として君臨しているらしい。

もちろん、怪我をしないように安全策はとられているから大きな怪我人が出るような事故は起こっていないけど…

御嬢様たちの化けの皮を剥がして何が楽しいのか…

「楽しみですね」

「……………」

えーと？まさかの棒倒し？

「楽しみですか？」

「ええ、和志さんの御料理は美味しいだけでなく見た目も可愛らしいですから」

「ああ、お弁当ですか」

良かった…危うく蘭さんのイメージが崩壊するところだった。

「いつも矢原先生のお弁当を作ってるのは和志さんなんですか？」

「そうです。毎日可愛いですよ」

やっぱり…あの乙女弁当か……

「兄弟仲がいいんですね…」

「えっ？」

「えっ？いや、だって毎日御弁当作るなんて、なかなか大変ですよ」

「そうですね。大変だとは思いますが…」

「まさか、矢原先生と和志さん、仲が悪いんですか？」

仲が悪い姉の為に、毎日お弁当を作るとかありえないと思うんですけど？

あっ、それとも和志さんは蘭さん狙いか？？

「いえ、お二人は大変仲が良いですが…」

「そうですよね。大学が休みの日にわざわざ朝からお弁当作ってくれるなんて、優しい弟さんですよ」

「…………私の御紹介の仕方に問題があったのは分かりました。反省致

します…」

いきなり反省されても、どうしたらいいのか…

「ど、どうしたんですか？」

「あの…そもそもお二人は御兄弟ではありません…」

「えっ？そうなんですか？…従弟とか？」

「いえ、御夫婦です」

「へっ！????？」

御夫婦とおっしゃいましたか？

夫婦??矢原先生と和志さんが？結婚している???

「か、和志さんは大学生ではないのですか？」

「違いますよ。和志さんはみちる姉さんと同い年で、みちる姉さんがこの学校に来る前に勤めていた病院で今も働いておられます」

「お二人が同い年!？」

矢原先生が落ち着きすぎなのか、和志さんが童顔なのか…

「お二人のお話しをお聞きになりたいのであれば、競技が終わってから直接お聞きになるといい思いますよ」

「あっ、はい。そうですね…」

いつの間にか集合場所に到着してたわたしたちは、事前の打ち合わせ通り攻撃班と迎撃班、守備班に分かれる。

攻撃班は相手の棒を倒しに行く。

守備班は自陣の棒を維持する。

迎撃班は相手チームの自陣への進入を阻止、排除する。

わたしは迎撃班で蘭さんは守備班。
危うく攻撃班に入れられそうになったが、全力で阻止した。
目立ちますから…

それにしても、矢原先生と和志さんが夫婦…
うーん……

全く持って似合っていない！

だって、笑ったところをほとんど見たことのないクールな矢原先生
と、草食系男子代表といえそうな笑顔の似合う和志さん…

ないなー……

だったら、まだ鋭い目が似合う修さんの方がしっくりくる。

いや、そういう問題じゃないけども…

パンパン！！！！

「勝ちましたね」

「えっ？」

いつの間にか一戦目が終わっていました…

「ユキさんの御活躍、流石ですね」

「御活躍？」

何かしちゃってました???

「御蔭様で、私たち守備班は随分楽をさせて頂きました」

な、何をしてしまったんですかー！？

ダメだ！集中して競技に望まないで、知らないうちに御活躍とかいう結果になってしまう。

このまま目立ってしまったら、何のために攻撃班になることを回避したのか分からない。

勝利はしても、それなりに動く程度にして目立たないように立ち回らないと。

よし、次の白チーム対青チームの対戦は、おとなしく見学しておく。

敵チームの戦略解析なんかするつもりはないから、ポーッと試合を見る。

それにしても、普通の御嬢様達はどこへ行ったのか…

目の前で繰り広げられているのは、どこからどう見ても女の紛争だ。

はあー

怖い怖い。

溜め息と共に試合から視線を外し、なんとなく救護テントの方を見る。

矢原先生は、救護テントの前で試合を見ていた。

背中の真っ直ぐ伸びた綺麗な立ち姿。少し意識して、わたしも背筋を伸ばしてみる。

ブルッ

うん？

隣で試合を見ていた蘭さんが、小さく体を震わせた。

「これ、どうぞ」

そう言っただけで膝に掛けていたジャージを渡す。

ただでさえ、試合と試合の間だけでも体が冷えてしまう気温なのに、華奢な蘭さんは更に寒そうに見える。

「あつ、大丈夫ですよ」

「わたしは、寒さに強いのでいいんです」

というか暑さにも強いけど、寒さには異常に強いんです。

遠慮する蘭さんの肩にジャージを羽織らせる。

「あの…有難う御座います」

「いいえ、どういたしまして」

そう答えながら試合に視線を戻す。

接戦になっているようで、どちらのチームが勝ってもおかしくない状態だ。

まあ、どちらのチームが勝っても総当たりだから関係ないけど…

試合に興味を無くし、さっきと同じように視線を矢原先生のいる方向に滑らせる。

救護テントは、わたしから見て競技場所を挟んだ丁度反対側にあり、かなりの距離がある。

しかも、現在競技場所は棒倒しの競技の真っ最中なわけで、競技中の大勢の生徒が動いている。

つまり、わたしはボーっと試合を見ている矢原先生を見ているも、

周りから見たら同じように見えるだろうと思って… たんだけど
???

!!!!!!

なにっ!???

矢原先生と目が合ってる!!!!

いやいや、落ち着きなさいわたし!

どんなに視力が良い人でも、この距離で視線が合ってるなんて分
からないはず!

だから、矢原先生がわたしの視線に気がついて目が合ってるってわ
けじゃなくて、わたしを見てるんだ。

んで、つまりはどういうこと???

矢原先生が…わたしを……… 見てる???

……!!!!!!

一気に顔が熱くなり思わず顔を背けそうになるけど、意志の力を総
動員してなんとか耐える。

矢原先生が気がついてないのに急に顔を逸らしたら、視線が合っ
たってバレてしまいそうじゃないですか。

視線を逸らさず、じっと矢原先生を見つめる。

耐えるわたし。

あれ? 矢原先生が顔を赤くして俯いた。どうしたんだろう???

「ユキさん、試合が始まりますよ」

蘭さんに声を掛けられ我に返ると前の試合は既に終わり、わたしと矢原先生との間を遮る競技者はいなくなっていた。

ということとは？

ただただ、矢原先生を見つめていたということになります…

…恥ずかしい／＼／＼／

耳まで真っ赤になっていることを自覚しながら、慌てて定位置に就く。

なんでこんなことになっちゃったんだ？

全ての行動が裏目裏目に出てる気がする…

あー、絶対矢原先生に変な子だと思われたー！！

チラッと救護テントを見る。

さっきの試合で怪我をした子がいたのか手当てをしている矢原先生の姿があった。

見られてなくてホッとしたような、少し残念なような……

治療を行っている矢原先生の横顔はいつもと変わらず落ち着いていて、処置をしている真剣な目はやっぱり綺麗だった。

あの矢原先生と和志さんが夫婦か…

大体、矢原先生と結婚っていうのも結びつかない。

なんとなく、わたしの中で矢原先生は孤高で、誰のものにもならないというイメージが勝手に出来上がってしまっているから。

いや、よく考えたらわたしと修さんも結婚して夫婦になるんだ…

周りから見たら、わたしと修さんはどんな風に見えるんだろう。

偽装結婚の仮面夫婦が、他の人から見たら仲の良い若夫婦とかに見えるりするのかもしれない。

所詮、二人の間関係は二人にしか分からないんだろう。

だから、全然釣り合っていないように見える矢原先生と和志さん夫婦も、実は相思相愛で支え合っているのかもしれない……

……………なんだろう

なぜか胸がざわついて、落ち着かない気分になる。

意味もなくイライラして、そんな自分が良く分からなくて不安になる…

パンパン！！！！

「えっ？」

また???

試合終了のピストルの音に気が付いて周りを見まわすと、わたしの周りには誰もいなかった。

「????？」

「ユキさん、凄いですね。少し怖かったです」

駆け寄ってきた蘭さんに言われて考える…

全く記憶にありませんが、わたしは何をしちゃったのでしょうか…

「えっと、わたしは何をし…」

「きゃー！ー！ー！ー！ー！」

「ちょ、あぶな」

蘭さんに質問しようとした時、後ろから悲鳴が聞こえて振り返る。

「！！！！！！！！！」

振り返った視線に入ってきたのは、こちらに向かって倒れてくる競技用の棒。
技用の棒。

更に詳細に言うと、倒れてきた競技用の棒の先に恐怖に目を瞑った少女がしがみついている。

冷静に状況を推測してみよう。

>>少女が自陣の棒に到達して登ってきているということは接戦だった。

>>少女が棒の先に登ってきた丁度そのとき試合終了のピストルの音がする。

>>自陣の守備班は、チームの勝利に歓喜し手を取り合い喜ぶ。

>>支える者を失った不安定な棒から少女は降りられなくなる。

>>やがて、自立することが出来なくなった棒が傾き…

きつとそういうことなのでしょうね。

棒が倒れてきたただけなら話しは簡単だ。避ければいい。幸い、何故かわたしの周りには人がおらずわたしと蘭さんが避けることは容易

い。

例えば、蘭さんがこの状況に硬直してしまっていたとしても、わたしは蘭さんを連れて避ければいい。

でも、このまま避けたらしがみついている少女は地面に激突するだろう。

安全面を考え、地面に敷かれた衝撃吸収マットは棒から落ちることを計算しているもので、棒ごと倒れてくるなんて考えられていない。棒の重さも加われば大怪我をするかもしれない。

はぁーーーーー

そこまで高速思考で考えたわたしは、諦めて目の前で硬直している蘭さんの体を右手で素早く後ろに庇い、左腕を頭上に掲げ衝撃に供える。

棒自体にも衝撃緩和材が巻かれているし、万一倒れてきた棒に当たっても大怪我をするようなことはない。

ただし、そこに少女の体重と抵抗もなく倒れることで加速されたスピードは計算されていない。

バキッ！

鈍い音と共に左腕を中心に広がる体を吹き飛ばしそうな衝撃と、尋常じゃない激痛に耐える。

衝撃でしがみついていた少女が、棒から手を滑らせ地面に叩きつけられる前に右腕で体を支え、怪我のないように衝撃を吸収してあげる。

ドンッ！！

重そうな音をたて地面に転がった棒を横目に、わたしは素早く待機場所からジャージを取り左腕を隠すようにして羽織る。

「大丈夫ですか？」

腰を抜かしてしまったかのように座り込んだままの少女に声をかけた。

声も出ないのか、固まったままこくこくと首を動かす少女。

状況についてくることが出来ないのか、他の生徒達も先生達も固まったまま動かない。

「ユキさんこそ、大丈夫なのですか！！お怪我は！！！」

逸早く硬直から解けた蘭さんが、普段からは考えられないような大きな声を出し、その声で我に返った先生が慌てて近づいてくるのが見えた。

まずいな…左腕が痛みを通り越して感覚がない。

「遠野さん、すぐに救護テントに…」

「大丈夫です。掠っただけですので大きな怪我もありません。彼女を診てあげてください」

そう言っつて、まだ放心状態の少女を見る。

「ユキさん、念の為に診てもらわなきゃ…」

「念の為に患部を冷却しようと思えますので、先に退場しても宜しいでしょうか」

蘭さんには悪いけど、怪我を見られるわけにはいかない。

「え、ええ。わかりました。その代わりに、後で必ず矢原先生に診てもらいなさい」

「わかりました。失礼します」

「私が付き添います！」

「蘭さん、大丈夫です。お昼は御一緒しますから、矢原先生にもそう伝えてください」

「ユキさん！」

急げ！

まだ何かを言っている蘭さんに背を向け、早足で校舎へ向かう。

急げ！

体育祭中の校舎の中は人の気配もなくわたしを迎え入れる。

急げ！

わたしは人気の無いトイレに駆け込んだ。

第7話（後書き）

ユキ…意識せず暴れたら、棒倒しの棒以上に危険なのは貴女です。
自重しましょうね…

第8話（前書き）

思いがけず3部作になった体育祭編が終わったー！
もっと長くなりそうやったけど、流石にカットしました。
シリアスにならないように戦ってます！！

第8話

トイレの中に誰もいない事を確認して、隠すようにしていた左腕からジャージを取ると、白いはずの長袖の体操服は真っ赤に染まっていた。

ぐぬううううう!!

遠のいていたはずの痛みが甦り、激痛に歯を食い縛りながら体操服の袖を捲くる。

痛みが分かるようになってきたということは、さっきまでみたいに感覚さえないという状態よりマシになっているということ。

進行形で着実に治癒しているとは言っても、開いた傷口からは止めどなく血が溢れている。

完治するまで少し時間がかかるかもしれない…

患部を確認するために血まみれになっている左腕を水道から出る水で、直接濯ぐ。

ふううううう!!!!!!

神経を逆なでする激痛を息を吐き出すことで我慢する。

傷の周りの血を洗い流すと……グロかった…

今も血を流し続けるぱっくり割れた傷口と歪な形に変形した腕。腫れ上がった腕は赤紫色に変色し、正視に堪えない状態だ。

今のわたしなら完治に30分くらいかかってしまつかもしれない。

痛みを耐えながら左の肩口に強くジャージを縛る。

傷口が塞がるまでの出血をなるべく少なくする為だ。

呼吸をするだけで激痛が走る左腕をなるべく動かさないように、浅い呼吸を繰り返して時間が過ぎるのを待つ。

パタパタパタパタ…

目を瞑って痛みを耐えていたわたしの耳に、誰かが廊下を走っている音が聞こえた。

足音はそのままトイレを過ぎ遠ざかっていく。教室に忘れ物をした子でもいたのだろうか。

また血まみれになっていた左腕を洗う。

歪に変形していた部分は違和感を感じる程度までになり、腫れと変色も少しマシになってきた。

開いた傷口は小さくなり、流れ出す血も少なくなってきた。もうちょっとで傷口は塞がりそうだ。

…パタパタパタパタ

さっきの足音が戻ってきた？

嫌な予感がして一番奥の個室に入る。

個室に入って鍵を閉めたと同時に誰かがトイレのドアを開けて入ってきたのが分かった。

「はっ……!!!!」

驚きと息を呑む気配で誰なのかがわかった。
やっぱりきちちゃったかー

「酷い……」

… あっ！洗面台血まみれのまんまだ!!

わたしが隠れる個室の前に人が立った気配がする。
そりゃ、ばれてますよねー

左腕を確認する。まだダメだ……

「あの、やはらせん……」

「ユキちゃん!!そこにいるの???」

「せい…… はっ???」

「ユキちゃん!!出てきなさい!」

……誰っ……!!!!

扉の前にいるのは誰ですか!!!!

「いつ!!」

思わず悶えた拍子に左腕を動かしてしまい、激痛に声が漏れる。

「ユキちゃん!?!どうしたの!?!大丈夫???」

「だ、大丈夫です」

というか、寧ろその呼び方がどうしたの?って感じなのですが。

「大丈夫なわけないでしょ！こんなに酷い出血なのに！！」

否定するなら、大丈夫か聞かないでよー！

「あの、ホントに大丈夫なので。もう少ししたら行きます！」

「ユキちゃん、取り合えず出てきなさい」

「いえ、あの…」

左腕を見る。切り傷程度になった傷口からの出血はそろそろ止まりそうだ。

変形していた部分の違和感はなくなり、後は腫れと変色した部分だけなんとかなれば…

「出てきなさい！」

「…わかりました。少し待ってください」

肩口で縛っていたジャージを外し、左腕を庇いながら羽織る。うううー。

ちよつとした動作なのに、出血が多かったせいとか少しクラクラする。目の前が暗くなりそうな感覚に、思わず目を瞑り壁に背を預けて深い呼吸を繰り返す。

うん？

「矢原先生、怪我してますか？」

「怪我？怪我をしているのは貴女でしょ！」

「いや、そうなんですけど…」

気のせい？

「誤魔化してないで、早く開けなさい！」

誤魔化したわけじゃないんだけど…

「あー、…はい」

少しだけ扉を開き、開いた隙間からこそっと覗く。

矢原先生の不機嫌そうな顔。

目元が鋭いだけに、そういう顔をされると普通に怖い。

思わず閉めてしまった。

「ユキちゃん……………」

「…はい」

もう一度気力を振り絞って扉を開く。

「…何をしているの？」

「……………」

といわれましても、トイレの扉の隙間から覗き見しているだけですが？

あれ???

…………… やっぱり…

扉越しじゃなかったらハッキリ分かる…

…………… 分かっってしまう

「…………… えっと、さっきの子は大丈夫でしたか？」

「大丈夫よ。驚くことに掠り傷一つなかったわ」

なんとか気を紛らわせないと…

「…良かったですね」

「そうね、あの状態で怪我をしなかったなんて奇跡的ね」

痛みでもなんでもいい、意識をしっかりとらないと…

「…蘭さんは」

「あの子も怪我はなかったわ」

身体が痺れる…

「…そうですね」

「怪我をしたのはユキちゃんだけよ」

頭が痺れる…

「…わたしは…」

意識が薄れる…

「だからちゃんと出てきなさい…」

「矢原先生、怪我してますね」

「だから、わたしは怪我なんてしてないわよ」

「してますよ」

「わかったから、落ち着いて出てきなさい」

信じてない。わかってない。わたしが混乱しているんだと思ってる…

…混乱はしている。視界が暗くなり酷い耳鳴りと呼吸困難、身体が爆発してしまいそうなくらいの動悸。冷たくなり感覚の鈍った自分の身体。

何も考えることが出来なくなった頭…

「匂いがしますよ。矢原先生の…」

「えっ!?!」

突然、トイレの個室から飛び出して腕をつかんだわたしに驚いたのか、わたしの顔を見て固まる矢原先生。

「……ほら、血が出てる」

矢原先生の右腕を固定し、矢原先生に見えるように手を握る。傷自体は浅いようで、もう血は止まりかけていた。

「…あ、さっきぶつかった時に…」

「気がつかなかったんですか?こんなに綺麗に切れてるのに」

手の甲から手首に向かって走る綺麗な赤い線。

まだ痛みの残る左手を近づけ、そっと傷口を指でなぞる。

「っ!?!?!」

直接傷口に触られる痛みによって身体を強張らせる矢原先生。

そんな矢原先生の目を見ながら、強張った先生の手をゆっくりわたしの口元に近づけ、傷口にそっと舌を這わせる。

「…ユ、ユキちゃん!」

驚いて逃げようとした矢原先生の手がわたしの左腕にぶつかり、思わぬ痛みを掴んでいた矢原先生の腕を離れた。

「ぐつつ!!」

「あっ!」

まずい…なにやってんだろ……

痛みのお陰で少し冷静になったわたしは、矢原先生から離れて壁に寄りかかった。

「う、ごめんなさい」

「……お願いです。今は近づかないでください」

わたしに駆け寄ろうとしていた矢原先生が動きを止めたのを確認して、目を瞑る。

「……」

「ふうー……」

目を瞑ったまま、気持ちを落ち着けるように何度か深呼吸を繰り返す。

少しずつ身体感覚が戻り、それと同時に頭の霧が晴れるように思考が戻ってくる。

「ユキちゃん……」

「……すみませんでした。気が動転していたようです」

「……大丈夫?」

大丈夫…
まだ大丈夫だ……

「はい、大丈夫です……。血は…止まりましたか？」
「大した傷じゃないから」

怖くないのだろうか。
逃げてもいいのに……

「…どこかにぶつけたんですか？」
「さつき廊下で人にぶつかったのよ。その時に荷物にでも引っ掛けたのね」

明らかに異常な行動をとったわたしと、なんで普通に会話ができるんだらう。

「…その時に怪我に気付かなかったんですか？」
「慌てていたから……」

怖くないはずなのに。

「廊下は走っちゃダメなんですよ」
「ユキちゃんを探すことが優先だったの」

どこまでも優しい人……

「すみませんでした。…ありがとうございます」
「…ユキちゃん、左腕の状態が見たいの。近づくわよ」

でも…もう終わりかな……

矢原先生が、わたしを見ながらゆっくり近づいて左腕にそっと触れる。

「痛みはある？」

「いいえ、もうほとんどありません」

羽織っていたジャージを捲り、血に染まった体操服を見た瞬間、矢原先生の手が止まった。

「……痛かったら、すぐに言って」

「はい」

慎重に体操服を浮かして捲り上げていく矢原先生。

血に塗れた腕の傷は、かなり小さくなっていった。

その小さな傷も、見る間に無くなっていく。

……さつきより治癒速度が上がってる。

舐めただけとはいえ、矢原先生の血を得たからだろう。

「……」

「……矢原先生、もう戻ってください。わたしは大丈夫ですから……」
もう近付かないでください。

「……」

「……蘭さんが待ってますよ」

わたしは大丈夫ですから……

「……………」

「…御自分の傷の手当をしてください」

逃げてください。

「…保健室に行くことにするわ」

「そうですね。その方がいいと思います」

「……………」

「……………??？」

はて？

この手はなんでしよう？

「あの？矢原先生？」

「なに？」

「何してるんですか？」

「何って、流石に目立つから隠さないといけないでしょ」

「はあ……………」

わたしの血に染まった体操服を隠すように、羽織ったジャージの袖口を整える矢原先生。

「それで…………？」

「保健室に行くのよ」

ええ、それは聞きましたが…

「なんで、わたしの手を握ってるんでしょうか？」

矢原先生がわたしの右手を握ったまま振り返った。

「なんでって、貴女が動かないからよ？」

「えっ？あの、いや…矢原先生？」

どうしてそうなる？？

「体操服…」

「へっ？」

「そのままじゃ不味いでしょ」

言われて、改めて自分の姿を鏡に映す。

ジャージを羽織った姿は一見なんの違和感もないけど、傷口を覆ったり肩口を縛ったりしていたジャージは、よくよく見るとあちこちに血の染みを確認することが出来た。

そして、もちろんジャージの下の体操服は血塗れなわけだ。

…確かに不味い。

「保健室に予備の体操服があるから、それを使いなさい」

「…わかりました」

洗面台の血を洗い流してからトイレを出て、矢原先生に右手を引っ張られながら廊下を歩く。

さつき借り物競争から救護テントまで戻ったときは反対だなー。そんな、取り留めのないことを考えながら、歩く度に動きを変える矢原先生の真っ直ぐで黒く長い髪を、ぼんやりと目で追いかける。

「……………」

「……………」

何か言わなければならぬのに、何を言えばいいのか分からない。
誰も通らない廊下を無言のまま二人で歩く
き、気まずい…

カチャカチャ…ガチャ

居心地の悪い雰囲気のまま、矢原先生が鍵を開けた保健室に入った。

「用意してくるから椅子に座って待ってなさい」
「……………」

矢原先生が予備室に入っていったのを見て、言われた通り椅子に近づく。

さっきから貧血による眩暈のせいで立っただけでも辛かったから、椅子に倒れこむように座り、クラクラする体を背もたれに預けて目を瞑る。

「大丈夫？」
「にやつ！！！！！！？」

耳元で聞こえた声に驚いて横を見る。
いつの間にか戻ってきていた矢原先生が、畳まれている体操服とジャージを持ったまま覗き込んでいた。

「ごめんなさい。驚かせてしまったみたいね」

にやっぺなんですか！なんなんですか！！！！うううー／／／／／
くすくす笑う矢原先生に、恥ずかしさが増す。

「だ、大丈夫です。出血が多かったので少し貧血気味なんだと思います」

そう言った途端、笑いは止まる。

「……………」

「……………」

「…出血は止まったの？」

「止まりました」

矢原先生の血のお陰で…

「そう…。これを使いなさい」

「ありがとうございます」

用意された清潔な体操服を受け取り、椅子に座ったまま羽織っていたジャージを脱いで机に置く。

ここで着替えても構わないかな？

チラッと矢原先生を見ると、右手の傷の手当をしようとしていた。

立つのも億劫だしいいよね。

「……………」
ウソ……………」

「?????」

体操服を脱いだ時に、小さな呟きが聞こえてそちらを向くと、矢原先生が右手の傷を見て驚いた顔をしている。

うん??

「どうかしたんですか?」

「いえ。大したことじゃないんだけど…」

「だけど?」

「…傷がもう治りかけてるから驚いただけよ」

「……っ!」

思い当たる節があります。

ええええ、傷口舐めちゃいましたしね…

…………… どう考えてもわたしのせいじゃないですか。

「………そ、そうですか。良かったですね」

「そうね…。あっ、ちよつと待って」

汚れた体操服を机に置き、新しい体操服を手に持ったわたしにスト
ップがかかる。

ブラジャー一枚の上半身で固まるわたし。

そりゃ女性同士だし、相手は医者なんだし、矢原先生もなんとも思
ってないわけだし…

それでも、やっぱりなるべくなら早く着たいんですよ。

「なんですか?」

「そのまま着たら、新しい体操服も汚れるわよ」

言われて目を落とす。血は止まっているけど、流れ出た血に塗れた

左腕。

…確かに。

「痛かったら教えて」

「じ、自分でやりますよ」

「保健医としての、わたしの仕事よ」

「はあ…」

左腕を固定して、血で汚れた部分を拭いていく。

やがて全ての汚れを拭い去ると、そこには傷ひとつない左腕が現れた。

「……………」

「……………」

黙ったまま、新しい体操服を着る。

「…何も聞かないんですか？」

沈黙に耐え切れなくなったのはわたしだった。

「…………聞かれないの？」

「……………」

「聞かれたくないものを、無理に聞こうとは思わないから」

「気味が悪いと思わないんだろうか…」

「…怖くないんですか？」

「怖い？別に怖いとは感じないし、怪我の治りが早い体質だとしても」

思っておくわ」

いや、それは流石に無理があるでしょう…

「左腕を出して」

「えっ？」

「流石になにも治療していないと変でしょう。幹部が見えないようにしておくから」

「ああ、そうですね…」

そう言いながら、包帯を巻いていく。

「ユキちゃんは怖いのか？」

「な、何がですか？」

「誰かと一緒にいることが」
「……………」

あまりに核心をついた言葉に、何も答えられない。

綺麗に包帯が巻かれていくなか、静か過ぎる時間が流れる。

「染みになってしまっから、洗っておくわね」

包帯を巻き終えた矢原先生が、汚れた体操服を持って予備室に消えた。

…怖い？

そうですね、怖いです。

矢原先生だけじゃなく蘭さんや修さん。最近わたしの近くに人が増えてたと思う。

そんな人たちを傷つけてしまう、自分自身が怖いんだ。

「その体操服は学校の備品扱いだから気にしないで。また洗濯して持ってきてくれればいいから」

「ありがとうございます。助かります」

「午後の競技は止めておきなさい。貧血でまともに動けないのでしよう?」

「そうですね。先生に相談して他の方をお願いします」

「お昼は…」

コンコン

ガチャ

「失礼します」

ノックの音がしてドアを見ると、開いたドアから入室の断りと共に蘭さんが入ってきた。

「ユキさん、大丈夫ですか?」

「いいタイミングできたわね。病院に行くほどの怪我ではないけれど左腕を打撲しているから、午後の競技は禁止ね」

「みなさんに迷惑をかけてしまいますが…」

「そんなことは気にしないでください。痛みますか?」

「多少は。でもすぐに治ると思います」

「無理をなさらないでくださいね」

痛そうな顔をして心配してくれる蘭さん。

…ごめんなさい。全く痛みはありません。

「お弁当を持ってきたの？」

「はい。どこでお昼にするかお聞きしていなかったなので、念の為に持ってきました」

「じゃあ、いつもと一緒にいるけどここで食べましょうか」

「そうですね。では、用意をさせていただきますね」

わたしは、この人たちから離れるべきなんだろう。

「あの、わたしは……」

「凄少量のお弁当でしょ？」

「えっ？あ、はい」

遮られた言葉に、机の上に広げられていく御重を見てしまう。

「あの、ちよつと今日から……」

「3人で食べられるかしら？」

「……どうでしょうか」

3人で食べても苦しいでしょうね。

「もうしわけな……」

「頑張つて食べないとね」

「……」

ことごとく遮られるわたしの言葉。

「……矢原先生」

「一緒に食べましょう」

「でも、わたしは……」

「逃げないで、もう少し付き合いなさい」

「……」

なんで、そんな風にわたしに接することが出来るの？
逃げなきゃいけない時もあるんですよ？？

「お二人とも、用意が出来ましたよ」

目の前の机に広げられた御重と、取り皿、お茶、お箸。もちろんわたしの分もある。

「食べるわよ」

矢原先生がわたしを見てる。

お箸を持った。

「いただきます」

「「いただきます」」

わかりました…。

逃げませんよ。

第8話（後書き）

自分の傷から出る血を自分で舐めたら還元出来ないの？

あつ、流石にそんなエコサイクルはありませんか…

第9話（前書き）

この小説はフィクションです！

細かい部分が現実的でないのは当たり前なんです！

だから、そんなもんなのかーくらいで読んでくださいえ。

実際、ここはおかしいよとか言い出したら書けないんでね…

第9話

11月になつて一気に寒くなつたように感じる。

特に今日みたいな雨の日は肌で感じる気温だけでなく、どこまでも暗い灰色の空とか葉を落とした木の物悲しさとか、視界からも寒さを訴えてくる。

昨日の体育祭で晴れていたのがウソのように、次の日は朝から雨だった。

やっぱり、天気予報は一日ずれちゃったか。

体育祭が日曜日に行われるから、月曜日の今日は振り替え休日。

電気を点けても薄暗く感じる部屋の中、カーテンの間から鬱々とした空を見上げた。

珍しい平日の休みも朝から降る雨で台無しだなー。

まあ、晴れてても雨が降つてても出掛ける場所は変わらないけど…

押入れを開けて数少ない私服の中から、ノーカットのストレートジーンズと無地の白い開襟シャツを取り出す。

ジーンズを履き、シャツに袖を通すときに左腕に巻かれた包帯が目に入った。

昨日、矢原先生が綺麗に巻いてくれた包帯はお風呂に入る時に一度外したから、今巻いてある不恰好な包帯は、今日の朝に悪戦苦闘しながら自分で巻いたものだ。

あまりに面倒くさくなって止めようかと思つたけど、どうせ明日も巻いていかないといけないんだから、慣れておくために何度かやり

直して適当なところで満足した結果だ。

わたしが不器用なのか、矢原先生が器用なのか…
内科の先生でも、包帯を巻くのは上手いということが判明。

シャツのボタンを上まで留め、長い髪を適当に一纏めにしてざっくりアップにしながら、もう一度窓から外を見る。

止みそうにないなー。

出来るだけ、遠野の家にいる時間を無くすために平日は授業が終わってからの時間を図書館で過ごしてた。今は保健室だけど…

休みの日は御婆様の言いつけがない限り外に出掛ける。主に図書館だけど…

雨が降る中、図書館に行つてまで読みたい本があるわけじゃないけど、修さんとの婚約が決まってから自由な時間がなかったから、御婆様の目が届かないところに行きたいという気持ちの方が勝った。

男物の厚手の黒いジャケットを羽織り鏡の前に立つ。

小柄とはとても言えない身長。デザインなんて考えてない洗い晒しのジーンズ。飾り気のない白いシャツ。シャツの上から羽織った無骨な黒いジャケット。

適当にアップにした髪は、纏まりきらなかったサイドの毛がジャケットの黒と対象的な金色の模様を描いている。

鏡に映るわたしは、可愛いとはとてもいえない格好をしていた。

女らしさとか、可愛らしさとか望んでないわたしにとって、これが休みの日の普段着。

勝手口の傘立てから、黒い紳士物の傘を抜き取り外に出る。

いつも学校に行く時は他の人との通学時間を避ける為に、かなり早く家を出るけど、今日は動き出したのがいつもより遅かったせいで、丁度通勤通学の時間と重なったのか道を歩いている人が多い。

失敗したかなー…

バス停に並んでいる、スーツ姿と学生服の列を見てげんなりする。しばらくして駅を循環しているバスが止まった。

元々乗っていた人が途中で降りる気配もなく更に人を増やしながらかぎゆづぎゆづ詰めの状態で20分。

拷問ですか…？

駅のロータリーに停まったバスから吐き出されるように出た後、呼吸が出来る喜びに思わず感動する。

通勤や通学でこの苦行を受けた後、仕事や授業をするなんて考えたことも無い。

雨の中、傘を差して駅前を行き交う人波…御苦労様です。

バス停の下で雨宿りしながら、くらくらした頭のまましばらくボートとする。

いくらかマシになったところで時計を確認すると、8時15分になっていた。

まだ図書館が開くまで1時間程ある。

どうせだし、少し大きい公立図書館に行こうかなー。

目的地を学校の定期圏内にある大きな図書館に決め、いつも学校に行くのと同じように駅のホームに向かう。

当たり前だけど…人が多かった…。

時間的に学生の姿は殆ど見かけなくなってるけど、まだまだ通勤時間帯の会社員の姿は減ったように感じない。

うっ、心が折れそうです…

どこかで時間潰して、近所の図書館にしようかなー。

そう思ったときにホームに入ってきた電車が、目的の駅までの間の殆どの駅を通過する通勤時間帯のみの特別区間快速だった。

乗ってしまえば10分くらい我慢するだけだし…覚悟は出来ました！

外の寒さが嘘のような車内。

しかし、それは暖かいと表現するにはあまりにも不快指数が高かった。

狭い車内に押し込められた、明らかに乗員オーバーな人の集団。

普段の荷物以上に邪魔になる濡れた傘。

酸素が薄いと感じるほどの湿度と熱気。

キーーーーっ

乗っている誰しもが早く目的の駅に着くことを祈ってるなか、駅間で停まった電車。

『お客様に御連絡致します。前を走ります電車内に急病のお客様がおられます。只今救護活動を…』

ああ……普段の行いが悪いのでしょうか…

動く気配のない電車に、乗車している人たちのイライラ指数も上が

つてきているようだ。
そりゃそうだよな。週のしょっぱなから雨が降ったかと思っただら朝から電車が停まるとか、入社して仕事をする前に通勤の段階でぐったりだろう。

『繰り返しお客様に御案内致します。前を走ります電車内で急病のお客様の救護活動を行っておりました影響で……』

分かった。それは分かったから…

『御急ぎのところ大変申し訳御座いませんが…』

結局いつ運転再開するの???

時間も確認出来ないくらい身動きの取れない状態だから正確なところは分からないけど、恐らく停車して5分は経っただろう。

正直、この状態で待機させられるのは厳しいものがある。

昨日の今日で体調が万全とは言い難い上にこれでは…さっきから眩暈が酷く、自分が急病人で救護されそうな状態だ。

せめて、これがどこかのホームに入ってくれれば…

明滅する視界の中、周りにいる人たちがわたしの様子がおかしいことに気付きだしたみたいで、迷惑そうに見てみぬ振りしようとしているのが分かった。

これ以上、面倒臭い事に巻き込まれるのが嫌なんだらう。

これだけ密集している車内で、どこにそんな隙間があったのかと思うくらい、わたしとの距離を空けようとしている。

…助けてくれなんて言いませんよ。
ああ、早く駅について……

『御待たせ致しました。次の 駅まで進みます』

唐突な車内アナウンスと共に進みだした電車の揺れに、力の入らなくなつた手で掴んでいた吊り革から耐え切れなくなつてずり落ちるよように振り払われる。

「つと!!」

「!!」

周りの人を巻き込みながら倒れる自分の姿が頭に浮かんだけど、抗うことも出来ずに傾ぐ身体。

予想していた衝撃は、後ろの方から支えるように腕が差し出されたことで回避された。

「す、すみません……」

後ろを振り向いてお礼を言いたいけど、身動きの取れない車内と未だにクラクラする頭で振り返ることも出来ない。

「大丈夫ですか？」

「…有難う御座います。大丈夫です」

声だけで判断しよう。

どうやら男性のようだ。

「次の駅に停まったら降りますよ。いいですね」

「えっ、…はい」

一緒に降りてくれるらしい。
どうやら親切的な男性のようだ。

「最近の大学生は頼りないと思ってたんだけど」
「ねえ。いい子もいるのね」

座席に座ったおばさん二人の会話が聞こえる。
どうやら親切的な男子学生のようだ。

電車のスピードが落ち、ホームに滑り込んだ電車がゆっくり停車する。

目的の駅ではないけど、ここで降りとかないと不味いことになりそうだ。

「降ります。すみません通してください」

「あつ、あの」

親切的な男子学生さんが周りの人に声をかけながら、降りるための空間を切り開いていく。

ありがたいけど…若干恥ずかしいです……

後姿だけで分かることは、わたしと同じくらいの身長で撫肩で全体的に細身な感じ。

髪の毛は気にならない程度に染めているのか、暗めの茶色でくせっ毛なのか緩くカールしている。サイドが長めの髪型だけど、髪色とくせっ毛のお陰で重くは感じないかな。

「どこかに座ろう。動ける？」

ばおえええー

電車が遠ざかっていく気配を背に感じながら、ホームの柱に手をついて倒れそうになる眩暈と吐き気を堪える。

「…す、少し待って下さい」

「分かった。じゃあ、動けるようになったら声かけて」

しばらくして少し気分が落ち着いてくると、背中を触られていることに気付いた。

背中を摩ってくれてるんだろうけど、他人に、それも男性に触られてることにびっくりして慌てて振り向く。

「あっ?？」

あれ?

「マシになった?」

目の前にいるのは親切な男子学生さん……のはず。

「ユキちゃん?大丈夫?？」

草食系男子代表?？」

「…和志さん?」

「へっ?気付いてなかったの?」

だって、男子学生って…

確かに、学生にしか見えないけど…

「動けるならベンチに座ろうか」

「あつ、はい」

はぁー

駅のベンチに座り和志さんが買ってきてくれたお茶を飲んで、強張った体から力を抜くと少しずつ気分もマシになってきた。

「すみません。御迷惑をお掛けしました」

「いいよ。大丈夫大丈夫」

「お仕事じゃないんですか？」

「仕事から帰ってきただけだし、問題ないよ」

仕事って確か…

「お医者様？」

「うん？医者じゃないよ。医療関係だけどね。僕はレントゲン技師」

「お医者様じゃなくても夜勤があるんですね」

「あー、僕のところは夜間の救急があるから」

そついうもんなのかー

「大きい病院なんですか？」

「あれ？それは聞いてないの？聖アンテルス病院。ユキちゃんの通っている学校の医学部付属の大学病院だよ」

「えっ！そつだつたんですか？」

そんなこと誰からも聞いていませんか？

聖アンテルス女学院はイギリスにある姉妹校共々医療に力を入れていて、日本でも医学部は国立の大学と並び国内最高水準の学業を修めることが出来る。

イギリスでは付属の病院が創立80年を迎え、最先端医療を受けることが出来る有名な病院で、日本の医学生や研修医の医療研修として広く現場を開放し、多くの名医師を輩出してきた。

その医師たちが日本に戻り、日本でも最高の医療が受けられるようにと15年前に出来たのが日本の聖アンテルス病院で、医師・技師・看護師、全てが海外の国立病院からお声がかかるハイクラスの病院だ。

つまり、この病院に勤務しているということは、医療業界でのエリートということですよ？

「凄いですね」

「まあ、僕は医者じゃないから」

「いやいや、技師でも凄いですって。」

「あれ、じゃあ矢原先生は…？」

「みちる？みちるはあそこで内科医してたよ」

サラッとおっしゃいましたね…

「なんで学校なんか？」

「大人事情。僕も詳しいことは話せないけど、今でもみちるは病院側に籍があるから一時的な移動なんだよ。期間が終われば病院に戻ることになるね」

「そうなんですか…」

まあ、トップクラスの医者が学校の養護教諭なんてやってたら、病院側からしても大きな損失だろうし、一時的にでもリリースせざるを得なかったってことは大事情があるんでしょうが……
そっか……一時的なんだ……

うん？聖アンテルス病院？

「あの、病院から帰ってきたんですよね？」

「そうだよ」

「病院って、反対方向じゃないですか？」

そうだ、このまま電車に乗ってたら病院の最寄り駅に着く。
今から出勤っていうなら分かるけど、帰宅中っていうのは明らかにおかしい。

「席が空いてたから座ったのはいいけど、寝過ぎしちゃって」

「ああ、そういうことですか」

単純な理由でした。

「うん。気が付いたら過ぎてて、仕方がないから引き返してきたんだ。普段は殆ど車通勤だし、乗り慣れないものはダメだね」

「お疲れのところをお引止めして、すみません」

「いや、僕もこの駅で降りるつもりだったから大丈夫。偶然だけどユキちゃんの助けになれて良かった」

「本当に助かりました」

きつと、あのまま和志さんがいなかったら、わたしが原因の遅延が発生していましたね。

「どこか出掛けるところだった？」

「図書館に行こうかと思ってたんですが…」

「どうしてもって用事じゃないなら無理せずに病院とか行った方がいいんじゃない？」

「そうですね…」

正直、帰るにしても行くにしても、今からまた電車に乗るといのは厳しいな。

もうしばらくここでジツとして、マシになったら動くか…

「ただの貧血なので病院とかは必要ないです。もう少ししてマシになったら帰りますから、和志さんはお先にどうぞ」

「貧血？ああ、貧血か。女の子は将来のこともあるんだから無理しちゃダメ。自分の身体と上手く付き合っていかなきゃいけないよ。」

へっ？

なんか違う…

いや、確かに貧血ですが…生理じゃないです。

っていつか、なんでそんなに恥ずかしげもなく言葉に出来るんですか？

医療従事者凄いなー！。

「は、はあ」

「で、用事があるわけじゃないし、ユキちゃんも帰るだけなんだったら送っていくよ」

「いえ、そこまでして頂かなくても大丈夫です。マシになったら帰りますし」

何をおっしやってるんですか？

いい人過ぎるにも程がある。

「って言っても、雨が降ってるから電車はなーーー」

聞いてない！？送ることは確定ですか！？？

「あつ、あの！ホントに大丈夫なんで！」

「いやいや、ここでユキちゃんを置いて帰ったら僕が怒られるよ。

……
ちよつと待ってて」

お断りをしているわたしを置いて、どこかに電話をしている和志さん。

もう、動けるし一人で帰りたい…

「ごめん、お待たせ。じゃあ行こうか」

「どこに行くんですか？」

「駅前のロータリーに送迎車がね」

「送迎車？」

「取り合えず、付いておいで」

ゆっくりのペースで歩いてくれる和志さんの後ろについて歩く。

「えーと、あついたいた」

ロータリーに着いた和志さんが、軽く手を上げると黒い乗用車が目の前に停まった。

スモークガラスで中が見えないようになっていたけど、どうやらこれが送迎車らしい。

「雨に濡れないうちに乗っちゃって」

「…はい」

左ハンドルの車の運転席の人と目が合う……えっ!!!!!!!!!!

「ユキちゃん、後ろ片付けてあるから乗りなさい」

ウィンドウが下がり、顔を出した運転者が後ろを指差した。

「……あ、はい」

わたしが後部座席に乗って、和志さんが助手席に納まったところで車がゆつくりとロータリーから動き出す。

「本当だったら、このまま直接ユキちゃんを送るんだけど…。一旦家に戻っても大丈夫？」

「あ、あの、わたしは何でも大丈夫です」

「そう？じゃあ、すぐに着くから」

「……………矢原先生……」

「何？」

「いえ…なんでもないです」

間違いなく矢原先生です。

そりゃ、和志さんと矢原先生は御夫婦ですけど…

「和志、すぐ着くんだから寝ないで」

「ふぁー……。はいはい」

ホント、姉と弟の図なんだけど…同い年なんですよね。そういえば…

「お二人はおいくつなんですか？」

「女性に年齢を聞いちゃいけないのよ？」

「すみませ……」

「26」

「あっ」

「ごめん！僕、女性じゃないからつい」

聞いちゃいました。

しかし、やっぱり和志さんは童顔で、矢原先生は落ち着きすぎなんですね。

「別に年齢くらいいいけど……着いたわよ」

駅から5分くらい車で走ったところにあるマンション。

うん、高級マンションですね。

夫婦揃って医療エリートだと、車だってマンションだって高級ですよね。

「ユキちゃん、少し横になっていきなさい」

「いえ、そこまでして貰う訳には」

「いいからいいから。みちるはユキちゃんが心配なんだよ」

「片付いてないけど、いらっしやい」

「……はい。有難う御座います」

しかし……最上階ですか……

「みちる、僕ちよつと出るから。何かあったら連絡して」

「わかったわ。車使ってもいい？」

「いいよー」

和志さんは部屋の前まで来たけど、そのままどこかに出掛けるらしく、矢原先生とわたしだけが部屋に入る。

「そのソファ―に座っておいて」

言われたソファに腰を掛けて、部屋を見渡す。

片付いてないとか言ってたけど、綺麗に整頓されているリビングはまとまりのある配色で清潔感のある空間だった。

「ベッド用意したから、使いなさい」

「…有難う御座います」

「まだ貧血が辛いんでしょ？」

「…そうですね」

「…なんで今日無理するのよ」

「…お休みだったの？」

「………もういいわ」

…家に居たくなかったんです。

「すみません……」

用意されたベッドに入って目を瞑る。

うん、クラクラする視界が安定して随分楽だ。

「寝なさい。起きたら送ってあげるから」

矢原先生の手が、頭をポンポンとゆっくり撫でるように滑る。眠るつもりはなかったのに、わたしは段々と…

「おやすみなさい」

「おやす…い」

矢原先生…睡眠導入材みたいだ…

第9話（後書き）

みちるさんのフルスモーク外車。

うーん、似合うような似合わないような…
和志君、君には全く似合いません。く（´・ー´）ノ フッ

第10話（前書き）

なんか姉妹出てきた！。

ちょっと、名前が主人公より目立つのですが…

第10話

「やはり寂しいですね」

「うん。そうですね」

恒例となりつつあるお昼休みの時間、いつもの保健室とは違う空間に少しの違和感を覚えながら、もう何度目かになる会話を繰り返す。

「イギリスですか。遠いですね」

「まあ、そうですね」

今週は月曜日からずっと同じような会話をしている気がする…

11月に修学旅行というイベントがある聖アンテルス女学院では、体育祭が終わり一息ついたと思ったら、すぐに一週間の日程で2年生がイギリスへ飛び立つ。

今年に関しては、自分には関係ない事として忘れていた修学旅行なんだけど、矢原先生は養護教諭なわけで…

引率者として同行するということを行く直前である先週末に知らされたわたしと蘭さんは、部屋の主のいなくなった保健室でお昼を食べることも出来ず、蘭さんの提案で生徒会室を間借りしているのである。

部外者のわたしが勝手に使用するのはどうかと思ったんだけど、修学旅行の期間は生徒会長が不在だし、一週間だけだし…と蘭さんに押し切られた。

「そついえば、ユキさんはイギリスの御生まれでしたか？」

「そつ…ですけど…」

なんで分かったんだらう？

「わたし、言ったことありましたっけ？」

「いいえ、以前みちる姉さんとお話しされていた時イギリス英語だったようなので」

ああ、矢原先生と話してたときか。

「よく分かりましたね。そういえば矢原先生も British English でしたか」

「みちる姉さんはイギリスに住んでおられたんです。私も2年程みちる姉さんと一緒にイギリスにおりましたから、イギリス英語は問題ありません」

「えっ？イギリスにいたんですか？？」

初耳ですが！？

「みちる姉さんがお医者様なのはお話ししましたでしょうか」

「ええ。聖アンテルス病院にお勤めというのも和志さんからお伺いしました」

「そうですね。留学して大学を飛び級。そのままイギリスの病院で経験を積まれて、日本に戻られたんです」

もの凄くエリートじゃないですか。

「凄いですね…あれ？蘭さんは留学ですか？」

「私は、母が亡くなってからみちる姉さんのところに引き取られたのです。父もわたしが産まれてすぐに亡くなっていましたので、そのままイギリスに」

「御爺様がおられたのでは？」

あつ、しまった突っ込み過ぎた。

「大した理由ではないですよ。元々みちる姉さんと仲良くして頂いておりましたし、みちる姉さんから一緒に暮らさないかと声を掛けて頂いたので。祖父も私のことを考えてみちる姉さんの方がいいと判断されたのでしよう」

大した理由じゃなくて良かった。

「本来であれば、みちる姉さんはイギリスの病院で実績を残されていたでしょうし、日本に戻ると決めたのも私の為なのでしょう…申し訳ない事です」

大した話しになりました。

「で、でも日本に戻ってきたから矢原先生は和志さんと出会って結婚出来たんですよ。日本にいることが運命だったんですよ」

「みちる姉さんと和志さんは幼馴染らしいのですが、結婚されたのは日本に戻ってきたからかもしれないですね」

幼馴染でしたか…

「いつイギリスから戻ってきたんですか？」

「4年前ですね。私が中学に入学する時に戻ってきました」

「あれ？今は一人暮らしなのですか？」

「そうです。と言いましても、みちる姉さんの住んでいるのと同じマンションですけれど」

あの警沢マンションか…

「じゃあ、心強いですね」

「みちる姉さんも、祖父も心配性ですから」

心配してくれる誰かがいるということは幸せなことなんですよ。

「矢原先生が向こうにいる間は和志さんも寂しいですね」

「ふふふ。私達も寂しいですしね」

「そ、そうですね」

また冒頭の会話を繰り返すの？

「あつ、そういえば今日の分も和志さんからお預かりしていますよ」

おっ、どうやら繰り返すのは回避してみたみたい。

蘭さんが冷蔵庫から取り出したタッパーの蓋を外すと数種類のフルーツが彩りよく詰められていた。

「ありがとうございます」

「今日はサラダじゃないですね」

「デザートですか…」

何故か矢原先生が毎日持ってきてくれてたサラダを、今週は和志さんが継承してくれてるらしく金曜日の今日はフルーツになっていた。しかし、ただのフルーツなのに皮の剥き方とか飾り切りとか…

「色々な切り方があるんですね」

「…食べるのがもったいないような気がしちゃいますね」

「和志さんらしいですね」

「普通で良いのに…」

「蘭さんも一緒に食べましょう」

「有難う御座います。遠慮なくいただきます」

しかし、和志さんってホントに…

「可愛らしいですね…」

「そうですね…」

やっぱり、誰でもそう思いますよね…

ガチャ

うん？

「あー、いたいた」

誰???

食べ終わったタッパーを片付けてるところに、ノックも無しに空けられたドアから一人の生徒が入ってきた。

「ごめん、食事の邪魔しちゃった？」

「いえ、もう食べ終わりましたよ。奏音^{かのん}さん、今日は何がありましたか？」

奏音さん？

うーん、知ってるような知らないような…

生徒会室に来たって事は生徒会の人なんだろう。二年生は修学旅行だから、必然的に一年生か三年生ということになる。チラッとネクタイの色を見た。

聖アンテルス女学院は御嬢様学校のイメージであるセーラー服…ではない。

所謂デザイナーズ制服と言われるもので、基本の形はブレザーにプリーツスカートとカッター、ネクタイ、ハイソックス、ローファー。ネクタイは各学年毎に色が指定されていて、一年生はワインレッド、二年生はコバルトブルー、三年生は黒。全てのネクタイに白で斜めに細めのストライプが入っていて校章の入ったシルバーのネクタイピンを使用する。

スカートはプリーツスカートで、基本色をワインレッドに白・黒・コバルトブルーでのチェック柄で、スカートの裾の部分に白色の細いラインが2本引いてある。カッターは白色に少しだけ黒色を落としたような薄い灰色。

ブレザーは逆に黒色に少しだけ白色を落としたような濃い灰色でダブルボタン、左胸のポケットの部分に校章の刺繍。

今の時期は、Vネックのセーター、ニット生地 of Vネックベストかカーディガンを選択して着用出来る。色は全てブレザーと同じ濃い灰色で、胸元に小さく校章が入っている。

靴下は校章が小さく入った黒色の膝下丈ハイソックスで、靴は学校指定の黒のローファー。

ちなみに、鞆も学校指定だったりする。

わたしは制服に可愛さとか求めていないけど人気のある制服らしく、聖アンテルス女学院の象徴、御嬢様ブランドとして憧れる女子は多

いらしい。

それで目の前の奏音さんかというと、セーターから見えるネクタイのカラーがワインレッド。つまりわたし達と同じ一年生ということになる。

「いやー、生徒会の用じゃないよ。遠野さんに話があつてさー」。

今週は生徒会室で遠野さんと昼食を取るって聞いてたから、丁度いいかたつて」

「ユキさんに?」

わたしに??

「あ、あのなんでしょう?」

というか誰?

「妹の琴音ことねを助けて頂いて、有難う御座いました」

「へっ?」

急に頭を下げられたけど……どういふことですか?

「体育祭のときですか?」

「そう。ちゃんとお礼を言わないと思つてただけど、なかなか機会がなくてさー」

蘭さんが助言してくれたけど……体育祭?

体育祭体育祭……??

「ユキさん、体育祭の棒倒しの時にお助けになつた女の子を覚えて

いますか？」

「えっと、あんまり覚えてないですね……」

「あつ、覚えてなかったんだー。あん時のじゆんときは白崎しらかぎ琴音かんの。で、私は姉の白崎しらかぎ琴音かんの」

同じ一年生で姉妹ということとは、双子ってことか。

って言っても、ホントに顔も覚えてないし気にしなくていいのに。

「そんな怪我もしていませんし、気にしないでください」

「いやいや、そんなわけにいかないっしょ。大きな怪我はしてないかもしれないけど、助けられたのは確かだしね。琴音も来るって言うてただけど、担任に捉まってるから遅れてるんだよね」

えっ、いやそういうの遠慮したいんですよ……

「そんな、わざわざいいですよ。今日はもう教室にもどり……」

ガチャ

あっ？

「きたきた。琴音ー」

どっかに隠しマイクでもあるんじゃないかなかろうかというタイミングですよね……

「奏音ちゃん、どこまで言った？」

「取り合えずお礼は言ったよ。琴音も言いなね」

…もう好きにして

「お礼が遅くなってごめんなさい。体育祭の時に遠野さんに助けて頂いた白崎琴音です。あの時はホントに有難う御座いました。遠野さんが咄嗟に動いてくれなかったら大怪我してたかもしれません」

「いえ、あのお姉さんにも言ったんですけど気にしないでください。無意識に動いてしまっただけです、怪我也治つてますから」

「ユキさん、そこは素直に受け入れてはいかがでしょう？」

「えっ？」

「あの時は、私もユキさんの背にかばって頂いて助かりました。感謝しています」

「えっと、はい。あー…どういたしまして…？」

なんで蘭さんまで便乗しちゃってんですか？

「はい。それでいいと思います」

なんで、そんなにみんな満足気？

「で、ここまでは琴音のお礼なんだけど、ここからはお願い」

「蘭ちゃんからは何か言った？」

「いえ…あのユキさんはそういうことにあまり関心がおありではないので…」

なんだなんだ？

「蘭さん言っただけなんだ？」

「す、すみません」

「んじゃあ、どうしよ」

「あたしが説明しようか？」

なんでもいいですけど、聞かなきゃいけないならサラッとお願いします。

「いえ、私が話します」

蘭さんが、何故か申し訳なさそうな顔でこっちを見る。そんなに話しにくい内容なの??

「蘭さん？なんですか？」

「あの、ユキさんはこの学校が好きですか？」

「へっ?」

「「えっ???」」

もの凄く唐突な質問でびつくりした…

というか、白崎姉妹も驚いてるってどういうこと?。

「えっと、…好きですよ」

「ありがとうございます」

「「「はっ?」」」

今度は完璧にハモレました。

「私もこの学校が好きです。周りに住んでおられる方。学校を好きでいてくださっている方達。都会の喧騒から離れ、守られてきた周りの自然。歴代の先輩方が守ってきてくださった校風。この学校を好きだと思って頂けるように、私は生徒会に入っているのだと思います。ですから、ユキさんがこの学校を好きだと言って下さって凄く嬉しいです」

「は、はぁ…頑張ってください…?」

「ユキさんは、生徒会のメンバーを御存知ですか?」

これ、どういう展開？

「……知りませんが……」

「二年生が4名と一年生が3名。現在は実質この7名で生徒会を運営しております」

「あつ、ちなみに一年生3名の内訳が、蘭さんと私と琴音ね」

「はあ……」

それは、なんとなく

「選挙前までは、三年生が4名おられて、会長・副会長も三年生でした」

「はあ」

で???

「現状の7名で運営していくのは、少ししんどいですね。来年度の一年生が入学するまでは、この状態が続くのでしょうか……」

「はあ……大変ですね……」

この話しは、どこに向かっているんでしょう。

「ところで、ユキさんは生徒会役員がどのように決められているか御存知ですか？」

うん？

「9月に生徒会役員選挙がありましたね」

「そうですね。会長と副会長は生徒会役員選挙で決まりますね。で

は、その他のメンバーは？」

なんだか嫌な流れを感じる…

「確か…会長からの指名だったかと…？」

「その通りです。今の会長は二年生の安東先輩あんどうで、副会長は私が任を受けております。現在その他の役員をしてくださっている方たちは、以前の会長が指名された方たちで、そのまま安東先輩が指名を継続されました」

「…そうなんですか」

「ユキさん」

「……………」

返事しちゃいけないと本能が訴えています。

「ユキさん」

「……………」

うとうとう

「…はい」

「生徒会からユキさんに指名が出ております」

やっぱり、そういう事かー

蘭さんの話しが遠回り過ぎだわ。

「申し訳ありません。非常に光栄なお話ですが、お断りします」

「えっ、なんで？」

「断る流れじゃないと思ったのになー」

いや、もの凄く断る流れだったし……
寧ろ受ける要素が何も無かったでしょうに。

「ですから、ユキさんに御声掛けするのはお止めするように申し上げましたのに」

「最近、蘭ちゃんと遠野さんが仲良くなったからチャンスだと思っただけだな」

「えー、ねえ理由を聞いていい??」

理由なんて分かりきってる。

「わたしは目立つのが苦手なので」

生徒会に入ったら、平穏な学生生活から遠ざかる。

今の平穏で静かに人の関わり最低限の生活を乱したくないし！

「……………」

「…ユキさんにはあまり御自覚がないようで」

「にしてもさ」

「遠野さん十分目立ってんじゃない」

「えっ?どこがですか??」

「容姿、成績・スポーツ」

まあ、容姿は髪の毛だけでも目立つから仕方ないけど、成績、スポーツはそうでもないはず！

「高身長で整いすぎた顔立ち。嫉妬すら出てこない日本人では有り得ない理想のプロポーションに、サラッサラのブロードヘアー」

「成績優秀で学年2位。テストは常に蘭ちゃんと1位争いしてるし」

「だからと言って運動出来ないわけでもなく、球技だろうが陸上競

技だろつが武道だろつがなんでもこい。運動部でもないのにどのスポーツでもレギュラー争い出来そうな運動能力があつて、でもどの運動部の勧誘も断つてる」

あれ？目立ってるの??

成績は主席じゃないならいいかと思つて調整してたし、スポーツなんかも部活をやつてる生徒にその競技では勝たないようにしてたし…もちろん一つの方向に特化しないようにどの部活からの勧誘も断つてたし……

何がダメだったの??

「正直申しますと、ユキさんの生徒会指名の御話しは随分前から上がつていたんです」

「ぶつちやけ、蘭さんより目立つ生徒だしねー」

蘭さんより目立ってる!?

そ、そんなはずない!!

「ただ、遠野さんつて人を寄せ付けないというか話しかけにくい雰囲気、今までは指名の話しも延び延びになつてただけど……」

それは、話しかけないでオーラです。

「そつかー、ダメかー」

「すみません」

「どうしても?」

「ユキさんの意思を尊重致しましょう」

「そうなんだけどさー」

「申し訳ありませんが……」

今までが目立ってたって言うなら、これ以上目立つのは控えなきゃ。

「あっ、生徒会役員が目立ってたらさ、裏方のお手伝いとかはダメ？」

「お手伝いですか？」

「それいいかも！要は人手が足りないときに助けしてくれるメンバーがいればいいんだし」

「確かに、そうして頂けるなら助かりますが…」

そりゃ、まあ生徒会に入れと言われるよりはマシだけど…

「…少し考えさせて頂いてもいいですか？」

「そうだね。安東会長が帰ってくる来週くらいに返事決めてくれたらいいよー」

「分かりました」

なんか、面倒なことになったな…

「じゃあ、こちらは先に教室戻るわー」

「蘭ちゃん、また放課後ねー。ばいばいー」

「はい、ではまた」

「遠野さん、じゃあねー」

「お邪魔しましたー」

ボタン

「はあー」

ドアが閉じられて、思わず溜め息が出た。

「ユキさん、強制ではないのですし気楽に考えればいいと思いますよ」

「まあ、そうなんですけどね……」

「もちろん、一緒に生徒会の仕事が出来れば嬉しいですが、私はユキさんと御友達としてお話し出来るだけで嬉しいですし、お手伝いの事も無理する必要はありませんよ」

「ありがとうございます」

うん。嬉しい。

「私達も戻りましょうか」

「そうですね」

ガチャ

面倒だけど、ちゃんと考えよう……

第10話（後書き）

和志さん…

何こだわり？

まあ、きつとみちるさんに乙女弁当を作る事が出来ないからストレ
スが溜まってたんでしようが…
来週には帰ってくるよ。良かったね。

第11話(前書き)

奏音の喋り方が普通…

普通って素晴らしい！めっちゃ書きやすいやん！！

こつなったら、誰か関西弁喋らしたるのかな…() () ()

第11話

「で、どうする??」

月曜日、まだ登校してきた生徒の少ない教室。本を読んでいたわたしの目の前の席に座った生徒が、唐突に声を発した。

あー、今日は前の席の子何か用事なのかな?いつもより大分早いぞ登校だわ。

「おーい、遠野さん」

えっ?わたしに話しかけてたの!?

なんか、前にもこんなことがあったなーと思いながら顔を上げると

……

「……………白崎…奏音さん?」

「はい、そうです。おはようございます。しかし、なんでフルネー

ム??」

「あっ、おはようございます」

目の前に座った生徒は、先週生徒会室で話しをした白崎姉妹の姉の方の奏音さんだった。

「えっと、白崎さんだけだと御姉妹なのでどうしようかと」

まさか、白崎姉さんとか白崎妹さんなんて言えるわけないし。

「それなら、私の事は奏音で妹は琴音っていう名前があるんだから、名前と呼んでよ」
「わかりました」

人見知りしない性格なんだろうな。わたしが出してる話し掛けな
いでオーラを突破してくるし…そういえば蘭さんにも通用しなかつ
たし、生徒会のメンバーって凄いな。

「それで…あれ？前の席??」

「えっ????」

「……………」

ああ、どこかで見たと思ったら！

「まさかと思うけど…覚えてなかったとか？」

「…そんなことはないですよ」

「…うっわ…マジか…」

「……………」

「……………」

誤魔化されてくれませんか??

「……………」

「……………」

「ごめんなさい」

「いや、ホントびつくりだわ。この席になって2ヶ月くらい経つん
だけど？話したこともあるよね…」

クラスメイトとの距離感を間違えてたかもしれない…

結論から言うと、名前と顔くらい覚えておくべきだった。

「あの、人見知りか激しくて、なかなか顔と名前が一致しないんです」

「それ、人見知りとかいう問題？……クラスが一緒だったのくらいは分かってた??」

「うん……?」

「破壊的に人との繋がりを無視してきたってのは分かったわ」

は、破壊的って言いすぎじゃ!??

「い、いえ会話したのは覚えてますよ!確か情報通とかおっしやってましたよね」

「いや、確かにそんな会話したけどさ、会話覚えてて本人の記憶無いとかさ……ちよつと凹むわー」

「ごめんなさい……」

破壊的ですね…もう受け入れときます。

「まあ、取り敢えず名前は覚えて貰ったみたいだし、ちよつとは進歩してるか……」

「だ、大丈夫です。もう覚えました!」

「いや、そりゃね。ここまで話して忘れられたら救われないし……取り敢えず、なんでも出来る遠野さんの意外な弱点って事にしといてあげる」

「は、はあ」

今度こそ忘れないために、もう一度奏音さんの姿を見る。

身長はわたしの目より少し高い…165cmくらいかな?

日本人女性としては十分高いんじゃない?

あつ、でも彫りの深い顔立ちと黒というより紫黒色のくすんだ髪色

は、もしかしたら日本以外の血が流れてるかもしれない。
あれ？そういえば双子の琴音さんは、背がもつと低かったようなきがするし、髪色も少し異なった…赤が入った黒色だったような彫りの深い感じは似てるといえば似てるけど、一般的な双子みたいに凄く似てるって感じではないな！。

「で？」

「えっと？…なんでしたっけ？」

結局、何も話しが進展しなかったけど、声を掛けられたんだった。

「先週話したお手伝いの件なんだけど」

まあ、それしかないよね。

「今日お答えしないといけませんか？」

「ううん。今週中でいいんだけど、もう決まったかなーと思って」

「もう少し考えさせて下さい」

気持ち的には断る方向に傾いてるけど…

「わかった。んで、それとは別件なんだけど安東会長が直接挨拶するって聞かなくてさー。今日の昼休みか放課後に時間作ってくんないかなー??」

「きよ、今日ですか？」

随分と急じゃないかな。

「安東会長って、思い立ったが即行動の人でさー。休みの間に進捗報告の電話してたら自分が挨拶するって言い出してね。ホント言う

と、今この時間に教室くるって言ってただけど、それだと目立ちたくないって言うてる遠野さんがめちゃくちゃ目立つからって説得して回避したんだよね」

「…ありがとうございます」

うわ…何その熱血……

「って、わけで教室に乗り込まれる前に顔合わせしときたいんだけど？」

「わかりました。ではお昼…」

いえ放課後に生徒会室に行きます

ね」

「そっか、放課後の方がより生徒が少ないか」

「そういうことです」

分かってるんじゃないですか。

「昼休みは教室でこそっと一人でパンを食べて、残りの時間はさっさと図書館。放課後はどこの部活にも参加しないで一人でギリギリまで図書館」

「えっ？」

「以前までの遠野さんの行動パターン」

「はあ」

突然どうしたんだろう？

「昼休みに蘭さんが教室まで迎えに来て、そのまま保健室で矢原先生と蘭さんとお昼を食べて、昼休み時間を保健室で過ごす。放課後は、図書館に寄って本を借りることもあるけど、今までみたいに閲覧室で読んだりせずに保健室」

「えっと…？」

「現在の遠野さんの行動パターン」
「…そうですね」

何が言いたいの？

「今までは、図書館に入り浸りだったのに、今は保健室に入り浸り
つてことかー」

「…流石、情報通ですね」

思わず嫌味っぽく言ってしまった。

「ああ、不愉快にさせたならごめんね。別にこそこそ嗅ぎまわった
わけじゃないよ。遠野さんは目立つから、嗅ぎまわらなくても情報は
入ってくるしね」

「…甚だ不本意なのですが」

「情報は…情報は入ってくるんだけどね…私の鼻が鈍ったのかな…
…」

結局、嗅ぎまわってるって言いたいの？

「仰りたい意味がわからな…」

ガタガタガタ

教室内の生徒が椅子を整えた音で周りを見ると、朝拝の放送が流れ
出す。

奏音さんと話してるうちに、いつの間にか予鈴も鳴ってたらしい。

奏音さんを見ると、もうちゃんと前を見ていた。

なんだか、話しが中途半端で消化不良気味…

はぁー

雑念だらけのお祈りになりそう……

あの後、休み時間の度に奏音さんに話しかけようか悩んだけど、何を言えばいいのか自分の中でもまとまらなくて、うやむやのまま午前中が終わってしまった。

奏音さんの方から特に接触がなかったから、わたしだけが気にしてるんだと思うし、もう忘れることにしよう。

「遠野さん。蘭さんがきてるよ」

「あつ、ありがとうございます」

今まで感じなかったけど席が前だという認識が出来てしまうと、なんか油断出来なくて、気が抜けない……

「はぁー」

「ユキさん、どうかされたのですか？」

思わずついてしまった溜め息を、蘭さんにばつちり聞かれたらしい。

「なんでもないですよ」

「また顔色が悪いですし……」

「そうですか？体調が悪いわけではないですよ？」

「体調がということとは、何かあるのですね？」

「む……」

引つかかっちゃったのか。

「ふふ…そんな顔なさらないでください」

「そんな顔って…」

「悔しそうな？拗ねているような？」

「も、もういいです。」

からかわれてるし!？

「顔色が悪いというのは本当ですよ。お悩み事ですか？」

「悩み事というほどでもないですけど…」

コンコン

ガチャ

「お待たせしました」

「みちる姉さん、お久しぶりです」

「そんなに待ってないから大丈夫よ。そうね、確かに一週間会わないとなんだか久しぶりな気がするわね」

うん。一週間しか経ってないのに、随分長く会ってなかったように感じる。

でも、よく考えたら矢原先生と出会ってまだ一ヶ月も経ってないのか…

蘭さんとも全く話したこと無かったのに、いつの間にかこうして一緒にいることが当たり前みたいになってるなー。

前みたいに拒絶して離れようとは思わないけど、少し距離のとり方を考えたほうがいいのかもしれない…

「もう用意してあるから、入っておいて」

「はい」

予備室のドアを開けた蘭さんに続き部屋に入る。

以前までは、保健室で昼食をとってただけど保健室利用者がいた時のことを考えて予備室でお昼を食べるようになった。

予備室は教室の半分程の広さで、冷蔵庫・電子レンジ・卓上コンロ・洗濯機なんかの日用家電のようなものから、予備の衣類が収納されている造り付けの壁面収納、机と椅子、簡易ベッド、そして何故かシャワールームまである。

正直、わたしの部屋より居心地がよさそうなんですけど…

「ユキさん、またパンだけなのですか？」

「えっ、はい」

「そのような食生活では身体が持ちませんよ！」

「燃費がいいので大丈夫ですよ」

「もう！前々から言わせて頂いていますが、何故改善なさらないのでですか！」

あれ？珍しく蘭さんが御立腹ですね。

「い、いやホントに大丈夫で…」

「大丈夫ではありません！！みちる姉さんも、ユキさんの食生活の改善の為に何とか言ってお下さいませんか！」

ちよ、ちよっと怖かった…

「…明日からパンも持ってこなくていいわ」

「はっ？」

どういふこと??

燃費がいいなら食べる必要ねえんだろーってこと？

「みちる姉さん、それはどういうことでしょうか？」

「和志が、ユキ…遠野さんのお弁当作りたがってたから」

「えっと??？」

「和志さんのお弁当でしたら安心ですね。栄養面もしっかり計算されておりますし」

つまり？

「わたしと同じお弁当になるけど、持ってくるから食べなさい」

えええ！

「そ、そんなことまでして貰うなんて出来ません！ホントに栄養とかちゃんと摂れてるんで気にしないでください」

「わたしと和志の自己満足よ。付き合いなさい。…乙女弁当だけど

「ユキさん、折角の御厚意です。頂いておくのが良いのではないですか？」

断り辛くなってしまった…

「…わかりました。御厚意ありがとうございます」

乙女弁当ですけど…

「それにしても…一週間しか経ってないのに、また顔色が悪いわね…」

「みちる姉さんも、そう思われますか？」

そんなにですか？

顔色が悪いのは、もうデフォルトですよ。御心配なく。

「元気ですから大丈夫です」

「あまり信じられないのだけど。あれ？……誰か来たみたい。先に食べておいて」

保健室に誰かがきたようで、矢原先生が戻って行った。

…と思っただけすぐに戻ってきた。

「遠野さん、貴女にお話しがあるという方がお見えになっています」

矢原先生の話し方が蘭さんっぽい。これが公私の公の方の喋り方なのかな。

「どなたでしょうか」

わたしに会いに来るなんて蘭さんくらいしかいないけど、その蘭さんが目の前にいるんだから思いつかないか……
いや……ちよつと待って……

「あなたが遠野さんね」

コバルトブルーのネクタイ「二年生

あー、はいはい。

「…そうですが？」

「安東先輩、どうされたのですか？」

…そういうことですよー。

「蘭さん、お食事の邪魔をしてごめんなさいね」

「いえ、それはいいのですが…」

「安東さん、何かお話しがあるのであれば、食後にされてはいいか
ですか？」

確かに…なんでわざわざ食事中に…

「御挨拶をしにきただけなので」

だから、なんで食事中に？

放課後に行くと言ったでしょう…

「あっ！やっぱりここにいるし！奏音ちゃーん、会長いたよー
ー！」

また、なんか来た…

「安東会長！何してるんですか！？」

「御挨拶よ？」

「だから、放課後に時間作ってもらって言ったじゃないですか。
聞いてました??」

「私から御挨拶に行くべきだと思っただけよ」

聞いてませんね…

「あー、会長らしい発言だね」

「じゃあ、もう顔合わせは済みましたね。はい帰りましょうー！」

「まだ御挨拶はしていないわ」

「大丈夫ですって。もう十分会長の事は分かってくれたと思います

よー」

はい、良く分かりました。我が道を行く人ですね。

「ほら、食事の邪魔です。帰りますよー」

「あつ、ちよつと待っ」

「待ちません。邪魔しましたー」

「遠野さん、ごめんね。矢原先生、蘭さんもすみません。お騒がせしましたー」

白崎姉妹に連れて行かれる生徒会長…
なんだったの??

「だ、大丈夫ですか?」

「大丈夫ですけど…」

「生徒会長って、いつもあんな調子なの?」

「そうですね…普段は仕事の出来る方なのですが…」

なかなか残念な人ですねー

「生徒会役員選挙で選ばれたのよね?まあ生徒からの支持はあるってことなんでしょうけど、生徒代表としては心配なところね」

「会長は人心掌握が必要ですから。安東先輩はカリスマ性があるので適任なのですよ」

「周りで支える人が大変そうですね」

「……そ、そんなことはないですよ」

…御苦労様です。

「で、あれはなんだったの?」

「ユキさんの勧誘ですね」

「生徒会？」

「先週、生徒会入りは拒否されてしまいました」

「じゃあ、なんのために？」

「正式な生徒会役員ではなく、お手伝いでというお話でしたね」

「ふーん。ユキ…遠野さんはどうするつもりなの？」

あの生徒会長の下で動くのは大変そうだなー。

お手伝いしてるだけでも、思いつきり引っ掻き回されて目立ちそうだし…

「まだ、検討中です」

まあ、きつと断るけど…

「と言われましても…」

「遠野さんの言い分も分かってるんだけどさー」

放課後の保健室で、何故か奏音さんに説得されています。

昼間で顔合わせは終了したという認識で、放課後は保健室に逃げ込んだのに…既に先回りした奏音さんが、保健室で出迎えてくれました。

「回答期限は今週中じゃなかったんですか？」

「いやー、今日安東会長見ちゃったでしょ？唯でさえ断られそうなのに、あの暴走見ちゃったら絶対断る方向で固めちゃいそうだし」

確かに、断る予定だったんだけど……

「何故わたしなんですか？」

「うーん、前から話しがあつたつてのは言ったよね？」

「お聞きしましたけど……」

「少数精鋭の生徒会で必要だと判断したからつてのが理由」

「はあ……」

「譲歩はするつてば。生徒会役員とかにはしないし、他のメンバーとなるべく絡まなくてもいいように一年メンバーの補助つて形にするから、必要最低限のお手伝いつて感じで」

別に忙しいわけでもないから、断る必要はないけど……

「……そこまでして、わたしにこだわる必要が分かりませんね」

「……優秀な人材は、貴重なんだよ」

「……」

「ダメ??？」

なんか、納得できないけど……

「……分かりました。生徒会役員じゃなくお手伝いですからね」

「おつ！ありがとうございます！」

「本当に、裏方でお願いしますよ」

「うんうん、りょーかい！まあ、来週からテスト週間だし、当分何もイベントないしねー。学期末くらいまで何も無いと思うから」

「では、何かあれば事前に教えてください」

「はいよー。でもさ、蘭さんだけじゃなく、私とか琴音とも親睦深めといてね」

いや、だからそれは拒否したいんですってば。

「…分かりました」

「そんなに嫌がらなくてもいいのに…」

「えっ、あの別に嫌ってわけじゃ…」

ないとは言えないけど…

「はあー…まあ気長にいくわ。あっ、邪魔してごめんね。じゃ

あ、また明日」

「はい、…また明日」

少し慌てた様子で保健室を出て行く奏音さん。この後、生徒会室に行くのかもしれない。

「…生徒会の手伝いをするの？」

机で事務作業をしていた矢原先生が手を止めて、わたしを見る。いつから見てたんだろう…

「そういうことになりましたね」

「そう…あまり無理をしないようにね」

「はい」

「引越しもあるんでしょ？」

「えっ!？」

「え?？」

「な、なんで…」

知ってるんですか!？

「12月に引越しと聞いてるけど、違った？」

そっか、学校には連絡してあるんだ。

「…そうですね。2週目ですね」

「もうすぐじゃない。引越しの準備もあるんでしょうけど、無理せずだね」

「引越しと言っても荷物はあまりありませんし、大したことはないです」

「そっなの？まあ、面倒そうなものは全部旦那さんにやってもらいなさい」

そっか…矢原先生は知ってるんだ……

「そうですね」

「取り敢えず今はその顔色ね。少しでも横になって体力回復しなさい」

「はい…」

わたしが結婚することを知っても、いつもと変わらない矢原先生。

「矢原先生……………」

「うん？」

わたしは、何を聞こうとしたんだろう…

「なんでもないです」

「そっ」

「…はい、おやすみなさい」

「おやすみ」

わたしは、何て言っても欲しかったんだろう…

第11話（後書き）

ユキ… 会話した相手くらい覚えようね。

安東会長… めっちゃ残念な人になりつつある。カリスマ性があるの
に…

頑張りなはれよ！

第12話（前書き）

次の話しとの2部構成です。

つまり、中途半端なところでぶつと切れます。

第12話

キーンコーンカーンコーン…

「はい、そこまで。机の上に筆記用具を置きなさい。列の一番後ろの人は答案用紙を回収して下さい」

ガタガタ…

閉じていた目を開けて、席を立つ。自分の答案用紙を裏向けに持って、前の席の人の答案用紙を回収していく。

回収した答案用紙を先生に渡して、終了ー！。

5日間みっちりテストに費やした一週間がやっと終わった開放感に、教室が一気に騒がしくなった。

「遠野さん、どうだった？」

テスト期間中で名簿順にならんだ状態の座席から、元の席に戻したところで前の席から声がかかる。

「そうですね。まあまあじゃないですか？」

「あー、はいはい。そう言いながら凄いんだっただわ」

じゃあ、聞かないですよ！

「奏音さんはどうでしたか？」

「私は、ホントにまあまあだね」

何が言いたいんですか!?

「…そうですね」

「そうですね。で、今日なんかある?」

「はっ??」

突然すぎて、全くついていけないし!!

「何がどうということですか?」

「そのままの意味なんだけど?」

「…つまり?」

「試験は今日までだよね?」

「はあ…」

「で、午前中で私たちは解放されたわけだよ?」

「はあ…」

「で、午後は何か予定ある?って聞いたんだけど」

聞かれた質問には答えますけど…

「特に予定はありません」

「あつ、じゃあ今日の午後は付き合っつてよ」

「生徒会のお手伝いですか?」

「そうだねー、そういう名目でもいいよ」

「はあ?」

意味がわからない…

「まあ、あんまり深く考えないでよ。取り敢えず…親睦を深める感

じで？」

「…誰とですか？」

「遠野さんと」

分かってて聞いているよね！！！！

「…誰がですか？」

「私と琴音と蘭さんが」

ああー、はいはい、わたしもわかってて聞きましたよ！！

「どこに行くんですか？」

「検討中」

「……………何をするんですか？」

「検討中」

「……………で？」

「いや、だからさー、蘭さんにもまだ声かけてないんだよね」

「……………」

この状況、どうしろと？

「そんな、怖い顔しないでさー」

「…別に怒ってはいませんよ」

呆れてるんです。

「ユキさんの予定を押さえる方が難しそうだったから優先したんだよ。蘭さんには今からアタックに行くから待っててくんない？」

まあ、良いですけど…

「…では、少し時間を貰えませんか？15分程したら戻ってきますので」

「ああ、一度保健室に行くのね。りょーかい」

その通りなんだけど、なんか…嫌な感じ

「…また後で」

「はい、じゃあね」

はぁー！ー！。

予想もしなかった展開で疲れる…

なんで、こんなに急に周りが騒がしくなったの??

目立たず地味っ子で3年間過ごすはずだったのに、平穩が半年しか続かないってどういうこと？

交友関係も必要最低限をキープしてたはずなのに、このままだと広がっていきそうな心配がする…

…気をつけなきゃ。

今日のやつ…断ろうかな…

コンコン

ガチャ

「失礼します」

「あっ、良かった」

「えっ？」

顔を見ての第一声が…良かった？

何が？顔色がとか??

「今日はテスト最終日だったことを忘れてたのよ」

「今日って何かありましたか？」

「何も無いわ。だから、そのまま帰るのかもしれないと思って」

今週はテスト週間だから、午前中のテストが終われば午後は帰れる。つまり、ホントはお昼なんて必要ないんだけど、わたしも蘭さんも学校に残って勉強してたから、テスト週間とか関係なく今週も保健室でお昼を過ごしてた。

「えっと、蘭さんは来ないと思いますが」

「やっぱり、お弁当いらなかった？」

あっ、お弁当を持って来てくれたのか。

よし、やっぱり今日のやつは断ろう！！

「お弁当頂きますよ」

「帰らなくてもいいの？」

「帰っても何もすることないですし」

まあ、これはホントの事。

ただ、予定が入りそうだったってだけですよー。

「引越しは？」

「来週末ですね…」

「準備は大丈夫なの？」

「来週はテスト休みなので問題ないです…」

「そう。ならいいけれど。蘭は帰ったの？」

「いえ…どうでしょうか」

そういえば、15分くらいしたら戻るって言って来たんだっけ。

「荷物は教室？」

そうだなー、荷物を取りに行くついでに断つてこなきや。

「そうですね。ちょっと取りに行つてきます」

「わかつたわ。行つてらっしゃい」

ガチャ

あれ！！！！？？？？？

「うわっ！」

「っと！！！」

保健室を出るためにドアノブに手を掛けて開けようとした瞬間、外開きのドアが勝手に開いた。

いや、より正確に言うなら廊下側からの人為的操作により、ドアノブを持ったわたしごと廊下側に排除しようとする……

まあ、つまりは中と外から同時に開けようとして、油断していたわたしはそのまま外側の人間にぶつかりそうになったということですね。

「大丈夫ですか！？」

矢原先生の驚いた声が聞こえて、わたしは目の前の人物を見た。

「わたしは大丈夫ですよ。奏音さんは大丈夫ですか？」

「つてか、なんでここにいらっしゃるんでしょう？」

教室に戻るから待つててつて言つたじゃないですか…

「あつ、私も大丈夫です。遠野さんごめんね。ノックすれば良かった」

「怪我もないですし、構いません」

そうそう。普通はノックするよね。

「白崎さん、どうかされたのですか？」

「いえ、保健室に用事ではありませんので。遠野さんにお話しが」

「そうでしたか。あまり慌てて怪我をしないように気をつけてくださいね」

「はい。遠野さん、ごめん生徒会の方で召集がかかっちゃってさ。誘っついて悪いんだけど今日は無しにしてくれる？」

それは、願ってもない事なんだけど、矢原先生の前で言わないで欲しかった…

「はい。大丈夫ですよ」

「で、一応遠野さんの荷物だけ持ってきたから」

「ああ、有難う御座います」

「ホントごめんね。埋め合わせは必ずするからさ…」

うん。全く望んでないからいいです。

「生徒会の仕事、頑張ってきてください」

「ありがとう」。じゃあ

…うん。断る手間と荷物を取りに行く手間は省けたけど……

「ユク…遠野さん、約束があるなら遠慮しないで言いなさい」

矢原先生への弁明という手間が増えた……

「いえ、約束があったというか……誘われたんですがどうしようか悩んでたんです。それで、まあ今日はお断りしようかと思っただけです」

正直に言っとうとう。

「本当に？」

「はい。和志さんのお弁当も楽しみですし」

「ならいいけど……。今度からは先約があるなら言いなさい」
「わかりました」

あつ、でも

「矢原先生もわたしにお付き合いさせてしまってますね……御迷惑であれば言ってください」

「どうせ保健室にいるだけだからいいのよ。何か用事があるならちやんと言うから大丈夫」

「はい」

保健室にすることがお仕事ですからね……。

「お昼にしましょうか」

「あつ、そうですね」

いつも通り、予備室で和志さんの乙女弁当を食べる。

「……………」

「……………」

2人だと会話がな…

「…蘭以外にもお友達が出来たのね」

「……………誰がですか？」

「白崎奏音さん？」

「ああ、別に友達というわけでもありませんよ」

「そうなの？仲が良さそうだけど」

「仲が良いというか…奏音さんは人見知りしない感じなので…」

「確かにそうみたいね。遠野さんは人見知りだし丁度いいんじゃないの？」

「はあ、そうですか…」

別にわたしは人見知りなわけじゃないけど…というか、何が丁度いいのか不明ですよ…

「気のない返事ね…友達は作りなさい…」

「……………はあ、そうですね…」

「……………」

会話終了…

ランチタイム終了…

パラ

本のページをめくり、書かれている文字を目で追う。
テスト週間が終わったから、教科書じゃなく久しぶりに文芸書だ。
読みたい洋書がすぐに見つかる学校の図書館って便利だなー。

「あ…」

のどが渴いた気がしてコップに手を伸ばしたところで、コップの中
身がない事に気がついた。

「区切りがいいのなら、一息入れましょう」

わたしの声に反応して時計に目をやった矢原先生が立ち上がりなが
ら声を掛けてきた。

16時…

同じように時計に目をやって思ったたよりも時間が経ってたことに
驚いた。

外も随分薄暗くなってるし。

「お茶入れなおしますね」

「わたしがやるわ」

先に動き出した矢原先生が、さっさと予備室に入っていく、出遅
れたわたしは矢原先生に後を追ってドアを開けた。

「じゃあ、洗い物はわたしがします」

「そうね。お願い」

勢いよく出る水で食器用洗剤を付けたスポンジを泡立て

「寒いんだからお湯を使いなさい」

「あつ、そうですね」

そうだった。わたしの部屋とは違いお湯が使えるんだった…

ちやっちやと洗って水切り籠に伏せ、椅子に座っておとなしく待つ。

「あら??」

洗い終わったティーポットを持ったままポットの前で固まる矢原先生。

「どうかしたんですか?」

「お湯が出ないのよ」

「…水を足してないとか?」

「お昼に足したばっかりなはずなんだけど……ほら、やっぱりお湯はある…わっ!!!!」

「先生!!」

中身を見せようとした矢原先生がこっちにポットを向けた瞬間に安定しないポットの蓋が外れそうになり、バランスを崩した矢原先生の手からポットが滑った。

椅子に座ったわたしのところまで被害はないだろうけど、このままだと矢原先生の胸元にかかってしまう。

ポットの中身は、98度で保温されてた高温のお湯…

考えることもなく、叫ぶと同時に行動に移っていた。

勢い良く椅子を背もたれ側に傾け、倒れる反動のまま矢原先生の腰の辺りにタックルをするようにぶつかる。

間に合わないか…

左肩にぶつかったポットから、高温の中身が左肩、腕、背中にかけてを濡らしていく。

「つつうう…!!!!」

熱い!!!!!!!!!!

「ユキちゃん!!」

あつつうううういいいい!!!!

「ごめんなさい!!!!ユキちゃん!!」

矢原先生が水で濡らしたバスタオルを広げて掛ける。

「うう…」

「ユキちゃん!ユキちゃん!!」

「…大丈夫です。わたしが勝手にやっただけです」

「ごめんなさい!シャワールームまで動ける?」

「動けますよ…」

ぐうううううー

服の上から濡れたバスタオルで冷やしていたけど、そのバスタオルの上からそのままシャワーで水を掛ける。

つつめええたあああ!!!!

「病院に運ぶわ!」

えっ!?!いやいや、ちょっと待って!!!!

「先生！矢原先生！！！！！」

そのまま飛び出していきそうな矢原先生の手を掴んで引き止める。

「すぐに治療する必要があるわ。救急車を呼ぶから」

「矢原先生！まずは落ち着いてください！！」

「ユキちゃんの身体に痕でも残ったら…ごめんなさい……」

「…病院は勘弁してください。わたしは…ほら、あれですよ。怪我の治りやすい体質？？ですから」

「あつ……」

病院なんかには運ばれたら…まずい……

「適当に冷やして、時間がたてば…治りますから」

「…本当に？」

「ホントですよ」

「…痕が残ったり」

「…しませんよ。大丈夫です」

「……………」

「……………」

矢原先生には、目の前で傷が治っていくところを見られてるんだから、嘘をつく必要はない…

「…痛みは？」

「今は…まだ痛いですね」

「患部を冷やすわ…」

「えっ、はい」

えっど？えっど？？

「や、矢原先生!?!」
「何?」

何って…なんでカーディガンのボタンを外してるんでしょうか?

「あの…」

「腕、動かせる?」

「は、はい…」

って!!!えええ!!!

「痛む?」

「大丈夫ですけど…」

「ゆっくりシャツを浮かせるから、痛みが酷いようならすぐに言うて」

「は、はい…」

慎重に脱がされたシャツとブラジャーがシャワールームの床に置かれる。

医者…目の前にいるのは医者……医者医者医者…

矢原先生は医者として患部を確認してるだけ!

恥ずかしくない!!

「酷いわね…」

「痛っ…」

「…痛むかもしれないけど、冷やすわよ」

「はい…」

濡れたバスタオルで患部を覆い、バスタオルの上から水を流す。

痛いですっ！

鏡越しに見た左肩は…赤くなってる？

「痛いわよね…」

「ですね…矢原先生も手が」

鏡越しに映る矢原先生の左手指先も赤く腫れてるように見える。

「わたしは大丈夫。直接かかったわけじゃないから」

「でも赤くなってますよ」

「ユキちゃんは、もっと酷いわよ…」

「…矢原先生の火傷治しときましようか」

「えっ？」

前と同じように舐めれば治るかな？

「よいしょ」

火傷をしていない右手で矢原先生の左手をとる。

「ちょ、ちよっと」

「ん？」

矢原先生の指を口に含んだまま目線を上げる。

「ユ、ユキちゃん!!」

あれ？何やってるんだ？？

えっと…

半裸で頭から水浸しの私と、いつもの白衣がびしょびしょに濡れて

る真っ赤な顔の矢原先生。

目線を外せないまま固まる二人……
あれ？

「……………い、痛みはなくなったからもう大丈夫よ」

「あ……」

「……………」

「……………」

またやっちゃった!!!

「…本当に治っちゃうのね」

わたしの口内から引き抜いた指先を見ていた矢原先生が呟いた。

「……………すみませんでした。早く洗ってください」

矢原先生の手を取って、わたしの身体を冷やす為に出しっぱなしにしている水で石鹸を使って綺麗に洗う。

「わたしの傷はこんなに早く治せるのに、ユキちゃん自身の傷は治りが遅いのね」

「治りが遅いですか？」

なすがままになっていた矢原先生が、バスタオルの下の火傷部分を見る。

「痛いでしょ」

「…そうですね。どうなってますか？」

「今は、赤く腫れて皮膚がぶよぶよしてる感じね。しかも範囲が広いわ…ここから…ここも…ここまで」

先生の指先が左肩から背中の中の部分、左脇腹くらいまでをなぞっていく。

痛くはないけど…くすぐったいです。

よく考えたら、なんて格好！

「や、矢原先生！！！少し時間がかかるかもしれませんが、そのうち治るんで」

「もう少し冷やしておきましょう」

「このままだと矢原先生が風邪をひいちゃいます。わたしは濡れるバスタオルで十分なので」

「これくらいで風邪なんかひかないわ」

「時期を考えてください！今は冬なんですよ！！」

というか、わたしにだって羞恥心があるんですよ！！

「…そうね。ユキちゃんの体調も考えるべきね。…少し待ってなさい」

「あっ、はい」

シャワールームの床に置いたままにしていた服を軽く絞っておく。

「ユキちゃん、替えの服を用意したから。あっ、それはそのままにしておいて」

「…はい」

「上はまだ着ないで、これで冷やしときなさい」

濡れバスタオルと保冷シート…服は着ちゃダメですか……

第12話（後書き）

しかし、それにしてもよく怪我するね…

火傷って痛いもんなー！。

みちるさん、気をつけなさい！

ユキを傷物にしたら責任とって貰いますよー！！

第13話(前書き)

はい。まさかの3部構成…
だって…終われへんかったんやもん…
というわけで、次回に持ち越しです。

第13話

痛い！

ジンジンとした痛みと、まだ熱さを訴える感覚を机に突っ伏して我慢する。

治癒速度が遅い気がする……

体育祭で怪我をしたときから薄々感じてたけど、今日の火傷でハッキリ分かった。

あの程度の怪我也今日の火傷も、2年くらい前なら見てて分かるくらいの速度で治ったのに……
今なら……死ねるのかな……

ガチャ

ボタン

うん？

保健室に誰か入ってきた？

今日は、部活もないし残ってる生徒もほとんどいないはずだから怪我とか病気とかじゃないと思うけど……

予備室の鍵はかかっているから、誰もいないって分かっただら急用じゃない限り出て行くと思うし。

ガチャ

えっ！！！！

予備室に入ってきた！？

突っ伏していた状態から体を起こし、顔だけでドアの方を振り向く。

「な、なんで鍵…」

「開いてたけど？」

矢原先生…閉め忘れたのか…

「ノック…」

「ああ、ごめん」

そういう人でしたっけ…

「で、何してんの」

「…奏音さんこそ」

振り向いた先にはノックもなく予備室のドアを開けた奏音さんがいた。

「作業が煮詰まってきたから気分転換に。きつとまだいるだろうな
ーって思ってた来たんだけど…思いがけない格好でお出迎え？」

「へっ？あっ！」

言われて、慌ててバスタオルで上半身を隠す。

「矢原先生は？」

「シャワールームに」

「…えっと、あんまり堂々と言われるとどっつていいか分からない
ね」

……ん！？

「ち、違いますから!」

「いや、いいんだけどさー」

「いや、だから違いますって!!大体、女同士ですよ!」

「別に性別は関係ないんじゃない?この学校多いよ?遠野さん人気あるし」

そんな情報いらナイ!!

「ど、どちらにせよ、わたしと矢原先生はそんなんじゃないです!」

「そんな必死で言わなくても...で、ホントのどこどうしたの?」

「ちよつと...二人して水浸しになってしまっただけです」

結果的には間違つてない...

「ポット...?」

「えっ?」

奏音さんの目線を追う...床にぶちまけられたままのお湯だった液体と、端の方に寄せられた中身のないポット、外れた蓋。

「あつ、そうですそうです。ポットに水を入れて運んでる最中に手が滑つちゃって」

「.....」

「奏音さん?」

「...かかったの?」

「そ、そうですね。あつ!」

「熱湯がかかったんだね...」

素早く近付いてきた奏音さんに、羽織っていたバスタオルを取られ

る。

バスタオルの下には赤く爛れた皮膚が…

「これは…その」

「いつ？」

「えっ？」

「どれくらい前に火傷したの？」

どれくらい？

「30分はたつてると思いますがけど…」

「治りが遅い…」

「はっ？あの……」

奏音さんが温くなったバスタオルを水で濯いでくれたから、冷たくなったバスタオルで患部を覆う。

「痛みは？」

「マシです。あの…ありがとうございます…」

「………」

「………」

なんか、今更隠すのもどうなのよって感じなんだけど、この状況も…
…どうなのよ…

「矢原先生はなんなのですか？」

「えっ？」

「どういう御関係なのでしょう？」

なんか急に雰囲気が変わった気がする。

けど…

「さっきも言いましたけど、矢原先生とはなんにもありません！普通です普通！！」

「蘭さんとは？」

「はい！????????普通の友人です！！」

なんで、そんなに誰かとくっつきたいの???何を期待してるんですか!!

「やはり……誰もおられないのですか……」

「誰ともお付き合いしてません！」

あつ、でもよく考えたら、もうすぐ結婚します。

「まさか一人もおられないとは思っておりませんでした……」

「……………」

わたしをどんな目で見てたんですか!?!
というか何股させるつもりですか!!!!

「……では、申し訳ありませんが私で我慢してくださいますか？」

「……………」

「……………」

「……………はあ?????」

「……これはどついつ状況ですか？」

「……非常事態ですの」

「……ちょ、ちょっと待って下さい！ホントに非常事態です!というか

理解が出来てません!!」

パ、パ、パニックです!!!」

「あまりにも異常です。最近補色されたのはいつですか？」

この状態が異常だと思えますけど!!」

…うん？

「……………」

「……………」

「……補色？」

補色ってなんですか？そんな日本語知りません…

「そうです。Color coating《補色》です」

Color coating? 補色?? 塗料?

「……………なんの話ですか??」

「…えっ?」

いや、何を驚いてるのか分からないですけど、ホントに理解出来ませんから!!」

「お、お待ちくださいColor coating《補色》が分からないのですか？」

「分かりませんけど…」

えっ? 常識??

「協会《Box》の方で御説明は…」

「協会《Box》？…なんのですか？」

「そんな…まさかユキ様は…：Different color《覚醒者》……」

「な、なんですか？」

最後の方の咳きは聞き取れなかったけど…

……なんでいきなりユキ様なんですか！！？

「……………」

「…あの、奏音さん??」

「はっ！し、失礼致しました！！取り急ぎはColor coating
coating《補色》を優先致します」

あのですね、だからまず…

「そもそもColor coating《補色》ってなんなのですか？」

「ユキ様の栄養補給です。どうぞ」

「……………へっ？」

奏音さんが、髪の毛を掻き上げて首筋をわたしに向ける。

「私ではあまりお力になりませんが、どうか我慢してください」

……………で、どうしろと？

「…何をしてるんですか？」

「遠慮なさる必要は御座いません。お口に合わないとは思いますが、

ど、どうしよう…なんかスイッチ入っちゃってる…
しかも、これは…あらぬ方向で勘違いしてるよね…
………ねえ、女同士ですけど…いや、奏音さんは性別関係ないっ
て言ってたし、矢原先生も延々と語ってるけど…これが日本の普通
なのかな…そ、そんなことないよね。だって中学ではそんなカッ
ルいなかったよ？えっ、これが高校との違いなの？そ、それとも…

「ガハツ！はあはあ…不味い」

「………はっ！？奏音さん、大丈夫ですか！？」

何やってんの！わたしまで現実逃避してる場合じゃないのに！！

「だと思つて… えっ！白崎さん！！吐血！！それに、腕、酷
い出血！！！」

あつ、それはきつと吐血ではないです。

「はあはあ…違います。……私とユキ様はそのような関係ではあり
ません」

あつ、吐血の方を否定するのが先じゃないんだ。

「白崎さん、そんなことよりも早く腕の手当てを…」
「必要ありません。それよりも、先ほどの行為は………救護活動で
す」

救護活動？うん、間違っではないない気がする。それに未遂ですし…

「えっ！そんな……」

「や、矢原先生、どうかしたんですか？」

ホントに未遂ですよ??

「傷が無い……」

ああ…奏音さんの腕の事か……

「はい。ですので手当ては必要ありませんと申し上げました」

「怪我をしたわけじゃなかった？ではこの血は吐血……？」

「吐血したわけではありません。腕に噛み付いて血液を吸い出したんです。腕の傷は自然治癒で治りますから」

そ、そんな説明で大丈夫なの!?

「な、何を言ってるんですか？それじゃ、まるで……」

「まるで……？なんででしょう？」

「まるで……し、白崎さん……目の色が……」

「……矢原みちる」

「があ！……？」

なっ！……！

矢原先生と奏音さんが目を合わせた瞬間、奏音さんの目の色がさつきと同じように金色に変わり名前を呼ばれた矢原先生の動きが止まったかと思うと、一瞬のうちに片手で矢原先生の首を掴んだ。

「ちょ！ちよつと、奏音さん……！」

「ユキ様、しばしお待ちください。矢原みちるの処理は私が行いま

す

「いきなり何をするつもりなんですか！？矢原先生から手を離してください！！！」

驚いた顔のまま固まる矢原先生の大きく開かれた目が、わたしに助けを求めている。

「手を離すと大声を出されると予想しますが？」

「処理とか望みませんから、手を離してください！」

「というか、処理ってなんなんですか！？」

「…承知しました」

「ごほっけほっ……………」

「矢原先生！大丈夫ですか！？」

「…だ、大丈夫よ」

奏音さんが怖いのか、すぐにわたしの後ろにまわって奏音さんから距離をとる矢原先生。

「首が赤くなっちゃってますね…痛いですか？」

「大丈夫。大丈夫よ」

矢原先生の首筋にはつきりと指の跡がついてしまっている。相当な力で絞めたんだ…

「…ユキ様。どうなさるおつもりですか？」

「…何をですか？」

「矢原みちるの処理はユキ様が？」

奏音さんの不吉な言葉に、矢原先生の体がビクツと震えた。

「何を言ってるんですか？大体、処理とか軽々しく口にしないでください」

「失礼しました。ですが、矢原みちるへの記憶操作は必要かと考えます」

「記憶操作？」

「処理というお言葉が禁じられましたので。記憶操作という言い方もいけませんか？」

「あつ……」

処理って記憶操作のこと！？紛らわしい言い方しないでよ！
つて……！！！！

「記憶操作とか出来るんですか!？」

「はい。そうですか。御存知ないのですね」

「それって、副作用みたいなものは……」

「発生いたしません。不要な部分の記憶を誤魔化すだけです」
「……………」

それなら……やってもらった方がいいんじゃないかな？

このまま矢原先生の記憶をいじって貰ったら……わたしもまだ人間でいられる……

「私がおこないましょ……」

「勝手に記憶を消さないで……!」

「矢原先生……?」

「全ての記憶をなかったことにするのはない。ユキ様との関係が変わるようなことはないぞ？隠すべき部分だけ隠匿するだけだ」

「わたしは、ユキちゃんに関する全ての事を忘れるつもりはないわ

！」

えっと…

「…ユキ様のことも知っているのか？」

「…人ではないのね…」

人では…ない…

「それを知って、尚一緒にいると？」

「いけない？」

「…ユキ様」

「えっ？」

「矢原みちるとは普通の関係ではないのですか？」

「いえ、あの普通ですが？」

「矢原みちるは、ユキ様のことを知っているようですか？」

「そう…ですね？」

「知られていても、ユキ様は何もしないのでしょいか？」

「矢原先生が望むなら、記憶を操作する必要はないでしょう…」

「わたしは、記憶を操作されるのは嫌よ！」

「ということなので…」

「……………」

矢原先生が、わたしのことを知ってる上で恐怖するよりも記憶を消すほうが嫌だというなら、わたしには何も出来ない。

「あの…恐れながら…ユキ様は何故矢原みちるでColor coating《補色》なされないのでしょうか？」

「へっ？」

「そこまで知られていて、記憶操作もColor coating

《補色》もなさらないのは何故なのかと……」
「そんなの……」

あいつみたいになるのは嫌だ……

「Color coating《補色》ってなんなの？」

「ユキ様の栄養補給」

うん、説明に優しさも何も無い。

「ユキちゃんの栄養補給？………血が必要ということ？」

「そういうことだ」

「矢原先生を巻き込むつもりはありません！奏音さん、勝手なことは言わないでください」

「申し訳ありません。失礼致しました。ですが、至急Color coating《補色》が必要で御座います。矢原みちるではないのであれば、やはり私をお使いください」

「…必要ありません」

「ユキ様。先程から火傷の治療が殆ど進んでおりません。あまりにもお力をなくされております。Color coating《補色》《だけは妥協致しかねます」

確かに、火傷の治りが遅い。

…だからこそ……もしかしたら

「このままColor coating《補色》をしなければ死ねますか？」

「ユキちゃん!？」

「…いえ。ですが、吸血衝動で身体と精神のバランスがとれなくなると予想されます」

なんだ。どうやって死ぬことはないんだ…

「具体的には？ユキちゃんはどうなるの！？」

「精神崩壊…力の暴走…人を死に至らしめるだけの存在…」

「そんな…」

わたしはなんなんだろう…人として血を求めたくないのに、血を求めなくても人ではられない。

何をしても、わたしは人として存在することは出来ない…

死ぬことも出来ずに、ただ人の血を求めるだけの…化け物……

「ユキちゃん…わたしの血を使いなさい」

「…嫌です」

「ユキちゃん！！」

「わたしは、矢原先生を穢したくありません！！」

「白崎さん。Color coating《補色》のことを教えて

どうすればいいの？」

「矢原先生！？」

「ユキ様が血を飲む。ただそれだけ」

「わたしはどうなるの？」

「どうにもならない」

「「えっ？」」

どうにもならない？

「わたしもユキちゃんみたいになつたり…？」

「何故？ただのColor coating《補色》でそんな現象はおこらない」

どういうこと？だって…わたしは…

「ユキちゃん、聞いた？わたしは穢されたりしないのよ。貧血くらいは我慢出来るから」

「私がユキ様にColor coating《補色》する場合、多量の血液が必要だが、矢原みちるは人間だからそんなに必要ない。10ml程あれば十分だ」

「そんなのでいいの？」

「ユキ様、矢原みちるで宜しいですか？」

「……………」

「ユキちゃん？」

「……………」

「ユキ様？ユキ様！」

「えっ？な、なに？」

「どうされたのですか？」

「…少し考え事してただけです」

わたしはなんなんだろうって…

「ユキちゃん。わたしでColor coating《補色》しなさい」

「矢原先生？」

「いいわね？」

「よ、良くないです」

「ユキ様。どうか御願致します」

「白崎さん、血はどこからのでもいいの？」
「構わない」

「そう。じゃあ」

「矢原先生！！何してるんですか！！！！」

流しにあったナイフで自分の腕に薄く赤い線をつけた矢原先生の姿
が……
ああ……この匂いが……

第13話（後書き）

ちよっとー、誰かユキに服着せたってー！！
女の子やのこ…

第14話(前書き)

前話の続き。

感想なんかを頂けると狂喜乱舞させていただきます。

第14話

「や、矢原先生……」

ダメ……この匂いに抗えない。

「ユキちゃん。いつもみたいに傷を治療してくれないの？」

甘い匂いに、差し出された腕の赤い傷から目を離せない。

さつき奏音さんの血を見た時よりも強い吸血衝動に駆られる。
濃い匂いに……酔いが回る……

「あ……う……はあ……」

ぴちやぴちや

息を詰めたような静かな部屋の中で、わたしの血を舐める音と矢原先生の漏れる息だけが……

……あれ???

「う……ん……ふう……」

ぴちやぴちや

えつと……?

「ユキ様、そろそろ矢原みちるの血を止めて頂けますか？」

「あ……??」

い、いつの間に舐めてたの…？
奏音さんに言われるままに矢原先生の傷口に舌を這わせる。

「いつ…」

シャワーから上がってきたところだから、いつもみたいに眼鏡越しじゃない矢原先生の瞳。

「大丈夫ですか…？」

「だ、大丈夫よ」

赤い顔、潤んだ瞳の矢原先生…

「ユキ様。お力が戻られていますので、あまり矢原みちるにお力を使われない方が良くと思います」

「へっ？」

「ユキ様は強い魅了の力をお持ちですので」

「魅了？お力？…わたし、何かしてますか？」

「…いえ、今は落ち着かれました。どうやら吸血等で気分が高ぶられると無意識にお力を発散してしまわれるようですね」

なに…それって知らない間に変な事してるってことですか…

「ユ、ユキちゃん！火傷が治ってきたわね」

「矢原みちる、ユキ様のお体を拭く物を」

「これでいいかしら」

「あっ、ありがとうございます」

バスタオルを受け取って、冷えた体を覆う。

今更ですが…なんでこんな晒されてるんですか……？

「あの…服を着ます」

「介助いたしま」

「いりません」

むしろ、着替える間くらい一人にさせて欲しい！

「白崎さん、ポットを片付けるの手伝ってくれない？」

あ…矢原先生は気を使ってくれてる。

「何故？矢原みちるがすればいいので」

「奏音さん、矢原先生を手伝って貰えますか？」

「承知しました」

奏音さんの操縦方法が少し分かってきたな…

しかし…それにしても奏音さんって、何者？

そう。そうだよ！なんか説明は後回しみたいに言われてたけど、奏音さんは明らかに人じゃない。

わたしの事もわたし以上に知ってるみたいだし…

奏音さんも、わたしと同じなの??

「奏音さん…」

「なんででしょうか？」

「あの…」

「なんで、そんな喋り方なの？普段と全然違うわよね。それに、何故わたしにそんなに敵しいのかしら？」

矢原先生！大事なところはそこじゃない！！

「矢原みちるに説明する必要性を感じな」

「奏音さん…説明して下さい」

「承知しました。」

ちよつと面倒くさい…

「普段は人間との接触到に支障がないように、喋り方・性格等に気をつけております。矢原みちるへの対応ですが、私の種族的に仲間意識が強いのです。排他的といえるかもしれませんが。特に人間とは相容れないものが御座います」

「種族…」

「白崎さんは…人ではないということね？」

「矢原みちるは、ここに至ってもまだ私が人だと思つのか？」

「そうね…。人ではないようね」

人ではない…なんでこんなに当たり前のように話しが出来るの？

「白崎さんは…ヴァンパイアなの？」

「わたしと同じ…人ではない存在…」

「ユキ様、違います！私は主ヴァンパイアでは御座いません」

「えっ？白崎さんはヴァンパイアではないの？」

「私は werewolf 《人狼》だ」

「werewolf 《人狼》？」

「そうです。主ヴァンパイアの守護獣で御座います」

「守護獣？」

「はい。主ヴァンパイアとの契約に従い、一生をお側にお仕えするのが守護獣である werewolf 《人狼》の役目です」

……うん。全然ついていけない。

「あの…色々聞きたい事があるんですけど……」

「ユキ様。わたしでお答えできる事であればお答えしたいのですが…主ヴァンパイアの事に関しましては、協会《Box》が説明するまでお答えすることは出来かねます」

「協会《Box》…それが何を意味することなのかも分からないのですが？」

「そうだよね…まずはそこからっていうレベルです。」

「失礼致しました。協会《Box》は主ヴァンパイアの評議会で御座います。主ヴァンパイアと守護獣を統括管理しており、世界の主ヴァンパイア及び守護獣の殆どの者が協会《Box》に属しております。古くはドイツに拠点を持っていたと聞き及んでおりますが、二世紀程前にイギリスに拠点を移したそうで、現在は人間との共存の為、表向きには世界的規模の活動団体として認知されております。聖アンテルスもその活動拠点の一つです」

なにそれ…統括管理？なんでそんなネットワークがあるの??

……わたしも管理されてるの？

「奏音さんは守護獣なんですよね。…わたしは……わたしはなんなのですか？」

「ユキ様は主ヴァンパイアであらせられます」

「…そう…ですか……」

「ユキちゃん…大丈夫？」

「大丈夫です…。自分が人じゃなくなったのは分かってましたから……」

ヴァンパイア…赤く光る瞳、口元の鋭い牙…首筋に穿たれる鈍い痛み…

「ユキちゃん…ユキちゃん??」

「……矢原先生は知ってたんですか?」

「何のこと?」

「…知っててわたしに近づいてきたんですか?」

わたしが人ではないと分かってても、普通に接する事が出来るなんて…怖がらないなんて…有り得ないよ。

「ユキちゃん?何を言ってるの?」

「協会《Box》はわたしを管理してるんですよね!…:…:…矢原先生は協会《Box》の人なんですか?」

「違うわ!」

「……」

何が真実なのか分からない…

「わたしはヴァンパイアが存在してるなんてことも知らなかったのよ?」

「……」

「ユキちゃん……!」

「……」

「ユキ様。矢原みちるの言っていることは本当です。矢原みちるは協会《Box》の人間ではありません」

「矢原先生は…人なんですね?」

「そうです。矢原みちるは協会《Box》に属していない人間です」「そうですか…」

「ユキちゃん、信じて!」

協会《Box》に関連していなくてヴァンパイアなんて存在も知らなくて、それでもわたしを怖がらない…
そんなの…どうやって信じればいいのか？

「……………」

「ユキちゃん…」

「矢原先生は…わたしが人でないと知って怖くないのですか？こんな化け物があるなんて知らなかったんですね？わたしは人の血を吸う化け物なんですよ！？血を吸っても化け物なのに、血を吸わなかったらもつと酷い化け物になるんだそうですよ？矢原先生の血を吸ったんです。わたしの感想をお聞かせしましょうか？？凄く美味しかったです！！矢原先生の血の匂いを嗅いただけで頭が真っ白になるくらい気持ちよくて、自分で自分分からなくなるくらい…周りの事なんて何も考えられなくなって、気がついたら矢原先生の血を吸ってるんです！矢原先生の血は甘くて体の奥から熱くなって気分が凄く高ぶるんです！！もう矢原先生の血を見るとただ美味しそうとしか思えません！信じられますか？人として生きてるのに、人のことが美味しそうに見えるんですよ！？矢原先生を見ると血が欲しくて欲しくて堪らなくなります！興奮するんです！！体中で血を欲するんです！！こんなの、もう人じゃない！！わたしはとことん化け物なんだ！人を人と思えない！わたしはいつか矢原先生を殺してしまうかもしれな」

「ユキちゃん！ユキちゃん！！！！貴女は化け物なんかじゃないわ！！！！」

矢原先生の大きな声と、椅子に座ったわたしの正面から矢原先生の胸に抱き締められた事で、わたしの叫びは途切れる。

「矢原先生…わたしは化け物なんですよ！！！」

「違つわー！ー！ー！」

「違わない！違わない違わない！ー！ー！ー！」

「化け物なんだよ！ー！ー！ー！」

「だったらー！だったら、そんな辛そうな顔で泣かないで！ー！ー！ー！」

「何を言ってるんだ！？……泣くってなんだ……誰が……」

「あ………」

「ユキちゃん……貴女は化け物なんかではないわ」

「……っつう……ふ……うううう……うわあああああああ

……」

「………」

「頭が重い……瞼が熱い……」

人前で泣くことが無くなっていったわたしが、気がついたら矢原先生に縋り付いて泣いてました。

どれくらい泣いていたのか分からないけど、体内の水分の心配が出るくらいに泣いたわたしは、重くなった頭とは逆に気持ちは少し軽くなっていて、背中に回され力いっぱい抱き締められる矢原先生の手に安心感を覚えていた。

「ユキ様……」

突然呼びかけられたことで、思わずびくついた背中を矢原先生がゆつくり撫でてくれる。

「……ユキ様。申し訳ありませんでした……。私の軽率な言葉により、ユキ様を混乱させてしまいました」

矢原先生の胸から顔を上げたわたしは、奏音さんを見上げる。

「いえ……。わたしが勝手に取り乱しただけです」

「ユキ様……申し訳御座いません……」

辛そうな顔の奏音さんが、絞り出すような声で謝罪の言葉を紡ぐ。奏音さんには非はない。どんなに言葉を選んだところで現実が変わらない。

だから、わたしの気持ちの問題。現実を受け入れたくないわたしの……

「白崎さん、今日はこれ以上話しを続ける必要があるかしら？」

矢原先生の言葉は、わたしを気遣ってくれている言葉。でも……

「矢原先生、大丈夫です。聞いておきたいこともありますし……」

「……そう」

「奏音さん……わたしは奏音さんに管理されていたのですか？」

「ユキ様、管理というのは人間社会に不都合を起ささないように統制しているということです。監視しているわけでは御座いません」

「人間社会に不都合……どうということなの？」

そもそも、存在自体が不都合でしょ…

「はい。捕食する為の誘拐、監禁、殺人等の行為は犯罪として協会《Box》では絶対の禁止事項としております。また、それを犯した者の捕縛、粛清が協会《Box》の大きな役割です」

「つまり、警察組織みたいな感じなのかしら？」

「先程も申し上げましたが、評議会としての役割も持っております」

矢原先生の質問なのに、わたしに向かって答える奏音さん…

「協会《Box》が大きな組織だっというのは分かったけど、そんなに多くのヴァンパイアが存在しているの？」

「主ヴァンパイアは非常に高貴な存在で在らせられます。しかし、それと同時に非常に希少な為、協会《Box》に関わりがないと私たちもお会いする機会は殆どありません。…私はこの聖アンテルス女学院で過ごして参りましたが、そのなかでも学院内で主ヴァンパイアをお見かけしたのはユキ様が初めてで御座います。」

「…白崎さんは、協会《Box》としてユキちゃんに接触したの？」
「違います。…先にも言いました通り、学院内で主ヴァンパイアにお会いすることもなかったのですが高校に入学してから、度々お力の残滓を嗅ぐ事がありました。しかし、個人を特定することが出来なかったので生徒会に入りました」

どういふこと？

「どづいふこと？」

あっ、聞いてくれた。

「私たち守護獣も主ヴァンパイアも人間としての身体能力を凌駕致

します。ですのでスポーツも勉強も非常に優れた結果となります。そのなかで一般とは別枠となる生徒会というものに組み込まれる可能性は高いと考えました」

なるほど…

「最初は蘭さんかユキ様かどちらか迷ったのですが…」

「蘭??」

「入学式で生徒代表という目立つ立場でしたし、成績も優秀で頭の回転も速く容姿も優れているので」

「えっ?でも高校に入学するまで感じなかったのよね?」

「高校に入学する頃に力が覚醒したと考えれば、おかしくはありません。最近はお力の残滓を纏われてることもありましたが、体育祭の時にユキ様からはつきりしたお力を感じることが出来ましたので、ユキ様が主ヴァンパイアであるということが分かりました」

「体育祭?妹さんを助けたときのことかしら?」

「ユキ様、琴音を助けて頂いた際、お怪我をされたのではありませんか?」

「ああ…確かに」

「その時に治癒に多大なお力をお使いになったか、Color c
oating《補色》されたのではないですか?」

「あつ……」

どちらもしましたね…。

「御心当たりがあるのですね。私はあの日にユキ様が主ヴァンパイアであると確信出来ました」

「なるほどね。それで、白崎さんがユキちゃんに近付いた事に意味はあるの?協会《Box》からの指示なのかしら?」

「協会《Box》からは何の指示も受けておりません。ユキ様が契

約守護獣をお持ちでないようでしたので、近くでお守り出来ればと
…勝手な行動を取ってしまいました。申し訳御座いません」

奏音さんの独断行動？

「協会《Box》はわたしのことを認識はしているのですか？」

「確認はしておりませんが、お力の残滓が漏れておりましたので、
まず間違いなく把握していると思います」

「協会《Box》はわたしに接触してきますか？」

「はい、それは確実です。ですので、先程私ではお教え出来ないこ
とがあると申し上げました通り、主ヴァンパイアの事は協会《Bo
x》の者が御説明に上がると思います」

「そうですね…」

人でない以上、協会《Box》に監視されるのは確定事項なのだろ
う…

わたしを監視して、行動を縛って、暴走する前に処分してくれる足
枷がある…何かある前にわたしを止めてくれる…何かあったら殺し
てくれる……ありがたい

「ユキ様。私でお答え出来る範囲の事に関しましては全てお答えし
ます」

「お願いします」

「ユキちゃん、今日はもう遅いわ。日を改めた方がいいのではない
かしら？」

確かに、外は大分暗くなってる。今日はもう帰ったほうがいいかな…

「ユキ様。日を改めてもよろしいでしょうか？」

「そうですね」

「はい。… あ…」

うん？どうしたんだろう？

奏音さんが急に、予備室のドアを開けた。

ガチャ

あれ？それと同時くらいに保健室のドアが開閉する音が…

「失礼します」

この声…

「蘭さん、どうしたの？」

はい。蘭さんですよね。

「ああ、奏音さん。やはり、ここにおられたのですね。外も暗くなってきたので、そろそろ切り上げましょうということになりました」「そうなんだー。後半サボっちゃってごめんね」

「いいえ、もう殆ど終わっていましたし。矢原先生とユキさんは予備室におられるのですか？」

「そうそう。ちょっと話しに付き合っただけでさー」

なんだろう。元々はこの話し方だったはずなんだけど、もの凄く違和感を感じる…

「ユキさん。今日は折角のお誘いを申し訳ありません。また誘って頂けますか？」

は…？わたしが誘ったことになってるの！？

「え、ええそうですね。また宜しく申し上げます…？」
「ええ…」

「ユキさん、今日は色々ありがとうーね」

「あ、いえこちらこそ…」

これで、今日は解散ってことになるのかな…？

「でさ、最後にさメアド交換してくんない？」

ああ…日を改める為に連絡先ね。

「わかりました。これをお願いします」

「ユク…遠野さん。わたしのも入れておいていい？」

えっ？

「いいですけど…？」

「Color coating《補色》が必要になったら躊躇わずに連絡しなさい」

「……………」

耳元で囁くように言われた言葉に返事が出来ない。Color coating《補色》が必要になったら……そんなの、躊躇いませよ…

「あつ、矢原先生、これ私の連絡先です」

「あら、私に？」

「折角だから交換しましょー。何か連絡が必要な事があるかもしれ
ませんよ」

「ええ…そうね」

「ユ、ユキさん。私も宜しいでしょうか？」

蘭さん？

「いいですよ」

「有難う御座います」

この流れで断れる訳ないじゃないですか。

「蘭さん、もういい？」

「はい。大丈夫です」

突然始まったメアドの交換が、やっと終わった。

「暗いから、気をつけて帰るのよ」

「はい。矢原先生、ユキさん、さようなら」

「ユキさん今日はありがとうー。じゃあねー」

「あつ、さようなら」

なんか…疲れた。

「……………」

「はぁー……」

「矢原先生？」

「疲れたわね……」

「すみません……。巻き込んでしまいました」

「違うわ。わたしが好きで巻き込まれたのよ」

「…有難う御座います」

「ユキちゃん…」

「…??？」

「……………なんでもないわ。気をつけて帰りなさい」

「はい。矢原先生もお気をつけて」

「ええ、ありがとう。さようなら」

「さようなら」

今日、自分が人ではないヴァンパイアという化け物だとわかった。それでも受け入れようとしてくれる矢原先生だけは、傷つけないようにしたい……

第14話（後書き）

奏音ちゃん。君、話し方面倒くさいよ。

普段通りで話そうよ…

ユキ…服着れたね。笑

第15話（前書き）

テスト休み中の奏音ちゃんとの逢瀬前編。

ってわけで、今回もぶつつと切ります!!

毎度の事ながら…感想なんかを頂けると……嬉しかったり…

第15話

ブブブブツ……………

「うわっ!?!」

充電器に繋ぎっぱなしになっている携帯電話が小さな振動と共に床に共鳴して、思いのほか大きな音があったのに驚いて、つい声が出てしまった。

まあ、この部屋にはわたししかいないから多少恥ずかしいところがあっても誰に見られるわけでもないけど…

テスト休み4日目の木曜日。今日になって始めた荷造りの手を止めて、携帯電話に手を伸ばす。

バイブレーションのパターンからメールであることは分かっていたので、焦る必要はなかったけど、響き渡る振動音に急かされる結果となった。

「件名： 話しの続き」

あー、はいはい。

「差出人： カノンちゃんだよ」

ちょっと待とうかー！ー！ー！ー！???

確かに奏音さんだと思ってましたけど、なんて名前で登録してるんですか!?!

あんな話し方だったくせに!?!!

「ユキさん、元気〜？」

あの後には、体調大丈夫だった？

あんまり我慢せずに、無理そうなら矢原先生に連絡するのも手だと思っよう。」

メールはこっちの話し方でいくつもりなのね…

「でした、前の話しの続きなんだけど、明日とか無理かな？もし大丈夫そうなら、そっちまでいくから連絡してくれる？よろしく！」

……………ノリが軽すぎて、本当に同一人物なのか疑わしい…

取り敢えず返信する前に…アドレスの登録名を変えてやる！

【白崎 奏音】

ふー、これでいい。

ブツブツブツ……………

「うえっ？」

またメール？普段は携帯なんて鳴りもしないのに、今日はなんなんですか？

「件名： 突然ごめんね」

や、矢原先生だったりします？

うん？

差出人は…名前じゃなくアドレスが表示されてる。

つまり、知らない人からのメールですよ？

えっと、これって架空請求詐欺みたいなの？

「香山修です。勝手にメールアドレスを聞き出しちゃってごめん」

修さん？御婆様に聞き出したのかな？

「ユキちゃん個人と連絡を取る手段がなくて、ついね。

引越しの事なんだけど今週日曜日に荷物を運んで、ユキちゃんは学校が休みに入る来週末から来るってことでいいのかな？

千草様にも確認したんだけど、本当に今週末に荷物を運んでしまってもいいかい？

持ってくる荷物が少なくって、こっちの車だけで運べるくらいしかないって聞いているから、来週末でもいいんだよ？

その場合は今週予定していた荷物運びの日は、これから住む場所を事前に確認するというだけでいいと思うんだ。ユキちゃん次第だから、連絡してくれると助かるよ」

確かに持っていく荷物は少ない。

冬物の上着込みで衣装ケース2個分の服と、学校の勉強道具、教科書とかでダンボール一箱くらいの量だ。

だからこそ、荷造りに時間はかからないと思って引越しの差し迫った今日になってやっと着手したわけだし…

正直来週使用する荷物もないですし、どっちでもいいですが？

えっと、奏音さんの話しが明日で修さんの荷物運びが明々後日。

はいはい、了解です。

まずは、奏音さんに返信する。

「件名： Re：大丈夫です」

「明日で問題ありません。」

何時に、どこへ行けばいいですか？」

送信

何の面白味もない文章になりました…

次にアドレスを登録してから修さんに返信する。

「件名： Re：大丈夫です」

あれ？

「荷物は今週で問題ありません。」

何時頃にお待ちしていれば良いですか？」

送信

ごめんなさい。センス無い……

金曜日。わたしは朝から通勤ラッシュの満員電車で揺られてる。デジャヴ……

待ち合わせ時間は10時。かなり余裕を持って家を出てきてみたら、この状況。

わたしは学習能力が無いのか……

幸い、体調が悪いわけでもないし、雨も降ってない。電車が急停車

することもなく目的の駅に到着出来た。

奏音さんとの待ち合わせは、わたしの最寄り駅と奏音さんの最寄り駅の丁度中間。

そして、そのホームには見覚えが…この駅って、和志さんに付き添われて降りた駅じゃないですか。デジャヴ……

前にも座ったホームのベンチに腰を下ろし、自動販売機で買ったホットのブラックコーヒーショット缶を飲みながらしばらく休憩。

一息ついて、時計を確認するとまだ9時を過ぎたところだった。

えっと、このホームから駅の改札前まで…どれだけゆっくり行ったところで5分で着いちゃうし…

駅前に喫茶店とかあったかなー。取り敢えず移動しながら、改札を抜けて周りを見渡してみる…。あれ??

「ユキさん。おはよー」

「おはようございます? 奏音さん?」

奏音さんですよね?

何故いるんですか??

「やっぱり、ユキさんは早いねー」

「あー、今日って待ち合わせ9時でしたか?」

「いやいや、10時で合ってるよ」

ですよね…

「わたしとの待ち合わせの前に、何か用事があったとか?」

「何もないってば」

じゃ、単純に

「早く来ただけってことですか？」

「いやー、ユキさんは絶対待ち合わせの1時間前にはいるだろうな
ーって思ってたさ。念の為早めに来てみたら正解だったわー」

「そうですか…」

じゃあ、11時集合とか言ってくればいいのに。

「集合時間一時間遅くしてたら丁度良かったかもしれないねー」

「……………」

なんだか、腹が立つな…

「それで、どこに行きますか？」

「あれっ？今日は矢原先生来ないの？」

「なんで、そこで急に矢原先生が出てくるんですか??」

「えっ、だって矢原先生ってこちら辺に住んでるんだよね？」

「そうですね」

「だから、わざわざこの駅にしたのかと思ってたんだけど？」

「偶然です」

「ふーん」

なんなんですか!?

「そちらは、琴音さんはいないのですね」

「琴音？連れてきた方が良かった？」

「そういうわけじゃありませんけど…」

「まあまあ、今日は二人で話そうよ」

「はあ」

「つても、どこ行こっか？ホントはカラオケとかがいいんだけど、
早過ぎて開いてないし…」

「カラオケ？」

「歌を歌う為の個室があるよ」

そんな大雑把な説明いらない。

「そうじゃなくて、なんでカラオケなんですか？」

「話しが易いから？」

「喫茶店とかじゃ駄目なんですか？」

「うーん、私らの身内には耳が良いのもいるからねー。あんま油断できないっていうか」

「…じゃあ、カラオケが開くまで喫茶店で待ちますか？」

「良い案があるっちゃあるんだけど…。取り敢えず、移動しよっか」

「はあ」

移動する奏音さんの横顔を見る。

今日は、この話し方でいくのかな…

「奏音さんの話し方は、そっちが素なんですか？」

「……………違うよー」

二重人格かと思うくらい喋り方が変わるし、どっちかで統一したらいいのに。

「あの、話し易い方でいいですよ？」

「…どっちの方がいい？」

うーん、あっちのはちょっと面倒くさい。

でも、こっちは偶に神経を逆撫でしてくれる。

「どっちでもいいですけど…」

「じゃ、まあこんなもんだと思って我慢してよ」

「分かりました……」

「おっ、やっぱりあるねー」

「えっ？あぁカラオケですね」

奏音さんの視線を追った先に大手カラオケチェーン店の駅前店があった。

「でも、やっぱりオープンは11時ですか。あと1時間半くらいありますね……」

「そうだねー。うーん、じゃあ代替案でいこうか」

「代替案？」

「ここらだと……」

また、歩き出した奏音さんについて行く。

カラオケがあつた通りから裏道になっている通りを2本入る。
なんか……段々と……？

「あの……奏音さん……」

「うん？」

「どこに行こうとしてます？」

「ここら辺？」

「……」

あのですね、駅前から裏道を進んでいけばですね、こついったゴミゴミとした建物群が現れるんですね。

「奏音さん……ここら辺って……」

「ラブホ街」

「ラブホ？」

「二人で入る休憩及び宿泊施設」

だから、そういう説明を求めてるわけじゃなくて！

「それは分かってます！そうじゃなくて、なんでラブホなんですか！？」

「代替案なんだけど」

「いえ、普通にカラオケがオープンするまで喫茶店でいいじゃないですか」

「時間をもつたいないかなーって」

「大体、わたしたち女同士ですよ？」

「最近のラブホはそんなの規制してないよー。あつ、でも男同士は駄目ってところはあるのかな？」

へー。じゃなくて！！

「それに、わたしたちまだ学生ですよ？」

「いやいや、ユキさん私らいくつに見えるよ？」

「へっ？」

奏音さん…165cmくらいの身長に彫りの深い顔立ちは年齢よりも大人びて見える。今日の服装は黒の細身のパンツに黒のセーター。セーターからは白いシャツの襟が見えていて、そのセーターの上からダークブラウンのロングモッズコートを羽織っている。肩甲骨くらいまでの紫黒色の髪はサイドテールに纏められていて、いつもより落ち着いて見えた。

わたしは…いつも通りの休日使用の格好だけど、そもそも日本人の年齢より老けて見える。

つまり、二人とも高校生と言っても信じて貰えないような見た目ということですか……。

「ってことで、ここでいつか」

「奏音さん、真面目に言ってます?」

「マジだけど?」

マジですか…

目の前の建物を見上げる。ああ、間違いなくラブホですね。

「奏音さんは気にしないんですか?」

「別に単なる休憩施設だし?その用途通りに使う必要もないんじゃない?」

「じゃあ、友達と来れるって言うんですか?」

「話しが飛ぶなー。まあ、そりゃ来ないね」

「じゃあ、止めときましようよ」

「個室希望。寧ろカラオケよりこっちの方がいい。ってわけで、行こっか」

「…恥ずかしくもないんですか?」

「誰も見てないって。それに、ここでグダグダしてて誰かに見られる前に入っちゃう方がいいんじゃない?」

もう入るのは確定事項なわけですか?

「はあ、分かりましたよ…」

なんかよく分からないけど、奏音さんについて行く。

初めての場所ですが…なんでこんなところにいるんだろう?

「寒くないでしょうか?」

上着をハンガーに掛けながら、奏音さんが聞いてくる。

また喋り方が急に変わるんですね…

「大丈夫ですよ」

「今日はわざわざお時間を頂いてしまい、申し訳ありませんでした」
「いえ、用事ありませんし。それに、奏音さんの話しも聞きたかったので」

「ユキ様、あれからcolor coating《補色》されましたか？」

「…してません」

まだ一週間しか経ってないし…

「お辛くはありませんか？」

「特に体の違和感はありませんよ」

「本当に、矢原みちるも呼ばなくていいのですか」

「あの、さつきも思ってたんですけど、なんで矢原先生なんですか？」

「ユキ様に必要な存在かと…」

「わたしはcolor coating《補色》の為に矢原先生と仲良くしているわけではありません！」

「…失礼致しました」

「矢原先生のこと嫌いなんですか？」

「そのようなことはございません」

でも、その呼び方とか酷いし…

そういえば、蘭さんのことは蘭さんって呼ぶのに、なんで矢原先生はフルネーム？

「人間が嫌いなんですか？」

「…相容れない部分もありますが…嫌いではありません。私の父も人間ですし」

「えっ？奏音さんはwerewolf《人狼》と人間とのハーフっ

てことですか？」

「そうです。といいますか、ほとんどの者が人間とのハーフです。主ヴァンパイア同士や守護獣同士の番は、あまりいいのではないのでしょうか」

「番つがい？」

「…夫婦ですね」

「生き方が全く異なるのに夫婦になる？」

「私はあまりわかっておりませんが、番に出会うと抗えないのだそうです」

そんなの…相手の人間が可哀想だ……

「それに、主ヴァンパイアの番は共に生きる事が出来ますし、契約守護獣となった守護獣の番も共に生きる事が出来ます」

「どういう意味ですか…？」

「人間としてではなく、主のお力が付くということです」
「……………」

化け物に魅入られ…人間じゃなくなってしまう…それは、なんて呪いなんだろう……

「奏音さんのお父様も？」

「いえ、母が契約守護獣ではありませんので」

あー、そもそも契約守護獣ってなんですか？

「あの、守護獣と契約守護獣って何が違うんですか？」

「失礼致しました。守護獣の中で主ヴァンパイアとの従属契約をした個体を契約守護獣と申します。従属契約とは主ヴァンパイアと守護獣の一对一の契約で、一度契約をすると取り消すことは出来ませ

ん。また互いにそれ以外の者と契約することは出来ません」

なるほど。ヴァンパイアは少ないって言ってたから契約守護獣は少ないのかな。

「琴音さんもwerewolf《人狼》なんですか？」

「琴音は……はい。werewolf《人狼》です」

それにしても、体育祭の時の動きは硬かったような…

「わたしの事は知ってるんですか？」

「気付いていないと思います。…琴音は、最近になって力が覚醒したので……」

「力の覚醒？」

「はい。全ての者が守護獣や主ヴァンパイアの力を生まれた時から持っているわけではありません。そもそもハーフとして生まれてくるので、力を持っておらず人間として生きる者も多くあります。力が覚醒する者の約10%が生まれた時から約85%は生まれてから5歳までに、約5%が5歳から10歳までに覚醒致します。そして稀に……稀に15歳頃に覚醒する者が現れます」

「琴音さんは……」

「そうです。琴音は15歳の時に覚醒致しました……」

「わたしは……なんなのでしょうか……？」

「……私では、お応えしかねます」

「そうですか……」

「申し訳ありません」

協会《Box》の人からじゃないと話せないってことか……

「奏音さんは何歳くらいに覚醒したんですか？」

「私は生まれた時点での覚醒者です」

「生まれた時からの覚醒者って、どうやって判断するんですか？」

だって、本人まだ喋れないでしょうし。

「守護獣が生まれた時点で覚醒していると…幼獣の姿となり、人型をとれません」

「へっ？幼獣？」

「はい。幼獣です」

といますと…？

「狼の赤ちゃん？」

「………そうですね。個体差はありますが、生まれて半年程は獣型と人型が安定しないようです」

えっ？ど、どいいうこと？

「奏音さんって狼の姿に…？」

「………御覧になりたいのですか？」

正直言つと

「ちょっと見たいと思いましたが、無理には言いません」

わたしも、自分の化け物な姿は見られたくないし…

「…ユキ様になら構いません」

立ち上がった奏音さんが着ているものを脱いでいく。
つて！！！！

「奏音さん!?!」

「流石に替えの服まで用意しておりませんので」

目を逸らす間もなく着ているものを全て脱いで裸になった奏音さん。

「失礼致します」

一瞬で黒目が金色になり、尖った犬歯が見えたと思った瞬間に体の輪郭が夜に塗り潰されたように曖昧になる。

「ユキ様。契約守護獣を持つ気は御座いませんか?」

「えっ?」

目の前に座った体長160cm程の紫黒色の狼がお座りをした状態でわたしに向かって流暢に言葉を投げかける。

「私を契約守護獣にして頂けませんか?」

「はあ!?!」

第15話（後書き）

こらー、学生がラブホに入っちゃいかーん！
君たち、まだ高校一年生なんだぞー！ー！！

第16話(前書き)

うん、事前に前後編とか言うの止めた方がいいかもしれん。
またしても、2部構成では追いつかなかった…

か、感想とか…くれたり…しませんか…

第16話

い、意外と大きいな…

お座りをした状態でも、かなりの迫力があるんですが……
狼ってこんなに大きいもんなの？

金色に光る瞳に、艶のある紫黒色の毛皮。

無意識のうちに手を伸ばし、見た目よりも柔らかい毛並みを撫でてみる。

き、気持ちいいかも…

「あ、あの…ユキ様……」

「はっ！ご、ごめんなさい！！」

思いの外気持ち良くて、つい手が止まらなかった。

「いえ、御触りになるのはいいのですが…」

「えっ、本当ですか！？」

「は、はい」

じゃあ……なでなで…

「あの…それで……」

「??？」

なでなで…

「契約守護獣の話なのですが……」

「ああ………」

なでなで…

「……………」
「……………」

なでなで…

「…やはり私では……………」
「…ダメってわけではないんですけど」

現実逃避を一旦ストップして話しをしようか。

「えっ？」

「質問してもいいですか？」

「はい。なんでしょうか？」

「さっきの奏音さんの話しを聞く限り、契約というのは後から解除できない一対一のもので、そんなに簡単に思い立ってするようなものじゃないと感じたのですが？」

「その通りです。契約守護獣は主となった方に一生お仕えしますし、契約した主も守護獣にお力の一部を引き渡すことになります」

「一生というのは……………」

「まず、守護獣には寿命があります」

寿命…あるんだ

「わたしは？」

「ユキ様は、主ヴァンパイアですのでありません」

化け物ですから…

「そうですか。それで？」

「はい。守護獣は人間よりも長命で大体130年程生きるでしょうか」

「130年…確かに長いですけど、それだとヴァンパイアは何回も守護獣を変える必要があるんじゃないですか？」

「はい。そのままですと主と共に歩むことは出来ません。ですので契約の話になります」

つまり…

「契約守護獣になると寿命が延びる？」

「正確に言いますと、契約守護獣になった場合主と同じ不老の存在となります」

「あー、確かにそれなら一対一で永続契約ですね」

「はい。契約守護獣は主と共に生きる事を誓いますので、主の消滅が己の死となります」

「はあ!？」

「つまり。主が死を迎えれば契約守護獣も同時に死にます」

なんか、とんでもないことおっしやいましたよ。

ちよ、ちよっとその前にどうしても聞きたいことが…

「ヴァンパイアって死ぬことがあるんですか??」

「あ……はい…御座います」

「不老だけど不死じゃない??」

「ユキ様……」

「…それも話せないことなんですか……」

「…申し訳ございません」

「……わかりました」

また協会《Box》か…

「それじゃあ、主が死ぬと契約守護獣も死んでしまうのに、それでも契約をするメリットを教えてください」

「メリットですか…主ヴァンパイアが契約をした場合、自分を護る盾と武器を同時に手に入れたことになるでしょう。契約守護獣は主に逆らわず、主にお仕え致します」

「守護獣側のメリットは？」

「不老、力の増強。それと…番への力の譲渡。つまり番をも不老にすることが出来ます」

それがメリット？

どんだん人外になることがメリットなの？

「デメリットは？」

「契約守護獣がいる限り、主は一定量のお力を垂れ流しにする必要が御座います」

「力を垂れ流す？」

「そうです。より正確に言いますと、常時一定量のお力を契約守護獣に譲渡する必要が御座います。ただ、意識して譲渡するわけではありませんので垂れ流しという方が合っているかと思えます」

餌を与え続けるってことですか

「守護獣側は？」

「主が消滅すると契約守護獣もその番も死にます」

「……………酷いですね」

他の人の命まで左右するなんて…何様なんだ…

「それだけ聞いても、奏音さんがわたしと契約したい理由がわかりません。長生きしたいということですか？それだったらわたしでは不向きですよ。わたしは死ぬ方法があるなら死にたいと思ってますから」

「生に執着は御座いません」

「では、力が欲しいのですか？それとも、契約するのは一種のステイタスなんですか？」

「私は、werewolf《人狼》のなかでも力が強いと自負しております。故に力に執着も御座いません。契約するということが守護獣の目標で憧れであることは否定致しません。しかし…正直申しますと、自分でも何故このような事を言っているのかよくわからないのです」

わからない？自分の気持ちか？？

「つい口走っちゃったってことですか？」

「主ヴァンパイアのお力の匂いは知っていたのですが、体育祭の時にユキ様の匂いを感じて、私の主はユキ様しかないと思ったのです」

「よくわからないな…」

「…申し訳ございません」

奏音さん自身がよくわからないと言っている通り、漠然と感じたってことなんだろう。

けど、わたしは誰かの命を背負うなんて無理だ…

「奏音さん…限りある命がある方が幸せなんじゃないですか…？」

「私も、そう思って生きてきました…いえ、今でもそう思っています」

す」

「矛盾してるよ……」

「私の感情とは別の部分がユキ様の守護獣となることを望んでいるのです」

「好きになつた人も生に縛り付けるの？」

「番にするつもりはありません！」

「大事な人がいるんですね……その人と生きる方が幸せなんじゃないのですか？」

「頭では、そう思っています。ですが……きっとユキ様の守護獣は私なのです」

「そんなの……後悔するよ……」

「抗えない気持ちを後悔するでしょうか？」

「大切な人の死を見つめる事しか出来なくなることに後悔しないと
言い切れますか？」

目の前で大切な人が死ぬ。止めることも追うことも許されない。

ごめんなさいと謝っても一緒にいたいと泣き喚いても、わたしには
どうにも出来なかった……

「既に感情論の問題ではないのです。白崎奏音がどう思おうと、例
え後悔する事になるとしても……後悔すると初めからわかっ
ているとしても私はユキ様の守護獣なのです」

「わたしに……奏音さんの命まで責任を取れと言うのですか……」

「……私は、私の責任でユキ様の守護獣であると誓います」

「わたしは死にたいんです。いつでも自由になりたいと思ってるん
です。奏音さんまで巻き込むとわかっていてわたしを選ぶんですか
？」

「はい」

「意味がわかりません……」

自分が自分で生きてるって実感を得られないのに、そこまでしてわたしを選択する必要がわからない。

「……………」

「……………」

「……………では…それに関して一つだけ願いを聞いて頂けませんか？」

「…死ぬことに関して？」

「はい。私は自分の意志でユキ様の守護獣となることを望みます。

また私がユキ様の守護獣となった場合、ユキ様の御意思には逆りません。ユキ様が生を終える選択をされた場合も同様です。ですが、

…5年…いえ3年！今から3年間だけ生きる事を選択して頂けませんか？」

3年…それだけでいいの？

「他に望みはないんですか？」

「ユキ様の守護獣にして頂くことが私の願いです」

「大切な人と生きるという選択肢を捨てても？」

「…はい。その為の3年間です……………」

目の前の大きな狼が、金色に光る静かな瞳をわたしに向けたまま口を閉ざす。

エアコンが動く微かな音しか聞こえない部屋で、どれくらい時間が経っただろうか。

見つめ合ってた視線を、根負けしたように外したのはわたしだった。

「…奏音さんの事まで気を配れるような優しさはありませんよ？」

「はい」

「…きつと長生き出来ませんか？」

「はい」

「…わかってるんですか！？後悔するんですよ？？」
「はい。…わかっています」

こんなどうしようもない条件なのに…

「…契約はどうやるんですか？」

「っ…！ありがとうございます！！」

表情は分からないけど、感情を隠せない耳と尻尾がわたしに喜びを伝える。

「ユキ様、お力を解放して頂けますか？」

「どうやって？」

「……………」

「……………」

知らないものは仕方ないじゃないですか。

「…失礼致しました。では、Color coating《補色》の時のことを思い出せますか？」

「Color coating《補色》…」

Color coating《補色》と言われて思い出すのは矢原先生の匂い。

「はい。では、そのまま目を瞑ってユキ様自身がColor coating《補色》をした時の感覚を思い出してください」

矢原先生の赤い血が…甘い…甘い…

「ユキ様、目を御開けになって下さい。今、お力が解放されている状態です」

ああ、分かる。

感覚が研ぎ澄まされたようなヒリヒリとした感じ、目が熱く、そして舌先で触れることの出来る牙…

「ユキ様、お力で血を操ることは出来ますか？」

「なんですか、それ??」

「……………」

「……………」

いや、だから知らないものは仕方ないじゃないですか。

「……………失礼致しました。では、分かり易い方法でいきます。ユキ様、指先から血が流れる程度に少し噛んで頂けますか？」

「えっと、わたしの指先に傷をつければいいってことですか？」

「はい」

痛い…自虐趣味はないのですが……

「これでいいですか？」

「はい。そのままでは、すぐに治癒してしまいますので……申し訳ありませんが、ユキ様の牙を傷に当てた状態にして下さい」

「うー」

へー。自分の血は美味しく感じないんだ。

「ユキ様、このコップの水の中に指先を入れて下さい。指を入れたら治癒が始まるまでに傷口を意識して見て下さい。血が水に広がっ

ていくのを見て下さい」

「どうですか？」

あー、貴重な血が…

「ユキ様、今コップの中にはユキ様の血と水があります。水の中に広がっていく血はユキ様の物です。ユキ様、コップの中の液体が回転してきました」

「えっ？」

いやいや、回転なんてしてませんけど？

「回転してます」

「えっと…」

「回転しています！」

もう一度しっかりと確認する。

いや、回転してないよね？

「回転」

「してるんです！…！」

うーん…回転…回転……してるんだろうか？

回転？？

「あっ！？」

「回転していますね」

してる…コップの真ん中に指を突っ込んでるだけなのに…指を中心にして液体だけが回転してる…

そのスピードは段々と速くなっていき、コップの淵から零れそうな程になった。

「あ、あの。これどうするんですか？」

「ユキ様、まだ傷口から血が流れているのが分かりますか？」

「はい」

「では、そのままコップから指をゆっくり引き抜いていくと液体は回転したまま付いてくると思われませんか？」

ついてくる？

「そんなことが」

「付いてくるのです」

「…付いてくる」

ゆっくり指をコップから持ち上げる。

液体は……付いてくる…

「付いてきますね」

「これ…」

どうなってるの？

「ユキ様、回転が止まりますね。回転が止まっても水は指先に球状になって留まります」

「回転が止まる…」

「はい」

「指先に球状になって留まる…」

「はい」

「そんな…」

なんで、こんなことが……

「完璧ですね。ではユキ様、液体の中に、まだ血が流れ出てますか？」

「はい」

「何故、治癒されてないのでしょうか？」

「えっ？」

「それ位の傷であれば、すぐに治癒されてしまうと思うのですが？」

「えっと……」

確かに……

「その水は、何故その状態で保っているのでしょうか？」

……そんなの

「……わからないです」

「ユキ様、その液体の中にユキ様の血はどれ位混じっていますか？」

「……ペットボトルのキャップに半分位ですね」

結構出てるな……

「ユキ様、何故そんな事が正確に分かるのですか？」

「へっ!？」

「コップの水が少し赤みをおびてきていますが、流れ出た血がどれ位かは判断出来そうにありませんか？」

「……なんで……」

なんで……分からない……

「今指先にある液体の中にユキ様の血がキャップに半分程混じっている」と仰いましたね？」

「…はい」

「では、その血だけが指先に集まります。ユキ様、血を回収して下さい」

「血を回収…」

ばしゅ

指先に血が集まると感じた瞬間、机の上に水が零れ落ちる。

「ユキ様、それが血を操るといふ事です」

「…これが？」

指先には、水と溶けあっていたはずの真っ赤な血だけが、小さな球状になって存在していた。

「球状から形を変えましょう」

「はい。…なんとなく、感覚がわかってきました」

球状からキューブ、星、ハート、紐状

「ユキ様、主ヴァンパイアのお力の主軸になるものが血の操作です。血その物を操り、先程のように水を操作することも可能です。血は傷口から流れ出ている必要はありません。また、操作にお慣れになれば離れていても操ることが可能です。但し、流れ出た血を操作する事は可能ですが、体内に戻す事は出来ませんので御注意下さい」

「…変な力ですね」

「これが出来ませんと、契約をする事が出来ません」

紐状の血を振り回しながら呟いたわたしの言葉に奏音さんが反応した。

「それじゃあ、契約はどうするんですか？」

「まずは、今操作しておられる血を手放して下さい」

「はい」

ティッシュを何枚か抜き取り、その上に紐状にしていた血を乗せて意識から外す。

上に乗ってた事が嘘みたいにティッシュに吸い取られた血を見て奏音さんを振り返る。

「ユキ様は、非常にお力が強くセンスも素晴らしいですね」

「そうですね…流石化け物ですね」

…別に望んで得た力じゃない。

「…ユキ様」

うん？なんでそんなに悲しそうな…

し、尻尾と耳が垂れ下がってる！？

「あ、それでこの後どうするんですか？」

「…はい。血を消耗してしまいますが、大きめの傷を作りますので痛みを我慢して下さい」

「契約って痛いんですか？」

「はい」

即答ですか？

「失礼致します」

「つぐう…！」

奏音さんの大きな牙がわたしの右手に突き刺さる。

「ユキ様、流れる血を操作して下さい」

「つう……どうすればいいですか？」

「杭の様な形で保持出来ますか」

どくどくと流れる血を操って長さ20cm程の杭を作る。

「…これ位で良いですか？」

「はい。それを右手で構えて下さい」

「構える？」

杭を握り込む様に治癒の始まった右手で逆手に持つ。

「ユキ様、痛みを耐えて躊躇わずに貫通させるつもりで振りぬいて下さい」

「えっ？」

奏音さんの手が私の左手の上に重ねられる。

思いの外硬い肉球を感じる左手…

貫通させる??

「お願い致します」

い、痛いですよね…

はぁー……

「いきますよ！」

「っ……」

「っぐっ……！」

勢いよく下した杭は、思ったよりも簡単に奏音さんの手とわたしの手を貫通した。

凄まじく……痛い……

「……先程の水を操っていた時のように、今ユキ様から出ている血を私の血に混ぜて下さい」

「……奏音さんの血を見つけました」

「私の血を介して傷口から、私の体の全ての血を掌握して下さい」
「掌握……」

それって、奏音さんを操るってこと？

「……ユキ様、躊躇わないで下さい」

「……」

「ふう……っ……」

血を巡らす事で、奏音さんの体の全ての事が鮮明に分かる。

「……っぐっ……はぁ……」

相当な痛みがあるのか苦しそうな奏音さん。

「循環しました」

「がぁ……はぁはぁはぁ……では……循環させている……血はそのまま……はぁはぁ……杭を抜いて……下さい」

切れ切れのまま言葉を紡ぐ奏音さんに従って、杭を引き抜く。

「っふう…！」

「はぁはぁ」

呻き声すら上げずに荒い息を繰り返す奏音さん。

「奏音さん、大丈夫ですか？」

「大…丈夫…です。はぁー！。ユキ様の血が…馴染むのに少し…時間…はぁはぁ…」

時間がかかるのだろうか…

わたしも、左手に開いた傷の治癒に少し時間がかかりそう。

ふうー！

最近、よく血を流すな…

第16話（後書き）

「キキ！ちょっと」「お手」とか言ってみてよ！
奏音ちゃんなら、なんだかんだできつとやってくれらるって！

第17話(前書き)

これ…ちゃんと繋がってるんか？

是非とも感想なんかを…

第17話

血がー

また貧血になりそうですね？

右手の傷は綺麗に治ってるけど、左手の傷は貫通してただけあって治りにくいみたい。

血は止まって、ピンク色の薄い膜みたいな状態まで治癒は進んでるけど、当たり前のように痛みはある。

奏音さんは…

「はあ…はあ…」

まだダメそうだ…現実にはいなさそうな位に大きな狼姿の奏音さんは、伏せの状態で荒い呼吸を繰り返している。

奏音さんの右前脚？の貫通していた傷は、紫黒色の毛に隠れてハッキリとは見えないけど、血は止まっているようだ。

…あれ？紫黒色だよな？？

なんか、光の加減で一瞬…

うん？やっぱり見間違えじゃない

「金色？」

「はあはあ…どうかされましたか…」

「えっ」

思わず声が漏れてたか…

「あの、奏音さんの毛の色が光の加減で金色っぽく見えただけで、元からそんな感じだったのか記憶がなくて」

普通に見てるだけだと紫黒色なんだけど…

「それは…ユキ様のお力が…入ったからです…はあ…今、治療で力を…使っておりますし…はあ…恐らく…目も…」

そう言っつて、わたしを見つめる瞳は確かに今までの金色に混じって…赤色が…

赤？

「奏音さんの目は赤が混じってるみたいですが？」

「やはり…そうですね…」

えっと、わたしはグリーンアイなのですが？

思わず、部屋に備え付けの鏡を振り返る。うん、緑の瞳だ。

「ユキ様は…はあ…お力を解放されると…綺麗な赤い瞳ですから…」

「…わたしの目が赤い？」

思わず眉間に皺がよる。

ああ、そんなにも化け物なのですか…

「ユキ様…有難う御座います…」

「少しはマシになってきましたか？」

「そうですね…大分楽になってきました」

呼吸がさっきよりも落ち着いてきたみたいだ。

「これって、今わたしの血が奏音さんの中にありますよね？」

「はい」

「奏音さんに害はないのですか？」

というか、苦しんでる時点で害が無いわけない気がするけど…

「ユキ様の血が…お力が馴染んでしまえば…違和感もなくなります。ユキ様の血を媒介に…お力の供給がありますから…契約をする前より…力も強まりますし、寧ろ体は動きやすくなるでしょう。ユキ様…治療は進んでいますか…」

「うーん、そうですね…」

進んではいるかな。痛みはあるけど…

「…矢原みちるを…呼び出しますか？」

「はっ？何故ですか？？」

「Color coating《補色》が必要かも…しれません。守護獣でのColor coating《補色》は…あまりお力になりません。…契約守護獣の場合は…更に悪いです。矢原みちるでのColor coating《補色》が理想的です」

「まだ大丈夫です…」

「…そうですね」

自分が血を求めてると思いたくない…

「あの、奏音さん」

「…なんででしょうか？」

「矢原先生の事、どう思ってるんですか？」

「どうとは？」

いや、なんか凄く厳しく当たってる気が…

「蘭さんとかと比べて態度がキツイ気がするんですけど」

「そうでしょうか？」

自覚なしですか！？

「嫌いですか？」

「いえ、そうでもありません。…ユキ様にColor coating《補色》をする貴重な者ですし」

「人としては、受け入れられませんか？」

「…嫌いではありません。良い人だと思います」

「では、もうちょっと普通に接しませんか？というか、少し話し方砕けませんか？」

「…努力致します」

是非努力して下さい。

せめて、普段と今の中間くらいまでにしてけると丁度いいかも。

「今の話し方が素なんですよね？」

「そうです」

「じゃあ、琴音さんの前でもそれなんだ…」

姉妹の会話なのに…堅苦しいよ

「…いえ、…琴音の前では…、この話し方はしておりません」

「あー。琴音さんに堅苦しくて止めてって言われたとか？」

そりゃ、姉妹の会話っぽくないもんね。

「…琴音の前で、この話し方にした事は御座いません」

「えっ？こっちの話し方が素なんですよね？」

「…はい」

「素で話した事がない？」

姉妹なのに？

「話し方だけの問題です。感情を偽って会話している訳ではありません」

でも…、本当の話し方で接して貰えてないってことじゃないの？
それって、なんか…寂しい気がする……

「家族の中で、この話し方をしないということなんですか？」

「…琴音にだけです」

「そんな…なんで……？」

「琴音が覚醒すると思っていなかったからです」

「どういう意味ですか？」

「…私と琴音は腹違いの姉妹です。母親同士が姉妹で父親が同じ人間」

「えっ？」

姉妹だけど、従妹だけど…姉妹…？ややこしい……

「複雑な事情などはありません。単純に姉妹で同じ人間に惚れ、男も姉妹どちらかに肩入れできず、争うことなく3人で家族になりました。そして、それぞれが子供を産んだというだけです」

いや、複雑過ぎます。

「それって、ヴァンパイアとか守護獣とかの間では良くあることなんですか？」

「守護獣では珍しいことではないです。主ヴァンパイアは必ず一対の番となりますので、有り得ません」

「そうですね？」

モ、モラルが…

「ですので、琴音の母親も私の母親もどちらも仲が良いですし、どちらの事も母親だと思っております。私と琴音も姉妹として生活しておりますし……家族仲は良いと思います」

なのに、琴音さんだけには話し方が異なる？

「私と琴音は同日に生まれていますので、双子のように育てられました。しかし、私は守護獣としての力が強く生まれた時から覚醒しておりましたし、逆に琴音は覚醒しないまま育ったので、このまま人として生きるのだと…そう信じておりました」

「人間だと思ってたから、壁を作ってたってことですか？」

「それは違います！…人であるならば守護獣の考え方に囚われず人としての生き方だけ知っていればよいと…それが琴音の…人の幸せですから……。家族で琴音を護ると決めたのです」

わたしの感覚で言うと、壁を作って暮らしていたというのがと明確な違いが見出せない。

「つまり…琴音さんは自身が覚醒するまで守護獣のことを知らなかった？」

というより、自分の家族が人ではなかったというのも知らなかった
ということ？

「まだ私が幼獣としての姿しか取れなかった頃の記憶は曖昧で覚えていないようです。物心がつく頃には隠していましたから…知らずに育っております」

それは…わたしならツライと感じる……

「じゃあ、きつと琴音さんは急に覚醒してしまって戸惑ってますね…」

「……それでも、受け入れなければならぬのです」

異形の者が存在していることを知らずに、自分自身も人だと信じて生きてきたのに急に全てを否定される…

「ツライですね…」

「……………」

境遇は違っけど自分自身の姿とダブって…

「ユキ様……………」

「な、なんですか？」

「…いえ、なんでもございませぬ」

「……………」

「……………私、白崎奏音はユキ様の契約守護獣としてお仕え致します。宜しくお願い致します」

「…はい」

奏音さんはホントにわたしの契約守護獣になっちゃったんだ…わた

しと一緒にいる事に何も利点なんてないのに……

「ユキ様、本当に矢原先生を呼ばないのでしょうか？」

あつ、なんか呼び方が変わった？

「こだわるんですね。でも必要ないので」

「しかし……まだ左手の治癒が終わっておられないのでは？」
「えっ？」

確かにまだ完治してない……さっきの治癒ペースだったら完治しててもおかしくないのに、急に治癒速度が遅くなった気がする。

「私がユキ様の契約守護獣となったことで、常にお力を供給して頂いております。恐らくユキ様自身の治癒に回せるお力が薄くなってきたのだと推測されます」

そ、そんなところにも契約守護獣にしたことへの影響が出てきてしまうのか……

えっと、つまり……

「……定期的にColor coating《補色》が必要になる？」

「はい。今までよりColor coating《補色》の感覚が短くなるのは間違いないはずです。ユキ様は矢原先生以外にColor coating《補色》する当ては御座いますか？」

「矢原先生でColor coating《補色》をすることも望んでないです！」

「ですが……!-!」

わかってる…。自我を保つ為にもColor coating《補色》は必要なんだ……

「…わたしが人ではないと知っているのは矢原先生だけです」

ファイ……ファイは知ってるのかもしれないけど…

少なくとも、わたしが認識しているのは矢原先生だけ。

「では、矢原先生が拒否しない限りColor coating《補色》を控えないようお願い致します」

「……必要最低限だけです。だから今日は大丈夫です」

「……はあ」

えっ、だって話しをしてる間に傷も目立たなくなってきたよ？

「奏音さんは、もう大丈夫ですか？」

さっきから普通に会話してるし大丈夫だとは思っけど。

「はい。私はユキ様からのお力も安定しておりますし治癒も完了致しました」

そうですねー。奏音さんに力を提供してるから、わたしの治癒が進まないんですもんねー！。

「じゃあ、そろそろ出ます？」

「そうですね。今……」

サイドテーブルの上の卓上デジタル時計を見る。

「13時半??」

「そうですね。思いの外早く契約が済みました」

早かったの?部屋に入ったのが10時前くらいだったから…

「契約するのにかかったのは3時間くらい?これは早い方なんですか?」

「私もどれくらいかかるのかは知らなかったのですが、少なくとも5時間はかかると予想していましたので」

あー、確かに5時間かかると予想してたのなら早い方かな。

「えっと、じゃあ…向こうで」

「失礼致します」

うん。人の姿に戻る必要はあるんですけどね…

そんな堂々と…:…なんで、わたしが恥ずかしがって顔を逸らさないといけないんですか??

「ユキ様」

「はい?って!」

隠してよ!!

「どうなされました?」

どうもこうもないでしょー!ー!ー!

「なんで、服を着てないんですか!?!」

「これから着ようかと思っております」

着てから呼びましょう！」

「で、なんなんですか？」

「私の目の色は、どうなっておりますか？」

いや、それホントに服着てからでも良くない？

……あれ？

「えっと、そんな色でしたか？」

奏音さんの目の色は…守護獣としての力を使用している時は金色で普段は少し色素の薄い焦げ茶色っぽい感じだった気が？

わたしの契約守護獣になって力を使っている時は金色に少し赤色が混じった感じで、今は……

ああ…そうですか、なんだかわたしのグリーンアイが混じってる感じなのですね……

「ユキ様の目の色が頂けているでしょうか？」

「…そのようですね。普段からその目の色になってしまっ？」

「はい。ユキ様のお力を体に循環させておりますので…。特に目にはユキ様のお力が溜まり易いのです」

「周りからしたら、急に変わった様に見えるとか？」

「いえ、その心配はありません。私の目の色がユキ様の目の色と混じって見えるのは、先程も申し上げました通りユキ様のお力が溢れているという状態なので、力を持つ者でないと変化を認識することは出来ません」

つてことは…

「琴音さんとか？」

「はい。琴音にはわかるでしょうが、何の力も持たない人間にはわからないでしょう」

「琴音さんは、奏音さんがわたしの契約守護獣になると知ってるんですか？」

「……いえ」

「バレますよ？」

「構いません……」

「……」

「……へ……プシュン……」

「……取り敢えず……服を着ましょうか」

「……はい」

なんか、視覚的におかしいですから……

「奏音さんがわたしの契約守護獣になって……で、これから何をしたらいいのですか？」

「特に成すべき事はありません。私はユキ様を御護りする為に存在しますので、御側に控えさせて頂くことが多くなるとは思います。

……近い内に協会《Box》の者が接触してくるかと思いますが、協会《Box》と接触される際は私が必ず御側に居る時にお願致します」

「分かりました」

協会《Box》か……わたしも聞きたい事は沢山ある……

「所で、ユキ様お昼はどうされますか？」

「お昼？」

「少し遅くなっちゃいましたが、お食事がまだですので」

「えっと、食事とかしなくても関係ないですよね？」

「確かに、食事をしなくとも身体的な問題はありませんが、活動エネルギーを全てColor coating《補色》で補つよりも食事の栄養素からも摂取する方が効率が良いのです」

…えっ？

絶食しても死なないけど、食事をしたらColor coating《補色》の回数を減らせる？

「……食べます」

「では、御供致します」

話してる間にちゃんと服を着た奏音さんと連れ立ってホテルを出る。コソコソと……

誰かに監視されてるわけでもないけど、なるべく早くホテル街から遠ざかりたい。

「あれは……」

「??？」

急に立ち止まった奏音さんにぶつかると同時に、奏音さんの視線の先を追う。

ホテル街から抜ける道、正面の喫茶店？道路に面したガラス越しのテーブルに…

「………矢原先生？」

「みたいだね。旦那さんかな？」

違う……和志さんじゃない…

「………なんで」

修さん……………

「声掛ける？」

「……………」

「遠野さん？」

「……………」

「遠野さーん??」

「……………笑ってる」

「あぁー、笑ってるね」

あんまり笑わない矢原先生が…

「矢原先生って、旦那の前では無防備に笑っただね」

「……………」

そう、無防備に…笑ってる……

「声掛ける？」

「掛けない……」

どんな顔して会うの？

「丁度会ったんだし、Color coating《補色》とか…

」

「必要ありません」

「…さつきより顔色が悪いんだけど」

「問題ありません」

「……………じゃあ、行こっか」

「はい」

二人に気付かれないうちに離れないと。

「遠野さん」

「……はい」

矢原先生と修さん…

「敬語じゃなく喋ってよー」

「……はい」

二人は知り合いだった…

「はい。じゃなくて、うんでしょ？」

「……はい」

それも、矢原先生が心を許すくらいなの…

「……ユキちゃんって呼んじゃうよ？」

「……はい」

まるでデート中のカップルみたいに…

「……じゃあ、奏音ちゃんって呼んでくれるっ？」

「……はい」

矢原先生と和志さんって言われるよりも、よっぽど夫婦っぽい。

「……ユキちゃん」

「……はい」

うん。釣り合ってる。

「…矢原先生が好きとか？」

「……はい」

あー、そうか修さんの好きな人……
矢原先生なんだ。

第17話（後書き）

あー、修さん久しぶりー。

って、いきなり浮気ですか!？

第18話（前書き）

どんどん話しが長くなってきましたね。

段々話しが読みにくくなってきましたね…

よし！感想をよろしくー！！

第18話

悶々…

悶々……

悶々……

奏音さんを契約守護獣にした金曜日。帰りに偶然見掛けた矢原先生と修さんの姿が頭から離れないまま土曜日を過ごした。

二人を見ていて気付いてしまった。

修さんの好きな人、守りたい人というのは、きっと矢原先生のこと
で……

そして…矢原先生も修さんのことが……

悶々…

悶々……

悶々……

結局昨日は何をするでもなく、一日が終わって…

ブブブブッブブブブッ……

電話？

「通話着信 香山 修」

修さん!?

「もしもし??」

「もしもし、ユキちゃん?」

「あっ、はい。おはようございます」

修さんからの電話…

あの喫茶店からわたしが見えたのかもしれない……

「おはよう。後10分位で着くけど大丈夫かな？」

「…はい……??」

何が……??

「じゃあ、用意をしておいてね」

「…はい……？」

何が……??

ツーツーツー

きつ、切れた……

えっと……日曜日……用意しておいてね……

……あつ!????

ああ???

現在時刻9時45分???

後10分位で着く???

はいいいいい!!!!!!

電気も点けず、膝を抱えて壁に凭れ掛かっていたわたしは、比喩表
現でなく飛び上がった。

荷物を運ぶの今日じゃないですか!?

しかも、10時位って約束しました。……はい、確かにしました。

金曜日の夜から、只々鬱々として過ごしていたわたしは、すっかり今日の事を頭から追い出してしまったたわけですね。

と、取り敢えず……

あれ？特に何もする事がない？

いつも通り、決して可愛いとは言えない格好だけど着替えは済んでる。

荷物も多くはないから荷造りは完了しているし……

慌てて立ち上がったけど、何もする事がないと分かったわたしは、玄関前で出迎えることにして、運べるだけの荷物を抱えて部屋を出る。

「ユキさん」

うっ………出た………

何故か、とつても薄暗い廊下の似合う………やっぱり………

「……はい。千草様」

「用意は出来ているのかしら？」

「はい。問題ありません」

「そう。修さんはもういらっしゃるの？」

「はい。もう来られます」

き、機械的な回答になってしまいます……

「……分かってるわね」

「はい………」

御婆様の望んだ通り、修さんと結婚します。

現実には分かってますから……逃げたりしませんよ……

「そう。しっかり務めなさい」

「はい……」

ピンポーン……

「来られたようね。…行きなさい」

「はい」

御婆様の視線を背中に感じながら、急ぎ足で玄関に向かう。

勝手口じゃなくて正面玄関に来るのは久しぶり。初めてですね。擦り硝子越しに見える人影。ドアの取っ手に手を掛け、ゆっくりと開けたその先に修さんの姿があった。

「おはようございます」

「おはよう。ユキちゃん。もう行けるのかな？」

「あつ、はい。もう用意はしてあるのですが、お上がりになりませんか？」

「用意が出来ているのであれば、今日はお邪魔せずに行こうかと思うんだけど……千草様が何かおっしゃってたかい？」

後半部分を小声で聞いてくる修さん。きっと御婆様がわたしに何か強要しているのなら、出来るだけ合わせてくれるつもりなんだと思う。

「御婆様からの指示はつけておりません。宜しくお伝えするようにと……」

「そうかい？じゃあ、慌ただしくて申し訳ないけど今日は時間もないですし、って伝えて貰えるかな？」

「はい。問題ありません」

「荷物は…これだけ？」

「あつ、いえ、残りも持ってきますので少し待ってください」

「わたしが行こうか？」

「いえ、重たいものはありませんので」

「わかったよ。じゃあ、この荷物を先に乗せておくから無理せずにね。重たいものは呼ぶんだよ」

あー、結構重いかかって思った荷物なのに男の人って軽々と持てるんですねー。

修さんの背中を見送って、残りの荷物を取りに部屋に戻る。

衣装ケース二つは流石に一回では運べそうにない。無理せずに二回に分けて運ぶ。

「あとどれくらいになるのかな？」

「あとは、これと同じ衣装ケースが一つあります」

「運べるかい？」

「はい。それほど重くはありませんので」

「そう。気を付けてね」

残りの衣装ケースを運び出すと、この部屋には殆ど何も残らない。

来週一週間を過ごす為の、制服と学校の勉強道具と鞆。それと、寝る時の服くらい。

なんとも御手軽な人間だ……あー…別に人間でもなかったか…

「これだけかい？」

「はい。載りますか？」

「問題ないよ。積んでくるから、準備をしておいで」

準備…？このまま行けますか？？

玄関に待機しておきます。

「あれ？もういいのかな？」

「はい。このまま行けます」

「じゃあ、行こうか？」

「お願いします」

ミニバン??…ファミリーカー？ちょっとイメージ外なんですけど。そういえば、矢原先生のともイメージ外だったっけ。

「今日は荷物があるから乗りなれない車なんだよ。運転は気をつけるから助手席にどうぞ」

「修さんの車じゃないんですか？」

「うん？わたしの車なんだけどね。普段乗ってるのではないよ」

「普段車…？」

そ、そんな何台も所有してるの？一人暮らしですよ？

御医者様って無駄なところでお金使うの??

「仕事に行くのに、大きな車で行く必要はないからね。でもこういう車も遊びに行くのには便利だから。ユキちゃんは車酔いしやすかったりする？」

「いえ、車酔いしたことはないの、大丈夫だと思います」

「1時間くらいだけど、少しでもしんどくなりそうなら早めに声をかけて」

「わかりました」

車で一時間くらいか…そういえばどこらへんに住んでるのか聞いてなかった。

信号待ちをしてる修さんの横顔を見る。

あの喫茶店で見た横顔と同じ……………
あつ、わたしの視線に気が付いた修さんがチラッとこっちを確認し
て…

「うん？どうかしたのかな？？」

「なんでもありません。…えっと、家の最寄駅はどこになるんですか？」

「千草様から何も聞いてなかったのかい！？」

あー、御婆様と会話なんて殆どしませんから。

「申し訳ありません…」

「あつ、いや責めてるんじゃないんだよ。唯、場所も知らないで引越しする決断をしたのかと思ってね」

「と、遠いとかですか？」

今更ですけど…不安になってきたかも…

「いやいや、遠くはないよ。ユキちゃんの学校なら、今のユキちゃんの家より大分通い易くなるんじゃないのかな？通学時間半分くらいになるかもしれないね。なんだったかな…通勤通学時間帯の…特別快速？みたいなのも止まるから」

「特別区間快速？」

「そう、それだ」

えっと、今の最寄駅も特別区間快速は止まりますけど？ま、まあそれでも近くなりいいんですけど…

「駅から離れてたりしますか？」

「うーん、徒歩だとどれくらいかな…車だとすぐなんだけどね」

ということとは、そんなに離れてはいないかな。

今はバスの経路が大回りとはいええ20分くらい乗ってるから、それよりはきつと近いでしょう。

でも…学校から近くなつて特別区間快速が止まる駅なんて限られてる……

「このまま家に行つてもいいのだけど、折角だから駅を経由して道順を見てみようか？」

「…お願いします」

見覚えのある景色…きつとその駅は……

「ここが駅の正面ロータリーだね」

「……………」

ああ………やっぱり……

その駅は、一昨日奏音さんと待ち合わせた…そして矢原先生が住んでいる街の駅……

「じゃあ、駅から家までの一番明るい道を進むからね。少し周りを見ながら確認してくれるかい？」

「…はい」

見たことのある道を辿る……

そこは…きつと……きつと……

「着いたよ」

「……………」

… 矢原先生が住んでると同じマンション……………

「衣装ケース2個はわたしが運ぶから、こっちの段ボールを持ってくれるかな？」

「…はい」

「大丈夫かい？」

「だ、大丈夫です」

… 大丈夫。

「最上階だからエレベータで行くんだよ。あつ、ごめん。ボタン押してくれるかな」

「……………」

高級マンションの最上階。それは広いフロアを4区画だけで区切った一区画がとても広いVIPフロア。

その4部屋のうちの1部屋が修さんの部屋。

そして…それは矢原先生が住んでる部屋の隣……………

「あー、ドア……………」

「え？」

修さんは衣装ケース2個で両手が塞がってる…それじゃ開けられないよね。

「……………うーん。ユキちゃん、ジャケットの胸ポケットにキーケースが入ってるから、その段ボールをこっちの荷物の上に置いて……………」

「

ガチャガチャ

修さんの説明を行動に移そうとしていたわたしの耳に、どこからか鍵を開ける音がした。

その音源は、隣接するドアの……
それは……

「あつ……？和志か」

「へっ？」

和志さん？

「な、何してんの？？」

「ドアを開けようとしていたんだけど」

「あー、両手が塞がってて無理ってこと？」

うん。無理ってことです。

「鍵はどこね」

和志さんが、修さんのジャケットのポケット部分をパンパンしながら鍵を探してるらしい。

「胸ポケット」

「ああ、あつたあつた」

ガチャガチャ

「ありがとう」

「ありがとうございます」

「いいよいいよ」

矢原先生じゃなかった

和志さんと修さんも知り合いなんだ。和志さんは気が付いてるのかな…

修さんが、玄関に入ってすぐの廊下に荷物を置く。

「どこか行くのかい？」

「みちるを迎えに行かないと」

「そうだったね」

「そっちは…ああ、ユキちゃんの荷物を運ぶの今日だったっけ」

「見ての通りだよ」

「ユキちゃん、お隣さんだよ。これから宜しくね」

「あつ、よ、宜しくお願ひします」

わたしが引つ越してくることも知ってる？矢原先生も知ってるってことだよね…

「あれ？実際に引つ越してくるのは…？」

「今週末です」

「そっか。修になんかされたら遠慮せず逃げてきていいからね」

「えっと…はい、ありがとうございます」

「和志…立ち話してていいのかい？迎えに行く時間が…」

「うわっホントだ！やばっ！！修、ユキちゃんまたね」

あつという間に走り去っていく和志さん。

「はあ…落ち着きがないね…鍵もせずに…」

呆れたように溜息をついた修さんが、胸ポケットからキーケースを

出して和志さんが締め忘れたドアに向かう。

ガチャガチャ

えっ？し、締まったの??

「……………全室同じ鍵とか？」

「いやいや、まさかそんな事はないよ。矢原家とは懇意にしているね。偶々だよ」

懇意にしてたら鍵を持つてるの？偶々で隣の家の鍵を??

でも、そうなのかもしれない…和志さんに知られずに鍵を手にする事は出来る。

矢原先生がいるんだから……

「一部屋空けたから、荷物を運んでしまおうか。こっち。この部屋を使って」

「ありがとうございます」

矢原先生の部屋を見てたから、驚きは少ないけど…ホント無駄に広い部屋……

そりゃ、この階に4区画しかないんだからある程度広いとは予想がつくけど、前に矢原先生の家にお邪魔した時は体調が悪くてあんまりじっくり見てたわけじゃないし、入ったのはリビング…のはずなんだけど、修さんのとこのリビングはもの凄く広く見える。

えっと…間取りが違うとか？

な、何畳くらいあるの？30畳??40畳位あるのかも…広すぎて良く分からないし、寒々しいし…

わたしの荷物を運び入れた部屋は…10畳くらい。良かった。まだ想像の範囲内と言える広さだよな。

「客用の部屋として用意したからベッドしかないんだよ。後々必要な家具を揃えるから、見に行かなきゃね」

「そんなに荷物も多くないので大丈夫です!」

「というか、今までから比べたら……… 落着けない………」

「間取りは… 4LDK?」

「荷物が多くなってくるだろうから、こっちのウォークインクローゼットはユキちゃん用だよ」

「えっ?!?!?!?!?!?」

「4LDK+WICでしたか…」

「そ、そんなに必要ないですから!修さんが使用して下さい」

「大丈夫だよ。ウォークインクローゼットは2つあるからね」

「… 4LDK+2WICなんですね……… 御医者様………」

確かに遠野の家も旧家で広いけど、わたしが今遠野家から借りている部屋と修さんから指定された部屋…明らかに修さんの家の勝ち。

「こんなにさせて頂いてありがとうございます」

「あー、実はこのマンション、香山の…父の持ち物だね。あまり苦労せずに入れてしまったから、ありがたがる必要はないよ」

「そ、そうですか」

「そうでした。修さんは香山家の人間でしたよね。その上御医者様…湧き出るお金ですね………」

「この階の住人もみんな顔見知りで」

そりゃ、4区画しかないし…

「みんな家族みたいなもんだよ」

……………そこに深い意味はありますか

「和志さんとも……………仲が宜しそうでしたね」

「そ、そうだね」

隣に住んでて、矢原先生とのことはバレないのかな…

「職場が一緒だから」

「そうなんですネ。職場が…」

うん??

「聖アンテルス病院!？」

「そうだよ」

そうだよ、って!!医療エリート!

「た、確か次期医院長先生にとかいっ…」

「ユキちゃん、あくまで噂だからね」

でも、そんな噂が流れる程優秀なんですよね。エリート中のエリートなわけですよ。見た目も肩書も矢原先生とお似合いなんですよね…

「凄いですね」

「いや、環境が良かったただだよ」

…聖アンテルス病院…修さんと和志さんが勤務している病院。そして…

「修さんの大事な方というのは…」

「えっ？」

「矢原さんですね」

「なっ！！？なぜ、そんな！！？？」

ああ…やつぱり……

「そうなんですね……」

「……誰かに聞いたのかい？」

否定はない……

「いえ…そう感じただけです」

「そうか…。そうだね。ユキちゃんに隠すのは卑怯だね」

そうですね…わたしは気付いてしまったから……

「確かに、ユキちゃんの言った通りだよ」

「どうして……」

あんなに仲の良さそうだった和志さんを裏切るようなことを…

「わたしたちは…幼馴染でね。いつの間にか守りたいと思う存在になっただけだよ」

「お二人が結婚した後ですか？」

「…前だよ。もつと前からだ…」

じゃあ、和志さんと結婚する前に修さんが幸せにしてあげる道があったんじゃないの？

「…和志は理解してくれてる」

「そんな！和志さんも承知の上でなんて！」

……偽装結婚

「それも家の為ですか…？」

「わたしを軽蔑するかい？」

軽蔑なんて…

「いいえ」

修さんと話しをしていた時の矢原先生は、とても無防備な…リラックとした顔で笑ってたから。
だから…例えそれが世間から後ろ指を指されるような関係でも…

「…軽蔑なんて出来ません」

「そうか…」

「和志さんが納得されているなら…お一人で幸せになって下さい」
「…ありがとう」

まだ悶々とする、晴れないこの気持ちが心の片隅に残ってる。それはきつと、矢原先生も修さんも、和志さんにも幸せになって欲しいという思い。

「修さん！必ず和志さんも幸せにしてください！..」

「あつ、ああ分かってるよ」

そう..みんな幸せになって欲しい。矢原先生のあの笑顔を..守って下さい。

第18話（後書き）

∴ 4LDK + 2WICなんですね……御医者様って……この金
持ちが!!!

けっ!!!

第19話(前書き)

あー、展開が遅い!!と思ってる皆様…
重々承知しております。
しばしお付き合い下さい。

「……………はい」

そう、わたしはテスト休みが明けた今週、保健室に一度も足を運んでいなかった。

「蘭さん、ごめんね。ちょっと、ユキちゃんと話したいことがあるから、今日もユキちゃん借りるね」

「あっ、はい…」

何かを頼んだわけでもないけど、何故か奏音さんはわたしに付き合ってくれる。

えっ？もしかして、それが守護獣の仕事とか？？

「ユキさん…。これ、みち」…矢原先生からです」

差し出されたのは…小さなタッパー。

「……………これは？」

「サラダです。今日も来ないなら渡すようにと」

「…ありがとうございます」

「あの……………」

「……………」

「いえ……………では、また……………」

蘭さんが去っていく背中を見送り、いつもと同じコンビニのパンを齧る。

「何か理由があったり？」

机をくつつけた状態にして自分のお弁当を広げていた奏音さんが、

独り言位の呟きで口を開いた。

「理由？」

「今週に入って急に保健室に寄らなくなった理由」

「……特にはないです」

本当に理由なんてない。唯……ちょっと矢原先生と顔を合わせるの……
……なんとなく気まずいというか……

別に、矢原先生は何も思っていないかもしれないけど、矢原先生の好きな人の嫁になってしまふんです。

なんて、説明できません。

「何も理由がないのに、今週に入って一切行ってないとかねー」

「………奏音さんと交流しようかと思って」

「奏音ちゃん」

「へっ？」

「奏音ちゃんって呼ぶって言うてくれたよね??」

はっ?えっ???そういえば、今週に入って奏音さんの名前を呼ぶた
びに同じことを言われてる気がする……

そんな約束しましたっけ………

「か、奏音ちゃん……」

「そう。で?交流??」

「こ、交流………」

「まあ、ありがとっつて言っとくけど……」

「けど……?」

「放課後も行ってないよね?」

「………」

そりゃ…行つてませんけど…

「放課後も保健室に行かないってことは、蘭さんと何かあったってわけじゃなさそうだし…」

「……………」

「矢原先生となわけだね……………」

「……………」

「…栄養補給は？」

「意識して食事してますよ」

食事も意外と大事だと分かったから。

「…それで？」

…何を言いたいかは分かつてる…………

「今のところ必要はないと思ってます」

「…早めに判断しないとヤバいからね」

「そうですね…………でも、大丈夫です」

「ふーん…………まあ、ならいいけど」

もしかして呆れてしまったんですか？食べ終わったお弁当箱を手早く片付けて、机を元の位置に戻した奏音さんは、そのまま教室を足早に出て行ってしまった。

…だって…………Color coating《補色》はやっぱり嫌だ…
矢原先生が栄養補給の対象になるなんて…そんな目で見るのも、そんな目で見られるのも嫌なんです…

一人になったわたしは食事を味わうこともなく、コーヒーで無理やりパンを胃に流し込んだ。

今週に入って一度も保健室には行っていない。それは、つまり矢原先生が用意してくれたサラダを食べていないという事。今日は木曜日…3日も行っていないのに今日も用意してくれた…机の上に残ったタッパ―に手をやり蓋を開ける。

……うさぎりん?」

前に和志さんが作ってくれたのとは違い、不揃いなそれ。唯のりんごのはずなのに、そのうさぎから温もりを感じる。一つ一つを大事に食べる…胸の中から温かい気持ちが溢れた……

「… さん……ユキさん」

「えっ…?」

タッパ―をしまい、ボーっとしていたわたしの名前を呼ぶ声が聞こえて振り向く。

「…蘭さん?」

「あの…みちる姉さんからユキさんに伝えるように……」

「タッパ―ですか?」

「いえ、明日の式が終わって帰る用意をしたら保健室に来るようにと……」

「…明日?」

「…と言われましたが?」

明日は二学期の終業式があるだけで、それが終わったらホームルームで解散。

後は…自由参加のクリスマスミサがあったけど……

「明日って、何かありましたか?」

「終業式?」

「……………」
「ホームルーム？」

「……………」
「えーと、ミサ？」

「……………」
「……………」
「何かありましたか？」

「いやいや、それを聞いてるんですよ??」

「…何もありませんよ」

「…と思うのですが？」

「あー、取り敢えず矢原先生から言われたことを伝えてくれたんですね。」

「わかりました。ありがとうございます」

「あ、あのユキさん」

「は、はい？」

「思いつめた様子に、思わずこっちまでどもってしまった。」

「何かあったのでしょうか？」

「えっと、何もなかったという結論になったかと思うのですが？」

「違います。明日の事ではありません」

「……………」
「……………」
「私が…何かユキさんの御気に障ることをしてしまったのでしょうか……………」

「ど、どうしてですか!？」

「…今週に入って…急に…」

うっ…

「違いますよ！蘭さんに対してどうこうなんて思ってませんから」「では、どうして…」

「…えっと」

「……みちる姉さんと何かあったのですか？」

奏音さんといい蘭さんといい…なんで突っ込んでくるのかな……

「矢原先生とも何もありませんよ」

「ですが…」

「少し考えたいことがあっただけです」

「そうですね…」

「………」

「………」

「…今週」

「えっ？」

「…今週だけですから……次からは戻りますから」

「はい…。わかりました。……待ってます」

この部屋で過ごすのも、今日が最後。

約3年間。思い返せばこの部屋にも愛着が……

うん。全くないですね。

全ての荷物を片付け、御婆様に挨拶を済ませ、布団を敷いた状態の部屋を見直し、ボーっと回想……する要素もなく、仕方がないので

本を……読もうと思ったけど、手持ちの荷物を少なくする為に、既
に持って行ってたのを思い出し……
はぁー

ブブブツブブツ……

うん？

「通話着信 矢原 みちる」

……

「……もしもし」

「もしもし、ユキちゃん？」

「矢原先生……」

「遅くにごめんなさい。今電話して大丈夫かしら？」

何もすることはないと判明したところなので……

「大丈夫です……」

「蘭に聞いたと思うのだけど」

「明日のことですか？」

「そう。明日から家に移るのよね？」

知ってるんですね……でもきつと学校経由で知ったわけじゃないんで
すよね。

「はい。明日学校が終わったら」

「そのまま行くのね？」

「そのつもりです」

「じゃあ、蘭から聞いたように、保健室に来て頂戴」

はっ？

「分かりましたけど…何かあるのですか？」

「少し待って貰うことになるけれど、一緒に帰るわ」

「えっ？」

「荷物があるでしょう？」

「大丈夫です！場所も分かりますし行けますよ！！」

「却下よ」

「へっ？」

い、いや却下って……

「鍵もないでしょう？頼まれているのだから一緒に帰りましょ」

修さんに…頼まれたから……

「…ユキちゃんは……わたしと一緒にいるのは嫌？」

「そんなことないです！嫌なんかじゃないです！」

というか、寧ろ矢原先生の方が嫌なんじゃないですか？

だって、好きな人の婚約者とかですよ？…愛のない婚約とは言え嫌なものなんじゃ……

「そう？じゃあ…待ってるわね」

「は、はい……」

「遅くにごめんなさい」

「い、いえ……」

「ちゃんと寝るのよ。おやすみなさい」

「あっ、おやすみなさい」

…嫌じゃないの…かな……………

「休み中も羽目を外すことなく、聖アンテルス女学院の生徒としての節度ある行動をするように心掛けるのですよ」

通知表を返し終えた教室で冬休みの注意事項を長々と話す先生が、ようやく締めに入ったみたい。

「休み明けも皆さん揃って元気に登校して下さいね。それでは皆さん、良いお年を！」

「……………良いお年を」……………

おおー、誰に言われるでもなく声が揃うんですね。

まあ、わたしは言えてないですけどね……………

一斉に席を立ちガヤガヤと騒がしくなる教室。

これから総合ホールでクリスマスミサがあるから、殆どの生徒が友達同士のグループにまとまり流れていく。

わたしは…

「ユキちゃん」

きたか…

「なんですか？」

「ミサ行く？」

「検討中…ですね。奏音さんは行く」
「奏音ちゃん」

「…奏音ちゃんは行くのですか？」

「敬語はやめるって約束したよね！..」

「…行くの？」

「まあ、それでいいけどさ。…で検討中だね」

.....

「…そうですね。では、良いお年を」

「いやいやいや、待って」

「.....」

「そんな冷たい目しないでさー」

「.....で？」

「今日に行くの？」

「どこに？」

「保健s」

「では、良いお年を」

「だからさー」

「なんなんですか！..!!」

うがー！..!!..!!..!!

「良いお年をー！..はまだ早いから！..!!」

「はっ？」

もう十分絡みましたから！

「うわー、ホント嫌そうな顔するなー」

「.....で？」

「ミサに行くなら一緒に行くよ」

「行かないなら？」

「うーん、どこに行くのか気になったりして」

「……………」

「……………保健室？」

「……………だったら何??」

「一緒に行こつかなーとか」

しつこい……

「……………勝手にどうぞ」

「お、怒ってる??」

「……………」

面倒くさいと思ってるだけです。

「あの……………怒っておられるのですか??」

あ?喋り方が変わった。

「ユ、ユキ様……………」

「……………」

あー、今獣型になったら間違はなく耳と尻尾がへしょんってなってるね。

「出過ぎた事を申しました……………しかし……………」

「ほら、もう着きましたよ」

ガチャ

へしょん感は可愛いけど、人型でやられるといじめてるみたいですね…

「あつ、ユキさん、奏音さん」

「蘭さん？」

「はい」

なんで保健室に？

「蘭さん、今日って何かあったっけ？」

「今年最後の生徒会の集まりがミサの後にありますよ」

「それは覚えてるし、ちゃんと行くけど…」

「奏音さんは、保健室に御用事でしょうか？」

そう、それを聞きたい。寧ろ二人とも…

「いや、用事ってわけじゃ…あつ、蘭さん！ミサ行くよね？？」

「えっ、はい」

「一緒に行こっ！」

「ええ、もちろん構いません。ユキさんも御一緒致しませんか？」

「わ、わたしですか？」

「実は、お誘いに伺ったのです」

あつ、そういうことですか。

「ユキちゃんはミサには不参加らしいよ」

「そうなのですか？」

へっ？そんなこと言いました？？

「だから、ほら行く！」

「え、えっ！、あっ！！」

ガチャ

「……………」

「……………」

「……………行きましたね」

「ええ…騒がしいわね……………」

蘭さんが奏音ちゃんに引つ張られるように連れ去られた後の保健室には、わたしと矢原先生の二人だけが残って……………気まずいですけど……………

「あっ、えつと有難う御座いました」

洗っておいいたタッパーを鞆から出す。

「ちゃんと食べたの？」

「はい。おいしかったです」

「そう。はい」

「はい？」

差し出された包みを反射的に受け取る。

けど、これって？

「お昼ご飯用意してないでしょ？」

「用意してないですけど…」

ミサに出席したとしても昼前には終わるから、お昼ご飯の事なんて

考えてなかった。

「今日で仕事納めにするから、夕方くらいになると思っのよ」

「すみません。昨日の電話の時点で何時になるか聞いておけば良かったですね」

「いいのよ。どちらにせよ用意するつもりだったから。少しお昼には早いけど食べましょうか」

「じゃあ、用意しますね」

テーブルの上に広げられたお弁当の中身はオムライス…ですか？

「和志が作ったものではないから、あまり見栄えは良くないけれど、栄養には気を使ったから食べなさい」

「せ、先生が作ったんですか？」

「そうよ。…何？」

「えっ、いえ……。頂きます」

やっぱり…と思っただけです。

「あっ、おいしいです!？」

「…そう?ありがとうございます」

見た目はオムライス???って感じだけど、お弁当向けに味がしっかりしてて想像してたより美味しい。

矢原先生って、意外と料理上手なのかも？

「ごちそうさまでした」

「お粗末様。どうする?」

「な、何がですか?」

「いつも通りベッドは使えるようにしてあるけれど」

あ、この後どうするかって事ですね。

「そうですね。使わせて貰います」

久しぶりの保健室。久しぶりのベッド。

でも…本がないから何もする事がない……

書類を整理している矢原先生をボーッと見る。

ホント綺麗な女性《ひと》だな…

「今日は本を読まないの？」

び、びっくりした！

書類から顔を上げずに急に声を掛けられた。こっそり見てたこともバシってたのかと思うと恥ずかしいし。

「本は荷物になるので借りてないんです」

「そう。何もなくて時間潰せるの？」

「大丈夫です」

「そう…」

「……………」

「……………」

「…あの」「…ねえ」

綺麗に被った。

「なんですか？」「なに？」

えっと…

「お先にどうぞ」「先に言いなさい」

「……………」

さあ、どうするわたし！！

「ユキちゃんから言いなさい」

眼鏡越しに矢原先生の綺麗な目が、わたしを見る。

「矢原先生は聖アンテルス病院に勤務されてると伺いましたが……」

「そうよ。今は出向みたいなものかしら」

「修さんとわたしの結婚の事は修さんから聞いたのですね？」

「そうよ？」

「わたしのことはいつから知ってたのですか？」

「いつからとはどういうこと？」

「わたしと出会う前から結婚の事も聞いてたのですか？」

「そうね。ユキちゃんの名前だけは知ってたわ」

好きな人の結婚相手と接する……………そんなの……

「…嫌じゃないんですか？」

「どういうこと？」

「例え偽装結婚だとしても…辛くないわけじゃないですよ……………」

矢原先生が何故わたしと普通に接する事が出来るのか理解出来ない。

「……………二人の事は聞いたのでしょうか？」

「…はい。聞きました」

「軽蔑する？許されない関係だと嫌悪する？」

「そんなことしません！」

「わたしは…いえ、わたしたちは偽装結婚だったとしても納得しているわ。ユキちゃんには申し訳ないことをしていると思っ
ているけれど…」

「わたしはこの結婚を嫌だとは思ってません。…皆さんが納得されているのであれば…わたしは構いません」

わたしの居場所を作ってくれる。それだけでありがたいですから。矢原先生がわたしと接していて嫌じゃないなら…この結婚で傷つく人がいないなら、わたしは喜んで利用されますよ。

「ユキちゃん…何かあるなら言いなさい。わたしたちのことをもつと頼つていいのよ？」

「…ありがとうございます。でも大丈夫ですよ。それよりも矢原先生！」

「な、何かしら？」

「さつき、わたしに何を言いかけたのですか？」

「それは…」

そんなに言い難い事なんですか？

「それは？」

「あの…」

そ、そんなに言い難い事ってなんですか？

「矢原せんす」

「白崎さんとはどうい関係なの！？」

「……………」

「.....
はあっ?..?..
」

第19話（後書き）

ユキちゃん、時間潰す物がないならミサに行けば良かったんじゃない？

第20話(前書き)

おっとー！ー、段々季節が追い付いてきましたよ！ー！
年越しは…どっちか早いのか……

第20話

「な、なんとおっしやいました??？」

「白崎さんは…」

ちよ、ちよつと待って!この先は聞いていいんですか!?

「もしかして……」

ちよ、ちよつと待って下さい!!

「ユキちゃんにとって……」

ちよ、ちよつと待っててば!!!

「しえええー……い」

「へっ!?!?」

つて、止めるにしても他に言い方なかったのか、わたし!!!
でも、矢原先生のびっくりした顔は貴重でした。

……じゃなくて!?!あー、いい感じで動揺してるわ!!

「し、白崎さんというと……それは白崎姉妹のお姉さんである、白崎奏音さんのことですか」

「…白崎奏音さんのことで間違いないわ」

「えつと…」

えっ?これなんて答えればいいの?

えっと？

「…わたしに用事でしょうか？」

「遠野さん……………」

「…なんでしょうか？」

「遠野さんは奏音ちゃんに……………」

「…はい」

なんだろう……………

「…奏音ちゃんに…何を……………」

…凄く嫌な予感がするんですが？

「……………遠野さんは奏音ちゃんに何をしちゃったの！……………？」

「……………」

「……………」

どうしよう。物凄く矢原先生の視線を感じる…

「琴音さん…ええと……………何を……………」

「奏音ちゃんから遠野さんの匂いがするの……………！」

「……………」

「……………」

……………何故……………このタイミングなのでしょう。

「……………琴音さん……………あの……………」

「遠野さんからも琴音ちゃんの匂いがするし……………」

「……………ユキちゃん……………？」

ああー、琴音さんの前なのに矢原先生の話し方が戻ってる……

「えつとですね……」

「…いつ?」

「えつ????」

「あたしの知らないうちに……。先週末までは普通だったの。ねえ、いつ奏音ちゃんとしたの?」

気付いてる…

「……………」

「……………」

「……………」

「琴音さんは、奏音ちゃんがわたしの契約守護獣になったことを推測じゃなくて気付いてしまったんだ。」

「……ここで誤魔化すことは…琴音さんを傷つけることになる。」

「テスト休み…先週末の金曜日です。ごめんなさい。貴女の大切な家族を……」

「なんで!なんで奏音ちゃんなの!??」

「……………」

「えつと、なんでと言われましても?」

「どっちから…?」

「それは…」

「おもいつきり向こうからですが……」

「遠野さんが無理やり関係を結んだんじゃないよね！」
「違います!!合意の上です!!」

いや、ちよつと待てよ?えつと…だから奏音ちゃんの方からなんですよ???

「そっか……」

「あ、あの……」

「大切な家族なの…傷つけたら許さないから……!!」

傷つけるつもりはないけど…

えつと、3年間の約束はしました……

つて!いやいやいや!!言えないでしょ!

「あの……それは……」

「ちゃんと責任を取れるの?」

なんて事聞くんですか!

「……」

「……」

責任……

「……」

「……」

……取れるわけないけど

「あの…わたしは」

ガチャ

「ユキちゃん」

「へ？」

ノックもせずにドアを開けるこの感じ…

「あら、琴音さんもおられますよ」

「奏音ちゃん、蘭ちゃん……」

ミサが終わった？

「琴音、こんなとこにいたの？ミサの途中で抜け出したから何があったのかなーって思ってたけど…保健室にいるってことは体調悪かった？」

「ううん。もう大丈夫…奏音ちゃんたちは何しに保健室にきたの？」

「明日、蘭さんとこで集まってクリスマスパーティーしようかーって話しになったから、ユキちゃんも誘おうと思って」

「明日ですか？」

「うん、明日」

「でも奏音ちゃん、明日ってイヴだよ？」

「イヴだけど？」

「急に言っても、遠野さん予定があるんじゃない？」

まあ、そんなのありませんが。

「蘭さんとこ明日はお泊りOKらしいから、夕方早めに始めて、好きな時間に解散って感じでいいんじゃない？どうかなユキちゃん？」

「えっと……蘭さんの負担になりそうですし……」

出来れば行きたくないです!!

「ユキさん、御遠慮なさらないで下さい。私のところは問題ありませんし、寧ろ来て頂きたいと思っています」

「……………」

「……………」

断れない!!断れないですし……!!

「……あの……宜しくお願いします」

「あまり羽目を外さないように気を付けてくださいね」

「はい。つてか、なんなら矢原先生もどうですか？参加したら、ばっちり監視出来ますし」

「遠慮しますよ。監視が必要な事をしないで下さいね」

「さあ、どうですかね」

「……………」

「やだなー、何もしませつてば」

「奏音ちゃん、そのメンバーって？」

「えっ？ユキちゃんと蘭さんと琴音と私……と矢原先生??」

「わたしは参加しません！」

「……遠慮しなくてもいいのに」

「……………」

矢原先生の顔がちょっと怖いです。

「詳細は??夕方早目って何時に始めるの?」

「そんなのまだ決めてないって。蘭さん、どうする?」

「私のところは、いつでも問題ありませんよ」

「だって。じゃあ……まあ後で相談しよっか」

「わっ！もうこんな時間なんですね！！」

「蘭さん、琴音、すぐに追い掛けるから先に行っというー」

「はい。わかりました」

「奏音ちゃんは？」

「矢原先生に相談があんの」

相談って???

「蘭ちゃん、先に行っというー」

「えっ？」

「琴音？」

「あたしも話したい事があるの」

「わ、わかりました」

話して……さっきの続きだったりします？

「あつ、じゃあわたしも席を外しましょうか？」

「ダメ。遠野さんはここにいて」

さっきの話しなわけですね……

「蘭ちゃん、ごめんね」

「いえ、ではまた後で」

で……蘭さんだけがなくなった保健室は？

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

重苦しいです。

「……………琴音」「……………奏音ちゃん」

「……………」

えっ？じゃあ姉妹だけで御話合いということだ…

「……………席を外しましょうか」

「ダメです！」

なんでしょう、この見事な会話。

「あの、矢原先生お仕事は大丈夫ですか？」

「そうね。もう殆ど終わったのだけど…」

「じゃあ……………」

解散！ってことで…………

「矢原先生、何度も同じことを言っちゃってるんですけど…」

「何かしら？」

やっぱり、解散って事にはなりませんか…………

「昨日言ったことなんですけど大丈夫ですよね？」

「……………大丈夫よ。ちゃんと分かっているから」

……………???

「それにしても……今日は話し方が違うのね？ちょっと違和感があるわ」

「……………」

それは……琴音さんがいるからじゃないですか？

それに、矢原先生も喋り方が戻ってますけど…

「奏音ちゃん、だ、大丈夫？」

「……えっ？大丈夫だよー」

「奏音ちゃん！」

「な、何？」

「遠野さんに聞いたの」

「……………」

あー奏音ちゃんが、絶対大丈夫じゃないっていう顔色になってます…

「…なんのこと？」

「またそうやって、あたしを騙すの？」

「……………」

「誤魔化さないですよ！あたしだって成長してるの！！奏音ちゃんの雰囲気が変わったのだって気付いてるし、奏音ちゃんから遠野さんの匂いはずっとしてるし…」

「琴音…」

「ホントは…ホントは奏音ちゃんの口から聞きたかった…：遠野さんに問い詰めたりするんじゃないなんて、奏音ちゃんから言っただけだった！！」

「…私の事だから」

「奏音ちゃんの事だったら、あたしは関係ないの！？何も教えて貰えないの？」

「違う！そうじゃなくて、これは私だけの事じゃないの！！私と

「ユキちゃんの事だから!!」

「あたしには言えない??」

「何物にも代えられない…大事な事なの…」

「なんで!?!あたしたち家族だよ!!!!」

「家族でも…言えないことはあるの…」

「……」

これ…どうすればいいんですか?

めっちゃ重い空気なのですが……

「…あの、琴音さん……ごめんなさい」

「……なんで、遠野さんが謝るの?」

「わたしが、誰にも言わないようにお願いしたんです」

って、事も無いんですけど……

「そうなんだ……それでも言って欲しかった……」

「……」

救えないです!!

「奏音ちゃん、さつき遠野さんにも聞いたの……二人の同意の上だったって。ねえそれで奏音ちゃんは幸せになれるんだよね?」

「……私から無理矢理お願いしたの。どうしてもユキちゃんが良かったから……だから……幸せかどうかは私が決めるから」

「……構うなって……こと……」

「琴音!!」

「そういうことでしょ?」

「琴音さん、そうじゃないでしょ?奏音ちゃんは、奏音ちゃんなりに琴音さんの事を大切にしてるんだよ。出来るなら巻き込みたくな

いつて」

「そんなの他人に言われなくても分かっている！！でも、何も知らないまま成長なんて出来ないの！！知らない振りをしたまま、それを優しさだなんて受け止め続けるのは……もう嫌なの！！」

「琴音！！！！！！！！！！」

バタン

バタバタ……

バタバタ……

どうしよう……二人が走り去った保健室……

奏音ちゃんも琴音さんも二人とも傷ついた。

わたしと奏音ちゃんの契約が悪かったの？

「ユキちゃん……」

「矢原先生……わたしも追い掛けた方が良いんですかね……？」

「琴音さんの事は、奏音さんに任せるのが一番いいんじゃないかし

ら

「わたしは……どうしたら良かったんですかね……」

「……奏音さんの事は……後悔しているの？」

後悔……

「……わかりません。もしかしたら誰かに必要とされたかっただけかもしれない。寂しかっただけかも……でも、例えもう一度やり直すことが出来たとしても断らないと思います」

「ユキちゃん……」

「……気持ち悪いですよね」

人でなくなつた今でも、誰かに必要とされたいなんて……

「どういう意味？」

「そのままの意味ですよ……」

「怒るわよ!？」

「怒る??？」

「ユキちゃんは、わたしたちの事も理解してくれたのよね?なのに、わたしがユキちゃんを気持ち悪く思うと言っの?」

えっ?

「だって、それは全然違いますよね?」

「違うわいわ!」

えっと……

「……………そうですか……?」

「そうよ!!--それに、誰だって人に必要とされたいと願う心はあるもの」

「わたしが……望んでもいいものなんですか?」

「当たり前よ!わたしだってユキちゃんに必要とされたいと思ってるわ!!--」

「……………」

「……………」

「……………うん?」

「……………えっ?ち、違うのよ!えっと、なんて言えばいいのかしら、ユキちゃんの力になりたいというのかしら……。ユキちゃんは何もかも溜め込んで抱えてしまっているのよ。そうじゃなく、貴女の助けになれたらと思って……」

矢原先生の気持ちは嬉しいし、きっと矢原先生にしかお願い出来な

い。でもColor coating《補色》の為だけの関係は嫌だ……。

「矢原先生……ありがとうございます。正直言って……わたしには矢原先生が必要です。でも…今のままで依存するだけの関係になつてしまう。それはわたしの心が弱いから……。だから……。せめてわたしから矢原先生に近づくことはしないでお願いします」

いつもわたしから求めてしまう関係なんて、唯の捕食になる。矢原先生に選択権があつて、矢原先生が距離感を保ってくれたら、わたしはその距離感を守ろう。

「そう……。ごめんなさい、変なことを言ってしまったわ……」

「矢原先生の気持ちは凄く嬉しいです。だから、今までみたいに一緒にいてくれますか？」

「もちろんよ。だから…少しは甘えなさい……」

「ありがとうございます……」

矢原先生は…ホントに優しい。その優しさにつけこんでるって分かつてる。でも、わたしは…我が身可愛さに矢原先生から離れることも出来ない……

「…そろそろ行きましょうか」

「もういいんですか？」

「大丈夫よ。職員室に寄ってから行くから、…そうね職員用駐車場の所で待っていてくれるかしら？分かる??」

「あつ、はい分かります」

「じゃあ、そこでね」

保健室の前の廊下で別れ、履き替えた靴を袋に持って駐車場に向か

う。

広い駐車場に停まってる車は、もう数えられるくらいしかない。そして……見覚えのある車が……

矢原先生……この車で通勤してるの……？

「ああ、ユキちゃんここにいたのね」

「あつ、すみません、勝手に動いてしまって」

「車、覚えていたのね」

そりゃ……

「お、覚えやすい車だったので」

このお嬢様学校で、フルスモークの外車ですから嫌でも目につきますよね。

「荷物は後ろに置いて前に座りなさい」

「いつも車で通勤しているのですか？」

「そうね」

「あれ？確か和志さんも車通勤って……？」

「もう一台軽自動車があるのよ。わたしが乗ろうかと思ったんだけど、和志がこの車よりも乗り易いから、そっちがいいって」

うん。和志さんはこの車を運転してるよりも軽自動車の方が似合います。

もの凄くイメージ通りです。

「で、先生がこの車で……？」

「そつよ」

鋭い目を眼鏡で隠したスラツとしたスーツ姿の矢原先生……似合います。

「ユキちゃん…」

「えっ、なんですか？」

「その、先生っていう呼び方やめましょうか」

「えっ？」

「修さん、和志さん、矢原先生…ってなんだか寂しいじゃない？」

「……矢原さん？」

「……間違っではないけれど」

「……み……みちるさん」

「……そ、そうね…／／／／」

な、なんだか凄く照れ臭いです。

「ユキちゃん。荷物を持って一旦こっちの家に寄ってくれろ？」

「わ、分かりました。修さんは？」

「今日は、早いらしいの。和志が晩御飯を用意してくれるから皆で食べましょう」

「分かりました」

凄く複雑な人間関係ですね…

それで、生活とかが成立しているところが凄いです。

「荷物は…そうね、そこに置いて手洗いうがいをしてきなさい。場

所はわかるわよね？」

「あ、分かります」

間取りは、殆ど一緒ですから。

「そこに座っておいて」

前と同じソファアに腰かける。

あ、リビングはパーテーションで仕切りを作ってるのか。だから、修さんの部屋のリビングと違う感じがしたんだ。

「着替えてくるから、ゆっくりしておいて。テレビとか勝手に観ていていいわよ」

「あ、はい」

テレビとか観てないな。日本でどんな番組やってるか分からない。まあ、興味もないけど。

入れて貰った紅茶を指先を温めるようにカップを抱えて飲む。

ふーーーーー

眼鏡？

息を吐いて顔を上げた先にテーブルの上に乗っていた眼鏡に、無意識に手を伸ばす。

先生がいつもかけてる眼鏡だ。

銀色の細いフレーム。持ち上げても殆ど重さを感じる事のない眼鏡。いつも矢原先生の鋭い目を隠して……

「ユキちゃん??」

「えっ??」

あれ???

「……眼鏡??」

そ、そうですね。

リビングのドアを開けて、こちらを不思議そうに見ている矢原先生。
…を眼鏡越しに見ているわたし……？

第20話（後書き）

和志君が御飯当番なわけだね？

ホントにどうやって生活してるんですか？

乱れに乱れてますな……

ほんで……しえええー……い……って……ユキ……

第21話(前書き)

うおおおー！

危うく一ヶ月あくとこやった！！

ユキちゃん引っ越してきた編です。

ようやく引っ越せたねー！

第21話

わたしは何をやっちゃってるのでしょうか？

違和感が無いほどに重さを感じる事のない眼鏡。

いつもと変わらない視界を映し出す視線の先で、驚いたような顔でわたしを見ている矢原先生の瞳は、いつもと違って遮るものがない。うん…当たり前です。わたしが掛けてるんですから。

「それ……わたしのかしら？」

「……………」

そうですね！

「ど、どうしたの？」

「……………」

わたしにもわかりませんが！

「…ユキちゃん？」

「あ…あ……ごめんなさい」

「いえ…あ、あの……怒ってるわけではないのよ？」

「えっと……無意識に手が……………」

「無意識??？」

ちょっと待って！無意識に他人の眼鏡を掛けるとか、眼鏡に興味があって意識して掛けるより気持ち悪いよ!？

「あっ、ちがつっ!!!!きよ、興味が!!!!」

「ああ、眼鏡が珍しかったのね」

「そ、そうですね！わたしは目が悪くないので眼鏡に触る機会が無くて……って？……あれ？？」

眼鏡を掛けてるはずのわたしの視界が、いつもと変わらない世界を映し出す??

いやいやいや、そんなはずはないでしょ？

「…どうしたの？」

矢原先生の顔をじっと見る。
やっぱり……

「これ……度が??」

「流石に掛けると分かつちゃうのね……。ええ、その眼鏡に度は入っていないわ」

「えっ?どういうことですか?矢原先生は目が悪い分けじゃないんですか??」

「そうね、2.0とまでは言わないけれど、眼鏡が必要なほど悪い分けではないわ」

「なのに……眼鏡？」

「そう。所謂伊達眼鏡ね」

「それは、なにか理由が？」

おしゃれ眼鏡とか??

「そんな大した理由があるわけでは無いのよ。ちょ、ちょっとした

……」

「……」

「……ちょっとした…理由よ」

「えっ??？」

そこまで言っという理由言わないんですか!？」

「眼鏡……疲れませんか？」

「慣れたわ。それに、家ではあまりかけていないから」

「そこまでして眼鏡を掛ける必要が??？」

「それは、ちよつとした……」

「ちよつとした??？」

なんですか!!

「はぁー……本当に大した理由ではないのよ？」

「はい。……で?」

「わたしの目」

「目?」

「わたしの目つき悪いでしょ……」

「……はあ??？」

「家系だから仕方ないのだけど、普通にしているだけでも目つきが悪く見えるのよ。だから少しでも」

「ちよつと待って下さい!？」

「な、何かしら?」

「……矢原先生の目つきが悪い……と?」

「えっ?」

矢原先生は何を言ってるの?

「目つきが悪いなんてことないです!というか、矢原先生のは涼しげな目元って言うんです!!眼鏡を掛けてる感じもクールビューティーな感じで美しいと思いましたが、眼鏡を掛けてなくてももち

ろん美しいです！矢原先生はとても綺麗な瞳をしてるからもつたい
ないですよ！」

確かに、最初の頃はちよつと鋭い目つきだと思ってたけど、見れば
見る程その瞳に吸い込まれそうで…
眼鏡越しじゃなく見ていたいと思う。

「……………」

「…や、矢原先生？」

あつ！もしかして、眼鏡総否定しちゃって怒ってる！？

「あ……………ありがとう／＼／」

「えっ？あ…はい」

怒ってないのかな？

「……………そうね」

「そうね？」

「じゃあ、ユキちゃんの前では外すようにしようかしら」

「目が悪くないのであれば、絶対外した方が良いです！」

「それなら、わたしからもユキちゃんにお願いがあるんだけど？」

「な、なんですか？」

「その前に、呼び方が戻ってるわよ」

「あ……………そ、そうですね」

みちるさん、みちるさん、みちるさん……………なんか／＼／

「が、頑張ります」

「ふふふ…。それじゃあ御願いなんだけど」

「お、お手柔らかにお願いします」

「簡単な事よ。前髪を切らせてくれない？」

「……へっ？わたしの前髪？」

「な、なんですか！？」

「逆に聞くけど、ユキちゃんは何故そこまで嫌がるの？」

質問に質問で返してはいけません！

「……」

「……」

「……」

はぁー

「……大した理由じゃありませんよ」

「何？」

「……ちよつとした理由です」

あれ？この展開……？

「……ちよつとした??」

やっぱり言わなきゃいけない流れですか……

「目は……目は口ほどに物を言っんです」

「どづいつ意味」

「知りませんか？日本の諺です」

「……」

「……………」
「……………」

あれ？ホントに知らないの？

「あ、あのですね。目というのは喜怒哀楽の感情が出やすく、口で語らなくても目を見ればその人の考えてる事が分かるという意味で……………」

「諺の意味を聞いているんじゃないわよ？」

「ですよー」。

「えっと……………」

「つまり、ユキちゃんは人に目を見られるのが嫌なのよね？」

「結論を言っとそうですね」

「理由は、人に自分の感情を知られるのが嫌だから？」

「いえ……………」どちらかというと、自分の感情も人の感情も知りたくないです。……………自分の事を知られるのも、誰かの事を知ってしまうのも嫌なんです」

「……………人と関わりたくないという事？」

あまりにもストレートな質問……………

「そうですね……………」

「……………今でもそう思ってるのかしら？」

「……………今でも……………」

「わたし……………たちと関わりを持つのは嫌？」

「……………」

みちるさん、奏音ちゃん、蘭さん、修さん……………

人との関わりなんて望んでないはずだった…

誰かを大切だと思えば思うほど、誰かと距離が近づけば近づくほど最後にはわたしが、その大切な誰かを壊してしまうかもしれない。

……だけど……全ての関係が無かったことにする事はもう出来ない。

……怖い

「ユキちゃん…?」

「……………」

わたしは大切な人を簡単に傷つけて壊してしまえる存在……

「ユキちゃん??」

改めて自分の周りにいる人を思い返した時、その人を傷つけてしまえる自分という存在も、だからといってその人との関係を断ち切つて一人になる事も……
どっちも怖い……

「みちるさん……………」

「何?」

「……………」

「ユキちゃん??どうしたの?」

わたしが掛けていた眼鏡をそつと外したみちるさん。
真っ直ぐに目を合わせる事が出来ずに俯くわたし。

「ユキちゃん」

俯くわたしの顔を両手で優しく挟み込んだみちるさんの手が抗うことを許さずに、そつとわたしの顔を上げさせる。

目と目が合った瞬間、何かを考えるよりも先に流れた雫が、わたしの頬に触れている。ちるさんの手を静かに濡らす。

「みんな……わたしと離れた方が良いんです……」
「何故？」

「……こ……怖いんです」

「人と関わりを持つことが？」

「……わたし自身が」

「ユキちゃん自身？」

「大切な人を傷つけてしまうから……」

「どうして？」

「わたしが……人ではないから」

「ユキちゃんは誰かを傷つけたいという衝動に駆られたりするの？」

「……そうですね」

「傷つけたいと望んでる？」

「そんな事望んでないです！……でも……」

「Color coating《補色》？」

「……しないと、制御出来ない化け物になる」

「していれば問題無いのでしょうか？」

「……」

「……」

「……みちるさんは、何故わたしから逃げないのですか？」

「あのね、前にも言ったでしょ？ユキちゃんは確かに人ではないのかもしれない。ヴァンパイアといわれる存在なんですよ。でも、だからといって化け物だなんて思っていないわ。それに、奏音さんも言ってたでしょ？Color coating《補色》に必要な血液って物凄く少量なのよ？身体に異常をきたすような事もないし、傷跡も残らない。何が問題？」

何がつて……

えっ？だつて……えっ？怖いでしょう？？

「Color coating《補色》しなかつたら、唯の化け物に」

「だから、わたしがいるでしょう？」

「……いえ、あの……だから、わたしはみちるさんの事をColor coating《補色》の対象だと思いたくないというか」

「わたし以外にいるのかしら？」

「……いませんけど」

「そう………つた……」

「えっ？」

なんて言つたんですか？

「な、なんでもないわ！」

「えっと……だ、だからみちるさんは拒否する事ができ」

「しないわ」

「へっ？」

「拒否なんてしないと云つたのよ。がつつりColor coating《補色》なさい」

が、がつつり???

「あ………あの、でも」

「わたしの血だと問題が？それとも………奏音さんの方が良い？」

「いえ！みちるさんの血が一番惹かれます！！」

ホント、他の人の血の匂いなんかと比べても、断然みちるさんの血に惹かれます！！！！

「…………… / / / / /」

あれ？変な事言った！？怖い事言っちゃった！！！！？

「あ、あの！変な意味じゃなくて！！」

いや…そのまんまの意味ですけど……

「い、いいのよ。わたしはユキちゃんにcolor coating
gg《補色》されるのは嫌ではないから」

「えっと……ありがとうございます」

「そろそろ必要なのでしょうか？」

「え？」

いつの間にか乾いた涙の跡と、まだ添わされたままのみちるさんの手。そして、眼鏡越しじゃないみちるさんの瞳。

「する？」

みちるさんの手がわたしの顔から離れ、みちるさん自身の髪の毛をサイドにまとめ首を傾げる。

露わになった綺麗な首筋と、こっちを見つめるみちるさんの瞳。

「み、みちるさん……」

「いいのよ？」

ゆっくり……吸い寄せられるかのように首筋に口を近づける……
仄かな香水の香りと、みちるさんの甘い匂い……

ゴクッ

ピンポン

「……あ？」

「ユ、ユキちゃんストップ！」

「は、はい！」

「和志だと思っわ。と、取り敢えず一旦落ち着いてきなさい。廊下の先の左手に洗面所があるから」

「へっ？」

「目」

「目？」

「わからないのなら確認してきなさい」

「えっと、わ、わかりました」

モニターフォンに向かったみちるさんに指示された通りに廊下を進む。

手前のドアがウォークインクローゼットで奥が洗面所。

作りが同じだから迷う事無く洗面所のドアを開けることが出来た。

暖色系の淡いピンク色の壁紙に囲まれた部屋。6畳程の広さだろうか。お風呂場の脱衣所を兼ねているとはいえ広くない？

その部屋にある大きな洗面台の正面の鏡には、わたしが映っていた。瞳の…赤い……わたしが……

ああ…確かに目ですね。

違和感のある自分自身の姿から目を逸らさずにじっと見る。

まるで目の色だけ合成したかのように、いつものグリーンの部分が赤色になってる。

えっと……思ってたより凶悪な感じはしないんですね……

目を硬く瞑って深呼吸しながら心の中で100秒数える。
ゆっくり目を開いた鏡の中にいつものわたしがいた。

コンコン

「ユキちゃん、大丈夫？」

ドア越しにみちるさんの声が聞こえて、慌ててもう一度鏡でチェックしてからドアを開けた。

「うん。もう大丈夫そうね」

「すみません…。和志さんでしたか？」

廊下に立っているのがみちるさんだけなんだけど和志さんリビング？

398

「晩御飯の用意が出来たから呼びに来たらしいわ」

「えっ？」

早過ぎじゃないですか？帰ってきて5分も経ってないんですけど！？

「隣りよ、隣り」

「あつ、ああそうですか。修さんは？」

「さっき帰ってきたらしいわよ。どうする？もう行く？それとも」
「

首を傾け窺う様に…

「大丈夫です！行きます」

「無理しなくてもいいのよ？」

「無理してませんよ」

「そう?…じゃあ行きましようか」

荷物を纏めて、そのまま隣に行く。……なんてお手軽…

「ああ、ユキちゃんいらっしや いや、ユキちゃんもおかえりだ

ね」

「おかえりー」

リビングに入ったわたしとみちるさんを修さんと和志さんが出迎えてくれる。

「えっと、た、ただいまです」

「みちる、ありがとうね」

「どういたしまして。お疲れ様」

「はい。ユキちゃん遅くなってごめん。これ」

手渡されたのは鍵。まず間違はなくこの部屋の鍵でしょう。

「ありがとうございます。お預かりします」

「お預かりじゃないよ。これはユキちゃんのだからね」

「あっ、は……はい」

今日からここがわたしの家…?実感がありません。

「というわけで、今日はユキちゃんの引っ越しを祝ってささやかなからお祝いだからね。手の込んだ料理じゃないけど僕が心を込めて作ったから」

テーブルの上に並んだ手の込んだ料理の数々…えっ?これ全部和志

さんの手作り???

「食後にケーキも作ってみたから、楽しみにしてて」

「ケーキ?」

「みちるの好きなショコラケーキ」

「ふふふ、ありがとう」

和志さん……そのポジションでいいの??

「ユキちゃんは、甘いものは大丈夫なのかな?」

「甘さは控えめだよ?その代わり洋酒が効いてるんだけど……」

「大丈夫です。ケーキ好きですよ」

最近は食べてないけど、ママが良く作ってくれたから……

「折角の料理が冷めてしまうわ。頂きましょう?」

「そうだね」

テーブルの空いていた席に座る。修さんの正面に和志さんが座っている。和志さんの横にみちるさんが座ったから、わたしはみちるさんの正面で修さんの横の席に座る。

「それじゃあ、これからよろしくね。いただきます」

「……いただきます」

「このチキンの香草焼き、凄く美味しいわ」

「ホント?うんうん結構いけてるね」

「おいしい……」

「ありがとう、頑張って作ったかいがあったよ」

ホントに美味しい。そういえば、みちるさんじゃなくて和志さんが

いつも料理作ってるんだよね？

えっと……修さんはどうしてたんだろっ……？自炊してたのかな？？

「修さん」

「うん？なんだい？」

「修さんの御食事はわたしが作っていいんですか？」

「あっ、僕が作るよ」

「今までも和志さんが？」

「そうそう」

ど、どっという生活だったんですか？

「もちろんユキちゃんのも任せて！お弁当は」

「わたしが作るわ」

みちるさん？

「だそうです」

「そういえば最近みちるが料理を頑張ってるって聞いていたけど…なるほどね」

「な、何かしら！？」

「いや何も。そうかそうか…お弁当ね」

「なんなの！言いたいことがあるならばつきり言いなさい！…」

「はいはい。ユキちゃんがびっくりしてるから喧嘩しない」

みちるさんの新しい一面…まるで家族内でのような軽やかな会話……

「ユキちゃん、喧嘩じゃないのよ」

「そうだね、からかってるだけだからね」

「黙りなさいよ」

「い、いえ。あの…大丈夫です」

何が大丈夫なのかはわからないけど…

「取り敢えず、ユキちゃんのお弁当はわたしが作るわ」

「あの、わたしは別に大丈夫ですよ。何かしら食べてお

「わたしが作るわ」

「あ…はい、ありがとうございます」

…凄く嬉しいです

「あっ、みちる」

「…何かしら？」

「ユキちゃんの荷物…見たかい？」

わたしの荷物？

「いいえ。ユキちゃんの荷物がどうかしたの？」

「実は…」

うん？

「凄く少なかったんだ」

は？

「どれくらいなの？」

「衣装ケース2個と少し」

「は？」

「えっ？あの時、修が運んでたので全部だったって事？」

「なんですか？？みちるさんと和志さんのその反応……何か問題でも？？」

「ユ、ユキちゃん……」

「なんですか？」

「荷物：後から届くとかなの？？」

「いいえ？？全部持ってきましたよ？」

「……………」

何か？？

「というわけで、みちるはもう休みなんだろう？」

「ええ、そうね。分かったわ」

「行ってらっしゃーい」

何が？？

「ユキちゃん、明日……いいえ明後日ね。買い物に行くわよ」

「えっ？な、なんでですか」

「必要な物を揃えに行くの」

「今のままで十分ですよ！？」

「一緒に買い物に行くのよ」

「え、でも……」

「一緒に出掛けるのは嫌かしら……？」

「そ、そんなことはないですけど……」

「ユキちゃん行っておいで」

「行きましよう？」

「……あの……宜しく願います」

誰かと一緒に食べる事……

誰かと一緒に笑う事……

誰かと一緒に出掛ける事……

嬉しいです……

第21話（後書き）

ねえねえ、がつつり吸っちゃっていいんですか？
ユキちゃん、いきなさい！！！！

第22話（前書き）

活動報告でも喜びを伝えましたが、総合評価が200を超えました！
これも皆様方が忘れずにいて下さるからです！！
まだまだ続きますので、宜しく願いします……

第22話

『……………』

『……………る』

『……………ある?』

はっ?

ぼんやり聞こえた声に慌てて閉じていた目を開ける……………目を…開ける……………?

……………ここはどこ?』

目を開けたはずなのに、開ける前と何も変わらない真っ暗な空間に数度瞬きを繰り返す。

『死はどこにある?』

『ひう!』

思いの外近くから聞こえた声にじっと目を凝らすと真っ暗な空間よりも更に暗い闇が見えた。

その闇は人型の輪郭を持ち、立ち姿に見える。俯いている……………?

『孤独は死よりもつらいんだ』

……………な……………に……………?

俯いていた顔が持ち上がったと思った瞬間、真っ暗で何も見えないはずなのに誰なのかが分かった……………
あいつだ……………

『僕は君から死を奪う。君は君で死を見つける』

やめて！何故わたしなの？？わたしがなにをしたの！？
わたしから何も奪わないで！！

いつも繰り返す悪夢……

あいつがわたしの家族を奪った……

あいつが……わたしの……死を奪った……

身動き一つとれないわたしに近づいてくるあいつ。

首筋に牙を立てようとする瞬間見えた顔は………わたしの顔
だった……

「いやあああー！！！！！！！！！！」

叫ぶと同時に体が動くことに気付く………ベッドの上……？

目が覚めてるのか、まだ夢の中なのか……曖昧なまま震える自分の身
体を両手で強く抱き締める。

はあはあはあ……

落ち着かない呼吸………落ち着かない動悸……

止まらない震え………止まらない冷たい汗……

………コンコン

「ユキちゃん？ユキちゃん？？どうしたんだい？？」

はあはあはあ………

修さん？

「あ……あ………の………」

喉が凍りついたように声を発する気持ちだけが空回りする。

「ユキちゃん？大丈夫かい??」

はあはあはあ……

大丈夫、大丈夫、大丈夫……
いつもの夢だから……

「ユキちゃん、入ってもいいかな？」

「も、もう大丈夫です」

声を絞り出して答える。

「無理しなくても良いんだよ？」

「……すみません。大丈夫です」

大丈夫、大丈夫、大丈夫……

いつもの夢だから……

「そうかい……何かあるなら私でもみちるでも良いから言いなさい。
良いね？」

「はい……」

「うん、おやすみ」

「……おやすみなさい」

静かに遠ざかる足音を聞きながら強張った体から力を抜く。

はあ……

大丈夫、大丈夫、大丈夫……

いつもの夢だから……

震えが収まり、ようやく今の自分の状況を確認する。
用意してもらっていた部屋のベッドの上で本を読んでいたはずだっ
たけど…

「いつの間にか寝てたんだ…」

ベッドの下に落ちていた本を拾い上げて、バラバラになっていたカ
バーを掛け直す。

最近……あの夢見てなかったんだけどなー

まあ、寝てなかったから夢を見ようがなかったんだけど…

枕元に置いてた携帯のディスプレイに映った時間を確認すると4時
過ぎだった。

もう寝れそうもない…というか寝るつもりもない。

汗を吸って冷たくなった服を着替えて、まだ温もりの残っていた布
団に足を突っ込む。

壁に凭れてカバーを掛けた本に手を伸ばした。

もう読む本がなくなるな…。また借りて来なきゃ…

ブブブブブブブブ…

「通話着信 白崎 奏音」

……何これ

「もっしー」

「……………」

「あれ？電波悪いのかな…もしもし」

「現在電話に出ることが出来ませ」

「なんだ、聞こえ点じゃん！」

「……なんですか？」

「おはー」

「……おはようございます？で、なんですか？」

「メリクリー！はまだ明日か！えっと、メリクリイヴ……！！！」

「…………で？」

「ユキちゃん、ノリ悪っ！！！」

朝からそのテンションについていけないです！

「朝から……」

あー、言うのも面倒臭い。

「何なに??？」

「何の電話ですか？」

「最近スマホに買い替えただけどねー」

「……」

「……」

「……」

「……冗談です。えっと、今日何時にくるかなーって」

「奏音ちゃん……奏音ちゃんの見てる時計は何時を指してる??？」

「ちよつと待ってよー。4時28分だつて。合ってる?？」

「……早いと思いませんか?？」

「えっ?合ってない?やっぱ電波時計とかの方がいいのかなー?」

「……」

「……」

「……」

「冗談です……。えっと……」

「……………」

あれ？静かになった。どうした？

あの後、琴音さんと何かあったのかな…

「今、どこにおられるのですか？」

さ、囁きになりました。

「えっ？い、家だけど？」

「家におられるのですね？」

何？急にどうしちゃったの？？

「そつですよ？」

「……………引っ越しをされたのでしょうか？」

「な、なんで？」

「ユキ様のお力を感じる場所がいつもと異なります」

「そつなんですか……………。引っ越し……しました」

「本当に場所を移されただけなのですね？先程お力の乱れが御座いました、協会《Box》の者が何かしてきたわけでは御座いませんね？」

ああ、それを心配して電話してきたのか。

「大丈夫です。ホントに引っ越ししたただけだから」

「それならば良いのですが…何かなさるのであれば事前にお知らせ下さい。本来でしたらユキ様の御側にお仕えさせて頂かなければならないのです。ユキ様も……………どうかお気を付け下さい」

「うん。ごめんなさい……ありがとう」

「昨日はColor coating《補色》されましたか？」

「えっと、してないけど……」

「……ユキ様」

「あの、大丈夫だから！ちゃんとしますから！昨日も、もうちょっと！……ってところまでいったので……！」

なんでしょう、この少し恥ずかしい報告をしている感じ。

「承知しました。くれぐれも宜しくお願い致します。で、現在はどちらに？」

「……家ですよ？」

「引越し先の所在地のことで 矢原先生と一緒におられるのですか??」

「はあ!?!い、一緒じゃないからっ!?!」

なんでそういう発想になるんですか!?!?

「ユキ様のお力と矢原先生の気配が非常に近い場所にあるようなのですが?」

「一緒じゃないです!家が隣りなだけでっ!?!」

つて、言っちゃった……

「ユキ様……色々お聞きしたい事があるのですが……?」

「そ、そうですね……色々話さなきゃいけないみたいですね……」

……

「そういうことでしたか」

「そういうことです」

結局家の事情で修さんと結婚した事、隣がみちるさんの家という事を説明した。

みちるさんと修さんの関係は話さずに、職場が3人とも同じで隣家同士で仲が良いと話した。

「矢原先生以外にお力の事は？」

「誰にも言っていないよ……」

「承知致しました。では、何かありましたらすぐに御連絡下さい」

「…分かりました」

「……………」

「……………」

「ユキちゃん、今日は何時に来る？」

…急にいつもの調子に戻るその切り替え能力が凄いね……

「確か夕方って言ってたけど…結局みんなは何時位に行くの？」

「えっ？13時くらいかなー」

「……………」

それは昼過ぎであって夕方ではありません！

「で、ユキちゃんは？」

「…………… 適当に顔を出します」

ピンポーン…

うん？ここ？？

手元の本から顔を上げて耳を澄ませてみる。

ピンポーン…

あー、やっぱりここだ。

修さんは早くに仕事に出掛けたから、今この家にいるのはわたしだけ…

出るべき？

勝手に対応に出ていいのかな……

ガチャガチャ

どうしようか迷っているわたしの耳に、鍵を開けている音が聞こえた。

修さんが帰ってきたとか？

部屋のドアを細く開けて、様子を窺う様にそつと顔だけ出してみる。

「ああ、ユキちゃん。良かった」

「みちるさん？」

「ええ、そうよ。…大丈夫なの？」

「大丈夫ですけど？」

貴女も鍵を持つてるんですね…

「どうしたんですか？」

「朝食」

「えっ？」

「食べたの？」

「……はい」

まあ、食べてる訳ないから嘘ですけどね。

「ウンね」

はっ！

「……い、今からです」

「ユキちゃん……今から食べるのなら昼食と呼ぶのではないかしら？」

11時30分……

「……ブ」

「ブ？」

「ブランチ……」

「……」

「……」

「はぁー！。いらっしゃい。一緒に食べるわよ」

「はい……」

呆れた顔のみちるさんに連れられてみちるさんの家に行き、言われるままにテーブルについて待つ。

「あの、和志さんは？」

キッチンに立つみちるさんの横顔を見ながら話す。

「仕事に行つたわ」

「そうなんです。あの…御迷惑をお掛けして申し訳あ」

「一緒に食べたいと思ったから呼んだのよ。御迷惑でもなんでもないわ」

「ありがとうございます」

「…体調悪いみたいね」

料理を乗せたトレーをテーブルに置きながら、みちるさんがわたしの顔を覗き込むようにして窺う。

「そんなに、悪いというわけでもないんですよ？」

「…食べられるかしら？」

トレーの上に並んでいるのは、和風きのこパスタ、スープ、それにサラダ

「おいしそうですね。もちろんいただきます」

和志さんが用意していったのかな？
マメですね……

「いただきます」

「はい、どうぞ」

うん、美味しい。朝食べてなかったけど、さっぱりしてるから胃に重くなくて食べやすい。こういうのを優しい味っていうのかな。

「どう？」

「凄く美味しいです」

「本当？良かったわ」

えっと？

「…もしかして……いちるさんが作ったんですか？」

「……そうよ」

「あ、あの…今度はわたしも作りますね」

「ユキちゃん、料理出来るの？」

「ブランクはありますが、人並みには出来ると思いますよ」

昔はよくママの手伝いもしてたし、お菓子作りなんかは得意だった。

「そうなの？楽しみにしているわね。あと、食事に関してはいらな
いと言われない限り用意してあるから食べなさい」

「えっ？」

「和志が作りたくてやっているんだから遠慮しないのよ？お、お昼
は頑張るわ」

本当にみちるさん、修さん、和志さんは3人で一家族みたいに暮らし
てたんだ……

「はい…いただきます」

「それで……これね。はい」

「!？」

な、なんですか？このでっかいお重は……デジャヴ……

「今日、クリスマス会をやるのでしょうか？蘭から聞いた和志が嬉々
として……」

「……あ、ありがとうございます」

ずっしりですね…

「何時に帰るの？」

「そうですね…特に考えてないですが……」

「もし泊まるのであれば、伝えておくから連絡してくれるかしら？」
「わかりました」

まあ、泊まらなれないと思いますけどね。

「それじゃあ、前髪を切りましょうか」

「へっ？な、なんですか急に」

「急ではないでしょう？昨日から言っていたじゃないの」
「えーと……」

確かに聞きましたけど……

「その話し…まだ続いてたんですね……」

「いつ終わったのかしら？」

「……」

「ほら、ユキちゃん見て」

「はい？」

言われるままにみちるさんの顔を見る。

目が合った…

「わたしも眼鏡をかけてないでしょう？ユキちゃんともっと目を合
わせて話したいわ」

えっ？……いやいや、切りませんよ？

「……………」
「……………」

切りませんってば

「……………」
「……………」

えっと……………き…切らないよね……………？

「ユキちゃん……………そんなにわたしと目を合わせたくない？」
「そんなっ！違います!!！」

みちるさん限定ではないですし！

それに、言い方ってものがあると思うのですが!？

「わたしに切られるのは不安？」

「そうじゃないです!！」

根本的に、そんな話しじゃないですし!!！

前髪くらいで心配しません!どんなファンキーな切り方するんですかー

「ユキちゃん……………」

「……………あう」

「…切るわよね？」

「……………切り……………ます…か？」

えっ?ほ、ホントに?

「切るのよ。いらっしやい」

結局、わたしに選択権ありました？

「……これは？」

「それを持って目を瞑ってなさい」

「はい……」

渡されたポリ袋の口を大きく開き、顔の前にキープして目を閉じる。

シャキシヤキ

静かな空間の中でみちるさんが操るハサミの音が大きく聞こえる。少し冷たいみちるさんの指先が、火照った頬に気持ち良く感じる。

「うん、やっぱりこれ位が良いわね。目を開けてみなさい」

言われた通りに目を開けてみると目の前にみちるさんの顔があつて、ストレートに見る事の出来るみちるさんの瞳に、わたしの姿が映っているのまでハッキリ見えた。

凄い……綺麗……

「ホントに綺麗ね」

「えっ？」

「ユキちゃんの瞳には魅力があるのよ。前から思っていたのだけけれど……吸い込まれそうだわ」

それは……何か変な力を発揮しちゃってます？

「ユキちゃんのその瞳には、世界はどんな風に映ってるのかしら」

えっ？複眼ではないので普通に見えてると思いますが…

「みちるさんの瞳の方が綺麗です。きっとわたしより綺麗な世界が見えてると思いますよ」

「ふふふ…。ありがとう。ユキちゃんかの瞳に映るわたしは、どんな風に映ってるの？」

「そうですね……。女神…」

「えっ？」

「な、なんでもないです！！」

確かに第一印象は女神様でしたけど！！つい、ポロツと言っちゃった！

「す、凄く美しい女性！です！！」

よし！誤魔化せた！！

「…あ…ありがとう…。／／／」

「いえ…」

「……………」

「……………」

「……………」

ピンポン

「だ、誰が来られたみたいですよ」

「そ、そうね」

二人でリビングに戻り、みちるさんがモニターフォンに向かってる

間にテーブルの上に広げたままになっていた食器をキッチンに運ぶ。洗っちゃってもいいよね？

清潔に掃除が行き届いてるキッチンに食器を置いて、スポンジで洗剤を泡立てまだ温かくなる前の冷たい水に手を浸す。

えーと、洗い終わった食器は……あつ、このキッチン食器洗浄機備え付け……えつと……

「ユキちゃん……」

「あつ、みちるさん。食器、洗っちゃったんですけど」

どこで乾かしましょう……って……あれ？

「どうかしました？」

なんか疲れた顔ですけど……？

「ユキちゃんにお客様よ」

「わ、わたしですか？えつと？」

でも、ここ矢原家ですよ？？

「ユキーちゃん。あつそびましょー……」

「……」

ああ、はい誰か分かりました。

「白崎奏音さんよ」

「……そのようですね」

玄関からリビングに続くドアを見てると、奏音さんが勢いよく入っ

てきた。

なんで、みちるさんの部屋にきちやうかな……

第22話（後書き）

奏音ちゃん……大暴走！

二重人格みたいになってますやん？

ちよっと、誰かカウンセリングしたげて！！

第23話(前書き)

皆様、メリークリスマス!!

ほらっ!驚きのリアルメリークリスマス!!!

これはですね……予定通りです!

…ごめんなさい。

第23話

「奏音ちゃん……」

「うん？どしたの？？なにになに？？？」

「……………」

いつもより無駄にテンション割り増ししてません？

「何をしに来たのかしら？」

「やだなー。今日のクリスマス会のお誘いに決まってるじゃないですかー。あつ、矢原先生も来ます？」

「行きません！」

「もう、ユキちゃんとの逢瀬を邪魔したからって怒らないで下さいよー」

「お、怒ってないわ！！」

うーん、二人の相性は悪いようです。

普段の奏音さんなら、そんなに酷くはならないんだろうけど……

「って、あれ？奏音さん、なんでその喋り方？」

みちるさんには奏音さんの本性？はばれてるでしょう？

「そうよね。あちらの話し方も腹立たしいけれど、今の話し方がより腹立たしいわ。元に戻しなさい」

「矢原先生も普段とは話し方違いますもんねー。ユキちゃんの前ではデレデレだったりしてー」

「貴女、何が言いたいのか！？」

あれ？みちるさんがお怒りになってます。
これは拙いのでは…

「奏音ちゃん、何かあった？」

ちょっと、いつもより酷いですよ？

「昨日あの後姉妹喧嘩が拗れたとかではないの？八つ当たりなのかしらね」

「……………」

あ、あれ？正解？

「か、奏音ちゃん？」

「……………申し訳御座いません」

「ご、ごめんなさい。……………わたしも少し言い過ぎたわ」

「……………いえ。取り乱してしまい、矢原先生に突っ掛かってしまった私に非が御座います。失礼致しました」

「奏音ちゃん、大丈夫？」

「はい、ユキ様にも御不快な思いをさせてしまい申し訳御座いませんでした」

きつちり喋り方を戻してきた奏音ちゃん。この喋り方の時の奏音ちゃん
は表情も

あまり変化しないから、取り乱す程落ち込んでるようには見えない
けど…

「昨日……………あの後琴音さんと」

「大丈夫です。御心配をおかけして申し訳御座いません」

「でも」
「ユキちゃん」

みちるさんに遮られた言葉はうやむやのままぼかされる。
まだ…聞くべきじゃないってことなのかな……

「有難う御座います……」
「それで？奏音さんは何故ここに来たのかしら？」
「いえ。ですから、先程も申し上げました通りクリスマス会のお誘いに伺いました」

あつ、それは本当なんだ。

「それと……」
「……何でしょう？」
「前髪、非常に良くお似合いです」
「は、はあ……」

なんですか、それ。

「でしょう？」
「矢原先生が御提案されたのですか？」
「そうよ。それに、わたしが切ったの」
「Good jobで御座います」

た、確かにこっちバージョンでもテンションがおかしい……

「そうよねー！」

「素晴らしい。ユキ様の知性に溢れた魅力ある瞳が遮られる事も無く光を湛えております」

「そ、そうね」

ほら、みちるさんも若干引いてるって！

「はい。それで、もうみんな集まってる？」

話しは無理やり修正しましょう。

「はい。実は2時間程前から集合しておりました」

「……………」

「…今日は、何時からの予定だったかしら？」

「夕方ですが？」

何か疑問でも？みたいな反応ですね…………

現在14時前ですね…

「13時くらいかな」とか言っというて更に早く集合しちゃってたわけですね…………

「……………」

「…はい。じゃあいきましよう」

ここは、もう抗わずに行きますよ。

「じゃあ、これね」

あっ、お重。ちょっと忘れかけてたし…………

「私がお持ち致します。……………重っ……………」

うん、小さく聞こえた重っっていうのは心の声として聞かなかった事

にしとこう。

「こ、これは何で御座いますか？」

「差し入れ？」

「そうね。蘭にでも渡してくれれば分かるから」

「左様で御座いますか。承知致しました」

「じゃあ、行つて来ます」

さあ……行きますかー

「たっただいまー」

「お邪魔します」

勝手に入っていいの？

「入って入って」

いや、だから……

「なんで鍵ななんて持つてるの？」

「へっ？そりゃ、蘭ちゃんから預かったからに決まってるよね？」

「……で？蘭さんは？」

「琴音と買出しー。だけど……帰ってきたかな？」

言われて耳を澄ませればドアの外に気配がする。

「おかえりーー」

奏音ちゃんが勢いよくドアを開くと、そこには驚いた顔で固まる蘭さんと

ドアにぶつかりそうになったのか、大きく後ろに仰け反る奏音さんの姿があった。

……奏音ちゃん……危ないから……

「こ、奏音……ごめん……大丈夫？」

「大丈夫だから……」

……うん

仲直りは出来てないのですね……

「蘭さん、勝手に邪魔してごめんなさい。あっ、荷物持ちますよ」

まだ、驚きの表情のまま固まってる蘭さんの手からコンビニのビニール袋を持つ。

「あっ！有難う御座います。ユキさん、いらっしやいませ」

「奏音、荷物持つか」

「寒いし入る」

こ、奏音さん……あからさまですな……

「そ、そうだね」

奏音ちゃんの勢いもなくなってます。

「ユキさん、これはなんででしょうか？」

それは……玄関を入れてすぐの廊下の端に寄せておいた大きな荷物ですね。

「和志さんからの……頂き物です」

「作って下さったのですね。どつりで既視感が……」

「蘭ちゃん、和志さんって誰？」

「親戚の方です。今日の為に料理を用意して下さいましたようです」

親戚……うん間違っていないですね。

「なんで遠野さんも知ってるの？」

「えっと、わたしも体育祭の時にお弁当を頂いたの？」

つて感じで誤魔化せてる？

「ふーん、そうなんだ」

……うーん、昨日の話しのせいなんだろうけど……

「琴音。ちょっと、ユキちゃんに対して態度が変わる」

「ほら、寒いから入るつよ」

「……」

「……」

琴音さん……何も隠す気がなかったりします？

「そ、そうですね。片付いてはいないですが、どつそお上がりますか」

楽しい会話なんかもなく、ただ蘭さんの後についてリビングに入る。みちるさんの部屋や修さんの部屋がある最上階とは異なり、ワンフロア下の
蘭さんの部屋は……3LDKかな？…普通に広いです。
ここに一人暮らし、流石に寂しい気がします？。
ああ、でもみちるさんも和志さんも毎日のように来るって言った
っけ。

リビングは、広さは異なるものの最上階と同じ対面式のカウンターキッチンに面していて、開放感のある明るい作りだ。
そこに落ち着いたクリーム色の毛足の長いホットカーペットが轢いてありその上に長方形の大判でブラウンの布団が掛けられたコタツが置かれていた。

テレビから離れた位置にソファもあるから和洋折衷みたいになっ
てるけどミスマッチ感はなく、意外といい雰囲気で纏まってる。

…が……しかし……さっきから会話がな感じです。

「いい部屋ですね」

会話……頑張る……

「有難う御座います。あつ、上着はこちらに掛けて置きますので」

「蘭さん、私もいいかなー」

「はい、もちろんです。どうぞ」

「琴音、上着かし」

「蘭ちゃん、ありがとー」

「……………」

この空気のなかクリスマス会をする？

「と、取り合えずテーブルの上に料理とか広げてしまいませんか！」

「そうですね！」

今回のお重の中身は、お弁当ではなくオードブル。
和志さん…何故医学の道に進んだ…

あつ、でも医学界でもエリートだったんだ。

うーん、見た目は料理界の方が…いや、教育界……保育…

「うっわ！これ何！？」

「すごっ！！めっちゃ高そうなんだけど！？」

「いえ、全て手作りだと思いますよ」

間違いなく手作りでしょうね。

「ちよ、食べていい？」

「そうですね。頂きましょう」

「か、奏音ちゃん……これすごーい…」

おっ？奏音さんが、あまりの事に険悪な雰囲気忘れてる？

「どれどれ？うっわ、こんな家で作れるんだー」

いや、こんなの普通は作れませんよ。

というか、作るうと思えますか？

「あたしも料理出来るようになれないかなー」

「琴音も下手なわけじゃないじゃん」

「そうだけど、こつこつこの出来たら格好良くない？」

美味しい料理の力！？

スムーズに会話が成立してる！

「お弁当等から始めてはいかがですか？」

「うーん、お弁当は奏音ちゃんが作ってくれるから……」

「琴音が作るなら、私食べるよ？」

「……考えとく」

……あれ？

うーん、料理の奇跡は終了しました。

「あつ、私達は飲み物持って来たから！飲んで飲んで」

「有難う御座います。遠慮なく……」

「飲んで飲んで？」

これって……

「呑んで呑んで？」

ですか???

「あ、あの……これはアルコールでは？」

「えっ??アルコール?わあ、ほんとだね!間違えちゃったのかな」

琴音さん……棒読み過ぎる……

「まあまあ、お酒は15になってからって言うでしょ?」

「えっ?いつの間に法律が改正されたのしょう?」

いやいやいや

「蘭さん……されてません。奏音ちゃん、悪乗りし過ぎ!」

「あつ、あーで、でも…」

「遠野さん、かったいなー！いいじゃん、別に強制してるわけじゃないんだから。飲みたい人だけ飲む感じで…！」

「こ、琴音！」

「何っ！？奏音ちゃんだつて飲むんでしょ！」

「わ、私は別に無理に飲まなくても…」

「ほんつと、優柔不断なんだね！あたしは飲むから…！」

あー、あー、そんな一気に……

「琴音！」

「好きなもの飲めばいいでしょ!？」

あー

「そうですね。じゃあ、頂きます」

わたしお酒強いからね？知りませんよ？

統一性のかけらもなく集められたアルコール飲料の中から、カップ酒をチョイス。

半分程を一気に飲み干す。

「なーんだ、遠野さんも飲めるんだ。ほら、ガンガン飲んでー」

うん。絡み酒ってやつですね。

「琴音」

「奏音さん、いいですよ。わたし酔わないので」

困った顔の奏音さんにこそっと囁くと、申し訳なさそうな顔をした

後諦めたのか、溜息をついて料理に手を伸ばした。
お姉さんも大変なんですねー。

「蘭さんはソフトドリンクにしますか？」

机の端に寄せてあったジュースやお茶のペットボトルに手を伸ばしながら聞いてみる。

まあ、他のメンバーがアルコール飲んじやってる事には目を瞑って
もらうしか

「あっ、ではビールを頂きます」

「ビールですね。はい……………って!!!？」

ちよ、飲むの???

「何か？」

「い、いえ。蘭さんがビールを飲んでる姿があまりにも……………」

……………似合わなくて

「イメージが合いませんか？」

「そうですね」

「こつ見えても強いのですよ？和志さん達に鍛えられましたから」

医療従事者……………なにやってるんですか……………

「らんちゃん、氷ーーー」

「い、ごめんね蘭さん」

既に御機嫌な琴音さんと、振り回されてる奏音さん……………

「いいですよ。アイスペールで用意してきた方がよさそうですね」

そんなのもあるんだ…イメージが……

「ホントごめんね」

「構いませんよ」

うわー、しかしクリスマス会という名の単なる飲み会になってる。

料理の匂いよりもアルコールの匂いが強い部屋は、女子会なんて呼べるものじゃなく間違いない飲み会ですね。

空き瓶や空き缶が積み上がる室内。

お重の中身が少なくなっって、室内の様子はどんどん学生らしさから離れていく。

「ほらー！ー！飲んで！ー！」

「分かった分かった、飲むから」

「うむ。あつ、遠野さんも飲み終わってる！ー！ほら次はこれだよこれ！」

何も薄めてないストレートの焼酎が注がれたグラスを手渡して、また奏音さんの方を向いてしまった。

折角用意したんだから、氷を入れません？

「琴音さん、荒れておられますね」

横から、伸ばされた手がグラスに氷を入れていく。

「そ、そうですね」

「姉妹喧嘩でしょうか」

「そ、そうですね」

うーん、姉妹なような姉妹じゃないような……

「私は一人っ子でしたので、実は少し羨ましい気もしているのですが」

「羨ましいですか？」

わたしも姉妹はいないけど、羨ましいかな？
喧嘩ですよ？？

奏音さんが大分参ってるみたいなんですけど？

「そうですね。相手がいないと経験しようがないことですから……」
「……みちるさんがいますよ」

「そうですね。みちる姉さんと姉妹喧嘩でもしてみましようか」

……酔ってます？

「こ、琴音！」

「だーかーらー、奏音ちゃんは駄目駄目なんだよー」

あー、あそこに完全なる酔っ払いが……

「遠野さん、そこんところはどなのさー!!」

「琴音、何絡んでんの!? 大人しく飲もうね。ほら、これ食べる？」

「奏音ちゃんには聞いてませーん」

いやいや、わたしも聞いてませーん。

「でー! 遠野さん!？」

「はい？」

どういう話しをしてたのですか？

「ちゃんと奏音ちゃんのこと大事にしてんの？」

「！！！！ぶつ！！ごぶつごぶつ！！」

焼酎が気管に！！

「あああ、奏音！」

「ユ、ユキさん。大丈夫ですか？」

大丈夫じゃない！

大事につて！？

「奏音！あんた飲み過ぎ！！ちょっと頭冷やしな！！！！」

「えー！！！！まだまだだよお！！これだけは聞いとかなきゃいけないんだから！！」

「えつと、だ、大事につて……」

3年とか言ってる時点で駄目な気が……

「奏音！大丈夫だつてば！」

「奏音ちゃんには聞いてないですー」

「大事に……大事に……」

「はい？なんてー？」

「えつと……」

「……もしかして、何も考えずに手を出したのっ！？」

「奏音！だから昨日も説明したでしょ！」

「だから！奏音ちゃんには聞いてないつてば！！！」

第23話（後書き）

蘭ちゃん、呑んじやうの！えっ、呑んじやうの！！？
ら、蘭ちゃん…人にはイメージというものがあまして……

第24話(前書き)

長らくお待たせ致しました！
待ってへんわい！とおっしゃらずに…

第24話

「な、何かアルコールじゃない飲み物を用意しますね」

「あつ、手伝いますよ」

「いえ、皆さんはゆつくりなさって下さい」

残されたメンバーを見て下さい……

ゆつくり出来る空気じゃないですよね？

「是非、手伝わせて下さい！」

そこは、無理やりにでも！！

「は、はい」

蘭さんが紅茶をの準備をしている後ろから、カウンター越しに白崎姉妹の様子を伺う。

何の話しをしているのか、二人とも険しい顔をしていた。

……のだけど……何故か琴音さんとはうちり目が合ってしまいました
た……

泣きそうです……

琴音さんが……？

えっ？な、なんで人の顔見て泣きそうになるの！？

「琴音さんに、何かなさったのですか？」

「……何もしてません」

いつの間にか隣に立っていた蘭さんが人聞きの悪いことをおっしや

る。

「では、奏音さんに何かなさったのですか……」

えっと……

「……………」

「何もおっしゃらないのですね」

「あの……」

「私は全て蚊帳の外なのです」

「えっ??？」

「ユキさん……私では相談役に不足しておりますか?」

「な、何がですか?」

「……………いえ……なんでもありません」

何故、あつちでもこつちでもこんな重い空気になるのですか……

「……蘭さん?えっと……どうしたんですか?」

「……知らなかったのです」

えっと、それは……

「何をですか?」

「ユキさんがいつの間にか引越しをしていたことをです」

ああ、そつちですか

「誰から聞いたんです?」

「和志さんにお聞きしました」

「……そうですか」

どこどこまで聞いたのでしょうか…

「黙っておられるつもりだったのですか？」

えっと、引越しくらいなら言っても良かったんですけど…
で？どこまでお聞きに……？？

「……………」

「みちる姉さんからも修さんからも何も聞いてませんでした……ユキさんからも……」

あー、ということとは……？

「私が何も知らなければユキさんの引越しも気付かないまま、知らない振りをして同じマンションから学校に通うおつもりだったので
すか？」

「そんなことは」

「私に何も気付かせないような振りをして、修さんと暮らしていた
ということですね」
「……………」

蘭さんが……険しい顔をしている…

「何もおっしゃらないのですね……」

「蘭さんに隠してたわけじゃないです」

「では……何故？」

「わたしが、未成年で学生だからでしょう。きっと皆さんもわたしの事を考えて黙ってくれていたんですよ」

「私が…偏見を持っていると……？」

何故!?

「そうじゃないです。きっと、蘭さんにはわたしに普通に接してくれる友達として」

「そのようなことで、私がユキさんに対して特別視することはありません!」

「あ、あの……」

えっと、だ、だから……

うーん……

そっか……みんなはわたしから蘭さんに言わないなら黙ってた方がいいと判断したのか……

それこそ……わたしの為に……

「ユキさんが何か悩んでおられるのは感じていました。……こんなに身近な事でしたのに私ではユキさんのお力になる事は出来ないのですね」

「そうじゃないですよ。そうじゃないです……」

「ユキさん、私は怒っているわけではありません……ただ……憤っているのです」

……!?!?……怒ってるんですね……

「蘭さん……貴女といい、みちるさんといい……貴女達には御人好しの血でも流れているのですか?」

「はい?何をおっしゃっているのですか?」

「……ありがとうございます」

「ユキさん、私の話を聞いておられましたか?」

「蘭さん、わたしと修さんはお互いの家庭の事情もあり結婚しまし

た。正確に言うと、1月に籍を入れることになっていきますので婚約ですね。それに伴って、今回引越しをしました」

「……どういことですか？」

「家庭の事情というのは……単純に家名の問題ですね」

「そういう意味ではありません。急になんですか？と聞いているのです」

「友達でも話せないことはありません」

「……そのようですね」

「でも、話しておくべきこともありました」

「はい？」

「わたしが学生の間は隠しておくつもりですが、修さんと結婚します」

「は、はい……」

「わたしが結婚しても、蘭さんは友達でいてくれますか？」

「それは……当たり前です！」

「今は……言えないことが沢山あります。それでも友達でいてくれますか？」

「……私でお力になれる事であれば話して下さいますか？」

蘭さんはいい人だね。

「はい」

「分かりました。では、これだけは約束して下さい。今回のように私の事を軽んじる判断はしないで下さい」

か、軽んじる？

「そんな、軽んじるなんてっ」

「私は、そのように受け止めました。ユキさんが私に話しをする事で私の気持ちが揺らぐという不安を感じたということですから」

「そ、それは…」

「私は揺らぎません。何があってもユキさんの友達としてお傍にいます」

わたしの周りにいる人は強い…

わたしが弱いだけなのかな……

「…じゃあ、友達でいて下さい」

「もちろん、喜んで！」

あれ…？これ、なんの話しだったっけ？

「奏音ちゃん、ほんつと馬鹿だよ！！」

ああ、そうそう。姉妹喧嘩中なんですよね。

「だから、ちゃんと説明してるでしょ！！」

しかも、なんだかヒートアップしてる模様…

「止めた方が良いでしょうか？」

「うーん…」

わたしが行くと、もっとややこしいんですよね……

「奏音ちゃんが、遠野さんを選んだのは分かったってば！だけど、

なんでそうなる前にあたしに言ってくれなかったのって言うてんの

！！奏音ちゃんのは全部事後報告！！」

さっき、わたしも同じような事で責められた気がする…

しかも、横から視線を感じる……

「ユキさん？」

「は、はい？」

「言えない事ですか？」

「い、言えない事というと……」

奏音ちゃんの事は…なんて説明する？

うーん…

「無理に聞き出そうとは思いませんが…お付き合いされているのですか？」

「は？」

だ、誰と誰が？

お付き合い？

どういう意味ですか??

「どういう経緯なのか分かりませんが私にそういった偏見は御座いません。ですから、変に隠し立てされるより言って頂いた方が」

「付き合ってます！」

「そうなのですか？」

偏見を持たないのは良いことですが、何故みんな、そんなにあっさりくつつけたがるの!??

「誰ともお付き合いした覚えはありません！」

「では…ユキさん……。人の意思は無視をしていいものではありません。まして、遊びでそういう行為をなさるのはどうかと」

「ちょー!…!…!…!…!…!…!…!…!」

その勘違い酷い！

何故、わたしが奏音さんを襲ったみたいになってるんですか!？

「違うのですか？」

「全っ然！違います！」

発想が偏りすぎですよね!？

「そうですか。えっと…何があったのですか？」

「そ、そうですね…あの……………」

「ああ、失礼しました。聞き出そうとしてしまってますね」

「…いつか、言える時が来たら……………」

「……………はい。そうですね」

結局、蘭さんに伝えられた事は最初と変わってないけど、それでも蘭さんの表情から怒りは消えてるみたいだ。

問題は……………

「奏音ちゃんのバカ！」

…あれですね

「取り合えず…紅茶で落ち着いて貰いましょうか」

「そうですね」

「ユキさん、空いたグラスを下げってきて頂けますか？」

「分かりました」

しかし……………

「遠野さん！」

うん、絡まれるよね。

「はい？つてええー！」

琴音さんが、めちゃくちゃ泣いてますけど！？

「……これは気にしないで。唯の…涙だから」

た、唯の泣って何！？というか唯じゃない泣ってなんなの！？？

「か、奏音ちゃん？」

話しはどうなったの？一体どういいう経緯でこの状態？

「ユキちゃん、ごめん」

「はい？」

「蘭ちゃん、5分くらいでいいから隣の部屋借りていいかな？」

ちよ、ちよっと待って？？どういいう展開？

なんだかよく分からないうちに、蘭さんに許可を取った琴音さんに手を引つ張られリビングの隣の客間らしき部屋に連れてこられる。

「で？」

「力を見せて」

説明を求めたわたしに、琴音さんが答える。

けど……

「どついつ意味ですか？」

何の経緯も分ならず、どうしたらいいのか判断出来ない。

「ユキちゃん、取り合えず今回の契約守護獣のことに關して琴音に納得」

「契約守護獣のこと”だけ”に關してね」

「……に關しては納得してくれるらし」

「納得”する努力をしたいと思ってる”から」

「……から、力を解放した姿を見せて貰えないかな？」

「……………」

取り合えず琴音さん……泣きながら睨まないで下さい。

「琴音は主ヴァンパイアの力をちゃんと見た事ないの。っていうか話しただけだったから、主ヴァンパイアを見た事もないし……」

「遠野さんがヴァンパイアだっていうのも、奏音ちゃんと契約したことで分かったんだよ」

「はあ」

で？

「ちゃんとユキちゃんの力を確認したいんだって」

「……」

「何も、ここでcolor coating《補色》しろと言って
るわけじゃ あれ？そういえば遠野さんってcolor coa

ting 《補色》してるの？」

「それは、まあ」

「力の安定感から言って、あまり定期的に行っている感じではないかな」

「ちょ、ちょっと！奏音ちゃん、何のんびり言ってるの！？命に係わる大問題だよっ！！」

「あ、あのColor coating《補色》出来ないわけじゃないから、大丈夫だと思うし……」

「そうそう、いつでもColor coating《補色》出来る状態にいるくせにユキちゃんが渋ってるだけだし」

「はあ？」

「い、いや……渋ってるってわけじゃ……」

「ちゃんとColor coating《補色》はしてよね！なんなら、あたしから説得してあげる……けど……あれ？対象って誰？」

「大丈夫で」

「蘭さん……とか？」

「違います！」

「えっ？でも最近遠野さんと親しくしてるのって」

「ホ、ホントに大丈夫で」

「あっ！もしかして矢原先生だったり？　なんて、そんなわけないかー」

「……」

「……」

「あ、そ、そうなんだ……」

咄嗟に嘘がつけませんでした……

同じように正直者のmy wolfさんが固まっています……

「えっと、記憶弄ってるの？」

「弄ってないです」

「あっ、そうなんだ。じゃあパートナーなんだね。安心した」

「パートナー？」

「琴音……矢原先生は協力者って感じだと思っよ………今は……」

うん？最後の方なんて言った？

「そっか。うん、でも無理矢理とかじゃないないらしいよ」

ああ、こういう感覚は奏音ちゃんとは違ってるんだ。

奏音ちゃんなら、無理矢理だったとしても記憶操作で力押ししてでもColor coating《補色》してくれって言う感じだった。

そっこののは、やっぱりwerewolf《人狼》としての年月の違いなんだろうか…。

「はい。じゃあ、遠慮なくどうぞ！」

「はあー。ユキちゃん、ちょっとだけ力を解放し」

「”ちょっとだけ”とか意味の分からない制限付けないでね！」

「……力の解放を御願いしても良いかな？」

「……………」

ああ、奏音さんは泣き腫らした顔で、奏音さんはもの凄く申し訳な
いってという悲壮感漂った顔……

「……………どうしたらいい？」

別に隠さないといけない相手じゃないし、サクッと終わらせた方がいいね。

「ごめんね。じゃあ、出し惜しみせず力操作をして貰おうかな。
私のなかのユキちゃんの力を感じられる？」

奏音ちゃんのなかに流れる自分の力……うん

「分かるよ」

「あつ、わかるんだ」

「えっ?」

いや、奏音ちゃんが出来るか聞いたんじゃないですか!?

「じゃあ、それに少し力を足してみてくださいないかな」

足す、足す…足す…足す…

「足す?」

「あー、ごめん。端折り過ぎたね。まず、契約の時みたいに力を解放してみてくださいる?」

えっと…開放はColor coating《補色》でのみちるさを思い出せばスムーズに出来たはず。

「OK。じゃあ、改めて私の中の力を感じる?」

「うん、感じる」

「同じ流れをユキちゃん自身の中に感じれない?」

ああ……

「…これかな」

「多分それであってる。そこに血を足すイメージで流せない?」

血…これは動かせるはずのもの…流す……

「…かな」

「…くあ」

「す、凄いね」

「うん？つて、何それ！」

「ユ、ユキちゃん……ストップ……力流すのゆっくり止めて……」

金髪・赤目の奏音ちゃんが苦しそうに言う姿に、慌てて流していた力を慎重に止める。

「か、奏音ちゃん大丈夫？」

「はあ……大丈夫だよ。ここまで強い力だと思わなかった……」

元の姿に戻った奏音ちゃんを琴音さんが支える。

「ごめん！大丈夫??」

「大丈夫。体調が悪いというより、力が漲り過ぎて獣型になるのを止められそうになかったっただけだからさ」

「そうなの？それならいいけど……びっくりした」

「それにしても……やっぱり主ヴァンパイアの力は凄いね」

「うん……凄い……」

「そ、そうなのかな」

別に嬉しい事でもないけど……

ガチャーーーーン

「うん？」

「蘭ちゃんかな？どうしたんだろうっ」

リビングの方から聞こえた何かが割れる音……？

慌てて3人でリビングに戻ると、散乱するグラスとグラスの破片を拾ってる蘭さんの姿があった。

「落とした?」

「あっ、お騒がせしてすみません」

「ごめん、お盆に載せたまま放置してたわたしのせいだね」

回収してくれと言われたグラスをそのままに隣の部屋に行っちゃってたから……

「違います。ちょっと無理して空き瓶も運んでしまおうと横着をした私が悪いのです」

えっ、あのお盆に更に不安定になる空き瓶を足したの?

「蘭ちゃん…無茶だよね」

「は、はい。そのようで……」

「……」

「……」

「ほら、蘭さんストップ。手でやったら危ないから、箒と塵取りある?」

「ああ、ありますよ。ついた!」

「ああ、言った傍から!」

「蘭ちゃん、切ったね?」

「き、切ってないです」

「……」

「……」

こっち見ないで下さい!二人とも鼻が利くんだから分かってますよね?

「……」

「……………」

「ふう……切ってますよね」

「切ってたな」

「切ってます」

はい。もう間違いなく。血の匂いぶんぶんしていますし。

「ほら、蘭ちゃん。諦めて見せなよ」

「そっだよ。サッサと治療した方がいいし」

「蘭さん、大丈夫ですか？」

「き、切ったと言っても指先を少しです。ほら」

あ……………血……………

血だ……………

第24話(後書き)

危ない！

そんなところで奏音ちゃん獣化しちゃったら……

ふ、服が……

よ……よかったね！！

第25話(前書き)

クリスマススイブがやっと終了！
長すぎぬやろっ！！

第25話

蘭さんの右手人差し指から流れ出る真っ赤な血。

.....

「大丈夫ですか？」

結構綺麗に切れちゃってるみたいで、まだ止まる気配は無い。

「蘭さん、早く治療しちやおう」

奏音ちゃんが、こつちを少し気にする様子を見せて治療を促す。
大丈夫ですよ？

確かに凄く惹かれる匂いではあるけど我慢出来るくらいには余裕があるし。

「そうだよ。ここは片付けとくからさー」

「箒と塵取りだけ貸して」

「この位の傷なら大丈夫ですよ」

「はいはい。ほら、早く行った行った」

「ほ、本当に大丈夫です。これであれば舐めとけば治りますよ」

あ.....

「「あ.....」」

わたし達に安心させようとした蘭さんが血に濡れていた傷口を舐めた。

「ほら、そんなに深くないです」

無邪気に語る蘭さんの唇に付いた血を思わず見つめてしまったわたしは……

「はぁー」

大きく深呼吸を繰り返す。

まずい……まずい……まずい……

余裕があつたはずの心には、みちるさんの血を思い出した自分自身の吸血衝動が今にも溢れそうになっていた。

「ユ、ユキさん!？」

「……なんですか?」

みちるさんと異なる血の匂いが、吸血衝動を抑えて自分自身を保とうとする最後の防波堤……

「凄く顔色が悪いようなのですが……」

「……そんなことないですよ」

「奏音ちゃん何してるの……?」

琴音さんの声に、そちらを見ればスマフォから顔を上げた奏音ちゃんと目が合った。

「ユキちゃん、大丈夫?」

大丈夫……? 大丈夫だよ……今のところ……

「ちょっと、気分が悪いだけです」

「大変！少し横になられますか？」

「……………」

心配気な蘭さんの瞳と、無言で現状を探ろうとする二対の瞳……

まずい……まずい……まずい……

「琴音、蘭ちゃんの傷の手当をしてあげて」

「奏音ちゃんはどうするの？」

「お迎えが来るまでユキちゃんを看護しとくから」

「お迎え？」

まずい……………

「ユキさん！寒いのですか!？」

身体の震えが……止まらない……………

「ユキちゃん、大丈夫。大丈夫だから」

何が……何が大丈夫なの？

ピンポーン

「お客様？」

琴音さんから治療を受けていた蘭さんが立ち上がろうとしたけど……

ガチャガチャ

バタン

それより早く鍵を開ける音とドアが開閉する音が聞こえた。

パタパタパタ

廊下を急ぎ足で移動する音が聞こえ、リビングのドアの前で止まる。

「ユキちゃん!!」

はぁー

奏音さんの腕の中で強張っていた力を抜く。

「大丈夫なの？」

大丈夫じゃない。

「動ける？」

本能で動いてしまいそうなのを必死で止めてるんです。

「ユキちゃん？」

「みちるさん……………」

「何かしら？」

伸ばした手で、みちるさんの腕を握る。

みちるさんの血を渴望した脳が見せた幻影じゃなかった……………

「みちる姉さん？」

「ああ、蘭。勝手に上がってごめんなさいね」

「それはいいのですが、どうされたのですか？」

「連絡を貰ったのよ」

「連絡？」

「私ー！。ユキちゃんの体調が悪そうだったからね」

「なるほど。そうでしたか」

「蘭、ガラスで切ったのね？大丈夫？」

「私は大丈夫です。かすり傷です」

「そう。もう治療もしてあるのね」

「矢原先生。蘭さんは大丈夫だからユキちゃんを御願いします」

「……………ユキちゃん」

みちるさんの腕をにぎにぎしていたわたしの目を覗き込んでくるように、みちるさんの顔が視界いっぱい広がる。

「へええ？」

なんだっけ？

えーっと、あーー

血が欲しいよ…………

「連れて帰るわね」

「御願いします」

「ユキさん、また連絡致しますね」

「遠野さん、また話をさせてね」

「はあ…………」

なにが…………？

ねえ、どこに行くの？

まだ歩くの？

「ユキちゃん、そんなに我慢してたのね……………」

我慢……？

「そんなになる前に言いなさい」

「……………」

「ユキちゃん？聞こえてないのかしら……」

「はあはあ……………」

「ユキちゃん、分かる？」

「……ダメ……………」

「ダメ？わからない？部屋についたのよ？」

「はあはあ……………」

我慢……………しなきゃ……………

「ユキちゃん、もういいのよ？」

頬を両側から挟まれ、そつと上げられた視線の先にみちるさんの晒された首筋を見た瞬間、それまで我慢して溜めに溜めた堤防が決壊した。

「はあはあ……………」

「ユ、ユキちゃん……………？」

次の瞬間にはベッドの上のみちるさんを組み敷いて両腕を押さえ、みちるさんの耳元で理性の残った自分が最後の御願いを口にした。

「……………みちる……さん……………欲しい……………」

少し涙目になったみちるさんを見つめる。
怖がらせてしまったみたいだ……………

「……………いいわよ」

それでも、優しいみちるさんが少し顔を横に向け無防備に見せられた首筋…

もう…ダメ…

「はあはあ…ごめんなさい……………」

舌を這わせ鼓動を感じる。

「ふ……………ユキちゃ……………んん!」

柔らかな首筋に牙を沈める。

溢れ出る甘い匂いに我を忘れ……………

……………

「ああ……………は……………」

はあー

「は……………うん……………」

舌の上に広がる甘味と、脳を溶かしそうな香り。

「ふう……………ん……………」

さつきから舌を這わせている対象が小さく身じろぎをする。
うん?

「ふぁ……」
「キ……ちゃん」

あれ？

「ユ……キちゃ……」

しまった！

「み、みちるさん！？」

やわやわと噛み含んでいた首筋から顔を離し、慌ててみちるさんの顔を見る。

「はぁはぁ……」
「キ……ちゃん？」

うつすらと汗を掻き、ほんのりと赤く染まった顔を上下させるほど荒い呼吸を繰り返している。
まずい！血を吸いすぎたの！？

「ご、ごめんなさい！大丈夫ですか？？」

「だい……じょうぶ……？」

言うてから、ますます赤くなったみちるさん。

「大丈夫！大丈夫よ！！」

赤い顔のまま、急に動き出そうとする。

「あっ、そんな急に動いたら貧血でくらくらしますよー！」

「そ、そんなに血を失ってはいないわ」

うん???

でも、なんだか辛そうだし……

「だとしても、まだ血が流れてますから。ちょっと待って下さい」

そう言うてから、上半身を起こそうとしてるみちるさんの首筋に穿たれた傷口に舌を這わせる。

早く治れ——

「ちよ、ユキちゃんんん!」

どうだ!

よしよし。

「これで大丈夫だと思います。痛みます?」

「……………い、痛くないわ」

その間は…やっぱり痛いのかな……

そりゃ……………痛いよね……

「あの……………ありがとうございます」

「ユキちゃん……………」

「はい??」

「あの……このcolor coating《補色》なのだけれど……………」

「……………」

やっぱり……………怖かったのか……………嫌……………だよね……………

嫌……………言ってもいいですよ……………?

「他にも……る…の」

「は？」

全く聞き取れませんでしたか？

「ほ、他にもユキちゃんがする対象がいるの？」

「えっと、いません……けど？」

あれ？前に言わなかったっけ？

「みちるさんだけですよ。というかみちるさん意外としたことないです」

「そ、そう。ならいいの……。うん、気にしないで」

「は、はあ」

想像していた言葉とあまりにもかけ離れすぎたんですけど…
しかも、何故か一人で納得して会話が終了のみちるさん。

「あれ？クリスマス会？」

「…ユキちゃん、覚えてないのかしら？」

「あー、ほんのり覚えてます」

そっか、蘭さんの血の匂いの中てられたんだ。

「今は何時ですか」

「今は……19時過ぎね」

「うわっ、もうそんな時間なんですね…」

えっと、蘭さんの家でお茶の用意をしていたのが16時半くらいだ

ったから……

「もう大丈夫なの？」

「はい」

実際、びっくりするくらい身体が軽く感じる。

「そう」

「あっ」

身体を起こそうとしたみちるさんを支える。

「あ、ありがとう」

「無理しないで下さい」

息が上がって汗を掻くくらい体調悪そうだったのに……

そんなに血を吸っちゃうなんて……わたしの馬鹿……

「大丈夫よ。何か簡単に食べられるものを作るわ。ユキちゃん食べれる？」

「えっと……はい」

正直、飲み食いしてたからお腹はあんまり空いてないけど……

「ああ、そういえばあのお重を持って行ったのよね……」

そう、それ。

あれ？

「和志さんと、修さんは？」

「……………今日は仕事よ」

「そうですね。じゃあ、わたしが消化に良さそうなもの作りま
すよ」

「ユキちゃんが？」

「はい。キッチン借りますね」

「え、ええ」

キッチンに行つて勝手に冷蔵庫の中身を物色する。

タッパーに小分けにされた冷凍御飯。冷凍の刻みネギ。玉子。昨日
の残りのチキンの香草焼き。

発見した物で創作料理とも言えないおじやを作る。

軽く味見をして、取り皿とスプーンと共にさっきの部屋に戻る。

そつえば、この部屋は……ベッドがあるし寝室？

「ユキちゃん、ありがとう」

「いいえ、美味しいかどうかわかりませんよ」

小鍋から皿に移し、スプーンを添えて渡す。

「凄く良い匂い……………うん。美味しいわ」

「そうですね？良かった」

料理と言えるような手の込んだ物じゃなかったけど久しぶりにキッ
チンに立って楽しかったし、何より誰かの為に作って、それを美味
しいと言って貰えて嬉しい。

「ごちそうさま。凄く美味しかったです」

「あつ、えつと、有難う御座います」

「ユキちゃん、アルコールは？」

「えっ？」

「呑んでたのでしょうか？酔っ払っているようには見えませんが、ちゃんと抜けているの？」

「あー、わたし酔ったことないので」

「強いよね。羨ましいわ」

あれ？怒られるかと思ったけど……？

「蘭も強いよね」

そういえば和志さんに鍛えられてるみたいなお話を言ってたなー

「みちるさんはあまり呑まないのですか？」

「そうね。あまり強くはないから」

へー、凄く強そうな雰囲気なのに。

「それと、厳しく言うつもりはないけれど、無茶して呑んでは駄目よ」

「はい、すみません」

やっぱり、未成年ですしね。気をつけます。

そういえば、もう20時半も過ぎたのに和志さんも修さんも帰ってこない。

「みちるさん」

「何かしら？」

「お二人は、今日は遅いのですか？」

「そうね……」

うーん、みちるさん大丈夫かな……

「ユキちゃん」

「はい？」

「今日は、こっちに泊まっていきなさい」

「はい??？」

あー、そうですね。

体調悪そうだから誰もいない場所で一人よりは一緒にいた方が安心かー。

「わかりました」

「前に使ってもらった場所を用意するわ」

「いえ！ソファーとかでいいですから!!」

体調悪い人に、そんなのやってもらえませんか！

「ダメよ。今の季節を考えなさい」

冬ですけど？寒さには強いので問題ないです。

「そんなことより、入浴はどうしますか？」

「そんなこと?……お風呂は用意するから待っていて」

「やりますから、大人しくしてください」

「ちよつと、ユキちゃん!？」

何か言いかけてるみちるさんを置いて部屋を出る。

よし、サッサと洗っちゃおう。

前に洗面所まで行ったから、お風呂場の位置はわかってる。

お風呂場のドアを開けて、風呂蓋を

「ユキちゃん」
「あれ？」

後ろからのみちるさんの声と同時に、お風呂の中を見て気付いた。

「洗ってあるんですね……」

「そうね。……言おうとする前にユキちゃんが部屋を出るから……」

……いや……

「すみません」

「いいわ。ついでだから溜めておいて。その間に用意していればいいわ」

「わかりました」

あー、用意？そういえば着替えとか持ってきてない。

というか、そもそもわたしは家でシャワー浴びてくればいいんじゃない？

「みちるさん。わたし、着替えもないですし、取りに行くよりもついでに入ってきちゃいますね」

「えっ??」

「いえ。あの……だから、寝る準備してから来ま」

「ダメよダメ！」

「へっ？」

「使っていない下着もあるし、スウェットで良ければサイズも問題ないでしょうから使いなさい」

「えっ?でも、隣ですし、そこまでするなら」

「問題ないわよね!？」

も、問題？ないけども？？
もしかして……………

「そんなに体調悪いんですか……………」
「体調？」

我を失つてる間にやり過ぎだよわたし！

「やっぱり貧血ですよね」

「貧血？…………あー、ああ、そう。そうね」

うーん、一人でお風呂危ないかな…

「じゃあ、一緒に入りますか？」

「……………」

あれ？聞こえなかった？

「みちるさーん、お背中流しますから、入りま」

「無理！無理だから！！」

「お風呂場で貧血興したらどうするんですか」

「貧血になんてならないわ！」

「いえいえ、体調悪いんですから」

「体調は悪くな……………わ、悪いかもしれないけれど、そこまで心配しなくとも問題ないわ」

「そうですか？」

まあ、ならいいけど。

「じゃあ、まずいと思ったら呼んで下さいね」

「だいじょ……わかつたわ」

むー、医者の不養生か……？

無事に何事もなくお風呂から上がったみちるさんの後にお風呂に入り、ゆっくり温まった身体は若干のぼせ気味……

「ユキちゃん、はい」

「……………」

少しボーっとした視線のまま声を掛けられた方を見ると、みちるさんがわたしに向かってコップを差し出していた。

「お風呂上りの冷たいミルク。あれ？定番ではないのかしら？」

「あ、えっと……頂きます」

うん。火照った身体に冷たい飲み物はすっきりする。

「もう休みますか？」

時計を見たら23時過ぎ。まだ二人は帰ってきてない？遅いな……

「そうね。ユキちゃんのベッドは」

「ソファーでいいで」

「ソファーは却下だから！」

話しを遮ろうとしたら遮られた……

「いえ、あの……でも」

「……………」

無言の圧力……

じゃあ、どこで寝ようか……

「あー、じゃあ、前の場所を……」

「……………ブル……よ」

「は？」

「……………ベッドはセミダブル……………だから」

ああ。あのベッド、簡易ベッドみたいに見えたけどセミダブルだったの？

「そうなんですか。結構大きかったんですね」

「……………奥側を使いなさい」

何が？

というか、なんでみちるさんはポンポンとベッドを叩きながらわたしを見てるの？

「お、奥側？」

「……………手前がいいのかしら？」

今度は、みちるさんがベッドの奥側に移動して逆側を空ける。

……………

……………つまり？

「……………一緒に？」

「ね、寝相は悪くないわよ」

一緒に寝ようって意味で合ってますよね？
体調心配だし、傍に居れる方が安心だけど……………

「あ、あの。和志さんが帰って来たら……………」

どこで寝るんだ？

「……………部屋は別だから大丈夫よ」

じゃあ、いいの……………？

「わたしも寝相は悪くないですよ」

まあ、いいか。

促されるまま、みちるさんの隣のスペースに滑り込む。
セミダブルって……………近い！

リモコンで照明が消えても隣に誰かがいるのがわかる。
温もりが伝わるといつか、そもそも腕とか触れ合ってる気がするんですけど……………！

「ユキちゃん。おやすみ」

「お、おやすみなさい」

誰かと眠るなんて久しぶり。

一人じゃない布団は、こんなにも温かかっただろうか……………
隣から聞こえる規則正しい呼吸音と温められた布団が、ゆっくりとわたしの意識を優しく夢へと……………

おやすみ……なち……い……

第25話（後書き）

みちるさん……な、生殺し……

……ユキちゃんは子供なのね——。

みちるさん、頑張るんや——！

第26話(前書き)

サラッとクリスマス。

イブ長かったのに……

では、どうぞ！

あつ、感想とか応援とか感想とか応援をお待ちしております!!

第26話

はい。もの凄くすつきりと目覚めました。

これだけ睡眠を取ったのは久しぶりだし頭もすつきりはつきりして
る…

けど、身動きが取れません……

充分な睡眠を取り、自然と目が覚めたわたしは起き上がろうとして
何も考えずに右に身体を向けたところで固まった。

同じようにこつち側に身体を向けて無防備に寝顔を晒している女神
様の顔が、それこそ目と鼻の先に存在していたから。

思わず右に向いた体勢のまま呼吸さえ止めて固まる。

しばらくして、みちるさんが眠ったまま動かないのを確認したわた
しは、そこでようやく忘れていた呼吸を再開する。

ふうー……

静かにゆっくり息を吐き出し、振動を与えないように気をつけなが
ら呼吸を繰り返す。

どれくらいの間がたっただろうか……

外が明るくなってきたのか穏やかな寝顔をカーテン越しの暖かな光
が覆う。

「ふうー……ん……」

眩しかったのか、小さく動いたみちるさんの髪の毛が一房頬を滑る
ように流れた。

あまりにも美しい光景に無意識に伸ばした手が、みちるさんの髪の毛に触れた。

「……あ」

「……あ？」

寝起きがどこのどこの、なんて無視するくらいぱっちり開かれた目が、みちるさんの髪の毛に触れているわたしをしっかりと写していた。

「お、おはよう」

「……おはようございます」

起こしちゃった……

「起こしてくれたのね」

……！！？

「そ、そうですね」

「少し、寝すぎてしまったかしら。ユキちゃんはちゃんと眠れた？」

「はい。久しぶりにこんなに寝ました」

「そうなの？良かったわ」

もう、外明るいでもんね。

「……ユキちゃん」

「はい？」

「取り合えず、起きましようか」

「あっ！」

みちるさんが壁側なんだから、わたしが動かないと！

固まってる場合じゃないし！！

「す、すみません」

「いいのよ。着替えを済ませたら朝食に……」

「みちるさん……？」

「なんでもないわ。朝食を済ませてから出掛ける用意をしましょう」

「えっ？……はい」

先に朝食にするってことですね。

「あ……」

うん？

テーブルの上に並んだお皿たち……

「みちるさん？」

「和志ね……」

ですよ。今まで一緒に寝てたのに、これを用意する暇はなかったはず。

「ということは、和志さんと修さんは帰られたのでしょうか」

「……はあ。あの子は……全く……」

「ど、どつしたんですか？」

なんか、ぶつぶつ言っておられますが……

「これ、ユキちゃんのでしょうか？」

示された場所には見覚えのある衣装ケースが……？

「あれ？そう…ですね…？」

なんで、こんなところに？

「これに服が入ってるのね？」

「そうです」

「そう…まあ、いいわ」

「えっ？」

「和志が用意してくれたみただからパンを焼いて……コーヒーを入れてる間に着替えなさい」

「分かりました」

衣装ケースの中から、いつも通り適当な服を選んで引っぱり出す。

「ユツ…！」

「へっ？」

「なんでもないわ」

何だろう？

取り合えず着替えを再開。早く服を着ないと流石に寒い。借りていた服を軽く畳んで……

「終わった？ああ、それは洗ってしまうから畳まなくてもいいのよ」

「はい。ありがとうございました」

「じゃあ、コーヒーが出来たらカップに注いでおいて」

「はい」

コーヒーのいい香りがりビングに広がり、しばらくしてコーヒーメーカーのランプが消えていることを確認してから用意してあったカッ

プに注ぐ。

えっと、みちるさんは砂糖とミルク使うのかな？

うーん、砂糖……ミルク……

どれだ???

「どう出来た?」

「あつ、コーヒーはOKです。砂糖とミルクはどうしますか?」

「ユキちゃんは使うの?」

「わたしはブラックで」

「そう。じゃあ、わたしもブラックでいいわ」

コーヒーをテーブルに置いて昨日の椅子に座る。

「いただきます」

「いただきます」

……

「お茶の方がよかったのかしら……」

「……………」

判断に困るところですね。

綺麗に巻かれた出し巻き卵を口に運ぶ。

「……………おいしいのよ?」

「おいしい……………ですよ?」

ジャムを塗ったパンを齧りながら答える……

「御飯はセットしてあったわね……」

「みたいですわね」

あっ、このほうれん草の御浸しおいしい……

「スイッチは入ってなかったけれど……」

「みたいですわね」

うーん、やっぱりコーヒーよりはお茶の方がマシか？

「あの子……急いでたのかしら……」

「やっぱり、御飯の方が良かったですか？」

「御飯用に作られたおかずじゃない？パンだとちょっと……」

「……ですわね」

あー、実は冷凍庫にまだ冷凍ごはんのタッパーがあったんだけど……
今更言わない方がいいかな。

「おいしいですよ？」

「……そうね。まあ……おいしいわ」

「……」

黙々と食べましょう……

「ユキちゃん」

「はい？」

「今日は、その格好なの？」

改めて自分の格好を見る。

……何か？

「そうですね」

「……そう。今日の買い物を楽しみね」

「へ？ええと……はい……？」

「わたし、頑張るわ！！」

……

みちるさんは頑張った。

わたしも……頑張った……

頑張った結果が、後部座席をまるまる埋め尽くしてますもんね。

……いや……頑張りすぎじゃないですか？

「み、みちるさん」

「何かしら？」

「終了ということでもいいですか？」

そろそろ満足でしょう？

「そうね、服と小物はこれでいいわね」

……

「後はお昼が遅くなってしまったから食べてから見に行くわよ」

「ま、まだ………了解しました」

確かに手持ちの物は少なかったですけど、そんなに一気に増やさなくてもいいんじゃないですか？

朝食を食べ終わったわたしたちは、用意をして早々に家を出た。みちるさんが運転する黒い車に乗せられ、普段の服装と好みを聞かれたので、『値段が高くなって、シンプルで動きやすいパンツルックです』と答えたら、無言のまま連れ歩かれる事に……。基本的にわたしの言ったベースは抑えてくれたようで、後は……。ひたすらみちるさんの指示の元着せ替え人形と化してました。服だけじゃなく、みちるさんの見立てで揃えられた小物は、センスの良さがわかり派手なものが苦手なわたしが気に入るように選ばれていて……。そういえば……

「みちるさん」

「どうしたの？」

「この、買い物のお金って……」

「ああ、気にしなくていいのよ。ちゃんと預かってきているから修さんか……。なんか申し訳ないな。」

「あの……ありがとうございます」

「わたしたちが好きでやってるのよ」

うん、ありがとうございます。

「お昼は何か希望ある？」

「いえ、なんでもいいですよ」

「じゃあ、適当に入るわね。ああ……。あれでいいかしら」

話してる途中でちょうど進行方向左手に見えたファミリーストランに入る。

うん。朝がどっちつかずな感じだったから、はっきり洋と言える物

を食べよう。

「後は何を見るんですか？」

注文したえびグラタンを食べながら、ミートドリアをついついてるみちるさんに質問する。

「靴と……下着類ね」

「あ、ああ……そうですか」

そんなものもありましたね……

下着とか着てればいいでしょ？改めて買いに行くと言われるような物だという認識がない。

み、みちるさんが選ぶの……！？

「ユキちゃん……大きいのね……」

はい。みちるさんが選ぶんです。

何故……そんなに楽しそうに人の下着を選べるんですか……

「た、唯の脂肪です……」

何故……周りの女性人が睨んでくるんですか……

「……敵が増えるわよ」

何故…みちるさんまで睨むのですか……

「そ、それより、適当に選びましょう」

「却下よ。ユキちゃんも女の子なんだから、ちゃんと気にした方がいいの」

「えっと…そうです…けど…」

そんな、誰も見ないようなものにお金かけてもね……

「はぁー。本当にユキちゃんは乙女心を失ってるわね」

「お、乙女心!?!」

「普通ユキちゃんくらいの年頃なら、もっと買い物でキラキラすると思うのよ」

「キラキラ…ですか……?」

「そうよ。キラキラ」

と言われましても……

今更、「わー、これ可愛いー」とか…?
うむむ…

「ユキちゃん、これとこれならどっちが好き」

「う……」

そんなに、キラキラした顔で見られても……ああ、これが……
えっと

「ど、どっちも大人っぽくて好きですけど……」

その、右手に持ってるブラウンの花柄刺繍はみちるさんに似合いそう。

「けど？」

「右手のは凄くいいですね」

「じゃあ、一つはこれでかくて」

「みちるさんに凄く似合うと思います！」

「……………」

うん、うん凄く良い。

「ユキちゃん」

「はい？」

「今は、ユキちゃんの物を選んでのよ？」

「あつ、はい。あの……左手のやつで御願ひします」

「右のこつちじゃないの？」

「いえ、だから、それはみちるさんに似合うと思うんです」

「……………そ、そう」

あれ？

ああ……………ほら、他の人に選ばれるの恥ずかしいでしょ？

「そうです。だからこれはみちるさんのです」

よし、ここはわたしだけじゃなく、みちるさんにも恥ずかしい思いをして貰いましょう。

「わ、わたしのは良いのよ！」

そんなに嫌がらなくても……………

センスを疑われてるわたしが似合うと言ったから嫌だった…とか？

「……あつ、じゃあ、あの……」
「他のも選ぶわよ」

あつ……

みちるさんは他の商品を見に奥へと歩いて行く。

……ホントに似合つと思つたんです。

「持てるかしら……」

どうでしょう？

「一回で行くんですか？」

「……無理ね」

はい。

「そうですね」

「二回に分けましょう」

「はい」

うーん……

二回でも厳しくないか？

二人で持てるだけの荷物を両手にぶら下げ玄関に入ると、美味しい匂いが漂ってきた。

「あら？帰ってるのね」
「和志さんですか？」

修さんの家に帰ってきたのに和志さんの名前が出るのは変かもしれないけど「食事の匂い」＝「和志さん」
今更、修さんが料理出来るとか言われてもイメージが湧かないし……

「そうよ」

言いながら、みちるさんがリビングのドアを開けた瞬間、良い匂いが強くなる。

「おっ？お帰りー」

「ただいま」

「あ、ただいま帰りました」

か、和志さんがエプロン着けてる……保父さんですよ……保父さん

「あれ？荷物それだけ？」

「一回では持つて上がれなかったのよ」

「だよ。修がもう帰るって連絡あったから、ついでに持つて上がって貰おうか？」

「ああ、じゃあ御願いますわ」

あー、でも！

「一人では無理じゃないかと……」

「うん。僕も鍵持つて行くから大丈夫だよ。取り合えずその間に二人は手洗いとうがいしておいでよ」

「あっ、はい」

「御願いな」

みちるさんより先に手洗いうがいを済ませた後、リビングに置きっぱなしにしていた荷物を部屋に運び入れる。
少なくともこれの倍以上？

整理が大変かも……

最後の方は、ぼへーっとしてただけだから、みちるさんが色々買ってたみたいだけどあんまり記憶に残ってないし。

「ユキちゃん」

「はい……」

うわー

「一回では運びきれなかったよ」

そこには、荷物を両手にぶら下げた修さんが。

「ま、まだありました？」

「そうだね。みちるが行ったから、その分で終わりだね」

いつの間にか、みちるさんが行ってくれたんだ。

「あ、お帰りなさい」

「ただいま。今日は楽しかったかい？」

「はい。あの、色々ありがとうございます。今日のお金も」

「それ、みちるにも言った？」

「えっ？はい……」

「みちるに、わたしたちが勝手にやってるんだーとか言われなかったかな？」

「い、言われました」

ばっちりです。流石に良く御存知ですね。

「そういうことだよ。ユキちゃんは何も考えずにされときなさい」

「あ、ありが………はい」

「うん。じゃあ、荷物は取り合えず部屋に入れてしまっうね。クロ―ゼットにしまっうのなんかはみちるに手伝って貰いなさい」

「分かりました」

「修―、みちるが戻ってきたら晩御飯にするよ―。用意して来て」
「分かった」

「ユキちゃんは料理を運んでくれる？」

「はい」

「シチユ―……」

リビングには食欲をそそる匂いが溢れていた。

「そうそう。やっぱり寒い日にはシチユ―だよ。ホワイトにしようか迷っただんだけど、今日はブラウンな気分。捻りも無いビーフシチユ―だけどね」

「美味しそうです」

「美味しそうじゃなくて、美味しい、が正しい」

「はいはい。分かった分かった。ユキちゃん、残りの荷物も部屋に入れておくわよ」

「あっ、はい」

「うわ―、みちる冷たい。修、躰がなってない！」

「はいはい。分かった分かった」

「なんだよ、二人して―。ユキちゃん、こんな大人に染まっっちゃダメだよ」

「えっと………？」

仲良い会話に入り込めないので、そつと見させて下さい。

「ほら、ユキちゃんが困るから」

「ユキちゃん、みちるの躰は頼んだよ」

「は？えっ……」

「はい？馬鹿な事言っていないで食べるわよ！いただきます！！」

「あつ、もう。いただきます」

「「いただきます」」

「ほんと、みちるは口が悪いなー。そんなんじゃ、生徒達から怖がられるよ。ねえ、ユキちゃん」

へっ？えつと、みちるさん……？そんなに見なくても口が悪いとか思っていないですよ？

「怖がられたりしてないですよ。保健室の綺麗な先生は優しいってみんな言ってます」

治療も丁寧だし人当たりもいいから、結構人気があるんじゃないかな。

「それは普段のみちるじゃないからでしょ？仕事モードのみちると普段とを一緒に考えちゃダメだって。普段のみちるが保健室にいたら、殆どの生徒が怖がるよ」

「仕事中に普段の通りで話すことなんてないからいいのよ。万人に好かれようなんて思っていないわ」

「だとしても、家族にも愛情を！ユキちゃんにも怖がられるよー？」
ん？そこでわたし？

「えっ！？ユ、ユキちゃん……？」
「怖くないです！」

そんなに心配しなくても、和志さんだって本気で言ってるわけじゃないですよ。

「そうよね」

「そうです。みちるさんは、綺麗で格好良くて優しく可愛って、ちゃんと分かってすから」

「……………」

「……………だって」

「……………あ、ありがとう……／＼／＼」

「はいはい。ごちそうさま」

「あっ、ご馳走様です」

「……………」

「……………」

いつの間にか、みんな食べ終わってたのか……

「チエストなんかも買わないとね。それまでは使うものだけ出すようにしなさい」

「はい」

御飯を食べ終わり、みちるさんに手伝って貰いながら荷物の整理をする。

「下着は一度洗うから一つに纏めておいて」
「分かりました」

袋の中身をチェックしながら、言われた通りに下着類を探し出す。

「あれ？」

これって……

「どうしたの？」

「いえ、あの……」

発掘した下着の袋から、疑問に思った物を取り出す。
うん。ブラウンの花柄刺繍??

「あっ、そ、それは……!」

こつちを買ったんだっけ?あれ?でも袋の中に見覚えのあるデザインの下着が見える。

「いいのよそれは!」

「えっと……」

「わ、わたしに似合うのでしょうか!??」

あ……

「はい。似合います」

わたしが言ったやつ……買ってくれたんだ。

そういう心遣いが、みちるさんの優しさだなーって思います。

「それで全部ね？洗っておくから貸しなさい」

「えっ、あの自分でやりますよ」

「いいのよ。ついでだから」

「でも…あの……」

食事も洗濯も掃除も、お風呂を洗うことでさえ気付いた時には終わってる。

ここに引越してから何かをして貰ってばかりで、わたしが何かをするという事が無い。

「男性陣と一緒に洗濯物だと気を遣うでしょう？だから、わたしのついでなのよ」

いえ、確かに気を遣うかもしれませんが…

「やっぱり、お風呂とかお手洗いなんかも問題かし」

「あの！わたしは何をしたらいいんでしょうか！？」

「ど、どうしたの急に？」

「わたし……何もしてないです。みなさんに何をしたらいいんですか？何が出来るんでしょう…」

「そうね…わざとユキちゃんに何もさせてないわけではないのよ？今までの生活が抜けないのね……」

「う、ごめんなさい」

「謝らなくてもいいの。きつと、これからよ。みんな仕事があるからね。色々頼む事になると思うわ。だから今のうちくらいはゆっくりしておきなさい」

「そうですね。……分かりました」

分かりました……！

一日でも早く、みなさんの力になれるように頑張ります！！

第26話(後書き)

あれ？みちるさん？？

デレたの？今デレたよね？？

ってか、デレデレだよね！！？

…しかし……ユキちゃん響かないね。

第27話（前書き）

やっと年末まできた。

ここまで現実と差が開くとは……

第27話

「……ちゃん」

「……」

「……ちゃん」

「……」

「……ユキちゃん!!」

はっ???

な、何…和志さん……?」

「ユキちゃん!…起きたかい?」

起きた?

「あ………はい」

真っ暗な室内。

「……大丈夫?」

またか…

「大丈夫です」

言うことを聞かない身体を起こし、汗で纏わり付く髪の毛を手でかき上げる。

「…みちるを呼んでこようか？」
「だ、大丈夫です。お騒がせしてすみません」

仕事で疲れている修さんを起こしてしまう事がつらい。
こうやって、夜中に起こしてしまう事も引越しをしてから何度かあった。

その度に、修さんがドアの前で根気よく声を掛けてくれる。
申し訳ない…

「ユキちゃん…ここにいるのは……つらいかい？」

「そんなことないです！」

遠野の家にいるより断然今の方がいいです！

「…すまないね」

「本当に皆さんと一緒にいれて嬉しいんです。だから…あの……ちよつと、夢見が悪いだけなんです…」

「そうか。分かった……。部屋にいるから何かあれば声を掛けて
「はい。…すみません」

遠ざかる足音に、聞こえないくらいの声で謝る。

どこにいても迷惑になるのかな…
はあー

枕もとの時計に目をやれば、まだ夜中の2時を回ったところだった。
寝なければいい、なんて分かっているけど…

食事と同じで睡眠もColor coating《補色》の回数を
減らす事が出来ると聞いて、なるべく取るようにしたい。

今日は31日。

もう今年も最後の日となり、24時間も切ったわけだ。

みんなで年越しして、近くの小さな神社に初詣に行くと聞いていた。

明日は香山の家に新年の挨拶に行くとは聞いていたから、睡眠を取れるうちに取っておいた方がいいのだけど…

はぁー

二度目の溜息をつき、覚悟を決めてベッドに寝転ぶ。

今日は、もう夢を見ることはないと自分に言い聞かせて目を瞑った。

見ない。

大丈夫。

見ない。

大丈夫。

見ない……………

大丈夫……………

……………

「ユキちゃん!!」

な、何っ？

耳元で聞こえた大きな声に、急速に覚醒していく。

ぼんやりとした視界は何を映しているのか判然とせず、頭が処理することを拒んでいるみたいだ。

その中で自分の荒い呼吸と髪の毛が不快に張り付く程の汗で、またやってしまったのだと頭の隅で理解した。

「はぁ…はぁはぁ……………」

全く……………一日に二度も起こしてしまうなんて…

どれだけ修さんに迷惑をかけ

あれ？修さん？耳元？？

「ユキちゃん」

やっぱり耳元で聞こえた優しい声に閉じていた目を再度開く。

「み、みちるさん？」

ハッキリしだした視界。

眉間に皺を寄せたみちるさんの顔が目と鼻の先にあった。

「ユキちゃん……」

「…ど、どうして」

慌てて身体を起こしてみちるさんと距離を

「ユキちゃん！」

「ふえ？」

背中と後頭部にまわされた腕に優しく力が込められる。

気付いた時には、みちるさんに抱きしめられていた………
何故？

「あ、あの！汗臭いんで！み、みちるさんの服が汚れちゃ

「大丈夫よ」

そう言いながら、汗で絡まった髪の毛を手で梳くように、ゆっくりと撫でられる。

「み、みちるさん……」

「……ユキちゃん」

みちるさんの腕の中で強く抱きしめられたわたしは周りを見ることも出来ず、唯みちるさんの胸に頭を預け、優しく響くみちるさんの鼓動に耳を傾ける。

みちるさんの鼓動に引つ張られるように、自分の荒れた心音と呼吸が落ち着いていくのが分かる。

「…みちる？」

自分が落ち着いたと言える状態になった頃、ドア越しにみちるさんに呼びかける声が聞こえた。

今度こそ修さんだろう。

修さんは、わたしの部屋に無断で入ってくることはない。

だから、わざわざみちるさんと呼んで来てくれたんだ……

「あ、あの……」

みちるさんは修さんの呼びかけに答えず、わたしを無言のまま抱きしめている。

「…みちる。どうする？」

もう一度聞こえた修さんの声。

「……連れて行くわ」

そう言いながら、ゆっくりと抱きしめられていた腕から力が抜かれた。

それまでぴったりとくっついていたのに、みちるさんとわたしの間

に隙間が出来た瞬間今まで感じなかった寒さに、思わず震える。

「大丈夫よ」

「えっ？」

そつと羽織らされた毛布ごと抱き締めるように身体を支えたみちるさんの腕が、そのままわたしを立たせると、ドアに向かって歩いていく。

どこかに行くの？

「ユキちゃん……大丈夫？」

ドアの外に立っていたのは修さんだけでは無かった。
心配そうな顔をした修さんと和志さん。

「ごめんなさい……」

「いいんだよ。謝るような事はない」

「そうだよ。そんなに全部溜め込む必要なんて無いんだって！」

「迷惑ばかりかけて……」

「そんなこと思ってもないよ。もっと頼ってくれてもいいくらいだ」

「色んな事がいっぺんにあったから疲れてるんじゃない？ ゆっくり休んだ方がいいよ」

「そうね。ユキちゃん、身体だけでなく心を休めることも大事なのよ？」

心？……ですか…

「ああ、引き止めてしまったね」

「ホントだ。身体が冷えて風邪引いちゃうよ」

「みちる。頼んだよ」

「ええ。ユキちゃん行きましょう」

「え？」

ど、どこに？

「あ、あの……みちるさん？」

わたしの背中にまわされたみちるさんの腕に導かれるまま、隣の家に入る。

「何？」

「あの……どうしてここに？」

「寝るためよ。でもその前に着替えた方が良さそうね」

やっぱり……

「迷惑ですよね……」

「何のこと？」

「修さんの睡眠を邪魔して……」

追い出されたってことかな。

「わたしが連れて来たの」

…知ってますよ。今もまだ背中に腕がまわされていますし。

「でも、そうしたら今度はみちるさんの睡眠を邪魔してしまうかもしれません。なので、寝ないことにします」

はい。そうします。

Color coating《補色》に影響してくるかもしれないけど
日常生活に支障が出るくらい迷惑をかけるなら、寝ない方がまだマシだ。

「却下よ」

「いえ、ほら……わたし寝なくても大丈夫なので」

「寝た方がいいのでしょうか？」

「いや、まあ……どちらかと言えば？くらいなのでいいです」

その代わりに……Color coating《補色》は御願いしませぬ。

「寝るのよ」

「だ、大丈夫ですから！」

「却下よ」

「だ、だからみちるさんが寝れなくな

」

「決定事項よ」

どうしてー！

「汗で身体が冷えるから着替えなさい。ああ、ちょっと待って……」

バタバタと寝室から遠ざかる足音を聞きながら、確かに纏わりつくシャツなんかの不愉快だと感じて着替えを…

ああ、衣装ケース置いたままだったんだ。

みちるさんの部屋に置きっぱなしにしていた衣装ケースから、ジャージの下とトレーナーを取り出す。

「ユキちゃん、はい」

着替えようとした時に戻ってきたみちるさんがビニール袋を差し出した。
受け取った袋の中身を覗き込んで……

「濡れタオル？」

「ホットタオルよ。着替える前に軽く拭いておくといいわ。それともシャワーにする？」

「あ、いえ。タオルをお借りします」

みちるさんからタオルを受け取る。

少し熱めに固く絞られたタオルで顔を拭くと、思いの外スッキリした。

そのまま、首筋の汗を拭っていく。

「…背中……拭きましょうか……？」

「えっ！？……あ、あの………」

掛けられた言葉でみちるさんの存在を思い出してしまった……

思わず、胸元を拭いていた手を止めて固まってしまった。

い、いえ……同姓だし……お医者さんだし……いいんですけど……
そういえば、ほら……前回のシャワールームでも見られましたし……

「あう………」

なんて、考えてる間にビニール袋から新しく取り出されたタオルで背中を拭かれてるし！

「強すぎる？」

「い、いえ。気持ちいいです」

「そっ?」

実際、恥ずかしさはあるものの暖かくて気持ちいい。け、けどっ!!

「後は大丈夫です!!」

「ああ、そうね」

なんで、そんなに冷静に対応するんですか。なんだか恥ずかしがってる自分の方が変みたいじゃないですか! い、いや……ちょっと考えてみたけど、二人して恥ずかしがってたらもつと居た堪れない。うん。みちるさんは落ち着いといて下さい。

「洗濯物は朝一緒にまわすから」

「すみません」

汗を拭き終わり新しい服に袖を通し、タオルと脱いだ服を一纏めにして渡す。

「気にしないでいいわよ。なんなら、明日の洗濯はお願いするわ」

「はい、是非!」

「それじゃあ、朝までもう一眠りするわよ」

「あ、はい」

前回と同じようにみちるさんがベッドの奥に行ってわたしを見る。うん?

えっと……そっいっつと??

「おやすみなさい」

「はい。おやすみなさい」

みちるさんの体温を感じながら静かに目を閉じる。

「…………ユキちゃん」

「はい？」

布団が温まってきた頃、もう寝たと思っていたみちるさんが突然口を開いた。

右に顔を向けると暗闇に慣れた視界に、うつすらとみちるさんの横顔が見える。

「やっぱりいいわ…………」

「え？」

瞳を閉じて上を向いたままのみちるさんの横顔を見ながら話しの続きを待つ。

「明日。…………明日起きたら話があるの」

「分かりました」

「…………おやすみ」

「おやすみなさい」

それからしばらくみちるさんの横顔を見ていたわたしは、そのまま目を閉じる。

ああ…………今日は…………きっともうあの夢は見ない…………

あったかい……
ママ……パパ……
うー……ん……

「……よ……」

なに？……まだ……ね……むい……よ……

「……お……の……」

もう……ちよっ……と……

「……ユキ……よ……」

『……まだ……寝れる……よ……』

『……もう朝よ……』

『お布団……ふかふか……』

『……暖かい？……』

うん……ホカホカ……

『ママも……寝る……の……』

一緒に……

「キヤ……！……ちよっ……！……」

ほら……もっと暖かい……

『ね……気持ちいい……』

『……………そうね』

ママと一緒に……………久しぶり……………

……………あれ？……………

寝る前……………オヤスミのちゅう……………して……………ない？

うー……………ん……………今する？……………する！

『ママ……………』

『ちょ……………うんん！……………』

よし……………あとは……………ママは抱き枕……………ぎゅ……………

……………あれ？……………そういえば……………オヤスミのちゅう……………ほっぺたじゃ……………な
かった？

久しぶり過ぎて……………どうだったかな……………

……………

久しぶり……………？

……………何が？

オヤスミの……………ちゅう……………が？

『……………ママ……………？……………』

『あの……………ユ……………ユキちゃ……………』

はい？

……………はい？……………？

「す、少し……………苦しいわ……………」

違うー!!ママじゃない!?

「Noooooooo!!」

「ふう」

ママだと思って思いっきり抱きしめていた腕を解けば、わたしの胸から開放されたみちるさんが、小さく息を吐き出した。

「み、みちるさん?????」

「な、何かしら?」

うん、間違いなくみちるさんです!

夢?これは夢なの?

ああ、ホントに久しぶりにいつもと違う夢を見た気が

「ユキちゃん??」

みちるさんの右手が、私の左頬を撫でる……

「あ、あの……」

「どうしたの?」

「そのまま、頬を抓ってみて貰えますか?」

「は?」

いや、だって……凄く感覚がリアルなんです。

いやいやいや……そんなわけない……これは夢だ!

「夢だ……夢だ……夢だ……」

「ユキちゃん。おはよう」

認めない！これは夢だ…

「夢だ…夢だ…夢だ……ゆ」

「ユキちゃん！！！」

「ふえ！！！」

自分に言い聞かせるように目を瞑って呪文を唱えていたのに、みちるさんの呼び掛けに遮られてしまったわたしが目を開けると、みちるさんの顔が真上にあった。

ど、どういう状況だ??

わたしの頭の横に両手をつけて……

ああ、覆いかぶさるように乗っかかっているわけですね！
夢決定！！！！！！

「夢だ…夢だ…夢だ……ゆ」

「夢じゃないわよ？そろそろ起きなさい」

だ、だって！！！！

これ認めちゃったら……

「わ、わたし……キ、キス……」

「ああ……お、おはようの……挨拶ね」

した?????

オヤスミのちゅうのつもりだったけど……しちゃった?

やっぱり、あれも夢じゃないの!!!?

しちゃったの……???

……ほ、ほっぺたでしたよね?

「頬へのキスが普通だと思ってたけど…海外だもの…色々あるのね…」

「のぁー！ー！ー！ー！ー！ー！」

何やってるよわたしー！ー！ー！ー！ー！ー！

寝惚けて襲うとか、どんな欲求不満ですかー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「そ、そんなに嫌がらなくても」

「ごめんなさい！あぁー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！申し訳ありません！」

「謝る必要はないわ」

「すみません！取り返しのつかないことを！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「おはよの挨拶なのでしょう？…い…嫌ではないから…」

いやいやマウストウーマウスでしっかり、ばっちり…

そんなの挨拶じゃないしー！ー！ー！ー！ー！ー！

「申し訳な」

「ユキちゃんは、そんなに嫌だったの？」

「…はぁ？」

えっ？嫌っていうか…

あれ？別に嫌じゃないな…

うん？？

挨拶…？

あれ？

「わたしとは…嫌だった？」

「…嫌じゃない…みたいですよ…」

けど…？

「そう」

みちるさんの綺麗な顔がゆっくりと近付いてくる……
えっ……？

「……………うん！！」

みちるさんの匂いが鼻先を掠める距離にあると認識した時には、自分の唇をみちるさんの唇が塞いでいた。

……………あれ？

チュッ

「……………おはよう」

「おはよう……………いびきます…？」

「……………分かった？現実よ」

……………

「……………」

……………

「ユキちゃん……………？」

……………キス？

……………挨拶……………？

「まだ寝惚けてるの？」

「あ、起きてますー！」

起きてますよ？

でも……つまり……これは現実で……

「今のは……キ」

「挨拶よ」

ああ、挨拶ですね。

「あ、はい。起きました。おはようございます。はい」

「そ、そう？じゃあ起きましようか」

「はい。起きます。はい」

ピンポン

「先に行くから急がないでいいわよ」

「あ、はい」

急ぎ足で出て行くみちるさんの後姿を見送る。

無意識に指を唇に沿わす。

挨拶……？

……キス……

キス……？

嫌じゃない……

挨拶……

……挨拶……か……

第27話（後書き）

ユキちゃん……

いい感じに混乱中やね。

みちるさん……

いい感じに暴走中やね。

第28話（前書き）

長くなってきた、サブタイトルとか章管理とか活用しないとなーと
思っ今日この頃。

感想とか…なんやかんや待ってます!!

第28話

えーっと……なんだっけ？

ああ、着替えなきゃ……

あっ………

「服……無いし……」

そりゃそうだ。

大体ここに置いてある、この衣装ケースがおかしい。

……他人ん家だし。

この前来た時からこの衣装ケースの服を着てたけど、流石に洗濯後の服はここに片付けに来てる訳じゃない。

取り合えず、みちるさんに言って着替えに戻るか……

「あの、みちるさん。きが」

「ユキさん!？」

「はい。………へっ?」

リビングにいるであろうみちるさんに声を掛けながら入室したつもりだったのに、横から掛けられた自分の名前に思わず返事を返してしまう。

えっと………

「蘭………さん?」

なんでここに???

「何故ここにおられるのですか？」

そう、それ！

「あ、えー……」

何故……でしょう……？

「ユキちゃん。蘭がいる理由は今日が年末だからよ」

うん？それって、どついう理由？

「蘭。ユキちゃんがいるのは……用事でさつき来たのよ」

……そうなの??

「そうなのですか？」

えっ？わたし??

「は、はい」

そつらしいです。

何故隠す必要があるのか不明だけど
伺つようにみちるさんの顔を見る。

……うわあ、ダメ……

さつきの……

なんだか、つい口元に目が……

「何か御用時でも？」

「えーと……」

な、なんだろう？？

「朝の挨拶に」

「朝の……挨拶ですか？」

……挨拶……って！！

「ユ、ユキさん。大丈夫ですか？」

「な、何がですか！？」

「いえ、あの……顔が赤いようなので？みちる姉さん、ユキさん熱でもあるのではないで」

「か、風邪かしらね？気をつけなさい」

うわ……みちるさん……

「……何故、二人して顔が赤くなるのでしょうか……？」

そんなことを言われても……

「……風邪がうつったのかしら」

「……」

「まあ……いいのですが……」

……

いたたまれません！

「あ、あの！着替えがまだだったので着替えてきますね！！朝早くからお邪魔してすみませんでした！！」

「そ、そうね」

話しを切り上げるチャンスに乗り、リビングをあとにする。

「…… 11時前ですよ？朝早いでしょうか……」

リビングのドアを閉める前に聞こえた蘭さんの独り言……

…そ、そんな時間になってましたか。

後はみちるさんに誤魔化して貰いましょう。

ピンポーン

へ？

丁度玄関で靴を履こうとしていた所に鳴った呼び鈴に、ドアを開けようとしていた手を止める。。

えっと…対応した方がいいのかな？

ガチャガチャ

と思ったら……ドアが開きそうです。

「おーい。入るよー。ってうわっ！ユキちゃん！！…び、びっくりました……」

「あ…えっと……お、おはようございます」

玄関のドアを開けたら、前にわたしが陣取っていたものだから驚いたのだろう。

和志さんが、驚いた顔のまま固まっていた。

「ああ、やっぱり和志ね……。返事があるまで待ちなさい」

「えっ、ああ。ごめん。ユキちゃんもごめんね」

「いえ。わたしの方こそ驚かせてしまったみたいで……」

「和志さん。こんにちわ」

「あれ？蘭ちゃん、こんにちわ。もしかして待たせた？」

「いえ。時間も決めていなかったなので、確認の為に寄らせて頂いたのですよ」

「そっかそっか」

「和志さんは、何か御用事でも？」

「ああ。ユキちゃんの着替えが必要だと思って。あ……しまった……」

ガチャ

「閉め出しかい……」

「ご、ごめんごめん。ほら……扉が勝手にね……？」

和志さんが開けたドアの外には、修さんが衣装ケースを抱えて立っていた。

……閉め出しですね。

「ユキちゃん。おはよう。どうだった？よく眠れたかい？？」

「あ、おはようございます。はい。ゆっくりと」

「……あの……話が見えませんが……」

「あ……」

「……」

そつえば蘭さんがいましたよね……

みちるさん……どうしますか？

「ああ、そつえば時間を決めてなかったね。蘭、お昼は？」

「……まだ……です」

「そうか。じゃあ、もう30分程待っていてくれるかい？皆で食べよう」

「はい。…私はそれで構いません」

修さんとの会話をしながら、蘭さんがチラチラこっちを見てる――

み、みちるさん……助けて下さい？

「はぁー。それで？その荷物はユキちゃんの着替えなのね？」

「そうだよ。全部は運べなかつたけど、取り合えずこれだけ先に運んでみたんだ」

「えっ？」

まず、何もわかってない蘭さんと、わたしの声が八モる。

だって・・・今日着る分だけあればいいんじゃないんですか？

「えっ？」

わたしのクエスチョンに、和志さんと修さんが八モる。

ど、どういうことですか？

「みちる……何も言ってな」

「今朝言おうと思ってただけけれど……今起きたところなのよ……」

「あぁ……えっと……」

「はぁー。……二人は先に食事の用意をしておいて」

「わ、分かった。……ごめん」

「すまない……。後は任せるよ」

二人が荷物を置いてドアから出て行く。

「私も席を外した方がいいのでしょうか？」

後に残された、蘭さんが疑問を口にする。

「蘭にも説明が必要でしょ。まずはユキちゃんへの説明が先だから少しリビングで待っていて」

「…分かりました」

蘭さんの背中がリビングに消えた。

「……ユキちゃん。部屋に行きましょうか」

「はい…」

真剣な空気に促され、少し緊張しながらみちるさんの後に続く。

さっき出てきたばかりの寝室のドアを閉め、みちるさんの指示に従いベッドの端に腰掛ける。

「寝る前に言おうとしていた事なのだけれど……」

「はい」

「……どづいつ風に言えばいいのかしらね……」

そんなに躊躇うような事なのですか？

「それは……さっきお二人が持ってきた荷物に係わる…話ですか……」

この質問の返事が Yes ならば…… Yes ……ならば……わたしは……

「そうね。…ユキちゃんも気付いてしまったのかしら」

「……そう…ですか」

出て行かなければいけない…

「…………嫌かしら？」

嫌とは…言えない…

「そんなことはないです……………」

これ以上迷惑を掛けたくない…

「本当に？無理をしなくてもいいのよ？」

優しすぎるこの人たちを…

「いえ。元々丈夫な身体ですし」

わたしが…………

「えっ？ユキちゃん？」

甘えた末に…………

「どこででも生きていけますから」

一方的に…………

「そ、そんなに酷い環境ではないつもりなのだけど…………」

傷つけてしまう前に…………

「…御世話になりました」

離れるべきなんだろう。

「はあ！？え、えつと……ユキちゃん？」

取り合えず、どこに身を寄せようか…

遠野の家に帰るなんて、それこそみんなに迷惑になる。

えつと…なんとか定住出来る場所を見つけるまではカプセルホテルか……

いざとなれば公園でも可。

こういう時は生身の人間じゃないというのは強味だな。

あれ？というが無理して生きなくても……

いやいやいや、奏音ちゃんと約束したし……

大体、生きるということを止めるのは相当難しい。

というか…死に方不明……

やっぱり、どこかしらで暮らすしかないな……」

そういえば、こういう事態になった以上奏音ちゃんに報告する必要がある。

あー……。なんて説明しようかな。

「……ちゃん！」

ああ…でも、言ったら部屋を提供されそう……

あっち行っても、こっち行っても迷惑をかけるのかな……

「……ユキちゃんーんーん！」

どちらにせよ、ここを離れるのは奏音ちゃんにはすぐにバレル。

「……取り合えず……行かなきゃ……」

このままだと動けなくなりそうだから、停滞しそうな自分の思考を煽るように呟いて無理矢理動く。

「ユキちゃん！どこに行くの!？」

ドアの前に立ちはだかったみちるさんが、焦ったような顔でわたしを見てる。

ああ……荷物……か？

「すみません。荷物は後程とさせて下さい」

「ええ、そうね。荷物は男性陣に動いて貰いましょう」

「はい。……では」

「だ、だから！どこに行くつもりなの!？」

そのままドアに向かおうとしたら右腕を捉まれる。

「取りあえずは奏音ちゃんのところですね」

「……それは………どういう意味かしら?」

どういって……

「取り急ぎの……寝床確保………?」

「そんなに……」

えっ？

「み、みちるさん!?!?!?」

ど、どうしてそんなに傷ついた顔するんですか???
そんな顔させたく無いから出て行くのに……

「嫌だったのね……………」

……………?

何がですか？

何がですかー！

何がー！ー！？

「ど、どういう意味ですか？」

「わたしと暮らすよりも…奏音さんの方がいいという事ですよ」

「……………はい？」

ちよ、ちよっと待って下さい！どこにそんな選択肢があったんですか！ー！？

「ああ、そもそもわたしでは……………ダメだったのね……………」

「あの……………み、みちるさん？」

これは……………違う……………」

何か違うぞ……………」

どこで行き違った……………」

考えてー！ー！わたし！ー！

「わたしといる事は、ユキちゃんにとって苦痛だった？気付いてあげられなくてごめんなさい」

「全っ然！全く持って苦痛じゃないです！ー！ー！ー！」

「……………気を遣わなくてもいいわ」

「ちよつ！みちるさん!？」

「Color coating《補色》の協力くらいはさせて

ああ、……奏音さんがいるのね」

「ちよつと待つて下さい!?!?!」

話しの刷り合わせをさせてくれませんか!？

「……何が…いけなかったのかしら。……いつ…ユキちゃんの心を遠ざけてしまったのかしら……」

聞けーーーーーえい!!!

「あのですね。みち」

「わたしが無理矢理…キス……」

いえ!あれは……挨拶で……えっと……

「みちるさん。聞いてくださ」

「いいのよ。……これからは気をつけるわ」

「な、何がですか?」

「ユキちゃんは嫌かもしれないけれど、学校ではどうしても顔を合わせてしまうから。なるべく気をつけて」

「みちるさん!?!」

どうして、ここまで話しが噛み合わなくなったんでしょう……

「……二人には伝えておくわ。後のこともこちらでやっておくから

「聞いてください!?!?!」

「行きなさい」

あつ、ダメだ……
静かに部屋を出て行ったみちるさんは、全くこっちの話しに聞く耳を持ってくれそうにない。

えつと……

どういうことだ？

みちるさんの話しを聞く限りだと出て行けって話じゃなさそうだった……

つまり最初に勘違いしたのはわたしで、何故かみちるさんも更に上乗せ勘違い？？

えつと……えつと……？

取り合えず、みちるさんとちゃんと話しをしたいけど、今の様子だと無理かな……

一旦修さんのところに行くべきか……

リビングのドアを横目に見ながら玄関に向かう。

みちるさんが冷静になって出てきてくれないかな……

「……………！！みちる姉さん！？」

ん、何！？蘭さん？

みちるさんが何！？？

ガチャ

えつ？

「どこに行かれるのですか！？」

「ら、蘭さん……？？」

リビングのドアから飛び出すように出てきた蘭さんが、怒っている事を隠さずにわたしに詰め寄る。

「みちる姉さんを泣かせて、どこに行かれるのですかと聞いているのですー!」

「え?…み、みちるを…」

な……………てる…………?

理解できない。みちるさんが泣く…………?

何故…………

わたしの…せい…なの…………??

なんで…………そんな…………

「あつ、ユキさん!?!?」

蘭さんの言葉を聞いたわたしは、無意識に閉まりかけていたドアからリビングに滑り込む。

ソファアの横に立っているみちるさんがゆっくり振り返った…………

なんで……………

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………みちるさん……………」

「……………何をしているのかしら?」

えっと……………

「みちるさんを抱き締めてます……」

「……何故……抱き締められてるのかしら？」

それは……

「みちるさんが泣いてたから……」

「な、泣いてないわ！」

はい。涙も引っ込んだようです。

「みちるさん。聞いて下さい」

「……何かしら？」

「まず、根本的な質問ですが……わたしはみちるさんと住むのですか？」

「……ユキちゃんが……嫌だと言ったのでしょう」

いやいやいや！

「言ってますんよ！？」

「奏音さんの所に行く……」

そ、それは……

「わたし……あの……家を……出なければいけないのかと……誤解して……」

「……誰が誰を……追い出すのかしら？」

「いえ、あの……誤解だったようです……？」

「……じゃあ、ユキちゃんは出て行かないのね？」

「はい。出来れば……出て行きたくないです」

「出て行く必要はないわ……出て行かないでちょうだい」

「はい。あの…御世話になりなす」

「ええ…」

あと、あのー…

「朝の…嫌じゃないです」

「…」

「…」

「…そ、そう」

「…はい」

えーと…気きたい事も聞かないといけない事も色々あるんですが…
どっとうタイミングで離れるのがいいのでしょうか…？

わたしとみちるさんの身長差は…10cmくらいだろうか。
正面から抱き締めると、横に向けたみちるさんの顔が肩くらいにあ
る。

えっと…

ああ、みちるさんにやってもらったみたいにしたら落ち着くかな…

……

みちるさんのサラサラの髪を、ゆっくりと右手で梳くように撫でる。
一瞬だけ、わたしの腰に廻されていた腕に力が入ったけど、すぐに
わたしの肩に凭れ掛かる様に力が抜けた。

「みちるさん…」

「…何？」

なんだか…凄く良い匂いがするのですが…

思わず、腕に力を込めてしまう。

「…………ユキちゃん？」

みちるさんが、クエスチョンマークを浮かべながら少しだけ身動きする。

開いた隙間から伺うように見上げてきた瞳が涙の余韻を残し……
な、なんだろう……無意識に動いてしまいそうな身体をなんとか押さえ込む。

しよ、衝動が…………

吸血衝動じゃなくて……でも、それに似て抗うことが難しい……

キス……キス………したい……

あつ、違う。

挨拶……挨拶だよ……

……挨拶………だから……いいよね………？

身体が勝手に動き、引き付けられるように顔を寄せる。

みちるさんの髪の毛が優しく絡んだ右手で、そのままみちるさんの頭の後ろを支えるように添える。

一瞬だけみちるさんの瞳が驚きの色を持ち、その後ゆっくりと閉じられたのを見て、わたしも目を閉じた。

そつと、唇に触れる温もり。

そのまま、時が止まったかのような静寂。

身体に伝わるみちるさんの鼓動と自分の鼓動が大きく響き、それだけが時が止まっていないことを伝えているかのようだ。

もつと……

軽く触れているだけでこれだけ満たされるなら………

もつと…もつと……

その欲望に抗うことなく、少しだけみちるさんを引き寄せせる力を強くする。

軽く触れ合っついていみちるさんの唇と自分の唇が強く重なり、境界線が曖昧になるような、そんな錯覚を覚えた。

「…………ふう…ん」

「…………あっ」

みちるさんが漏らした吐息に、呼吸を思い出し唇を離す。

「あ…………はあはあ」

呼吸を再開したみちるさん……

上気した頬…………

さつきよりも潤んだ瞳……

薄く開いた唇……

もつと…………もつと…食べたい……

その思いのまま、さつきよりも強くみちるさんの唇を

「あのですね…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………？」

へっ？

第28話（後書き）

「こらこら！なんて羨ま

蘭ちゃん……もっと早く止めてもええんやで！！

第29話（前書き）

ストーリーの中で、現在あやふやになってる部分が多くあります。大分もつれた感じになってますが、そこはぐっと堪えて読んで下さい。

後の話で、少しずつ明確になる予定でいきたいと思います。

第29話

みちるさんの唇に触れるよりも先に横から聞こえた声に思考も行動も停止する。

いやいやいや……停止してる場合じゃない！

「もうそろそろ……よろしいでしょうか？」

……

えっと…？

目の前にある驚きで固まったままのみちるさんの瞳の中に、自分の驚いた瞳がある。

同じように固まっている人間を目の前にして、お互いに少し思考を取り戻したわたしたちは、それぞれ顔を離しぎこちない動きで顔を横に向けた。

「……蘭」

「……蘭さんですね」

「……」

「……」

「……何か……説明がありますでしょうか？」

「うぁー……」

「……な、な、な！」

ようやく状況を思い出した！

思い出しましたよ……！！！！！！

大慌てて、二人して距離をとる……
……い、今更ですか??

「お邪魔をして申し訳ありませんが」
「ち、違いますよ!??」

思わず言葉を遮ります。
全力で遮ります!!

「そ、そうね!い、色々理由があつて……!」
だつて!こ、これはですね……

「挨拶ですから!!」
「挨拶?」

「そうですよ。ねえ!みちるさん!!」
「……そう……ね」
「そ、そうですか」

そうです!挨拶です!!
挨拶、挨拶……
このキスが挨拶以外の意味を持つてたなら……

……ダメだ
挨拶……挨拶……
挨拶だから……それ以外の意味は無い!
……でも何故そんな衝動に……?
みちるさんを……食べたいと思つた……!?
違う!血だけで満足だから!!
だから!!……これは挨拶!挨拶なんです!!

「それより、蘭さん！何か質問ですか！？」

「…何か……と言いますか……。何もかもが疑問なのですが？」

「えっと……」

「そうですね……。まず基本的なところからなのですが、お二人は
どういう……一緒に暮らしになるのですか？」

「そうですね」

というか、そうらしいですね？

そういえば、どういう経緯でそういう話しになったのかは知らない。

「みちる姉さん。ユキさんは修さんと御結婚されたのですね？」

「ええ、そうよ。簡単に説明するなら……偽装結婚だから一緒に家で暮らすストレスを減らせるならば……わたしの方が良いと判断したの」

「そうですね」

そうですか……偽装結婚とかサラツと言いましたよ？

「あの……御迷惑をお掛け」

「迷惑してないわ」

します……

「……………」

はい。ありがとうございます……

「それで……お二人はどういう……昨日もお泊りに？」

「……ユキちゃんの問題が不安定だったから、無理矢理連れてきたの」

「お」

「あの……御迷惑をお掛け
「してないわ」

……してないと

「そうですね。ユキさんの体調も心配ですし、みちる姉さんが傍に居られるのは賛成です。それで……お二人はどういう…… みちる姉さん……分かりましたから睨まないで下さい」

あの……

「わたしも聞きたいことが……」

「なんででしょうか？」

「蘭さんは何故ここに？」

「年末だからよ？それに、そろそろ一緒にする良い機会だと思って」

えっと……確かに年末です。

それに、蘭さんが来るのは予定事項だったみたいで、わたし以外のみんなは普通に理解してた。
で？どういうことですか？？

「良い……機会……？」

「説明不足のようですよ？？」

「そんなことは……」

無いとは言えないけど。

「ユキさん。ユキさんは今誰と御飯を共にされていますか？」

「みちるさん、修さん、和志さん……？」

「そうですね。家族ですから」

うん。ありがたい事ですね。

「では、ユキさんが引越して来るまではどうだったのでしょうか？」
えっ？

「みちるさん、修さん、和志さん……？」

さっきと同じ回答だけど……そうじゃないの？

「そうですね。では……私はどう思われますか？」

「あっ……」

そうですね。みちるさんとは姪と叔母の関係だって言ってた。
正真正銘の家族じゃないですか……

「はい。そうですね。以前はわたしも御一緒していたのですよ？」

一緒にマンションに住んでる。それに前はみちるさんと一緒に暮らしてたって聞いた。

寧ろ、今蘭さんが一緒に食卓にいない方が不思議なくらいだ……
わたしが引越しをする前までは……一緒だった……つまり……

「わたしが……来たからですか？」

「そうですね」

「蘭っ！」

……迷惑……掛けてるじゃないですか……

「この前お話しをした時に言いましたね？」

…この前？

「何をですか？」

「ユキさんが私に何も話してくれないと」

「…そうですね」

「みちる姉さんも……修さんも話してくれなかったので気がつか
なかったのです」

「……………？」

「全員で食事をするとはなくなりましたが、和志さんが食事を持
つてきて下さって、私が食事する時も誰かがおられたので、何故皆
で食事をしなくなったのか……知らなかったのです」

「蘭…それは」

「はい。分かってます。というよりは、この前ユキさんと話しをし
て分かりました。私がユキさんを受け入れることと、ユキさんが私
を受け入れること……特に、ユキさんから私に心を開くまで待つて
おられたのですね？」

「……………え？」

わ、わたし??

「……………」

「で、でも……あの……この前も言いましたが蘭さんとは友達でいた
いと思ってますよ？」

わたしなりに受け入れたつもりなんですけど…

「はい。もちろん私もユキさんの事を全面的に受け入れていますよ
?ですから今回、年末で家族が集まるとういのを切欠にして今後の

食事を全員で…と思われたのでは？」

「……………」

「…そういってよ」

「蘭さんは…嫌じゃないんですか？」

わたしのせいで振り回されて…

「何故でしょうか？私としては喜んでいるのですが？？」

つまり……？

「やっと呼んで頂けるのですから。今後は是非食事も御一緒にしましょう」

ああ…はい……！

「よろしくおねがいします」

「ごちらせ。それで…お一人はどういう」

～
～
～

「……………」

「和志ね。御飯が出来たようよ」

電話かと思ったら、メールでしたか。

画面から顔を上げたみちるさんが、蘭さんに告げる。

「そうですね」

「あ、あの…さっき蘭さんが言いかけたのは何だったの？」

「ユキちゃん。御飯なのよ」

「えっ？あ、はい……」

「……ふふふ。らしいですよ。行きますよう、「キキさん」
「???.……はい」

「それで?ちゃんと話しは出来たのかい?」

朝御飯兼お昼御飯のピラフ……
海老……おいしい……

「ええ」

コンソメスープ……トマトの酸味が玉子でふんわりと……

「蘭にも話しは?」

キャベツのホットサラダ……

「ええ。問題ないわ」

「ふふふ」

このベーコンの旨味とキャベツの甘味が……

「それで?荷物は運んじゃっていいってこと?」

全ての料理がコンソメベースで、まとまりのある……

「問題ないわよ。ね?」

あー、和志さんに料理習おつかなー

「……………」

「……………」

「……………」

ふえ？

「は、はい？」

「……………」

「美味しいですか？」

「え？つと…あの…はい…？」

それはもちろんおいしいですけど、何故そんなに皆から注目されるのでしょうか…？

「そう」

「美味しいですね」

「うんうん。嬉しいなー！」

「いい事だね」

何故、そんなに微笑ましいものを見る目で…？

「あ、あの…？」

「ユキちゃん」

「はい」

「荷物は運んでしまっても問題ないかな？」

「あっ、はい。御願います」

「じゃあ、今日中にやっちゃおう」

あっ

「あの！和志さん」

「うん？」

「お邪魔になってしまつと思ひますが…よ、宜しく御願ひします！」

「……………うん？」

「……………」

あれ？

「えっと、あの……………今日から部屋をお借りして」

「いや、寧ろ二人ずつになつていいんじゃないの？」

「はっ？」

どういう意味でしょうか？

「二人ずつ？」

「そうだね。今までよりもユキちゃんは気が休まるんじゃないかな」

全く会話が噛み合つてないようなのですが？

「チエンジよ。チエンジ」

「ああ、そうだね。チエンジだと思えばいいかな。いや、これが正しい形なのか……………」

みちるさんと衆さんが言つてるチエンジの意味も分からない……………
話しを変えろということですか???

「え————と。なるほど……………」

何かに納得してる蘭さん…

「二人して何言ってるの？チェンジ…チェンジ…？」「わたしは和志さんと全く同じ状態です…」

「ユキちゃん！大丈夫よ。ユキちゃんの代わりに和志がこっちに来るから」

「へっ？何言ってるの？？僕は元々」

「わたしだけだから同性で気兼ね無く生活出来るでしょ？」

えっと…

つまり、わたしが和志さんを追い出した…？

「そ、そんな！！これ以上の御迷惑はお掛け出来ません。わたしの為に…」

「あの、ユキちゃんの為って言うか、僕は元々」

「気にしなくていいのよ！」

そんな…気にしますよ…

「わたしは…やっぱりお邪魔でしょうか…」

「邪魔なわけではないでしょ？」

「そうだよ。逆にユキちゃんに気を使わせてしまったんじゃないのかな？私たち大人がしっかりしなくてはいけないのに。駄目だね…」

…」

いえ……。修さんもみちるさんも一緒にいたいという気持ちを表に出すことも無く、普段からわたしの為に時間を使ってくれてる。

みちるさんなんか、修さんと一緒にいる時間を削ってわたしの為に

一緒に住むと……

「なんか、よく分からないけど……取り合えずユキちゃんが嫌じゃないなら今回の移動はOKなんだよね？」

「そうだね」

「んで、ユキちゃんは嫌じゃないって事だよね？」

「はい」

「はい。じゃあOKということだね」

和志さん、修さんみちるさん……ありがとうございます……

「あのですね……質問しても宜しいでしょうか？」

「かまわないよ」

「どうぞー」

「……いいけれど……」

「………？」

そんなに改まって……どうしたんだろう蘭さん。

「今……、どどういう状態なのでしょう？」

「と……」

「……どうい……うことかしら？」

「私の認識とユキさんの認識にズレのようなものを感じましたので」

「わ、わたしの認識ですか？」

えっと……

「わたしが修さんの家から移動してみちるさんの家にお邪魔する……」

「お邪魔ではないけれど……そうね。ユキちゃんが移動するで間違

いないわよ」

「それで今後は、修と僕、みちるとユキちゃんの組み合わせで住み分けする。合ってるよね？」

「そうだね。私もそういう認識だよ。ユキちゃんもそれで大丈夫かな？」

「はい。大丈夫です」

「……認識の違いはなさそうよ？」

「ええ。では、どなたが組み合わせに疑問を持っておられ
それは、今話す必要があるかしら？」

……ちゃんと、認識してますよ。

わたしも、この組み合わせは悪いと思ってます。

「蘭ちゃんから見て、今回の事は違和感があるってこと？」

「いえ、そうではなく。話しの内容に違和感が」

「例えば、ユキちゃんが私達の為に無意識に今回の選択をしたのかな？ そうだね。その可能性もあるかもしれない……」

本当は……修さんとみちるさんが一緒に住むべきなんですよ……

「いえ、あのそうでは」

「ユキちゃんは、わたしと住むのは嫌かしら？」

「嫌じゃないです！」

「即答だね」

あっ……

嫌じゃないけど、これはわたしの我が侂だから……

「うん、じゃあ何も問題ないよね？」

いや…わたしは問題ないけど……

「まあ…いいのですが……」

…そうですね。蘭さんから見ても違和感はあるんですよね。

「じゃあ、そろそろ食器片付けちゃうよ。修、荷物運びは任せた！」

「ああ、そうだね」

修さんと和志さんがそれぞれ動き出す。

蘭さんは、まだ何か言いたい事があるのか難しい顔をしているけど…

「ら、蘭さん？」

「みちる姉さんは」

「蘭？もういいかしら？夕方までに荷物を片付けてしまいたいのだけれど？」

「……分かっていて誤魔化しているのですね」

「…子供の好奇心は大事ね……でも、もういいかしら？」

「…わかりました」

ど、どうしてみちるさんは不機嫌になっているのでしょうか？

「あ、あのー！」

「どうしたの？」

「すみません！ー！」

わたしの選択が間違ってるなら、ちゃんと教えて欲しい…

「何を謝ってるの？」

「わたしの我が侷で…」

「意味が分からないわ。わたしと住むのはユキちゃんの我が俣ではないでしょう？寧ろ、わたしから提案したと思うのだけれど？」
「そう…ですけど……」

それは…みちるさんが大人だから……

「ユキさん。みちるさんが不機嫌なのはユキさんのせいではないですよ」

「「えっ？」」

「……そうでしょうか？」

もっと、わたしが落ち着いて、迷惑を掛けなくて大人の対応が出来ていれば……

「大丈夫ですよ。みちるさんが不機嫌なのは、私がしつこくみちる姉さんの逆鱗を撫でさすっているからです」

な、撫でさすってる？

「わ、わたしが不機嫌!？」

「そうですね。私は楽しく撫でさすっているのでいいのですが、ユキさんが怖がってしまわれます。もう少し大人の対応をお願い致します」

「!!!!……お、大人の対応ね…蘭………貴女、何か嫌なことでもあったの？」

「あら？失礼しました。私も人のことは言えませんね。少し表に出してしまいましたか」

えっ？蘭さん怒ってるの？

「……ら、蘭？」

「私達は何も分からない子供なのでしょいか？」

「……………」

「大人と子供。都合のいい時だけそういうくりにするのは止めて下さい」

……「こういうことをきちつと言い切る。蘭さんは大人だと思います。」

「……ごめんなさい。失言だったわ。わたし達の甘えね」

「その上でお聞きします。……私の感じている違和感をみちる姉さんは分かっていますか？」

「……分かっているわ」

「どうしたらいいですか……？大人の会話過ぎて付いていけません。」

「……正そうとは思われないのですか？」

「もう少し……わたしだけの問題ではないから……」

「……分かりました」

えっと……もしかして修さんとみちるさんが付き合ってるのを、わたしが知らないと思ってる？

だから、みちるさんはそれをわたしに隠したい……とか？

「あの」

「おい。蘭ちゃんはこっち来ておせち手伝ってくれろ？」

「分かりました」

食材の袋を抱えた和志さんが蘭さんと一緒にキッチンに入っていく。

「あの……」

「…わたし達も行きましょうか」
「……はい」

修さんとみちるさんの関係を知ってますよ。
って…言いそびれてしまった………

第29話（後書き）

むむ？

い、意外と蘭ちゃんって大人しいだけじゃなかったのね。

そして……ユキちゃん激ニブやね……………

第30話（前書き）

感想有難う御座います！！

ホント感謝感謝です。

皆様とのやり取りが、私の活力となつとります。

第30話

「ああ、来たね。先に邪魔になりそうな和志の荷物は避けておいたよ」

「ありがとうございます」

「運び込む順番とかはあるのかな？」

「後で片付けるから気にしなくてもいいと思うわ」

「じゃあ適当に運んでしまおうから」

「御願い。ユキちゃんは細かいものを纏めておいて。終わったらこっちに来て片付けましょう」

「わかりました」

増えた荷物も、まだ未使用の物が殆んどだから運びやすい。運ぶのも修さんがやってくれるし、受け取った荷物もみちるさんが仕分けていくから、あまりやることがない……

「あつ、ユキちゃん。洗濯物御願いできる？」

「了解しました」

そういえば、忘れてました！

やる事が無くなつて、どうしようか悩みだした瞬間にみちるさんが良いタイミングで助けてくれる。

…自分で思い出せ！！

「使い方は」

「大丈夫です」

「そう？じゃあ、浴室乾燥で干しておいてくれるかしら？」

「はい」

「ユキちゃん」

「えっ？あ、みちるさん」

バスタブの淵に腰掛けてポーっとしてたら、みちるさんが脱衣所に入ってきた。

「ど、どうしたの？」

「何がですか？」

「なかなか戻ってこないから何かあったのかと思って……何か嫌なこと思い出してしまった？」

えっ？

別に、何も……お二人の事をボケーっと考えてただけで……

「そんなに暗い顔で」

「く、暗い顔してますか？」

「何か悩み事があるなら言いなさい。一人で思い詰めては駄目よ」
「は、はい」

特に何も無いけど……

「ああ、お風呂も掃除してくれたのね。ありがとう」

「いえ、これくらいしかお手伝い出来なくて」

「あまり、気負う必要はないのよ。何かあれば御願いますから」
「はい」

「もう洗濯物が上がるわね。終わったら一度休憩しましょう。部屋の話しもその時ね」
「分かりました」

みちるさんの背中を見送って、洗濯物を手早く干していく。

浴室乾燥のタイマーをセットしながら、鏡に写る自分の顔を見る。
暗い顔……？

…自覚はないけど……してたらしい。

何考えてたっけ……？

……二人は……愛し合ってるんだなーって……

……
なんだろう……

確かにちよつと……

……
……もやつと……

……
なんでなのかな？

……
Color coating《補色》したら独占欲とか……？

はあー

うまくコントロール出来ない感情が気持ち悪い。

「あー」

こんなことしてる場合じゃない！

話があるって言ってたんだから、ちよつちよつと行かないと。

「すみません。遅くなりました」

「急がなくてもいいのよ。洗濯物ありがとう」

「いいえ。あつ、何か飲み物でも入れましょうか？」

「大丈夫よ。向こうで和志が用意してるでしょうから。呼ばれるまで部屋を見ておきましょう」

「はい」

そんなこまで和志さんがやってるんですか……

「ユキちゃんの荷物なのだけれど、こっちのウォークインクローゼットを空けたから使って」

「あ、あの。そこまで荷物も無いですし……」

「無理して空けたわけじゃないから気にせず使っていていいのよ。チェストの届け先をこっちに変更して貰うから」

「…分かりました」

「それで…部屋なんだけれど」

「部屋…ですか??」

「ユキちゃんの部屋よ」

わたしの部屋とかいらいないですよ!!

「部屋は必要ないですよ。あ、あの以前使用させて貰ったりリビングのベッドを借わせて貰えば……」

「あそこは部屋ではないでしょう?ユキちゃんも来ることだし、パーティーションを外して模様替えをしようかと思っているから」

「で、ではソファアをお借り出来れば」

「却下よ」

却下ですか……。

でも、部屋を用意して貰うのは申し訳ない気がする。

「部屋は余ってるのだから遠慮しないで使いなさい」

そうですか。

まあ、隣と同じ間取りだから…確かに部屋は余ってるのですね……

「ありがとうございます」

「隣で使っていたのと同じ部屋を用意したわ。必要な物は……また買い物に行きましょう」

う……ま、また行くのですね……

「……了解しました」

「隣と同じで客間としてベッドしか入れてないから、不便を感じたら言いなさい」

「はい」

「……眠れないなら……」

「……なんですか??」

「なんでもないわ。行きましょう」

???

歩き出したみちるさんを追い掛けて修さん家のリビングに入る。

「ああ、丁度呼びに行こうと思ってたんだ」

「……どう?少しは片付く目処がつきそうかい?」

「そうね……まだ色々買い足したい物があるけれど、今日のところはなんとかなるわ」

「お二人ともお疲れ様です。目処がついたのでしたら、少しゆっくりされたらいかがですか?」

「そうね。後は家具を揃えてからでいいかしら」

「……そうなの?じゃあさ、買い物に行ってきたくない?」

か、買い物!?

「……いいわよ。何が必要なの?」

「……おもちー。この前使っちゃったのを忘れてた」

ああ、普通に食品か。

「お雑煮用ね。……白味噌？」

「分かってるよ。白味噌はちゃんと用意してるから」

「なんで、みちるは生まれも育ちもこっちなのに……白味噌って……」

お雑煮…？

「どちらも好きよ？でも、一年に一度しか食べないのだから、どうせならどちらも食べたいでしょ？」

「そうだね。わたしも嫌いではないよ」

「ユキさんはお雑煮、どちらですか？」

どちらって？

「あの……」

「あれ？雑煮が分からないとか？」

それくらいは……！

「お餅の入った汁物？ですよね？」

「そうそう」

「ユキちゃん、食べたことが無いの？」

「あるような……ないような……？」

「えっと、すまし派？白味噌派？」

「第3の選択肢はありますか？」

「「「はっ？」「」」

「というと、なんだろう？」

「母のオリジナルだったので、洋風？コンソメ風味？」

パパがお餅が苦手で眉間に皺を寄せて食べるから、ママがパパが食べれるように作ってたんですね。

日本に戻ってからは、食事は自分で管理させられたし……
お雑煮…興味あります!!

「コンソメかー。なんとなく美味しそうだけど、僕が作るの是一般的なものだけどいい?」

「はい!楽しみです!」

「うん。楽しみにしといて。じゃあ、その為にも買い物よろしくね」

「はい!」

「じゃあ一緒に買い物に行きましょうか」

「いいですか?」

家に残ってても、何もすること無いし…

「もちろん、いいわよ」

「あっ!待って待って。じゃあ、もうちょっと買い物足してもいい?」

「メモで書き出しといて。その間に用意してくるわ」

「OK!。今日の晩御飯は大晦日だからすき焼きだからね。あんまり遅くならないように帰ってきてよ」

「ええ」

大晦日はすき焼き?

年越しそばじゃないの??

まあ、すき焼き嫌いじゃないし嬉しいですけど。

「お二人とも、お気をつけて」

「二人が買い物に行ってる間に、玄関飾りはやっておくよ。行ってらっしゃい」

「行ってきます」

「普通のスーパーだけれど・・・ユキちゃんは何か買いたい物はない？」

信号待ちで止まった時、運転してるみちるさんが前を向いたまま質問してきた。

「特にはないですね」

「ユキちゃんは、今までどういう物を食べていたの？」

「……今まで？」

「そう。料理も出来るみたいなのに学校でのお昼を見ている限り、あまりまともな食生活を送っているとは思えなくて」

「そうですね…。まあ、日本に来てからはまともな食生活は送ってないですから」

「どういう事かしら？」

どういって……

「そのままの意味です。食事をしなくても…死にませんから……」

経済的ですねー

「……家の方に注意されたりはしなかったの？」

「家の方……？」

というと、遠野家の皆様でしょうか？

「一緒に食事をしたり
「無いです無いです。一緒に食事とか……」

例えば、御婆様が急に御飯を一緒に食べようと言ってきたと想像し
ましよう……

怖っ！！

無理無理！

「向こうに居た頃は？」

昔は、そりゃ……ちゃんと……

「……食べてましたよ」

「何が好き？やっぱり日本食よりも向こうの料理の方が好みなのか
しらっ？」

「日本食は好きです。よく……母が作ってくれましたから……」

みちるさんは、どこまで知ってるんだろう。

修さんに、どこまで聞いてるんだろう……

「そう。じゃあ、ユキちゃんが作る料理も日本食が多いのかしら？」

「そうですね。もしかしたら母のアレンジが入ってるかもしれない
ですけど……」

ママが作ったのが日本料理だと信じてるけど……変なアレンジが
してあっても判断のしようが無い。

「……………がんばらないと……………」

「へっ？」

何か??

「得意な日本食は何？」

ああ、得意料理ですか。

「ぶり大根」

「ぶ、ぶり大根？ぶりと大根を煮込んだ？」

えっ？それ以外にあるの？

「そ、そうです」

まさか、あれもママのアレンジ！？

ぶり大根なんて名前がついてるくせに、ぶりと大根使わないとか！
??

「今度作ってくれる？」

「……………いいですよ。美味しくないかもしれないですけど」

へ、変なアレンジだったらごめんなさい。

もうちょっと、アレンジしようが無い物言っところかな……………

「あ、やっぱりスクランブルエッグが得意料理とか……………」

どうだ！

「……………日本食でもなんでもないじゃない……………ぶり大根ね」

む……………

「はい」

「じゃあ、その時はわたしも何か作るわ。そうね……親子丼にしましよう」

「親子丼……ですか……？」

「そうよ。………それなら……れる……」

………親子丼

親子丼なんて………

「ユキちゃん？」

「えっ？」

「大丈夫？酔った??」

「大丈夫です。ちょっとボーっとしてただけで……」

「そう?ならいいけれど、隠さずにちゃんと言っのよ」
「はい」

ああ………そつだ………

今のうちに、みちるさんに言っておかないと……

「あ、あの」

「何？」

「修さんとはお話ししましたが……えーと……」

なんて言えばいい?オブラートに包んで言いたいんです。

「………何?やっぱり一緒に住むのは嫌？」

「そうじゃなくて!お、お二人が………その……」

「二人？」

「お付き合いされてるの………わたし知ってます………から」

「…………え？」

「あの……………」

「知っていたの……………」

「はい……………」

「…………いつから？」

「引越しをする前に……………」

「…そう。ごめんなさいね」

「いえ……………」

「今回、わたしと一緒に住むという話しも…………二人に気を使ったから？？」

「…もつと早くにみちるさんに言えば良かったですね……………」

そうしたら、みちるさんも隠そうとせず二人の時間を主張出来たかもしれない…

「…………気を使わせてしまったのね」

「ごめんなさい……………」

「何を謝るの？謝る必要は無いわ」

「……………」

「…嫌じゃない？」

「何がですか？」

「二人の関係…………かしら。嫌悪感を持たれる事も嫌がられることもあるわ。でも受け入れて貰えれば…家族として嬉しいわ」

そんなこと思いません！

二人が…………お互いを大切に思っていると知ってますから…………

みちるさんが家族だと言ってくれたから。

こんなわたしでも家族だと…………

「家族ですから。お二人が幸せならば……………」

「わたしと暮らすのは……？」

「へ？」

「気を使ったからというのを抜きにして……一緒に暮らす事は嫌ではない？」

「嫌なんかじゃないです」

自分の事を隠さなくてもいい人が傍にいてくれるのは心強いし。

「このまま……一緒に暮らす事になっても問題ない？」

「……！？みちるさんはいいんですか？」

折角、修さんと一緒に住むことが出来る良い機会なのに？

「ユキちゃんが、それでいいの　違うわね。わたしはユキちゃんと一緒に良いわ」

そうですね……

確かに、相手が異なる夫婦同士で生活するのは、明らかにおかしいですから。

偽装結婚する意味が無くなってしまつ。

まだ、同性同士で暮らしている方が誤解を招かなくて済む……

「宜しく御願います」

「……ええ」

二人が一緒に暮らせるように……なんて考えてたのは大きな御世話だったのかな……

今までうまくまわっていた生活が、わたしが入った来た事によって乱れてしまつてるのかもしれない。

蘭さんみたいに、わたしも一人で部屋を借りたほうがいいのか……？

でも、みちるさんとかが考えて今の形を提案されてるんだから、これが全員にとってのベストなのかもしれない…

今更、変な提案をしてかき回す必要もないですよ。

それなら、ちゃんと伝えよう！

「わたし、みちるさんと一緒に暮らせるの嬉しいです！」

「え？」

えっと……

「上手く言えないですけど…誰かと一緒に居て落ち着くというのは

……良い事だから……」

「……………」

…あれ？良い事だよね？

あれ???

でも、このままじゃまずくないか？

Color coating《補色》の対象者が傍に居る……

ど、どうしよう。またみちるさんが食べたくなるような衝動が起きたら……

血だけじゃ満足出来ないなんて、最近の自分がおかしくなってるのかな。

ちゃんとColor coating《補色》して、力自体は安定してるはずなのに……

力の暴走……

もし、自分がそうなった時一番最初に襲ってしまうのは…きっとみちるさんだ……

みちるさんが傍に居る事で定期的なColor coating《

補色》が可能になる。

その事が暴走の危険を減らしてくれるはずなのに、もし暴走してしまつた時に傷つけない人が一番危険な所にいるなんて……
本当にColor coating《補色》してたら暴走の危険はないの……？

「ユキちゃん」

「はい？」

「わたしもよ」

「え？」

「一緒に暮らせて嬉しいわ」

「……」

もつと、ちゃんと自分の力の事を知らないといけない……

「わたし……奏音ちゃんと、きちんと話しをしますね」

「え？……あ、着いたわ」

「はい。あの…その時は一緒に聞いて貰ってもいいですか？」

「……いいわよ」

「御願います」

もし、暴走した時にみちるさんが自衛する手段があるなら……

……わたしを殺してくれてもいいです……

第30話（後書き）

ユキちゃん……誤解を解いたつもりなのにね……
どうしようもないね……

第31話（前書き）

一回データが飛んだ…
覚えてる通りにしたけど、なんとなく中身が違つ気がする……
しょぼーん

第31話

「あのー」

「どうしたの？あつ、なんか嫌いな物でも入ってた？？」

「あつ、いえ。久しぶりだったので凄く美味しいです」

「ホント？良かった良かった」

「それで、どうしたんだい？」

大した事じゃないんですけど……

「わたしが日本の文化に詳しくないだけかもしれないんですが、大晦日はすき焼きなんですか？」

「ああ、これは香山家の習慣だよ。大晦日の晩御飯がすき焼き」

「除夜の鐘を聞きながら年越し蕎麦ね」

「お陰で、僕まで大晦日にすき焼き食べないと年が終わる感じがしないんだよね」

あー、ちゃんと年越し蕎麦なんですね。

「ユキさん、お腹に余裕をもっておかないと年越し蕎麦が苦しくなりますからお気をつけ下さい」

「あ、そうですね。美味しく食べて食べ過ぎるところでした」

「まあ、蕎麦を食べてから初詣に行くから良い腹ごなしにはなるんじゃない？」

「初詣？」

「ええ。知っているかしら？」

「はい」

それくらい知ってますよ。

というか、日本に留学してきた外人でも知ってるでしょ。

「えっと、じゃあ皆で年越し蕎麦を食べて初詣に行くんですね？」

「そうよ。毎年そんな感じで年越ししているから」

うん。みんな仲良くていいですね。

「あ、ユキちゃん」

「なんですか？」

「明日は本家に挨拶に行かないといけないから、初詣から帰ったら早めに休むんだよ」

「あ、はい分かりました」

「ユキちゃんのこと……遠野の方はいいの？」

「ああ………いいそうだよ」

…その間はなんでしょう？

「御婆様が何か言っていましたか？」

「……………」

言ってたんですね……

「正月は忙しいから時間がもつたいないってさ」

「こら、和志言い過ぎだよ！そこまで直接的ではなかったらどう？」

「あ、あの………実際には……？」

なんて言っちゃいました？

「うーん……………」

「香山の本家には挨拶に行くから、わざわざ来なくてもいい。って感じ」

「そ、そうだね……大体そんな感じだったかな？」

「す、すみません」

恐らく、もつと辛辣な言い方だったのでしょう……

わたしが修さんと結婚した事で香山との繋がりが出来たらそれで終了。

本家を継がない修さんに媚びへつらう事はしないだろう。

寧ろ、これを期に香山本家の方へ顔売りに行く可能性大……

まあ……御婆様と会わない方が修さんは気が楽かもしれないけど。

陽季様……ごめんなさい。御婆様のことは適当にあしらっておいで下さい！

「では、香山本家へ行くだけで良いのですね？」

「そうだね」

「昼前に出て、そのまま行くのね？」

「えっと、お昼時に御邪魔してもいいんですか？」

普通がどうかは知らないけど食事時間に行ったら迷惑にならないかな？

「あー、大丈夫。これも毎年恒例。おじさんがお昼と一緒に食べるの楽しみにしてるんだ」

「夜は親族が集まって大々的なものになってしまっからね」

うわー。それ……わたしも出るんですよ……

親族御一同様に顔合わせですか……気が重い……

「よ、夜は泊まりになったり……？」

「しないしない。遅くなるけどちゃんと帰ってくるよ」

「年末年始はなかなか忙しいからね。無理しないように」

「あ、はい」

「じゃあ、明日はゆっくり集合ってことで……」

「和志……諦めなさい」

うん？

昼前に出発すればいいんですよね？

「ユキさん、元旦はきちんと挨拶から始まるんです」

「はい………？」

つまり？

「朝から、きちんと集まって新年の挨拶はするんだよ」

「なるほど」

「ほんと……香山家の恒例ってのは大変だよ。ユキちゃん、頑張つて慣れてね」

「分かりました。大丈夫ですよ」

精神的疲労が心配ですけどね……

あー……精神的疲労蓄積中………

人が……多い………

気温は低いはずなのに、ここまでみっしりと人がいるせいであまり寒さを感じない。

……遅々として進まない景色……息苦しいなー。

年越し蕎麦をすすり新年を迎える事が出来たわたしたちは、当初の予定通り目的の神社から3駅離れた場所に車を停め電車で最寄り駅まで来て、連れ立って神社に向かった。

無事参拝は達成した！！
達成したのだが……
見事にはくれたよねー……
人混みのせい！というより、初めての初詣に足並みを揃えられなかつたわたしのせいでしよう。
不幸中の幸いなのは……

「……ごめんなさい」
「いいのよ。全員で行動しないといけないなんて理由はないのだから」

みちるさんが隣にいる事。

まあ、巻き込んだとも言いますが……

「でも……」

「大丈夫よ。こういう時の為の携帯電話でしょ？」

「繋がりませんけどね……」

どうやら規制がかかっているらしく、さっき電話してみたけど繋がらなかった。

「み、みんないい大人なんだから心配いらないわ」

「……はい」

まあ、この人混みのどこかにはいるだろうから大丈夫でしょう。
それに、ここからなら電車に乗っても帰れる。幸い年越しの時刻表適用で終電なんて関係ないし。

「あつ、ユキちゃ」

うん？

「みちるさん？」

隣にいるはずのみちるさんを見たはずなのに、全然知らない兄ちゃんがかつちを見てる。

……何故？

「ちょ、あー」

少し視線を移すと少し離れた位置で、人混みに揉まれるように離れていく焦った顔のみちるさんを見つける事が
つて、まずい！みちるさんともはぐれちゃうよ！！！！

「みちるさん！」

慌てて人を掻き分け、少し伸ばされたみちるさんの手を握り引き寄せる。

「あ、ありがとう。ユキちゃん」

どうやら、このゆっくりとした流れに絶えられなかった人が流れを乱したみたい。

「これだから最近の子は……」

うんうん。我慢が出来ないっていうのは幼い証拠だね。

「みちるさん、こつちへ」

さつきから、その『最近の子』っていうのがチヨロチヨロと……

「ねえ、もう初詣は終わったの？」

とか声掛けてくるから問題なんですよ。

しかも、割と声掛けてくる『最近の子』が多い。

みちるさんもいつもの眼鏡とスーツじゃないし声が掛け易いのかも
しれないけど……

なんだか腹が立つな……

「あれ？聞こえてないとか？」

聞こえてるけど無視してるんだよ！

「そこの美人なねえーさんと、外人ちゃん！聞こえてるっしょ？」

外人ちゃんって……

なんて御馬鹿……

「無視しないでよー！。新年早々良い出会いがあつたんだから親
睦を深めようよ」

良い出会いって……

一方通行過ぎるでしょ。

「……連れがいるから」

あ………あまりにも鬱陶しかったのか、みちるさんが答えた。

「マジで？オレも連れがいるんだよねー」

「よお、おめえ何やってんの？」

「何、この美人な姉さんら」

「レベルたけえーな。ちょ、こっちの子日本語喋れんの？」

うわー！。増殖したよー！

あつ、日本語分からないって事にして、無視に徹しよう。

「な！これオレの連れ。って事で今から遊びに行こう！」

「おお！いいねえー」

「行こう！」

「よしやー」

「……………」

ああ、みちるさんの不機嫌度が凄い。

眉間の皺が…深いです……

人が多くて振り切る事も出来ず、ずっと付いて来るこの人たち迷惑です。

というか、流石にここまで粘るとは思わなかったし……

「行きません。貴方達だけでどうぞ」

きっぱり。はつきり。

さて、みちるさんの言葉はこの人たちに通じますか？

「いやいや、男だけなんて華やかさに欠けるし花を添えてよ」

「そうそう。絶対楽しいって！」

「ねえ、二人はいくつなの？」

「そっちの外人ちゃんは日本語喋れんの？」

いやいや、この御馬鹿さん達に日本語が通じないわー

堂々と、人の流れを無視して通せん坊。
幼稚にも程がある。

出店の間のスペースから動けなくなったわたしたちに同情的な視線は感じるけど事なかれ主義の日本人は見て見ぬ振りですか。
まあ、自分の家族や恋人の方が大事ですからね。

「ほら、立ち止まったって事はその気になってるんでしょ？」

「さあ、行こう!！」

無理矢理引き止めておいて何を言う？

「それにしても、めちゃくちゃ可愛いねー」

「こんな人混み危ないから、ほらほらエスコートしてあげるよ」

無理矢理肩を抱き寄せようとする御馬鹿。
避けるけど

「止めなさい！」

みちるさん!？

こいつら……しつこい……

みちるさんの手を引っ張って人混みに紛れようとするけど人が多すぎる事で進む事が出来ない。

わたしたちの後を一定の間隔でにやにやしなから追い掛けて来る馬鹿共……

より距離を開ける為に出店の隙間に見つけた横道に滑り込む。

人がいなくなった事で走る事が出来るようになったわたし達が追いつかれたのは神社の裏手と言えるくらい人の通らない暗い細道だった。

みちるさんのペースで走ってたからね……

「ほらー、はいはい。追いついた」

「オレ体力ないから、もう逃げないでくれよー」

「こんな暗いところで、こんな時間に美人な姉さんらが二人だけで歩いてたら危ないよー」

「俺らがナイトしてんよ」

「いい加減にしてください。迷惑です」

うーん。

その言葉で引き下がるでしょうか……

「迷惑とか、効くわー」

「そんなこと言わないでさ。ほらほらお姫様ー」

「ユキちゃん！」

懲りもせず肩を抱こうとする御馬鹿。

まあ、これも避けますけど。

「ぶつ、避けられてんじゃん」

「ユキちゃんって言うんだ。可愛いねー。オレが楽しませてあげるから遊ぼうぜー」

「ちよっと！貴方達、いい加減にしなさい！迷惑だって言ってるでしょー！」

「おー」。威勢がいいねー。これってあれ？ツンデレ？？」

「いやいや。まだデレてないじゃん」

「いや、おれこついう抵抗されてる感じ嫌いじゃないし。デレは後でな」

「おつめ、きめえー」

「うっせ！ツンツンでもいいんだよー！おれに従わせる感がよー！」

言いながら、みちるさんの腕を乱暴に掴む。
はぁ？乱暴に掴む??

「みちるさん!?!」

「おいおい！日本語喋れんじゃん!?!」

「ちょっと、ユキちゃんユキちゃんなんで今まで黙ってたのさ!?!」

うるさい!?!

「みちるさんを離して」

「おー、こっちのツンツンさんはみちるさんね。りょーかい」

「で?みちるさんを離せってよ?」

「じょーだん。折角捕まえたのに離すわけないでしょ?」

「だよなー」

「離さない。警察に言うわよ」

「おいおいおい、やっぱツンツンだねー」

「警察だつてよ!」

「おーーこええーこええ」

「まあ、この後の事が人様に話せる内容だといいな」

「みちるさんを離せ!」

明らかに空気がおかしい。

ちやかしてるとかじゃない。

「ほらほら、ユキちゃん!ユキちゃんはオレらと遊ぼうな」

「つつても、みんなで遊ぶ事になるんだけどな」

「最初は俺だからな?俺が見つけたんだからよ」

「はいはい」

「おれは断然こっちのツンツン」

「わぁーっ たよ」

何を言ってる？

「いいじゃねえーかよ。この前のはおめえーに譲っただろ？」

「あれをカウントするか！？しゃーねえー。まあーいいよ」

何を話してる？

まずい……まずい気がする。

「遊ぶ気はありません。わたしたちを帰してください」

「はい、むりー……！」

「キャッ！」

「みちるさん！！！」

「離さない！！！」

「つつう！」

無理矢理腕を引かれたみちるさんが抵抗した。

それは些細な攻撃だけど、馬鹿男の顔に赤い線が引かれる。

「おおお、凶暴だね！」

「手こずってんじゃん」

「……ってえな！調子にのんじゃねえよ！！！」

パァー……

それは……あっけないくらい一瞬の出来事。

振り下ろされた男の手と、勢いを殺しきれず倒れこむ……みちるさん……？

馬鹿共の向こう側の光景が現実味を無くし色を……失う……

「……………」

「おいおい！あんまり顔に傷つけんなよー！後が控えて……………」
て、あれ？」

「うお！…いつの間にそつちに動いたのよ！」

「ちょ！今どうやった？すげえー！」

馬鹿男の腕を掴んだまま、みちるさんを右手で引き寄せる。

「おお、美人二人の図は美しいなー」

「なになに！そういう関係のお二人さん！？」

「ってか、おめえ嬉しいからって長過ぎ！いい加減ユキちゃんの手を振り解けての！」

「いいいいががあああ！！」

振り解けたら……………ね

「ちょ！おめえ、なんだよ！！」

「ううううでー腕がー！……！」

「はああ！……？」

そこで、ようやく腕を放す。

「なななんだよそれ！……！」

「うがががああ！……！」

大袈裟。

ちよつと、握り潰しただけです。

「おい！てめえ、何したんだよ！」

「うるさい」

「はあ！……！……？」

「なんか隠し持ってやがんぞ！気いつける！！」

万一にもみちるさんに被害がいかないように強く引き寄せ、震えてる身体を馬鹿共が見えないように抱き込む。

……震えてる……

馬鹿共が……

誰を怯えさせてるんですか……

「大人しくしとけば良かったのに……」

「何言ってるの？それはこっちのセリフ」

「折角色々楽しい事があったのに、全部無駄にしちゃってよー」

「嫌い」

「はぁ？」

「嫌いだってよー」

「この状況で何粹がっちゃってるの？」

黙ろうか……

「おいおいおい」

「自分の腕噛み付いて、どんな威嚇方法だよ」

「頭いつちやってんじゃね？」

温かいはずの血が苔むした石畳の上に広がり温もりを失っていく……

「……ユ、ユキちゃん？」

「大丈夫ですよ」

大丈夫。

もう……大丈夫ですから。

みちるさんを抱き締めたまま身動きするみちるさんの視界を塞ぐ。

「何二人で空気作っちゃってんですかー？」

「俺らも混ぜて貰わないとね」

「ほらっ！こっちに来いって……言っただよっ！！」

バキン

空中で止まる馬鹿の拳。

へえ………

殴ろうとしてくるんだ……

あのね……力の使い方……大分……覚えたんですよ……

「ふうー……」

顔を上げ馬鹿共を視界に入れる。

「……おい……」

「ああああ。今……どうやったんだよ……」

「ちょ……あんな目だったか……？」

「な、なあ……あいつ……怪我どこいったんだよ……」

人を傷つけるのは駄目だけど……

こいつらは……わたしよりも……化け物だよ……ね？

「……騒ぐな」

「……ああ？」

「！？何言っただよー！」

「なんのマジックかしらねえがトリックがあんだろ！」

「そ、そうだよな。カラコンとかよ」

「……でもよ」

「びってんじゃねえよ」

「おめえ怪我してネガティブなんだよ。そこで見とけ」
「おらあ!!」

3人一斉に来ようが無駄ですよ。
ああ…黙りましょうね……

「「「!?!?んんんんん!!!!」」」

自分の血を薄く空中に霧散させ襲い掛かってきた馬鹿3人の口を覆う。

「ひ!!ひいいい!!!!ば、化け物!!」

はい。正解です。

地面に座り込んだまま腰でも抜けましたか?
腕を庇いながら立とうとしてるみたいですけど…
でも……逃げられませんね……

「う、うがあああああ!!!!」

煩い……

霧散した血で腕をちよつとだけ捻っただけなのに…
ああ…そんなことしてる間に他の馬鹿共が逃げようとしてるし……

「!?!?……んん!!」

全員の脚の腱を認識出来ない位薄い血刃で絶つ。
綺麗に切れ過ぎて、血が吹き出るような事も無い。
優しすぎますかね?

「…ユキちゃん」

「もう。大丈夫ですよ」

静かになったでしょう？

「ど、どうなってるの？」

「……………」

どう？ 駆除しただけですが…
違った、駆除する直前ですが？

「ユキちゃん……離して」

「嫌です」

腕に力を込める。

「ユキちゃん、離しなさい」

「……………」

何故…離さないといけないの……

第31話（後書き）

ユキちゃん！

やっちまえばよろしー！！

法律？何それ、おいしいの？？

第32話（前書き）

お久しぶりです。

無事に掲載投稿出来てやっと一安心といところでしょうか。
皆様の感想いつも力となっております。

ありがとうございました……

第32話

「……………」

なんで、そんな事言っんですか……

「ユキちゃん

「イヤで

「ユキちゃん

「……………はい

しびしび腕の力を少し緩めると、みちるさんが恐る恐る顔を上げた。腰に手を廻して身体を引き寄せられたまま周りを見渡したみちるさんが石畳に転がる4人の馬鹿共を視界に入れた瞬間固まる。

603

「ユ、ユキちゃん……………これどうなってるのかしら

「……………煩かったので黙って貰いました

「動けないようだけど……………」

「……………そのようですね

「……………」

「……………」

「ユキちゃん……………何をしたの？」

何をしたのか…

「暴れるので足の腱を……………切断しました……………」

「……………」

「ホントにびっくりです。わたしよりもこの世に必要なじゃない者が

存在してるなんて……何故、世界はこれを許容するのでしょうかね。
人が裁かないのなら……わたしが変わりに処分しま

「ユキちゃん!!……何をするつもりなの?」

「……………」

何をするのか……………

「みちるさん……わたしは人間じゃないんですよ?」

「ユキちゃん……?」

分かってるんでしょう……………?

「だから……人なんて簡単に殺せるんです」

「!?!?」

「……んっ?!?!?!?」「……」

「わたしは、わたし自身の存在も許せないですけど……この馬鹿
共の存在も許せないですね」

「ユキちゃん!簡単に人を殺すとか言っては駄目!」

違いますよみちるさん。

「わたしは簡単に人を殺せるんです」

「それでも」

「こいつらは……わたしよりも化け物ですよ。人という括りに入れ
るべき存在じゃない。そんな存在を許すんですか?」

「ユキちゃん、貴女は人であるべきよ。だから人を殺してはいけな
いわ」

「……………」

……みちるさんはおかしい……………

襲われそうになって、殴られて……それでも相手を許す？
理解出来ない……

もし、わたしが化け物じゃなくてこいつらを止められなかったら、
こいつらは嬉々としてみちるさんもわたしもめちゃくちやに汚した
んですよ？

きつと、今まで何人も何人も……

こいつらが生きている限り、きつとこの先も……

「ユキちゃん……わたしの為に誰かを傷つけるより、わたしの為に
貴女が傷つかないで」

わたしは傷ついてない！みちるさんが傷ついたんだ！！！！

「理解できません！みちるさんは何をされたか…何をされそうだったか
分かってるんですか？」

「わ、分かってるわ。こいつらは人として最低よ。怖いと思う気持ち
ちも許したくないと思う気持ちもあるわ」

「じゃあ」

「でも駄目なのよ！！ユキちゃん。わたしの事を思うなら貴女の手
を血で汚さないで！」

みちるさんの為を思うなら……

馬鹿共を処分する事がみちるさんの為だと思った……

でも、みちるさんは望んでない……

この馬鹿共を殺したら……自己満足になってしまつのだろうか……

ガルルルルウウ

低い唸り声？

「「「「んんっ！！！！！！？」「「「「

呻く馬鹿共の視線を追う。

「ユキちゃん!!」

すぐにみちるさんが、わたしの前に両手を広げ立ち塞がった。

「みちるさん？」

「ユ、ユキちゃん……逃げなさい……」

えっ？

震えるみちるさんの肩越しに見える闇色の塊……

「あの…みちるさん？」

「何してるの!?逃げなさい!!」

ゆっくりと一歩一歩意思を持って近付いてくる……それは……

「あの…大丈夫ですよ」

「わ、わたしが気を引いて置くから」

「みちるさん」

そんなに震えなくても大丈夫です。

それに……

「わたしがみちるさんを置いていくわけじゃないじゃないですか」

目の前で震える背中を抱えるように引き寄せせる。

「ユキちゃん……」

わたしとみちるさんの目の前で、どしりと腰を下ろした闇色は興味深げにこちらを見る。

「お、襲ってこないわね……………」

襲ってきませんよ。だって…………あれ？言わない方がいいのかな？？

「野良犬？野犬？それにしても大きい……………」

あつ、ちよつと尻尾が怒ってる。

野良じゃねえよって？

「ほ、保健所とかに連絡した方がいいかしら」

保健所？

そこの馬鹿共の処理を御願ひ出来ますか？

「意外と賢そうな目ね。この大きさ……………なんていう犬種かしら？」

飼えませんかよ？

「ゴールデン……………」

いやいや、ゴールデンくもないし！黒いし！！

「ユキ様。もう宜しいでしょうか？」

「じゃ…………べった？」

あー、みちるさんが腕の中で硬直してます。

「いいですけど……隠さないの？」
「何をでしょうか？」

ああ、そもそも隠す必要はないと……

「ユ、ユキちゃん……これ何？」

これ？

「これは狼です」

This is wolf .

「狼………あ、あの……喋った……わよね？」

「矢原先生に記憶操作はしていないはずですが？」

「奏音ちゃんです」

「……奏音さん？……werewolf《人狼》」

「覚えていたようだなにより」

「凄いわね……ちゃんと狼だわ……」

おもいつきり犬って言ってましたよ!？

「werewolf《人狼》ですから」

「狼の形じゃなくて、人型の……獣？みたいなのを想像してたわ」

「獣人型の事ですか。力の消費が激しいので能力が高くなければ無理」

へー……。初めて知りました。

知ってたような顔しとこう。

「奏音さんはなれないのかしら？」
「見たいと？」

えっ、なれるの？
見たい！

「とうわけではないけれど……その姿が怖いよ。戻ってくれない？」

み、見たいです！！

「ふむ。怖いと……。しかし生憎服を持ち合わせていないので。怖いならユキ様の後ろに隠れておいて下さい」

あ、見れないんですね……

「か、隠れないわよ！」
「それで、ユキ様……お力の奔流があり慌てて来たのですが……」
「……」
「……」

これだけ派手にやれば奏音ちゃんには分かるか……

「状況を見るに判断出来ますが、どう致しますか？」
「どうとは？」

「こやつらがユキ様に暴拳を働いたのでは？」

「……」
「処分致しますか？」

「奏音さん!？」

「何か？」
「処分って、わたしの時に言っただけに記憶操作の事なよね？」
「ユキ様の御命令があればそれでも我慢致しますが……私はこいつらの命を刈り取る事を処分と言ったつもりですが？」

処分……

「人を簡単に殺すなんて」

「矢原みちる！忘れるな。我々は人ではない」

「馬鹿言わないで！！人として生きている限り貴女達は人なのよ！！！」

……人

「矢原みちる……ならばどうする？人であるお前は、そのものをどう裁く？」

「け、警察に」

「その裁きが正当なものなのか？人を傷つける人を……人が裁けるのか？」

「……それが人のルールよ」

「馬鹿げているな」

「……」

「はぁー」

「ユキちゃん？」

「ユキ様？」

「確かに馬鹿らしいですね」

「ユキちゃん！！！」

「ユキ様、ではこれらは処分」

「記憶操作で御願います」

「えっ？」

だって、しょうがないじゃないですか。

「わたしだって、奏音ちゃんに人殺しさせたいわけじゃないから」
「ユキ様、ですが…!!」

但し

「ある程度のペナルティーは負ってもらいます。足の傷を治すつもりはありません。記憶操作。身体障害。警察。いいですね？」

「承知致しました」

「……………」
「みちるさん。これ以上の妥協は有り得ません」

「歩く事は……………」

「出来ないでしょうね」

「……………」

「……………この4人の人生の裏側に……………何人の被害者がいるのでしょ
うね……………」

「……………分かったわ」

「ユキ様。後の事は私が……………お戻り下さい」

「奏音ちゃん……………」

うん。暖かい。

がっしりと抱きつきながら背中を撫で撫で。

「迷惑かけてごめん。宜しく御願います」

「は、はい」

うん。尻尾がゆらゆら……………

「みちるさん。行きましよう」
「え、ええ」

あ、その前に！

「みちるさん！」

「な、何？」

「あー」

「あー」

疑問系のまま薄く開いた口……

「あがつ！？」

の中に指を差し込む。

あ、みちるさん暴れない！

後頭部に手を廻して固定したまま口内を探る。

「ユ、ユキ様？何を??」

「うわー、ほらやつぱり歯がぐらついでる……口の中なのに、まだ血も止まってないし」

力任せに殴られた口内は、頬の内側が切り口が瞑れたようになって未だに血が止まらず、頬に傷をつけた歯が今にも抜けそうにぐらついて……

引き抜いた指についた血が……

お、おいし……痛々しい……痛々しいんです！

「みちるさん……痛いですね？」

「だ、大丈夫よ」

いや、ほら涙目ですし。

「ユキ様。やはりこいつらは処」

「口内の傷は治りが早いのだいじょ　んっ……！」

「おおー！」

こんなになって何をおっしゃいますか。

医者だからって簡単に傷が治るわけじゃないのに……

わたしをもっと利用していいんですよ！

「うっん！んん」

唸るくらい痛いんじゃないですか！

今だって、少し舌先が傷に触れただけなのに。

もっと、優しく触れないと駄目かな？

「ふうん！」

痛い？

優しく優しく……

「うんん……」

甘い……

匂い……

優しく優しく……

「……んふう」

止められない……

衝動……

優しく……やせ……しく……

「様」

「ふう……ん」

「……ユ様」

「は……ふう……ん」

「ユキ様——！」

「ん??」

いきなりどうしたの奏音ちゃん!?

「ユキ様……あの、矢原先生は口内を怪我しているの?」

「ん」

だから治療してるんじゃないですか。

「殴られたようですね」

「ん」

痛々しい……

「舌もですか?」

「ん?」

えーと?

「そして、……もう充分かと思われます」

「……」

「…………んはぁ…………ん」

あ……れ…………？

明らかにさっきよりぐったりしてるみちるさん…………

身体を支えるわたしの肩に力なく寄りかかり、荒い呼吸を繰り返してありますが……。

うん？

「み、みちるさん！大丈夫ですか！？」

「…………ん……………うん……らい……………だい……じょうぶよ……」

そ、そうですか？

「ユキ様……………やり過ぎです」

「あ……」

やっぱり？

血を貰えたから、わたしまで体が軽くなったし…………

血……吸いすぎたか……………反省……………

「まだ痛みますか？」

傷自体は治癒したと思う。

顔の頬の部分が変色して腫れてたけど、口内の傷口から治癒と同時に血の循環を操作したことによって元通りの綺麗な色になっているように見える。

「だ、大丈夫よ」

「後で痛むようなら教えて下さい」

「矢原先生……………歩ける状態ですか？」

ちよつと、ふわふわしてるように見えるけど、支えて歩けば大丈夫かな？

いざとなれば力を使えばいい。

みちるさんの体重くらい軽く運べると思う。

ただし力を使い過ぎると……Color coating《補色》をしないといけない。

みちるさんが歩けない 運ぶ為に力を使う Color coat
ing《補色》 みちるさんが歩けない……………

だ、駄目だ！本末転倒過ぎる！！！！

「大丈夫。歩けるわ」

あ、支えるくらいで大丈夫かな？

「いつ人が来るとも知れませんが。これらを人目につかない所に運びますから、そちらも出来るだけ早く移動して下さい」

「あ、ごめん」

「分かったわ。ユキちゃん行きましょう」

行きましょう………と言いながらふらついてますが？

「はい。行きましょう」

みちるさんと腕を組んで軽く支える。

「……………」

「……………」

「……………」

さっきから無言なのですが……
怒ってるのでしょうか？

えっと……………何故？

思い当たる事なんか……………

……………いっぱいあります！！

「あの……………すみませんでした」

「何が？」

さて、どれですか？

選択肢1

「わたしが皆から逸れなければ、こんな事には……………」

「そうじゃないでしょう？わたしたちじゃなければ他の被害者が
出た。……………ユキちゃんのお陰で助かったのよ」

「あの男の人達から守れなくて」

「守ってもらったわよ？」

「そ、そうですか」

違う

選択肢2

「治癒……………無理矢理してしまつて」

「ああああ、あれは！治療ね！治療よ！！」

「綺麗に治りました？治癒出来てないところがあるとか」

「だ、大丈夫よ！」

「えっと……………貧血とか？」

「そ、そんなに出血してないわ」

「ホントですか？みちるさんの血を舐めてるうちに治療のつもりだったんですけど、途中から完全に血に酔っちゃって……あんまり記憶が……………」

「覚えてないの？覚えてないのね！？大丈夫！大丈夫だから！！！」
「そ、そうですか」

違う

選択肢3

「あの男達を処分するって言うてしまったから…………？」

「……………ユキちゃん。もつと自分のことを大切にして欲しいわ。それは、ユキちゃん自身を人と認めてあげることだと思うの。あの人達を処分しないと決めたユキちゃんの行動はとても大事だと思うわ」
「でも、何もせずに開放したわけではないです」

「そうね……………」

それですか？

「見なければいけない現実もあるのね」

「え？」

「ユキちゃんが言ったでしょう？あの人達の人生の裏側に何人の被害者がいるのかって」

「……………」

「人としての社会で裁く事は…………防ぐ事は出来ないのね……………」

……………つまり？

「あれくらいのペナルティーは受けるべきだと…………？」

「……………そうね。否定はしないわ。ただ…………ユキちゃんにさせた事が……………」

「わたしが適任でしょう。人が出来ないのですから」

「ほら、そう言うでしょう?」

「は?」

「そういうふうにはユキちゃん自身が思い込むから、ユキちゃんに力を振るって欲しくないのよ」

えっと……

「すみません」

これが……

「……」

「……」

「……」

「あの……」

「どうしたの?」

「お、怒ってますか?」

「わたしが?」

「はい」

「いいえ。何も怒ってないわよ。どうして?」

あれ?怒ってますよね?

「さつきから黙ったままだったので」

「それは……考え事をしていただけよ」

「何をですか?」

「……」

もしかして……

「わたしが怖くなりましたか？」

「え？」

「人じゃないと改めて目の前で確認出来たんです。怖くなくても仕方ないです」

「怖くないわよ！」

「そうですね。みちるさんは今までも充分わたしが人外だということを見てきたんだから今更で」

「そうじゃないわ！わたしが考えてたのは、ユキちゃんと奏音さんの関係が気に……………」

「はあ？」

えっと、わたしと奏音ちゃんの関係？

「……………」

「……………」

「……………なっていないわよ」

関係というと……………奏音ちゃんは契約守護獣だけど……………

「……………言えないです」

「……………そう」

「わたしの事じゃないから……………だから、ちゃんと時間を作って話します」

「……………」

「……………」

「……………」

「もしもし……………ええ。ごめんなさい……………まだ……………そう。何も無いわよ。……………大丈夫……………分かったわ……………そうね……………」

……それで御願いい

電話を切ったみちるさんがこっちを見る。

「和志さん達ですか？」

「そうよ。もう地元の駅にいるらしいわ。先に帰っておくからって。タクシーで帰りましょう」

「そうですね」

あっちは無事に帰れてたのか……良かった

「……………ユキちゃん」

「はい」

「奏音さんとの話し合いにわたしがいてもいいの？」

「はい。御願ひします。みちるさんにはわたしの事を知る権利がありますから」

「知る権利？」

「はい。わたしと一緒に暮らす事を選択してくれたから……………みちるさんにもきちんと知っていて欲しいです」

「……………そう」

わたしを受け入れてくれるみちるさんにわたしの事を隠すべきじゃない。

ここまで受け入れてもらった事が奇跡だと思う。

だから、わたしの事をもっと知って怖いと感じたら離れるべきなんだと思う。

それで離れて行ったとしても……………後悔しないで……………から。

第32話（後書き）

ユキちゃん！

それは、もう治療じゃないよね！？

気付きなさい！！

そして、奏音ちゃんの獣人姿……見たいよねー！！！！！！

第33話（前書き）

英語はね…適当に書いたからあんまり深くつっこまないで！
サラッとね、サラッと！

第33話

「あつ、おはよー」

「おはよう」

「おはようございます」

結局、帰ったのが明け方とも呼べる時間になってたから、そのままみちるさんと部屋に戻り順番にお風呂に入った後、宛がわれた部屋に戻った。

力を使ったからか疲労感はあるけど眠る事はなかった。

部屋を移動したその日にみちるさんを起こしてしまうのが嫌だったから……

「ユキちゃん、ちゃんと休めた？」

「あ、はい。みちるさんは？」

「大丈夫よ」

と言っても、寝室に入ってから4時間も経ってないから休めたとは言えないでしょう。

「昨日、結局何時になったのですか？」

「帰ってきたのは4時前くらいだったかしら」

「おそっ！」

「逸れたのはすぐに気がついたから駅の改札前でしばらく待っていただけだね」

「そうそう。何してたの？」

「境内にいるかと思っでぐるぐるしてたのよ」

「そうなんです。行き違いになってしまったと……」

まあ、実際は行き違いどころの話しじゃないですけど。

「そっかそっか。次からは連絡が取れない事も想定しないよね」
「そうだね」

「取り合えず、立ってないで座ったらどうだい？」

「そうね」

「ユキさんも」

「あ、はい」

昨日と同じ席。修さんの向かいでみちるさんの横に座る。

「では、改めまして……あけましておめでとうございます」

「……あけましておめでとうございます」「……」

「メインはお雑煮だよ。取り合えずすましね。御餅は2個にしてあるから、足りないなら言っ。後は御節。はりきって作ったからいっぱい食べてね」

おお、日本のお正月だ！

「和志、白み」

「白味噌はまた後でね。今はすまし！」

「……分かったわ。いただきます」

「あっ、いただきます」

「……いただきます」「……」

お雑煮。当たり前なんだけど和風だ！。

「ゆきちゃん。御節にはそれぞれの料理に意味があるんだよ。知ってるかい？」

「少し知ってますよ。昆布巻きは喜ぶ。なんですよね」
「そうそう」

「ユキさん、これは御存知ですか？」

えっと……？

「海老……？」

「そうです。これにも意味があるのですよ」

へー！

「みちるは意味分かるのかい？」

「えっ？」

「最近料理覚えようとしてるんだらう？」

「……御節は作れないわよ。意味は分かるわ……海老って腰が曲がったように見えるでしょう？だから腰が曲がるまで長生きするという意味を込めてあるのよ。長寿祈願ね」

「お、よく知ってたね」

「それくらい知ってるわよ……作れないだけで……」

「いずれ作れるようになるさ」

「なるほど。色々考えられてるんですね。あの、わたしも作れるようになりたいです。和志さん、教えて下さい！」

色々な願いが込められた食べ物。

美味しいだけじゃなく、なんだか暖かい食べ物だなーと感じる。

「もちろん！みちると一緒に教えたいよ！」

「はい！御願います」

「あつ、和志さん。私もよろしいですか？」

「あれ、蘭ちゃんも？いいよいいよ」

「御願います」

「みちる、そろそろ?」

「あっ、そうね」

あれ?もう出発の用意するんですか?

席を立ったみちるさんが、ソファアの上にあった紙袋を持って戻ってくる。

出発では……ない……??

「ユキちゃん」

「はい?」

「今日は夜もバタバタしているでしょう?」

「そのようですね」

あまり乗り気ではないですが……

「だから、改めてやるつもりではあるんだけど……先に渡しておくわね。はい」

「えっ?」

「おめでとっ」

これは?綺麗にラッピングされた包み。

「あ……りがとっ……」

取り合えず、受け取ってみました。

「ユキちゃん。僕らからも。はい」

「おめでとっ」

これもまた、綺麗にラッピングされた包み。

「ありがとうございます……?」

「ユキさん。私からはこれを」

えっ！蘭さんも？

「……………ありがとうございます」

えっと……………お年玉ってお金を貰うものだと思ってました。
危ない危ない。これもママのルールだったのか……………

「開けてみて」

「はい」

そうですね。子供にお金を渡すなんてどうかと思うもん。

ある程度の年齢ならともかく、小さい子にお金を渡すなんて、今思
うと不思議だよね。

そっか、お年玉って本来はプレゼントなんですね。

「パジャマ……………ですか?」

「はい。どのような物が良いか悩んだのですが、着心地に拘ってま
で自分のパジャマを選ぶ事はなかなかありませんし、そういった物
の方が遠慮なく使って頂けるかと……………どうでしょう?」

「凄く嬉しいです！ありがとうございます」

でも、大人から子供に渡すのがお年玉でしょう?

あー、ママルールだったのかなー。

わたし蘭さんに用意してませんよ?

「これは……食器？」

「そうそう。ランチプレートのセット・マグカップ・味噌汁椀からお箸まで一揃いね」

「プレゼントに適してないかもしれないけれどね。こっちで使っている物は皆で統一しているからいいけれど、これからみちると家で食べる時にみちると違う物だとなんだか寂しいだろ？」

「ありがとうございます。使わせて貰います」

確かに御客様みたいな感じがするなーとは思ってました。しかし……旦那様からお年玉つて貰うものなんですか？というか、何歳までが子供とみなされるのでしょうか。

「ユキちゃん、開けてみて」

「はい。これはお財布と……」

「キーケースね。部屋の鍵を付けておいたわ」

「ありがとうございます」

凄い嬉しいですが、こんなに高そうな物いいのかな…

「お財布なんかは、本当は春にプレゼントするのがいいらしんだけれど……」

あー、お年玉の季節に合わなかったから仕方ないですね。

嬉しいですから、季節なんて関係なく使いますよ！

「ありがとうございます。全部大事に使わせて貰います！」

「うん、使ってねー。今日はバタバタしているから先にプレゼントだけ渡したけど、ちゃんとケーキとか御馳走は三箇日が過ぎたら用意するからね」

ん?? ああ、えっと、今日は遠野家の方で御馳走食べるから、内々では別の日を設けるってことか。
で? 蘭さんへのお年玉は? プレゼントが見当たりませんか?

「で、こつからは例年通り。蘭ちゃん。はい、お年玉」

「ありがとうございます」

「蘭。わたしからも」

「ありがとうございます。大事に貯金します」

「そんなこと言わずに、たまには使いなさい」

「ふふふ。そうですね」

あれ?

「ユキちゃん。はいお年玉」

「ユキちゃん。どうぞ」

「ありがとうございます...?」

もしかして.....

「あの、さっきのプレゼントはなんですか?」

「何って...誕生日プレゼントのつもりだったんだけど?」

「ユキさん、誕生日今日ですよね?」

「そう...です.....ね」

よく御存知ですね。結婚する相手の情報...知ってるか。

正直、わたし自身が覚えてなかった.....

Happy New Year! And Congratu-
lations on your birthday! May
this year be happy and fruitful

毎年言われてたのにね……

「誕生日おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとうございます」

こうやって、わたしの誕生日を祝ってくれる人はもういなくなったから……

「……ありがとうございます」

わたしが存在しているという事が……いいことなはずがない……祝っていいはずがないのに……

「ユキちゃん、あなたにとって今年が幸せで実り多き年で……今年はきつといい年になるわ。あなたは幸せになっていいのよ」
「……………」

幸せになる？誰が？

……幸せ？

どうしよう……ここに住むようになって、みんなと過ごすようになって安心してる自分がある……
幸せ……？

「ユキちゃん？」

みんな幸せそうだ。

「ユキさん？」

ああ、わたしに安心を与えてくれる人たち……

「ユキちゃん？どうしたんだい？」

家族……幸せな家族たち……

ダメ！ダメダメダメ……怖い……

その幸せは簡単に崩れる！

あつけなく、一瞬のうちに消えてなくなる。

ある日、予想もしなかった化け物が現れて幸せを奪うんだ……

……その幸せを奪う化け物は……きっと……

「ユキちゃん、こっちを見なさい」

「……大丈夫です」

大丈夫。大丈夫です……

これ以上近付きませんから。

わたしが死ぬ方法を聞いてちゃんと教えますから。

いつ殺してくれてもいいですから……

だから……もう少しだけ一緒にいてもいいですか？

「どうしたの？」

「ごめんなさい。ちょっとボーっとしちゃってただけです」

「ユキちゃん？」

「それよりも修さん、出発の用意とかで、何か必要な物はありますか？」

「い、いや……何もいらなけれど……」

「そうですね。わかりました。じゃあ、服装だけ気を付けねばいい

ですかね」

「…そうだね。みちる、用意しているんだろっ?」

「ええ。少し早いけど準備しましょうか?」

「そうだね。一時間後に出発しよう。和志と蘭もそれでいいね?」

「いいよ」

「はい。問題ありません」

あつ、年始の挨拶って言うてみんなでゆっくり食事してたのに勝手に切り上げさせちゃいましたか……

お二人ともごめんなさい。

「片付けはしておくから。はい、かいさーん!」

「ありがとうございます。お願いします」

みちるさんの後ろについて、蘭さんと三人で玄関に向かう。

「ユキさん」

「はい?」

「あの……大丈夫ですか?」

……

「何がですか?」

「先程、誕生日の」

「やっぱり寝不足ですかね。折角お祝いして貰ってるのにボーっとしちゃって、ごめんなさい」

「いえ、あの……」

「もう一回顔でも洗ってしゃっきりして来ますね」

「………はい。では後程……」

うん???...後程?何かあるの?
見送りとか??

「ユキちゃん」

「はい?」

蘭さんと別れて部屋に戻ったところで、みちるさんが振り向いた。

「言えない?」

「.....何がですか?」

「誕生日だから」

「睡眠不足ですよ」

「.....さっき蘭も言おうとしていたでしょう?分かってて遮ってるのよね?」

「.....」

それを分かっているのなら聞かないで下さい。

「誕生日に何かあるの?」

「...そんなことないです。ちょっと.....自分の誕生日を忘れかけてたので、みなさんに祝って貰えたことにびっくりしただけですよ」

「御家族とはユキちゃんの誕生日のお祝いはしなかった?」

.....家族

「して貰いましたよ。新年のお祝いは朝、夜はわたしの誕生日のお祝いをしてくれてました」

「日本に来てからはなかったのね...」

「そうですね」

「それは寂しいわね」

別に、お祝いされたかったわけじゃないですから。

「寂しくないですよ。誕生日を喜ぶ年齢でもないですから」

年齢なんて関係ない……

毎年……毎年……わたしだけが誕生日を迎える……

存在していいはずの無いわたしだけが……

「これからは、わたしたちがいるわよ。ユキちゃんの誕生日もみんなが祝ってくれる。生まれてきてくれてありがとうって、みんなが祝福してくれ」

「止めて下さいー!」

「ユキちゃん?」

「あ……」「ごめんなさい……」

「ユキちゃん……何かあるなら言ってくれないと分からないわ」

「……」

「ユキちゃん?」

「何もありません……」

だから……もういいでしょう?」

「ユキちゃん聞きなさい」

「……」

「ユキちゃんがわたしに何も言わないから、ユキちゃんの気持ちを想像することは出来ても分かることは出来ないわ。さっきユキちゃんが言ったように、何かしらの理由でユキちゃん自身が誕生日を迎える事、あるいは誕生日を祝われる事を嫌だと思ってるんでしょね。どう?」

「……そうかもしれませんね」

「じゃあ、ユキちゃんは、わたしの誕生日を祝う事に抵抗はある？」
「ないです」

みちるさんの誕生日なら心からお祝いします。

「そう。じゃあ、わたしはわたし自身の心情に従って貴女が生まれ
た日を祝います。覚えておいてね」

「え？」

いえ、あの……

……え？

「何かしら？」

「えっと……わたしの誕生日は喜ばしいことなんかではなくってです
ね……」

「ユキちゃんはわたしの誕生日を祝ってくれるのでしょうか？」

「はい、もちろんです。凄く大切な日ですね」

「……わたしはユキちゃんの誕生日を喜ばしいことだと思っている
から祝うわ」

「……」

えと……

「以上。さあ、用意するわよ」

「……はい」

「堅苦しくする必要はないけれど親族が集まるから顔合わせも兼ね
ているでしょうし、少しかっちり目に……フォーマルだけれど大丈夫
かしら」

「はい……。ちなみにどんな感じなんですか？」

フォーマルって…スーツ？

「こんな感じね」

「…スカート？」

「スカートね」

「………スーツじゃない…？」

「ユキちゃんの言ってるのはパンツスーツの事かしら？これはワンピーススーツみたいなものよ」

「…これをわたしが？」

似合いませんよ！

「ユキちゃんの瞳の色と髪の色を考えた結果、ダークグリーンにしてみたの。髪の色も瞳の色も映えるわよ」

「あ、ありがとうございます」

制服以外のスカートが久しぶり過ぎる。

なんだか…足元がスースーして頼りないんですが……こんな感じでしたっけ？

首元に嫌味にならないネックレスを掛けられ、胸元にシンプルなブローチを付けられ……

もう…よいでしょうか……

「ああ、ユキちゃん。似合う似合う」

「衣装に負けない華やかさが、羨ましいです」

「うん、可愛いね。みちるが本気出して選んできただけある。よく似合ってるよ」

「そうでしょうか？今までの格好だけではもったいないわ。普段からもっともっと磨いていくわよ」

……勘弁して下さい。

「それに比べて……みちるは何故そんな地味スーツにしたのさ」
「あら、それを言うなら蘭でしょう?」
「みちる姉さん、私のは制服という立派な正装です」
「まあ……そうだね」

あの……気になっていることがあるのですが……

「こっちのネクタイとこっちとどっちがいいと思っ?」

「和志の?」

「修の」

「うーん、右手のかしらね」

「そうですね。今日のスーツだと、そちらの方が良い気がします」

「ほら、言っただろう?」

「えー……。ユキちゃんはどう?」

「……み、右手の……」

「ぶーぶー」

「ほら、諦めて渡して」

「へーい」

あのですね……

「信号待ちの時間じゃなくて、着いてからの方がいいんじゃないかしら」

「そうだね。そうするよ」

「和志さん、左手のネクタイは和志さんが使われたらどうでしょう」

「えっ?」

「ああ、確かにそれもいいね」

「和志、換えてみなさい」

「はいはい」

「どうぞですか？」

「さっきのよりもいいかもしれないわね」

「和志、こっち向いて。うん、いいね」

「ホント？」

あ、和志さんがこっち見てる。

頷いところ……

「じゃあ、こっちにしよう」と

そうじゃなくって！

「ユキちゃん、どうしたの？気分でも悪い？」

「体調が悪いのかい？もうすぐ着くから我慢出来る？」

「元気ですから、大丈夫です！」

けど、なんでみんなで香山家に行くんですか！？

第33話（後書き）

ユキちゃん……誕生日迎えられてよかったね！。
ホンマは年末やったって噂もあるけど……
思い出して貰えてよかったよかった！わはは！！

第34話（前書き）

いつも、感想等ありがとうございます！！
この小説を投稿する活力にさせて頂いてます！

第34話

「車、停めてくるよ。先に入っておいて」
「分かったわ」

分かりませんけど……？
あのですね、お見送りにしてもみんなでする必要ないでしょう？
これも毎年恒例とか？

「よく来たね、待ってたよ」
「明けましておめでとうございます」
「ああ、そうだね。明けましておめでとう」
「は、陽季様、明けましておめでとうございます」
「そんなに硬くるしく様なんで付けなくてもいいんだよ？」
「は、はい」

そうなんですけど、いきなりフランクにはいけませんよ？

「和志君、元気にしてたかい？」
「はい。小父様もお元気そうで」
「なかなか、倒れてもいられないからね」
「お忙しいんですか？」
「年内に少しゴタゴタがあつてね。ようやく落ち着いたところだよ。みんなは最近どうなんだい？ユキちゃんの引越は落ち着いたかな？」
「そうですね。大分いい感じですよ」
「そうかい。それは良かった。おや、修はどうしたんだい？」
「車を停めに行っているわ」

「ああ、人をやればよかつたね」

「それくらい自分でやりますよ。父さん」

「おや、噂をすればだね」

「小父様、京香小母様は？」

「今、来ると思うよ」

どうしよう。この当たり前にみんなを受け入れて話してますという
空気……

陽季様は、どこまで知っていて受け入れているんだろう。

物凄く複雑なのではないですか？

えっと、息子の恋人……恋人の旦那さんと、息子の恋人の姪御……
全て知った上で受け入れているのなら、陽季様って凄い。

「それにしても、ユキさんも和志君も……もう少し私との壁を壊し

てだね……どうだろう、そろそろお義父さんと呼ぶと」

「お義父さん」

ま……まさかのみちるさん！！

「……うーむ、みちるに呼ばれるのは少し気持ちが悪いね。まあ、
それでも構わないけれど」

か、構わないんですか？

というか、こういう複雑な関係って意外と一般的だったりするんで
しょうか？

えっと、わたしってどういう反応をすればいいんでしょう？

よくよく考えたら、旦那様の……恋人が御義父様の事を自分より先
にお義父さんと呼んだんですけど……

「呼んできましようか？」

「うん？誰をだい？」

「母さんでしょう」

「そうよ。その間に部屋に移動したらいいんじゃないかしら」

「あら、まだこんな所にいらしたの？」

「京香小母様」

「あけましておめでとうございます」

京香様？えっと、御義母様とお呼びすればいいんでしょうか？
というか、しよ、初対面なのですが！？

「あ、あの」

「まあ、貴女がユキさんね！ジヨシユと同じ綺麗な髪色。御顔を良く見せて。綺麗な目の色ね……本当にジヨシユと茜さんの面影があるわ。抱き締めてもいいかしら？」

あ、えっと……もう抱き締められてるのですが……

「母さん、ユキちゃんがびっくりしているよ。少し落ち着いたらどうだい？」

「そうね。ユキさんにやっと会えたものだから感動してしまったわ」

な、泣いておられます！！

「ユキちゃん、母さんとは初めてだよね」

「は、はい」

「もの凄く……おおら」

「天然ね」

「みちる……言い過ぎだよ。ええと、おっとりし」

「空気を読まないわね」

「……みちる」

確かに、京香様はほんわかとした空気を纏っておられますね。しかし…みちるさん、そんなに強気で大丈夫なんですか？ 追い出されたりしませんか？

「もう、みちるさんったら相変わらず棘々と。偶にしか顔を見せないのだから、もう少し優しく接してくれてもいいと思うのよ」

「そうだね。京香さんから和める空気を譲渡して貰うといいよ。その眉間の皺は酷いんじゃないかい？」

「陽季さんもそう思うでしょう？」

「と、棘々も皺もないわよ！それより、いい加減に移動しましょう」「ああ、またやってしまったね。申し訳ない。いつまでもこんなところで立ち話しはスマートなおもてなしとは言えないね」

この受け入れてますという会話……

何故、修さんはみちるさんと結婚しなかったんだろう…？
和志さんはこの状況をどう思ってる？

「部屋にお通しして直ぐで申し訳ないのだけれど」

「着ないわよ」

「陽季さん修さん、和志さんは奥の間に」

「着ないわよ」

「みちる、ユキさん蘭ちゃんはこちら」

「着ないわよ」

「みちる…諦める」

何の会話ですか？

「ほら、蘭もユキちゃんも抗議の声を上げていいのよ？」

「折角用意して頂いたのですから」

「蘭、もつと自己主張しなさい。ユキちゃん！嫌よね？」

えっと……

「何がですか？」

「あれよ」

あれ？えっと……木の箱みたいな物ですね。

「あれって、なんですか？」

「ユキさん、御覧になったことがありますか？」

「まあ、ユキさん初めてなのね！」

木の箱……

何が？

「はい！移動しましょう！！」

「着ませ」

「……みちる。諦める」「」

「んっ……」

えっと、みちるさん諦めましょう。

「ふふふ。新しく仕立てたのよ。拒否権はないわ」

「わざわざ用意しなくても……」

「年々、華やかさを失っていく女性陣を憂いたのよ」

「親族内での新年の挨拶なのだから、華やかさが必要だとは思えな
いけれど？」

「新年の挨拶だからこそ華やかにしてはどうかしら？男性陣のスー
ツは仕方ないにしても、貴女と蘭ちゃんは集まる御婦人方の中でも

悪目立ちしてしまうわ」

「こ、これもいけませんか?」

「蘭ちゃんのは制服でしょう?学生の正装なのでしょうけど、華やかとは言えないわね?」

「そう…ですね」

確かに、制服に華やかさを求められても困りますし……

「みちるさん……貴女の…悲しいわ…」

「失礼極まりないわね」

みちるさんのパンツスーツは似合うんですけどね。

学校でも、その上に白衣って感じですしピシッとして格好良い…

…けど華やかではない。

「ユキさんはとても良く似合っているわ。華やかね」

「あ、ありがとうございます。みちるさんを選んで頂いて…」

「まあ、そう……。ふふふ…。そうなの…ねえみちるさん。ふふふ

…」

「そうよね!!良く似合ってるでしょう!?!だからこれでいいんじゃないかし」

「貴女、ユキさんの着物姿見たくないの?」

はい?着物??

「……………」

「さあ、どつしましょ?」

ああ、あの木の箱って桐っていつやつですね!

つまり、中身は着物…

「着物!？」

「そうなのよ。ユキちゃん御着物って着た事ないでしょう?」

「な、無いです。でもわたしの容姿には合わないんじゃないでしょうか……」

「そんなことは無いわ。ユキさんのイメージに合わせてみたのよ」

イメージって……完全なる外人使用って事でしょうか?

「見てみない?ほら、全員の柄を梅で統一してみたのよ」

「綺麗ですね」

「そうでしょう?みちるさん、どう」

「……そうね」

やっぱり似合わないかな……

「ユキさん、色違いですよ。着ましよう」

「そうね。蘭ちゃんはこの桜色よ。柄も大きめで華やかでしょう?」

「ありがとうございます」

「じゃあ、蘭ちゃんとユキさんは御着物でいいかしら?」

「……着るわよ」

「あら?みちるさん何か言った?」

お二人は仲が悪いのでしょうか?

「耳が遠くなったのかしら?わたしも着ると言ったのよ」

「あらあら。そうよね、ユキさんとお揃いなんですものね」

「……わたしのはどれなの?」

「ふふふ。貴女のはこれよ」

「灰桜?」

「そうよ。そういう少し落ち着いた色合いが似合う年になったのね」
「はいはい。そのようですね」

険悪ってわけではないけど、このドキドキするやり取り…痛いですよ……

「でも、この色も綺麗ですね。ユキさんのはどういう色なのですか？」

「これよ」

「綺麗な赤色ですね」

濃赤色。少し不思議な色。

「ユキさんの髪と目の色が綺麗に映えると思うのよ」

「確かに綺麗な色ね。今様…臙脂になるのかしら？」

「臙脂よりも少し青が強い感じでしょう？一目惚れしちゃったのよ。」

ユキさん、どうかしら？」

「はい。とても綺麗ですね」

どこまでも奥のありそうな赤色、見ると目が離せなくなりそうな

……

「じゃあ、御着替えしちやいましょうか。まずは蘭ちゃんね」

「お願い致します」

「その次はみちるさんにしましよ」

「鏡を貸して頂けたら一人で着付けます」

「…覚えていて？」

「まだ、そんなに経ってないわよ」

「そうね……。じゃあ、ユキさんは少し待っていて頂戴ね」

あつ、えつと着替え中つてどこで待っていていればいいんでしょうか？

「と、隣の部屋で待ってます」

「あら、わざわざ部屋を移動する必要はないわ。蘭ちゃんもみちるさんも気にしないわよね？」

「はい。着付けの過程を見ているのも面白いですよ」

「そこにいなさい」

「…はい」

だからって、人の着替え中の過程を見るのもどうかと思うんです。

「みちる姉さん、今度着付け教えて下さい」

「着物なんて偶にしか着ないのだから、一人で着れるようになってもあまり活用できないわよ？そうやって、人に着付けて貰うので十分だと思っけれど？」

「折角、着付け出来る人が近くにいますから」

「そうよね。今日の御着物も貴方たちの物になるのだし、そういうのもいいわね」

えっ？

「はあ…そうよね。有難く頂くけれども…今度からは事前に相談して」

「ふふふ…」

「あ、あの」

「ユキさん。私たちの為に御仕立からして頂いたのですから」

「あ…」

「そうなのよ。置いて行かれても困ってしまうわ」

「…頂戴致します」

着物って、どういう風に保管する物なのでしょうか。
というか、着物ってどういう場面で着るんですか？

そんな価値の分かっていない者に与えてもいい物なのですか……？

「ユキさんの着付け、今日は私にさせて頂戴ね。今度からはみちるさんがやってくれるわ」

「はい。ありがとうございます」

「日本文化に興味があるのなら茶道・華道もみちるさんが一通り出来るわよね」

「みちる姉さん。…是非」

「……………暇があればね」

みちるさんって、名家のお嬢様だったのかな…

今までは、香山家という家に対してみちるさんが嫁ぐことの出来なのは香山家の問題だと思ってたけど、みちるさん自身の御家の問題でもあったのかな……

相思相愛で、香山家は受け入れているのにみちるさんの御家が認めない……

ロミオとジュリエット…みたいな？

着物を着るのに邪魔になるからだろう、ざっくりとアップにした髪の毛から纏めきれなかった後れ毛が背中に流れる。

「こんな感じかしら？蘭ちゃん苦しくはない？」

「はい。ありがとうございます。ユキさんどうですか？」

掛けられた声で我に返りそちらを見ると、お人形さんが立っていた。

「うわぁ、可愛いですね」

ふわふわの髪が桜色の着物の上で揺れて、ミスマツチなような、凄く自然なような……

「あら、みちるさんも終わったのね」

「……………」

「みちる姉さん。とてもお似合いです」

「蘭、貴女も可愛くなっているわね」

「かんざし？コサージュもあるのよ？」

「いいわ。これで纏まっているから」

い、いつものみちるさんがいない……

「あら？」

「ユキちゃん？」

「どうされたのですか？」

「あ……あの……………」

だ、だってみちるさんはパンツスーツで……
白衣で……
いつもかっちりとした……………

「ユキさん？」

「みちるさんが何かしっちゃった？」

「……………えっと……ユキちゃん……変かしら？」

「いいえ！」

変ではない！

なんだか、いつもと違うみちるさんにちょっと戸惑ってるだけです。
えっと……えっと？感想をストレートに言っなら……

「とても綺麗です」

「……………」

「……………そうですね!」

「…そうですね。じゃあ次はユキさんの番よ。みちるさんと蘭ちゃんは隣で待っていていらして」

「はい。さ、さあ、みちる姉さん行きましょう」

「あ、あの」

蘭さんと連れられたみちるさんが出ていきドアが閉まる。
もっと早く言わないと嘘くさかった?

う、嘘じゃないのに怒ってしまったんだろうか…

「うふふふ…みちるさんったら…ふふ」

「……………怒らせてしまいました」

「あらいやだわ、みちるさん怒っていないわよ?」

「でも顔が赤く…」

「あらあら、あれは照れているのよ」

照れている?

「そうですね?」

「そうなのよ。京香御母様を信じなさい。…ふふふ」

「はい。きよ、京香御義母様」

「あら……………うふふ…」

ダ、ダメでしたか?

「可愛いわ……………」

「……………」

自分よりも身長の低い京香様に抱き締められているこの状況…
しかし…修さんは本当に京香様の息子なのでしょうか？……………纏う
空気が似て無さ過ぎる！

「まあ、ごうしましょう。折角の御着物が乱れてしまったわ」
「は、はあ」

それは…何故でしょうね……

「髪は結い上げてもいいかしら？」

「はい。お任せします」

「綺麗ね……」

パパと同じブロンドを優しく優しく櫛で梳く……
なんで…そんなに悲しい顔をして……………

「京香様」

「京香御母様でいいのよ」

「あ、はい。あの」

「なあに？」

鏡越しの京香様が優しく微笑む。

「あの……すみません、質問を忘れてしまいました」

「あら。…そうなの」

「はい……」

「……………」

声を掛けたりしなければよかった……

「……………」

「……………」

「ジョシユはね…」

「……………はい」

「自称6歳の時に引き取ったのよ」

「はい？」

自称？

「陽季さんが仕事でイギリスに行って帰って来た時にね…拾って来たって言ったのよ。ふふふ」

「拾って来た…？」

そんなこと聞いたことないよ。パパは天涯孤独…それしか知らない。

「本当のところはどうなのでしょうね。問質する前に私ったら思わずジョシユを抱き締めてしまったのよ。あまりにも感情を出さない子だったから…」

パパは…しびい顔をする…怒る…優しく笑う…わたしの為に大泣きする……

「文哉さんと同じ年なのよ。養子として引き取ろうと思っていたの」

もしパパが香山になっていれば何か変わったのかな……

「お断りします」

「えっ？」

「そう言われてしまったの。一度じゃなく、それこそ毎年のように言っただけだ…」

「……………私たちは……………」
「…京香様」

泣かないで下さい。

その思いを込めて抱き締める。

「……………最後までジョシュと家族にはなれなかったのね……………」
「……………」

泣かないで……………下さい……………」

第34話（後書き）

京香様……ぐすん……

そして今回の新事実！

ジョシュパパって、ユキちゃんよりも無表情だったのね！！

第35話（前書き）

間が開きました……

次回は頑張ります……きっと……

第35話

コンコン

「お時間がかかっているようですが何かありましたか？」

控え目にノックされたドアの向こうから蘭さんの静かな声が聞こえる。

「あら、大丈夫よ。心配を掛けてしまっでごめんなさい。もう少しで行きますと伝えて貰えないかしら」

「わかりました」

ドアから遠ざかる気配。鏡越しに京香様を見ると少しだけ赤くなつた目と目が合い、気まずくなる……

「ごめんなさい。いい年をして恥ずかしいわ」

「い、いいえ」

「はい。髪の毛はこれでいいと思うわ。あとは御着物を整えましょ
う」

「はい」

言われた通りに鏡の前に立ちながら、さっきの話しを思い返す。パパが天涯孤独なのは本当。

でも、家族として受け入れてくれる人は居たんだ……
なんで、自分から拒否したの？

感情を押し殺しながら生きて相容れる人を拒否して……何を隠していたの？

そんなの……
そんなのまるで……わたしみたいだ……

「わたしたちはジヨシユの事を愛していた。わたしたちのことを愛してくれているジヨシユの気持ちも感じていたわ」

「父はみなさんを家族として愛していたと思います。みなさんの愛情も受け取っていたと思います」

「……それでも笑って欲しかったわ。怒って欲しかった。泣いて欲しかった。我儘を言って欲しかった。……あの子の背負っているものを一緒に共有したかったわ」

「……」
「茜さんと出会って貴女が産まれて、やっとジヨシユに家族が出来たのね」

パパ……ここにも貴方の家族が居ます。
みんなパパの事を愛してくれています。

……嬉しいですね。

「本当はユキさんもこちらで引き取るつもりだったのよ」
「はい？」

……なんですか？

「けれど、ほら……千草様がいらしゃったでしょう……」
「……」

「実はね千草様から修さんへの御縁談の御話しがあった時嬉しかったの」

「嬉しかったですか？」

「そうなの。まるで孫が帰ってくるみたいでしょ？実際は御嫁さん

だから娘になるのね。うふふふ

「……………」

穏やかに笑う京香様。

「ユキさんの意志も確認せずに御話しを進めてしまつてごめんなさい。ジョシユの時みたいに待てなかったのよ。御婆様ではなくて御母様だけれど……………やっぱり嫌だったかしら…?」

「いえ。嬉しいです」

素直に嬉しいと思える。

けれど、やっぱり…

「……………何を背負っているのかしらね」

「えっ?」

「いいえ…なんでもないわ。なんでもないのよ」

「……………」

「みちるさんとの生活はどう?」

「とても優しく あれ?」

わたし、修さんと結婚したんですよ?

まさか、みちるさんと暮らすつていうのも知ってるんですか?

いやいや……………結婚したら普通結婚相手と暮らしません?

そっか、みちるさんと修さんの関係を知ってるから。

いやいやいや……………だとしても、普通みちるさんと修さんが一緒に暮らすつて思いませんか?

いやいやいやいや……………わたしが和志さんと住んで、みちるさんが修さんと住んでしまつたら当人はいいのかもしれないけど、夫婦がそれぞれ異なる異性同士で住んでたら、余りにも世間体が悪いから…

……………

いやいやいやいや……

「あら、難しい顔をしてどうしちゃったの？」

「あの……京香さ　御義母様はどう思っておられるのですか？」

「ここは、ストレートに聞いてみよう！」

「うん？何をかしら？」

「修さん、みちるさん、和志さん……わたしも含めた4人の結婚に
関してです」

「そうね……ユキさんは、そういう関係は道徳的ではないと思う？」

「道徳的……分かりません。何が許されて何が許されないのか」

まず、人でもないわたしが道徳を語るべきじゃないでしょう。

「あの子たちが何か悪い事をしているのかしら？」

「何も……何も悪くはないです」

「……私は、あの子たちに甘いのでしょうかね。あの子たちの幸せ
を一番に考えてしまっわ」

「結婚という形を取らなくても幸せならいいということですか？」

「そうね。結婚することだけが全てではないでしょう？結婚という
繋がりが無くても家族になれるわ。あの子たちが考えて出した答え
だから認めてあげたいのよ」

「家族……ですか……」

確かに、みんな家族みたいだ。

誰と誰が結婚してて、してないとか関係なく全てを受け入れてる。

「でもね本当は少しだけ……少しだけみちるさんのことが心配だっ
ただのだけど、貴女が来てくれてよかったわ。うふふ」

「はい？」

「ああ、だからと言って無理する必要はないのよ？嫌な事は嫌と言つていいの。それでも言い難いことがあるのなら御母様に言いに来なさい。ユキさんは何があっても私の家族ですからね」

えつと…

「はい」

つて、答えていいんでしょうか？

「さあ、そろそろ行かないといけないわ。ユキさんの時間を独り占めしていたら怒られてしまう。慣れないと思うのだけれど歩けそうかしら？」

「あつ、はい。大丈夫です」

歩幅を小さくして歩くんですね。
しずしず……

「ユキさん」

「はい」

なんでしょう？

「おかえりなさい」

「えっ？」

「……………」

パパの家族。パパを愛してくれた人たち。
わたしを待っていてくれた人たち……

……ありがとうございます。

「……ただ……ただいま……」

「うふふふ。おかえりなさい」

もう一度おかえりなさいと言った京香様が開いた扉の向こうに、女神様が

違う！

えっと！いつものかつちりじゃない華やかな着物を着たみちるさんが振り向いて、驚いた顔でこっちを見てる。

うん？

何を驚いているんですか？

「わあ、ユキさん！とてもお似合いですね」

「本当に。その着物の色もいいね」

「似合う似合う！」

「あ、ありがとうございます。修さんと和志さんも、とても落ち着いた雰囲気で格好いいです」

わたし似合ってます？

めちゃくちゃ外人です！っていう見た目のわたしが和服とか着ちゃってもいいんですか！？

それに……

「あら、みちるさんどうなさったの？」

みちるさん、こっちをみたまま動かないですし！

「な、なんでもないわ」

「なあに？感想は無いのかしら？」

「い、いえ！あの变だと思いま」
「似合っているわ。その着物の色に貴女の髪色がとても映えて……
き、綺麗よ」

「ありがとうございます！」

確かに、この着物の色は吸い込まれそうな赤でとても綺麗だと思つ。
髪の色との対比が更に美しく見えるのかな。

うん！変じゃなくてよかつた。

「うふふうふふ」

「お、御母様。何かしら？」

「いやあね、みちるさんったら。なんでもないのよ。ふふふ」

「……………ふん」

うん。本当に仲が良いと思つ。

全てを受け入れた。これが家族の形なんだろう。

「そつえば母さん、何がおかえりなんだい？」

「うふふ。ユキさん」

「ユキさん??おかえり…ですか？」

「蘭ちゃんにはわからないかしら」

「わたしにも分からないのだけれど？」

京香様、今まで話してた流れが分からないのに誰に理解して貰おう
としてるんですか!?

そんなエスパーみたいな人

「ジヨシユ……………かな？」

「!?!?」

「あら、さすが修さんね」

怖い！修さん、怖いです！！！！

「ああ、確かに。おかえり……うん。いいねえ」

「うふふ。陽季さんも嬉しそうね」

「嬉しいね。孫が帰って来たみたいだ」

「あらあら。陽季さんも同じことを仰るのね」

「ははは。修と結婚したんだから娘なんだけどね。やっぱりジヨシユの方が息子みたいなものだったから、感覚としては御爺ちゃんだね」

「あの……ジヨシユさんという方は……？」

そうですね。香山家の人たちじゃないと分からない会話でしょう。

「ユキちゃんのお父様よ」

「はい。そうですね……って……！！」

あれ！？なんでみちるさんが知ってるんですか??

「ユキちゃん、どうしたの？」

「あ、あの……みちるさんは父の事を知って……る………？」

「もちろん知ってるわよ」

「え？」

もちろんなんですか？

「みちるさんだったら、ジヨシユの事を実の兄だと信じてたものね」

「そ、そんな小さい時の話しを持ち出さないで！」

「そうだよ、母さん。みちるだって小学生に入ってからにはちゃんと疑問を感じてたんだからね」

「まあ！ではそれまでは信じていたのね？」

「あ、あのね」

「はいはい！ちょっと質問なんですけど……！」

わたしも聞きたい事があるんですが！

何故、みちるさんも当たり前前にパパの事を知ってるの??

しかも話しを聞いてる限り、誰かから人づてに聞いて知ってるとかではなく、みちるさんが小さい時に実際に親しく接して知ってたみたいなき感じなんですけど？

「和志君、どうしたんだい？」

「さっきから話題になってるユキちゃんのお父さんのジョシユさんって、あのジョシユさんですよね？」

「あのジョシユさんだね」

「和志も良く相手にして貰ったから覚えてるだろう？」

「覚えてるよ。文哉さんにもジョシユさんにも遊んでもらったし」

ちょ……っと待って下さい！

全く整理が出来てません！！

ここに、和志さんまで絡んでくるんですか???

「お父様？」

「はい。えっと、さっきもみちるさんが言いましたが、わたしの父です」

ほらほら！わたしだけじゃなく蘭さんも話しについていけてませんか……！！

ちょっとは、收拾して説明して下さい……

「ああ、いえ。そうではなく……」

「ユキちゃんが混乱しているわ」

わたしも混乱していますが、場も混乱してると思うんです！

「和志さんまでジヨシユと面識があるのが不思議なのかな？」

あつ、そうですね。というかみちるさんの会話からパニックは続いてますけど……

「和志とわたし達は幼馴染なのよ」

「幼馴染？」

ああ、そういえば和志さんとみちるさんが幼馴染ってというのは聞いてたけど、修さんもってことなのか。

小さい時に修さんの家に遊びに来てパパに会ったってこと？

「……なるほど」

いや……でも……

「なんで、みちるさんは実の兄だと……？」

「そ、それは小さい時の話しなのよ！それまでも文哉兄さんとジヨシユ兄さん、同じ年で双子なのに似て無いなーとか、ちゃんと疑問には思ってたのよ！」

いやいやいや、そもそもパパは正真正銘の外人さん。

似て無いとか、そういう問題じゃない気がする……

……って……あれ？

「文哉兄さん……ジヨシユ兄さん……???」

みちるさんって、小さい時は周りの人が全員家族に見えてたの？
友達のお兄さんだよ？

あっ、そうか。そうじゃなくて、親しみを込めて

「お父さまですね」

「はい？」

いやいや、蘭さん。お父さまじゃなくて……親しみを込めてお兄さま
まって呼んでるって事で

「私の父と、ユキさんのお父様ですよ」

「……………はい？」

「はい？」

えっ！あの……………どうしたんですか？っていつ顔で見られても困りま
す……………

「どうしたんですか？」

「……………」

言われても困ります……………

「ちょっと……………頭の中を整理させて下さい」

「えっ、あ、はい……………」

不思議な顔をしながらも、みなさんで会話を再開して貰います。
わたしは、その間に今までの会話を纏めましょう。

……………

……
あのですね……
……もしかして
いやいやいや……

確認……して……みますか……？

「あの……御食事中すみませんが……」
「どうしたのかな？」

代表して陽季様がにこやかに答えてくれる。
楽しく話しをしながら食事をしていた皆様の視線を受けて少し怯むけど、この話しを有耶無耶のまましておいては拙い気がする。

「皆様にお願いが」
「いいよ。言ってみて」
「はい」

では、まず快く快諾してくれた修さんから……

「修さん、この場の皆様に、それぞれ普段の呼び方で呼び掛けて頂
けますか？」
「ええと、つまり。ユキちゃん……とかでいいのかな？」
「はい。そうです」
「分かった。では、座ってる順で。ユキちゃん……みちる……蘭……母さ
ん……父さん……私……和志」
「ありがとうございます」

はい。修さんの場合は分かってました。

「和志さん。いいですか？」

「えっと。ユキちゃん…みちる…蘭ちゃん…小父様…京香小母様…
修…僕」

「ありがとうございます」

和志さんも…はい。

「何故、和志君は昔から京香小母様なんだい？なんだったら、私も陽季小父様にするかい？」

「なんででしょうか…自分でも意識してではないんですが……」

「二人とも話しは後でね。取り敢えず今はユキちゃんの御願いからだよ」

「そうだね。では私が。ユキさん…みちる…蘭…私…京香さん…修…和志君」

「ありがとうございます」

「次は私でいいかしら。ユキさん…みちるさん…蘭ちゃん…陽季さん…私…修さん…和志さん」

「ありがとうございます」

問題は…ここからなんです。

「ユキさん。普段の呼び方ですよね？」

「はい」

「では、私からで宜しいですか、みちる姉さん」

「どうぞ」

「はい。ユキさん…みちる姉さん…私…御爺様…御婆様…修さん…
和志さん」

「……ありがとうございます」

ほら、きちやいましたよ……やっぱり……

「じゃあ、最後はわたしね。いいかしら？」

あー、聞きたいような、聞きたくないような……
正直、もう蘭さんで分かってしまいましたが…

「はい。………お願いします」

「ユキちゃん…わたし…蘭…お父様…お母様…修兄さん…和志」
「………はい。ありがとうございます」

つまり………

「修さんとみちるさんは御兄妹なんですね？」

「えっ？そっだよ？」

今更？みたいな顔で言われても………

兄妹恋愛なんて重い話だと思っただけだから…

まさか、そこまでだとは想像出来ないでしょう！！……？

「蘭さんのお父様が文哉様……」

「そうです。と言いましても、私が生まれる前に亡くなりましたので私は父の事を記憶してはいないのですが」

「あの…香山の性ではないのですか？」

「父と母が籍を入れる前に父が亡くなったので」

「その後、蘭の母親自身は養子縁組を嫌がったんだよ。というより遠慮したのかな」

「蘭ちゃんのお母様が亡くなって蘭ちゃんは養子として引き取ったのよ。公的には香山なのだけれど、蘭ちゃんの意向で対外的にはそのままの性を名乗っているの」

「そ、そうですか」

ややこしいです！

分かり易く、香山蘭！って言うてくれれば途中で気付いたかもしれないのに。

「えっと…分かりました。みちるさんはわたしから見えて…義妹？で、蘭さんが姪？？」

「そ、そうね」

「そうですね」

「あら、みちるさんの方が妹になっちゃうのね。ふふ」

「…ユキ義姉さん…ないわ…ダメ… な… よ…」

み、みちるさんがぶつぶつ言いだしたけど大丈夫でしょうか？

「みちる。ちょっと面白いけど、ユキちゃんがびっくりしてるから戻ってこーい」

「えっ！だ、大丈夫よ」

「あの…ユキさんは今まで気付いていなかったのですか？」

「……はい」

だって、誰からも聞かされてませんでしたし…

「みちる言ってなかったのか」

「兄さんが説明してると思っていたのだけれど？」

「いえ。気が付かなかったわたしが…」

確かに、まるで本当の家族みたい…って家族だし当たり前！！

「うふふ。ごめんなさいねユキさん。少し抜けた子供たちで…誰に似たのかしら」

「……………い、いえ」

うん。確かに家族です……………

修さんとみちるさんが結婚できない理由が凄くはっきりと分かりました。

禁断過ぎます……………

第35話（後書き）

き、近親相姦！！

まさかの展開やん……

京香様も陽希様も親として受け入れちゃっていいの?????

第36話（前書き）

二週連続で投稿となりました。
来週も……頑張ります。

第36話

つ、疲れたのですが……

わたしのイメージだと、20人くらいが集まって大きなテーブルで会食……みたいな感じだと思ってた。

ところが実際行ってみたら、100人以上で立食パーティーみたいになってますよ？

これ、事前情報と違いますか？

親族の顔合わせ？どこが？えっ？これって全員親族なの？？？

っていう状態で、何も分からないまま修さんの横で挨拶……

新年早々、こんな強制イベントを毎年こなさないといけないのでしようか。

やっこのことで、わたしに向いていた興味の視線が減り少しだけ緊張から解放されたら一気に疲労がやってきた……

「あ、あの修さん」

「どうしたんだい？」

小さな声で話しかけたわたしに、同じように小さな声で返してくれる。

「どこかに少しだけでも一人になれる空間は無いでしょうか？」

「疲れちゃったか……。そうだね、じゃあ前のコスモスの部屋は分かるかい？」

「はい、分かります」

「あそこで休んでおいで。無理して戻らなくていいからゆっくりしときなさい」

「すみません……。ありがとうございます」

大丈夫です。なんて言えない……
だって、疲れたんです！

人の視線って一気に集めたら凶器ですよ。

……しばらく一人でボーっとさせて貰おう

はぁー……

電気も点けない真っ暗な部屋の窓際に椅子を寄せ、背もたれに深く
凭れ掛かりながら大きく息を吐き出す。

着物が着崩れちゃうと気付いたのは凭れ掛かった後なのでどうしよ
うもない。

開き直って完全に脱力して

「疲れたかしら？」

「えっ！？い、いえ！そんなことはないです」

いつの間につとつとしてたのだろう。

何も気配に気付けないまま廊下から掛けられた声に驚いた後、修さ
んの妻として見せてはいけない失態に、慌てて振り返りながら弁明
する。

「御見苦しいところをお見せし」

未だに電気も点けない室内から、明るい廊下側に立つ人を見る。
その人影は逆光でもハッキリと誰だか分かる。

「みちるさん？」

「そつよ」

ですよ。

「どうしてここに？」

「ユキちゃんの姿が見えなかったから、修兄さんに聞いたのよ」

「あ、そうですね」

言われてみれば納得。というか、それ以外に考えられないじゃないですか。

それにしても、みちるさんの修さんに対する呼び方が違和感あり過ぎる……

「疲れたのね」

「……そうですね。少し……」

もう、ここは正直に言ってもいいと思うんです。だって……

「想像と違った？」

「もつと、小規模なものだと思ってました……」

「夜が大々的だから昼にわたしたちだけが呼ばれたのよ」

確かに修さんから大々的だーってというのは聞いてましたけど……

「みなさん親族……ですか？」

「親族よ。と言っても、香山重工が血族会社だからかしら。血の繋がりがあつような、ないような……殆どの役員が来てるわね」

「……あつような、ないような？わざわざ元旦にですか？」

「この場は一応会社とは関係なく親族として集まったという名目があるでしょう？だから、役職関係なく挨拶が出来るわ。それは結束

力に繋がるのよ」

「結束力ですか」

「そうよ」

大人の社会って大変ですね。

でも、媚を売るために集まって来てるのよ。とか言われなくてよかった。

「新年の挨拶だけは逃げられないのよ。他の呼び出しはそれとなく断っておくから、これだけは耐えてね」

「……戻らないといけないですか？」

「ふふふ。そんなに嫌そうな顔しないの。今日はもう終わりよ」

「はぁー」

良かった。今から戻ってとか言われても耐えられる気がしないし……

「終わるまで休んでいいわ」

「みちるさんは……？」

戻るんですかね……

「……どうしようかしら。一通り挨拶は終わったんだけど」

「じゃあ！いつしょ……に……」

「えっ？何かしら？」

「……」

わたし、何を言おうとしたの？

「……」

「……」

「……………」

「……………」

「……そうね……。ユキちゃんにこの家を案内してあげるわ。どう？」

「……はい」

わたし、戻って欲しくないと思った？

「この部屋は修兄さんのお気に入りね」

「修さん……」

なんで戻って欲しくなかったの？

「あの人は季節毎の花が好きだから。この部屋からは」

「コスモスですね」

……一人は寂しいから？

「そうよ。見たの？」

「はい。以前この部屋に案内して貰った時に」

「そう。この季節は……あの部屋から水仙が見れるかしら……」

「水仙ですか？」

寂しい……

「そうよ。見に行ってみる？」

「……それも修さんのお気に入りのお部屋ですか？」

「そういえばそうね。ほら、さつきも言ったけれど花にこだわりがあるから、それぞれ季節毎にお気に入りの部屋があるのよ」

「そう……ですか……」

「部屋だけじゃないわよ。あの人は多趣味だから色々変わった物も

あるわ。それにスポーツ関連は一通りやってみるって人だから、この部屋なんか面白いわよ。ほら御覧なさい」

賞状、トロフィー、メダル、盾……

「浅く広くで色んなスポーツに手を出して、こうやって大会で成績を残されたら、それ一本で頑張っている人からしたら嫌味でしょうね」

それらは、修さんの輝ける歴史……

「ほら、これなんて兄さんが中学2年生の夏に……」

……みちるさんが楽しそうに語る修さんの……過去……
なんで……どうして……こんなに……

……寂しい……

「……でしょ？だから今度一緒に」

「何故……修さん……なん……ですか……」

「えっ？」

「どうして全部修さんの話しになるんですか！」

「ど、どうしたのユキちゃん？」

「みちるさんが……案内してくれるって言ったのに……修さん修さん修さん……みちるさんの中に修さんが溢れてるのは分かってますよ！でも、みちるさんがわたしを案内してくれるって言ったんです！……こんな時くらい修さんじゃなくてもいいじゃないですか！……わたしの前で惚気ないで下さい……」

一人が嫌なんじゃない……

わたしを置いて戻るのが寂しいんじゃない……
修さんの所にみちるさんが戻るのが寂しい……
修さんの傍にみちるさんがいる……のが……

………はい？

「あ、あのね！！ユキちゃ」

「ナシです！！」

「ナ、ナシ??」

「今の全部ナシですから！！！！」

何を考えてるんですか………？

みちるさんが修さんのところに戻るのは当たり前ですから！！
それが寂しいに繋がる意味が分からない。

「ナシじゃないわ！！」

「ナシですから！！」

それに、本当の兄妹でもあるんだから思い出が修さん寄りになる事
だって当たり前じゃないですか！

「ナシにしないで頂戴！！」

「ナシナシです！！」

惚気るのも当たり前！

好き………なんだから………

「ナシにさせないわよ！というか、聞き捨てならない言葉があつて
ナシに出来な」

「あーあーあー！ナシです。そうだ！ほら、もう一回最初の部屋か

「やり直しってことに！」

時間を巻き戻したりする力は有りませんか？

うーん、ヴァンパイアの力なんて肝心なところで役に立たない！

「そんな子供みたいに人の言葉を遮らないの！それにやり直しなんてしないわよ！！重大な誤解をされて」

「わーわーわー。分かっていますから！もういいですよ　んっ！！」

……………うん？

「どっ？いつもやられてばかりじゃないのよ？」

「え…と…？…あ…」

また近づくみちるさんの顔……………

唇に触れる温かさを無意識に求める。

「んはあ…ん……………」

みちるさんの唇から洩れる息まで、全部……………全部……………自分のモノに……………

「…んちゅ……………ふぁあ…ん……………う……………」

温かい…みちるさん……………

「ちよ、…んふぁ……………「キちゃ……………はあ…ん……………んんん！」

うん？肩をバシバシされてる……………

あつ……

「み、みちるさん？」

「はあはあ……どこ……ちゃんの……しら……」

真つ赤な顔のみちるさんがわたしを睨みながら、ぶつぶつ言っておられます……

「ごめんなさい。つい……？」

「……わたしからしたのだからいいわよ」

「あ、はい……」

そつえば、何故かみちるさんからキスをされて……
キ、キス……？

挨拶？なんの挨拶だったのでしょうか？

「えっと、今日はおやすみの挨拶が早いので」

「違うわよ」

「えっと、おかえり？」

「どこに行ってたの」

「どこ……でしよう？」

「ユキちゃんは、挨拶じゃないとキスしないの？」

「えっと……」

嬉しい時とか？

親愛の感情が昂ればするでしょう……

「大体……ユキちゃんの挨拶のキスの基準は……あ、あれなの？」

「基準？」

「し、舌とか」

「何故!!!」

そんなことをした、わたし!!!!!!
そんな挨拶嫌です!

「絶対違います!!!」

「じゃあ、ユキちゃんからしても挨拶じゃないじゃない……」
「……挨拶じゃない?」

ですか…

それって、どういう意味ですか?

「わたしはユキちゃんとキスしたかったからしたのよ!」

そ、そんなに真っ赤になりながら宣言して……

……っつて!

「へっ?」

「ユキちゃんは違うのかしら?」

わたしは……みちるさんとキスしたかった?

「そう……ですね……。ごめんなさい」

「何故謝るのよ!わたしからもしたでしょう?」

「それは、いいんです」

全てを知ってるみちるさんが怖がらずに親愛の情を持ってくれる
ってということが奇跡だから。

素直に嬉しいと思える。

だけど、わたしはダメ。

どこまでが親愛の情なのか分からないから。どこからがヴァンパイアとしての欲求なのか分からない。血だけじゃ飽き足らず……止めどなく……みちるさんを……食べるのだろうか……

「何が違うのよ!?!」

「……………」

「あのね、ユキちゃんは大きな誤解をしてるみたいだから訂正しておくけれど」

「……………誤解?」

「わたしと修兄さんは兄妹よ!?!」

「はい」

知ってますけど?

「兄妹なの!?!?!」

「えっ?は、はい」

二回も言わなくても、今日きちんと理解しましたから!

「ユキちゃん凄く日本が堪能なのだけれど、もしかして間違っ
て覚えたのかしら……………」

「何がですか?」

「惚気る」

「惚気る……………」

「あのね、確かに自慢の兄ではあるけれど、あれはあくまで家族を誇らしく語ったのであって、惚気たわけではないでしょう」

「すみません。あのときは……ちょっとおかしかったんです。みちるさんと修さんが家族としての視点じゃなくなっていたので……失言でした」

Color coating《補色》してから、みちるさんに対して独占欲が強くなってる気がする。冷静にならないと……

「まず、そこで家族以外の視点っていうのが気になるわね」

「いえ。だから、本来ならみちるさんと修さんは兄妹として見なければいけないのに、本来の関係を思い出しちゃって、わたし」「ストップ！何故だか凄く嫌な予感がするわ……わたしと兄さんの本来の関係って何？」

「……恋人」

「oh my God!!!」

「えっ???」

いきなり、悶絶しだしたみちるさん……どうすればいいですか？

「どうやってたら……」

「なんですか？」

「どうやってたら、そんな勘違いが出来るのかしら!!」

「か、勘違い???」

どこの部分が勘違いなのでしょう？

「何回も言ったでしょう？わたしと兄さんは？」

「恋人？」

「じゃないわ！兄妹!!どこから恋人が出てきたのよ!？」

「どこから……?えっと最初は……修さんと話しをしたみちるさんが見たことないくらい優しい顔してて……」

「そ、そんな顔してないわ!」

「してました!」

「それはいつのことなの？」

「えっと……修さんの家に荷物を運び入れた前日です」

そう。奏音ちゃんを契約守護獣にした日の帰り……

遠くからでも分かった二人は、とてもお似合いで優しく笑ってた。

「前日……それって喫茶店ね」

「……そうです」

自覚……あるんじゃないですか。

「優しい顔して話していた……。そうね。確かに、二人の姿を見るまでは修兄さんと楽しく語らっていたわ。主に貴女の事について話しをしていたのだけれど？」

「わ……わたし？へっ……??？」

「……奏音さんと歩いてたわね」

「えっ？みちるさんも……気が付いて……？」

どういふこと??

「駅に向かう姿を見ただけだけれどね。……ホテル街から……」

「はい？」

「いいのよ、別に。奏音さんとの時にも話しをしたでしょう？誰かを必要とする……必要とされたいと望むことはあるのよ。ただ……あの時点ではちょっと負の感情に揺れたっただけだから」

「えっ？いや、あの」

「それは、もういいのよ。恋人疑惑の要因その次はなんなのかしら？」

いいのでしょうか？

負の感情に揺れたって控え目に表現してますけど、イライラしたとか力チンとしたとかムカついたとかですよね？
それ、そのままスルーしていいんですか？

「他に変な誤解を生みそうな事があった？」

分かりました。スルーします。

「隣りの家に住んでます」

「……あのマンションはそもそもお父様のものだから。兄さんもわたしも蘭もいるでしょう？」

「あっ……」

そう言われたらそうですけど！

「修さんも否定しませんでした……よ？」

「ウソでしょう!？」

「本当です」

「なんて言っただの？」

「修さんの好きな人は矢原さんですね？ってストレートに。そうしたら修さんは、そうだって」

聞き間違いであるはずがない！

「それで？他に何を言っていたのかしら？」

「えっと……確か軽蔑するか？とか……」

「なんて答えたの？」

「しない……と……後は、幼馴染だったけど……好きに……なった？あれ？」

「他にも誤解した原因があるかしら？」

「……みちるさんが4人の関係をどう思う？って。許されない関係だと思っかって……」

「ええ」

「……………」

「そうね」

「……………」

おかしいですね……

おかしいですよ……？

「頭の中は整理出来たかしら？」

「みちるさんと修さんは兄妹？」

「そうよ」

「恋人ではない？」

「当たり前でしょう」

「あれ？修さんと許されない関係……？あれ？」

「はぁー！。分かっていなかったとは思わなかったわ」

「わたしと和志が幼馴染。修兄さんと和志は？」

「お……幼馴染……？」

「そうね。わたしたち家族は受け入れているのよ。でも世間を誤魔化さないといけない事もあるの」

「和志さんが……」

「もう一度聞いわ。許されない関係だと思っ？軽蔑する？」

「……しません」

「そう。良かった」

そうか……そうなんだ……

「どうしたのユキちゃん。嬉しそうよ」

「いえ、なんでもないです。……みちるさんは……」

「何かしら？」

「……………」

「どうしたの？」

「なんでもないです」

「そう？」

「はい」

みちるさんは……………

修さんの恋人じゃなかった。修さんの元に帰るんじゃないじゃなかった。それを嬉しく思うなんて……………また独占欲が強くなりそう……………

第36話（後書き）

やっと気付いたかー！ー！ユキちゃん鈍い！！

修さんと和志さんが付き合ってた事より、みちるさんがフリーやった事の方が嬉しいのね。

和志さん……よかったね……？

第37話(前書き)

これは！三週連続投稿なのですか？
頑張ったのですか！？

第37話

パタン

静かに閉じられたドアの音と共に近づく気配に読んでいた本を閉じて顔を上げると、ちょうどみちるさんが視界に入る。

まだ寝る時の格好のままのみちるさんが、わたしを見て欠伸を我慢したのを見て笑いそうになった。

まだ眠いのかな？？

「おはよう」

「おはようございます」

挨拶だけ交わして、みちるさんが朝の用意をしている間に朝食の準備を始める。

3月も折り返しを過ぎ学期末を迎えた最近になって、やっと日常化し始めた毎朝の光景。

最初は和志さんが作ってくれた食事を居るメンバーみんなで食べてただけで病院勤務の二人と時間が合わないのに、無理して和志さんが作ってくれるのが申し訳なくて平日は別々に食べるようになった。

時間が合う時は和志さんが料理を教えてくれるから、最近レポートリーも増えた気がする。

今日は週末だから、お手軽朝食で勘弁して貰おう。

ハムエッグ、グリーンサラダ、フルーツヨーグルト

時計を確認しながらトースターにパンをセットしてコーヒーをカップに注ぐ。

ガチャ
パタン

よし、良いタイミング

「ミルクと砂糖はどうしますか？」

「任せるわ」

「……じゃあ、今日はミルクだけにしますね」

「毎日用意してくれるのは嬉しいけれど、ちゃんと寝れているの？」

「大丈夫ですよ」

「大丈夫じゃないでしょうか？睡眠時間…何時間なのかしら？」

えつと……大体、夜部屋に向かうのが日が変わる位だから………6
時間位って言っておけばいいかな？

「6時間く」

「ちなみにね、ユキちゃん」

「はい？」

「大体わたしがいつも起きるのが6時なのよ」

「へえ………」

…という事は？

「睡眠時間は？」

「…5時間くらいですかね」

「……嘘おっしゃい………」

「えっ？いや嘘じゃないで」

チーン

「あつ、パンが焼けましたね」
「はぁー」

みちるさんの大きな溜息は聞こえない振りをして、パンを取りにキッチンに向かう。

修さんの部屋からこつちに引越して来たことで、悪夢を見なくなるなんて都合の良い事は考えてない。

食事も睡眠もColor coating《補色》の回数を減らす為にとるようになっているけど、食事だけに切り替えた。

わたしが寝るたびに周りの人を起こしてしまうなんて……迷惑過ぎる！

「蘭は？」

「今日は来ないそうですよ」

「そう」

蘭さんは元々みちるさんと朝食を食べることが多かったらしい。

じゃあ、わたしが後からで申し訳ないですが一緒に食べさせて貰ってもいいですか？っていう話になったのに……何故か強い口調で遠慮します！と……

そんなにわたしの料理が不安なんですかー！……！……！

結局、みちるさんにバカな事言わないで！とフォローして貰って、週の半分位は一緒に食べるようにしている。

……やっぱり……口に合わないでしょうか……

「ちゃん……ユキちゃん？」

「へ？」

「どうしたの、ポーっとして。コーヒーが零れるわよ」

「あっ、うわっ！」

危ない危ない。コーヒーは嫌いじゃないけど一日コーヒーの匂いが纏わりついてるなんてどんな香水だ。

「ユキちゃん……ちゃんと寝なさいよ」

「大丈夫ですよ。睡眠はとってますから」

「……しっかりとるのよ」

「はい」

ちゃんと睡眠はとってますよ？

年が明けてからもきちんとして続けている放課後の定例行事。

コンコン

「どござ」

「失礼します」

ガチャ

もう、ここまで毎日通っていたら習慣と呼ぶと思います。

「あれ？」

「やほーーー」

「奏音：ちゃん？」

「そっだよー。ユキちゃんの目の前に居るのは奏音ちゃんです」

いつも通り保健室に来たはずなのに、どうしてここに奏音ちゃんが？

「奏音さん…いきなり喋り方が変わった」

「やだなー、矢原先生。生徒のプライベートをばらさないで下さいよ」

「……………」

「奏音ちゃん、どうしてここに？みちるさんと何を話してたんですか？」

「カウンセリングですよカウンセリング。悩める年頃なんで」

「カウンセリング……？」

絶対ウソでしょう……

同じクラスなのに、わたしに隠れてわざわざみちるさんと話しをしてるなんて……どう考えてもわたしのことですよ！

「そうそう、カウンセリング。それよりもユキちゃん。安東会長が来週の時間がある日は昼休み空けてくれーって」

「またお手伝いですか？」

「そういうこと」

「わかりました」

生徒会の裏方の仕事を手伝うという話しが正式に決まってから、何回かこんな風に呼び出しがかかった。

呼び出しと言ってもわたしの手が空いている時とかだけにしてくれて、仕事内容も事務雑務で、きちんと裏方という約束は守ってくれてる。

最初のインパクトが強かったせいで不安だったけど、意外と安東先輩は身内にはしっかり気を配れる人みたいだ。

良かった……インパクトだけの生徒会長じゃなくて……………

つて！！！

「誤魔化されませんよ!」

「どしたのユキちゃん。怖い顔しちゃって?」

「カウンセリングじゃないでしょ?わたしの事ですよね?コソコソされるのは不愉快です」

「ユキちゃん、あの…別にコソコソとかじゃないし……」

特に、わたしがみちるさんにColor coating《補色》
している事を知っている奏音さんは、わたしに何かある度にみちる
さんへのColor coating《補色》をしるとづるさい。

わたしは、必要最低限のColor coating《補色》で問
題ないって言ってるのに……まさか強要なんてしてないです…よね
………?

「奏音ちゃん」

「な、何…かな……?」

「話があるなら直接わたしに言って?それともわたしに内緒でみ
ちるさんに何か言わないといけない事があった?」

「あつ、それは……でも……」

「ユキちゃん、あのね」

「みちるさんも何かあったら教えて下さい」

強要されてColor coating《補色》をして貰うなんて、
非道な事したくない。

俯いてしよげている奏音ちゃんにはしつかり反省して貰わないと。

「………」

「ユキちゃん……」

「………」

「………すみませ」

「ユキちゃん、違うのよ」
「みちるさん……」

ここで許したら、これからもみちるさんが困る事になるんですよ？

「……わたしが呼んだの」

「へ？……呼んだ？」

「そうよ」

「みちるさんが……奏音ちゃんを保健室に……呼んだ？」

「正確には、見掛けたから声を掛けたのよ」

「なんで……ですか？」

そんな危険な事？

「そんなに大きな意味はないのよ？」

「そ、それはつまり……本当にわたしとは関係なく保健医と一生徒として話しをしていたということですか？」

「……そうね」

あっ、まずい。

だとしたら……

「か、奏音ちゃん？」

「なんで……しょうか……」

……落ち込んでる。

「疑ってごめんなさい……！」

謝る以外にないですよね？

どんよりオーラ全開ですしね!?

「ユキ様は……」

「…はい」

恨み言くらい聞きますから!

「私の事を、どんな極悪動物だと思っておられるのですか!?!?!」

動物って言っちゃったよ!?!人物じゃなくていいの!?!?

「いや、あのですね!極悪だとか思っていないですよ!?!」

「私が矢原先生に何をするというのですか!?!?!」

最初の頃を思い出して下さい!?!色々しそужゃないですか!?!?

「いや、あのですね!Color coating《補色》で奏音ちゃんが色々心配性になつてたから!?!」

「私がユキ様のColor coating《補色》を心配するのは当たり前ではないですか!私で代用が可能なのであれば、いくらでも差し出しますとも!?!だからと言って矢原先生を襲うような真似をするとおっしゃるのですか!?!?!」

そんなにいりませんか!?!ちょっと怖いです!?!?

「いや、あのですね!襲うなんて思ってないですよ!」

「しかし!ユキ様は」

「奏音さん!?!少し落ち着きなさい!」

みちるさんの一喝で部屋に静けさが戻る。

「矢原先生を大切にしておられるのは存じておりますが……」
「もちろん奏音ちゃんも大切だって思ってますよ」

わたしに命を預けた奏音ちゃん。

きちんとその事を受け止めないと……奏音ちゃん事を大切に思っている人の思いも、奏音ちゃんが大切に思っている人の思いも……全部自分に返ってくる。

だから、ちゃんとColor coating《補色》もしますよ。

「でしたら、もう少し信用して頂けないでしょうか……私はユキ様が大切にしておられる方を……矢原先生を傷つけるつもりはありません。矢原先生は唯の餌ではないので」

「え、餌って?!?!?」

「いえ。ですから、餌ではな」

「そんなの!……でも……」

「いえ、あの……」

それは……

「わたしがみちるさんでColor coating《補色》して
るから?」

「……そうですね。矢原先生しかColor coating《補色》な
色《なさらないのですから。それは単なる栄養補給……餌としては
な」

「Color coating《補色》……しないとダメなんです
よね……」

「ユキ様……」

Color coating《補色》なんて言葉で濁してるだけ、

それはわたしが生きていく為に吸血しているという事だ。
人の血を欲して……餌にしているという事だ。

……みちるさんを
餌……に……

みちるさんと目が合った事に気付いて、思わず無意識に向けてしま
った顔を逸らす。

「あのね、ユキちゃん。バカな事考えないでね？」

「えっ？」

予想してなかった言葉に驚いて折角逸らした顔を戻してしまった。

「バ、バカとは！？ユキ様に対して……ガルルウ」

「ちよっ！」

「奏音ちゃん、待て」

「ガウツ」

あっ、つい……

でも……それで止まれるんだ……

「ユ、ユキちゃん。いいかしら？」

「はい。すみません」

それで、何がバカな事？

「ユキちゃん、今頭の中で考えた事を言ってみて」

「何がバカな事だったのか……と？」

「その前」

その前は奏音ちゃんが待てが出来るんだーって思ったんですけど、きつとそれを言ったら違うと言われ……

「待てがで」

「その前ね……！」

……ですよね。

「Color coating《補色》なんて言葉では言っても……

……所詮……人を餌にしてるんだなと」

「あのね……。わたしはいつユキちゃんに食べられたのかしら？」

「Color coating《補色》そのものがそうでしょう？」

「あれが食べることになるの？あのたつた数ミリリットルの血液のやり取りが？それも月に1度から2度よ？」

「……少ない……」

今、「待て」中の人物から小さな声で呟かれた声は聞こえなかったことにしよう。

「その数ミリリットルの血液のやり取りでわたしは存在してますから」

「わたしはColor coating《補色》を嫌だと思ったこともないわよ？」

「それは、みちるさんが優しいからで……」

普通は嫌でしょう。だって、血を吸われるんですよ？

「害も無く人の為になっているのだからいいのよ。献血よ献血」

「そんなに軽いものじゃないです！みちるさんはもつと危機感を持

った方がいいんじゃないですか!？」

「ユキちゃんは極端過ぎるわね。例えばこのcolor coat
ing《補色》が、もっとリスクのあるものだったら話しは別よ?
死ぬとか、毎日貧血ぎりぎりまで血が必要とかね」

吸血されたらヴァンパイアになるとか……

「それでも……自分の血が……生存の為に吸われるって……」

「わたしの血がユキちゃんの生存の為に吸われるのなら嬉しいわよ
?」

「そんなの……」

みちるさんが……優しいってだけ……

「あのね、わたしだって誰にでも血をあげたいと思うほどお人好し
じゃ無いの」

「……………」

「ユキ様、発言をお許してください」

「えっ!奏音ちゃん?」

今まで、きつちり「待て」をしていたのに

「急にどうし」

「もどかし過ぎで御座います」

「も、もどかしい?」

「ごう……お二人の発言を黙って聞いているというのは……………ふう
……………」

……………物凄く深い溜息をついたね

「何が言いたいのかしら？」

「まず基本的な事なのですが……矢原先生はユキ様の事をどう思っているのですか？」

「ど、どうって……？」

「つまり、ユキ様の事を」

「あー、そうねそうね！」

わたしの事……怖いですか？

「誤魔化す必要があるのですか？」

「……貴女はどうなの？」

「確認する必要もないですね。私はユキ様の事をお慕いしていますから。私の命はユキ様の物ですし、私自身もユキ様の物です」

え……いや、そこまで……

……契約守護獣って重いですね

「そう……」

「それで矢原先生は？」

「……好きよ。大切だと思ってるわ」

みちるさん……ありがとうございます……

わたしを受け入れてくれる……怖がらないでいてくれるみちるさん

……

わたしも、好きですよ。大切だと思っています。

「まあ、そうでしょうね」

「貴女には悪いけれど……」

「いえ、矢原先生はユキ様の御傍に居るべきです」

「Color coating《補色》があるからかしら？」

心配してたのはこれ！

わたしの契約守護獣の奏音ちゃんとColor coating《補色》対象のみちるさんですよ……？

Color coating《補色》させようとする奏音ちゃんとWerewolf《人狼》を恐れるであろうみちるさん……難しい関係ですよね？

こういう確執みたいなことが起こると思ってた。

「そもそも私が言った餌と言う発言が軽率であった事は認めます。

ユキ様申し訳ありません。その上でColor coating《補色》というのは……あ……」

「何？」

「何かしら？」

何か説明するんじゃないの？

どうぞ！

「よしっ！今日はもうこれくらいでいいかなー」

「はっ？」

「ユキちゃん、ありがとねー」

「えっと？」

きゅ、急にどうしたんですかー？

コンコン

えっ？

「どどどー」

「失礼します」

「蘭…さん？」

「はい。お邪魔してしまいましたか？」

あー、蘭さんが近づいたから話しを止めた？

「もう終わったから大丈夫。来週からのお手伝いOKだって」

「あっ、伝えて頂いたんですね。有難う御座います」

「うっん。うわっ、もうこんな時間なんだー。じゃあ、私帰るねー

」

「はい。また来週」

「あの……」

さっきの話しの続きは…？

「どしたのユキちゃん？あっ、何々？土日離れるのが寂しいとか？

仕方ないなー！夜にラヴメール送っというてあげるから！」

「いらない！」

「まあまあ、遠慮しないで。じゃーねーねー」

結局、中途半端に終わってしまった……

職員駐車場に向かう蘭さんの背中を見ながら、さっきの話しを思い出す。

奏音ちゃんは何か説明しようとしてくれたみたいだった……何を言おうとしてたんだろう……？

「奏音さん、夜に連絡してくるのね」

「え？」

何のことでしょう？

「さっき夜にメールするって言っていたでしょう？あれ、さっきの話が中途半端だったからじゃないかしら」

「あ……」

なるほど！

いらなとか言っちゃった……

「気付いてなかったの？」

「……はい」

奏音ちゃんって、普段とのギャップがあり過ぎてどこまでが真面目会話なのか分からないし。

「わたしが言えた事ではないけれど……もう少し奏音さんの事も正面から見えてあげた方がいいのではないかしら……？」

「そう……ですね」

……反省します

第37話（後書き）

奏音ちゃん……犬扱いやね？

ユキちゃん……蚊扱いやね？

……どんまい

第38話（前書き）

お気に入り登録有難う御座います。

投稿を待って下さっている皆様、有難う御座います！

第38話

ブブブブツ……………

「件名：話しの続き」

うん。前にも見たことがあるなー！。
というか…使いまわし？

「差出人：白崎 奏音」

うん。分かってたよ？

「どもー！ー！」

やっぱり、このノリでいくんですね。

「今何してんのー？」

私は外にいまーす。ちょっと肌寒い！！！！w w w」

意味が分からない。

「奏音さんから？」

「そうです」

リビングのソファで突っ込みを入れそうになりながらメールを読
んでたら、丁度お風呂上がりのみちるさんが入ってきた。

「なんて送られてきたの？」

「まだ、最初の方しか読んでないですけど……先に読んで下さい」

「いいの？」

「むしろ…どつぞ？」

「疲れるの覚悟で……！」

「ありがとう」

わたしが手渡したホットミルクをふうふうして飲みながら、メールに目を通す。

みちるさんは猫舌ですね。

おっ……眉間に皺が寄って来てます……

「ねえ、ユキちゃん……彼女は何が言いたいの？」

「さ、さあ？なんて書いてます？」

「そうね……長いメールのくせに一言で表すことが出来るわね」

「……その一言でお願いします」

「寒さに強くて暑さに弱いそうよ」

「……………」

「……………」

「そりゃ、基本が狼ですもんね？
で？」

「それだけですか？」

「それだけよ……………」

……………どつしたらいい……………？

ブブブッブブブッ……

電話？

あれ？でも、わたしのじゃない。

「あ、わたしね」

あー、みちるさんのか。

「ねえ……ユキちゃん」

「はい？あの、出なくていいんですか？」

みちるさんの手の中でずっとブルブルしてますけど……

「彼女は何がしたいのかしら……？」

わたしに向けて見せられたスマホの画面に出ている着信表示……

「……さあ？」

「通話着信 奏音ちゃんだよ」

というか！こっちでもやってたのか……！

みちるさん……直そうよ……

「もしもし……あれ？」

「どうしたんですか？」

「切れたのよ」

ピンポン…

「……………」

「……………」

わかりますか？

非常に嫌な予感…

いいえ、不愉快な予感がします……

ピンポン…

「ふうー……」

「みちるさん。わたしが行きます」

「……………はあ……」

みちるさんの返事が溜息です……

「大丈夫よ、わたしが行くわ。いいユキちゃん、決めつけは良くないわ。きつと偶然……偶然なのよ……」

最後の方は、完全に自分に言い聞かせてたけど……

「あつ……………」

みちるさん、もし本当に来客だった場合どうするの!?

お風呂上がりです!っていう格好のまま行っちゃったし!!!

「み、みちるさん!」

「えっ?」

ガチャ

「はい、ごんばんわー！」

「……………」

「奏音ちゃん……」

「はい。呼んだ？」

うん。結果オーライ！

このセキュリティーの高いマンションで、まずありえないと思うけど、夜遅くに不審者とか、変な勧誘のおじさんとかが来たんだとしたら……

みちるさんの御風呂上がりの姿を見たのが奏音ちゃんであんな良かった。

「呼んでない。どうやって入って来たの？」

「うん?? 死角について？」

「……………」

意味が分からない。

取り敢えず、セキュリティーの甘い所からって事にしよう。

「今度から来る前に連絡しなさい。そうすればきちんとコンシェルジュにも連絡しておくし、正面から堂々と入れるでしょう?」

「へーい。事前に連絡する時は正面から入るってことで!」

「……………毎回事前に連絡するのよ」

「はい」

きつと、次も突然現れるな……

「いやー、それにしても……二人でお風呂? ラブラブだよなー」

「はあ???」

何言ってるの!?

「別々で入ってるし!」

「どこをどう見たらそうなるのよ!」

「どこをどうって…だって、ユキちゃんも矢原先生も髪の毛濡れてるし…完全な風呂上がり…って格好だし?」

えっと…確かにみちるさんの事言えない格好ですね。

みちるさんの先に入らせて貰ったんだけど髪の毛乾かすのが面倒で、つい自然乾燥を狙ってしまう。
でも……

「そういえば…ユキちゃん?」

「はい。…なんででしょう?」

「髪の毛が乾いていないようなのだけれど?」

「…みちるさんとお揃いですね?」

「……………」

「……………」

みちるさんが許してくれないんです。

「わたしはお風呂から上がったところなの。ユキちゃんは時間があったはずよね?」

「……ほら、もう、ほとんど乾いてますよ?」

「そんなわけないでしょう……ユキちゃん、貴女の髪は綺麗なのだからきちんと手入れしなさい」

「分かってますけど……」

「ほら、あちらを正面に座りなさい」

「いえ、あの…みちるさんから先にど

」

「却下よ」

「……はい」

結局、こうやってほぼ毎日みちるさんに髪の毛を乾かして貰う羽目になる。

「ユキちゃんの髪はサラサラね」

そう言っつて、手櫛しをかけながらドライヤーで乾かしてくれる。ちよつとくすぐつたいけど、なんとなく落ち着くというか……

「はい。乾いたわよ」

「あつ、じゃあ次は代わります」

「…そう？ありがとう」

やってもらった事は、きちんと返す。

これ、人としての常識ですよね。

いくらわたしが人でないとはいえ、感謝していることは行動で伝える事が出来るんです！

「みちるさんの髪は綺麗ですね」

ドライヤーを当てながら手で梳くと良く分かる。

癖がない。

真っ直ぐで癖が無いというのもそうだけど、色が変わらない。

例えば、日に焼けて毛先の方が変色していくというのがない。

だからと言って毛が太い分けでもなく、どちらかといえば細いの……

なんだろう、芯が通った髪の毛？って感じ。

そんなわけないけど、髪の毛にまで人格が表れてる？って思っつてし

まうくらい……

「ふふっ」

髪の毛に人格が表れるって…!

自分で考えておきながら思わず笑いが漏れる。

「急に笑ったりして、どうしたの?」

「なんでもないですよ」

「思いだし笑い?」

「違います」

「そう?」

「そうで ふははは」

ドライヤーを止め振り返ったみちるさんの髪の毛が、笑ったわたしを咎めるように顔を掠めてまた笑いが溢れだす。

「もう…なんなのよ」

そう言いながらも、みちるさんが柔らかく微笑むからつい…

「ねえ、私出直した方がいい?」

「……………はあ?」

「いや、だからさ…お邪魔なようなんで、出直してきた方がいいんじゃないかなーって」

「奏音さん……………」

「はー」

「……………」

「……………」

声にならないみちるさん。そうですよね。

このパターン前にもありました！
でも、今回は違いますから！！！！！！
覚えてます…覚えてましたよ！！！！

「はい！！みちるさん！ありがとうございます！」
「イ、イイエ。ドウイタシマシテ」

頑張れ、みちるさん！

「あー、帰ろつか？」

「大丈夫です！」

「いやー、二人の世界っぷりが凄かったから止めなかったけどさ

……」

「そんなことしてないわ！」

「髪の毛の乾かし合いっこ？」

「アレハ…」

「髪が長いからお手入れが大変なので。手伝いですよ」

「へー。毎日？」

「まさか！毎日じゃないからね？」

ほぼ毎日だけです…

「っっていうか、もう二人で入っちゃえばいいんじゃない？っと思ってんだけど」

「二人で？意味が分からないんだけど…」

「いや、だから」

「で、奏音さんは何しに来たのかしら？」

あ、みちるさんが復活した。

「うん？話しの続きじゃないの??」

「……その喋り方なのかしら？」

「ユキちゃんはどっちがいい？」

チラツとみちるさんを見る…

眉間の皺が……

「素の方で喋って下さい」

「はい。承知致しました」

切り替え早っ！

「それで、話しの続きをしてくれるのよね？」

「はい。そのつもりなのですが……」

「どうしたの?…… やっぱり、わたしには教えられないのね?」

「いいえ。ユキ様が御望みですので、矢原先生にも御話し致します」

「そう」

「ユキ様。以前にも申し上げましたが、本来であれば協会《Box

》の者が全ての説明を致します」

「聞いたけど……」

「それは、今は教えられないということよね?いつまで待たせるの?ここまで待たせるその協会《Box》?本当に教えるつもりがあるのか疑問だわ」

「協会《Box》がお待たせしていることに関しては私も非常に憤りを感じております。ですがユキ様へのコンタクトを慎重にならざるを得ない理由もあります……」

理由……

「その理由というのは教えて貰えるのかしら?」

「私ではお教え出来かねます」
「結局、そうやって隠すのね」

理由……

「秘匿しているわけではありません。私も存じ上げないのです」

「どういうこと？」

「まず基本的な事なのですが、全ての主ヴァンパイアを一括りにヴァンパイアと纏めて言うことは出来ません。例えて申し上げますと、一番一般的なヴァンパイアをA、次に多いB、その次のCというように」

「つまり、ヴァンパイアというのは何種類も存在するということがしら？」

理由……

「端的に申し上げますと、そういう事で御座います」

「それと、協会《Box》がユキちゃんとコンタクトを取らない事に関連があるの？」

「……確証があるわけでは御座いません。私的な意見とお思い下さい」

「ええ」

「恐らくユキ様は、非常に珍しいタイプなのではないかと」

「それは……ヴァンパイアとしての種類が、ということよね？」

「はい。あくまで私の予想ですが」

理由……

「……本当にそうなの……かな……」

「いえ……あの、あくまで私のよそ」

「協会《Box》はわたしの何を知ってるの……？」

「何を……ですか？」

「わたしの知らない何を知ってるの？」

「ユキちゃん？」

「わたしがこうなった理由って何……？ どうしてわたしだったの……？
誰が何を知ってるの……？ 誰も止められなかったの……？ どうして……
どうしてパパとママが死ななきゃいけなかったの……？ …… どう
して……なのかな……」

協会《Box》が知っている事。わたしとコンタクトを取らない理
由……

全てが悪夢の……あの日に関係してるんじゃないのかな……

「ユキ様……。もう少し……もう少しだけお時間を頂けませんか？一
ヶ月……いえ、半月以内に協会《Box》側とコンタクトを取ります。
協会《Box》側から必ず説明の者を来させます」

「奏音さん、貴女にそんなことが出来るの？」

「必ず……どんな手を使っても……」

「……………」

「……ユキちゃん」

「分かっています……」

奏音ちゃんは言った事はきくとやる。

「待ちます。奏音ちゃんを責めたいわけじゃないから……無理はし
ないで」

「……………はい」

真実……

それが分かる日が来る？

大丈夫………待てる…

「ところで奏音さん」

「なんででしょうか？」

「協会《Box》が説明するっていうのは分かったのだけれど、じやあ奏音さんは何を話しに来たのかしら？」

ああ、確かにそういえば。

「はい。ですので私が話せる範囲で………とありますが、基本的に誤解を生んでいるであろうポイントを修正せねばと思ひまして」

誤解を生んでいるポイント？

「つまり？」

「結論から言いますと、私とユキ様の関係、及びColor coating《補色》に関してです」

えっと………それって今更説明が必要なのでしょうか？

「………それは必要な説明なのね？」

「と判断します」

「分かったわ………」

そうですか。

「まず、私とユキ様の関係ですが………」

「分かってるわ」

契約守護獣と主ヴァンパイアの関係ですね。

「いえ、分かっておられないかと……。念の為にお願いしますか？」

「……付き合っているのでしょうか？」

「はあ！！？わたしと奏音ちゃんって付き合っていましたっけ？」

「付き合ってますせん」

「えっ？？？？」

ど、どこからそんな情報が？

「おかしいと思っていたのです……。ユキ様は矢原先生に何か説明されましたか？」

「何を？」

「契約守護獣などです」

「して……ない？」

だって、わたしだけの話しじゃなかったから奏音ちゃんの許可も得ずに勝手に話すのはどうかと思って……

「契約守護獣？それはなんなの？」

そっか、そこからだったんだ……

「えっと、守護獣と主ヴァンパイアの一对一の契約……。だったよね？」

「それで御座います」

「つまり、主ヴァンパイアであるユキちゃんの契約守護獣がwerewolf《人狼》である奏音さんということかしら……？」

「それで御座います」

「契約守護獣……。それは、ユキちゃんにマイナスになるようなこと

はないのね？」

「御座いません」

おお、言い切った。

三年は死ねないというのは……

まあ、マイナスじゃないということ。

「つまり……どういうこと？」

「つまり、矢原先生が懸念されているような関係では御座いません」

付き合ってますえん！！

「でも、あの……ホテル……」

「やはり、あの日気付いておられましたか。確かにホテルには入っておりますが、そういった用途で使用したわけでは御座いませんので御安心下さい」

「な！そ、そういった用途って！御安心って！！」

あ、みちるさんが真つ赤だ。

「はい。セックス目的では御座いません。主従契約する為に使用したのです」

「セ……」

みちるさん……医者なのに初心ですね。

というか、落ち着いて思い出して下さい。

同性ですからね？

「あと、Color coating《補色》に関してですが……
矢原先生……話しを進めても大丈夫でしょうか？」

「だ、大丈夫よ」

「Color coating《補色》は以前にも御話しさせて頂きました通り、主ヴァンパイアとして必ず必要な行為です」

.....

「どれくらいの間隔で必要なの？」

「そうですね……主の感覚次第なのですが、契約守護獣がいて適度にお力を使い、食事睡眠を取ったとすると、週に二度程であると思われませす」

「そんなに!？」

「ユキちゃん」

「10日に一度」

「週に二度なのよ」

「週に一度……」

「却下よ」

「.....」

今の感じでも問題があるようには感じないのに……

「ユキ様、急に週に二度にとは言いませんが、増やすよう努力して頂けませんか」

「.....分かった」

「Color coating《補色》は矢原先生以外でされないのですね?」

「みちるさん一人にしない方がいいの?」

「いえ、そんな事は御座いません。Color coating《補色》で貧血になるような事は御座いませんし、健康に負担を掛けるような事は御座いません」

「じゃあ、わたしは問題ないわよ」

「ユキ様は、矢原先生一人がよろしいでしょうか？」

みちるさん以外にColor coating《補色》する？
イメージがわからない……

「そう……ですね。みちるさんには申し訳ないですけど……」

「矢原先生、嬉しいですよね？」

「そ、そうね」

「奏音ちゃん、無理に言わせないで」

「ユキ様……」

「言わされたわけでは無いわよ」

「そう……ですか？」

「そうよ」

わたしもColor coating《補色》をしたことで、みちるさんに対して独占欲が強くなってる。

みちるさんもわたしが他の人にColor coating《補色》をすることがイヤ？

Color coating《補色》には独占欲が強くなるような要素があるの？

「ユキ様、基本的な事を申し上げますとColor coating《補色》は……誰でも良いのです」

「は??？」

「誰でもという用語がありますが、記憶操作が可能なので人を固定する必要も御座いませんし、主にも血液の好みは御座いますから飲み比べなど」

「しません」

「はい。つまり矢原先生はユキ様の好みということなのでしょう」

「他の人にColor coating《補色》した事がないから

知らない……」

「そうですね……例えば、以前蘭さんが怪我をした事が御座いますよね？覚えておられますか？」

そういえば、クリスマス会？の時に……

「覚えてますね」

「奏音さんの血の匂い……矢原先生の血の匂い……」

「ふう……」

「御自覚頂けましたか？」

「……確かに、みちるさんの方が惹かれますね……」

第38話（後書き）

奏音ちゃん、どうやって忍び込んだ！

みちるさんの気持ちはダダ漏れなのに、ユキちゃんが鈍すぎる……
奏音ちゃん、フォローしたげて！！

第39話（前書き）

奏音ちゃん来訪編続きです。

第39話

あのクリスマスマスの状況を思い出してみたら分かる。

あの時、蘭さんが血を流しているのを見て、匂いを嗅いで吸血衝動に駆られた。

恐らく血に飢えている状態だったんだと自分でも思う。

それでも、なんとか自分の意識を保っていた。

例えばあれが蘭さんじゃなくみちるさんだったなら……

多分、周りに誰がいたとしても我慢できなかったんじゃない？

……そこまで自我を失うなんて……

「ねえ奏音さん。さつきから言っていることが回りくどいわ」

「あえてですが……？」

「……結論は？ユキちゃんの好みの血がわたしの血だったのよね？それがなんなのかしら？」

「近くにいると、際限なく求めてしまう……」

そんな気がする……

「いえ。そんなことは御座いません」

「違うの？」

「ユキちゃん、違うわよ。さつきも奏音さんが言ってたでしょう？ Color coating《補色》を一人でしていてもなんのリスクも無いって。つまり、奏音さんはリスクの話をしているわけではないのよ」

え？

「はい。左様で御座います」

「じゃあ……」

「……Color coating《補色》にも相性があります。

そして、その相性の良い者とのColor coating《補色》

《は他の者とColor coating《補色》するよりも効率

が良くなります。今はこれだけ覚えておいて頂ければ……」

「全部を説明するつもりはないという事ね？」

「先に余計な知識を入れて頂きたくないので。協会《Box》の

説明もあるでしょうが、そういった事を抜きにユキ様自身での感覚

も大事にして頂きたいと思っっているのです」

「わたしには……説明される時がくるのかしら？」

「この先もユキ様の傍に居られるのであれば……」

「……そう。わかったわ」

「他に御質問が……あまり御答え出来ませんので、本日はこれで……」

「

「あっ、聞きたい事があるのだけどいいかしら？」

「何で御座いますよう？」

どこまでが質問できる範囲なのかわからないから、今日はこれで終わるのかと思っただけど、みちるさんが何かある？

「以前狼の姿を見たでしょう？あれは奏音さんのよね？」

「以前と申されますと元旦の事で御座いますね？」

「そつよ」

あーー。

確かに良く分からないバカ者たちに絡まれた日に奏音ちゃんが駆けつけてくれたっけ。

そついえば……

「はい。確かに私ですが……」

「あの」

「どうしたのユキちゃん？」

「話しに割り込んでごめんなさい。忘れないうちに質問したいんですけど、いいですか？」

「いいわよ？」

「奏音ちゃん、わたしの位置が分かるの？」

「と申されますと？」

発信機でも付いているのかっていうくらい、わたしの位置を的確に把握してる気がするんです。

「えっと、例えば元旦の日もそうだし……引越した時もだけど、わたしのがいる場所ってどうやって把握してるのかなーと」

「それは、契約守護獣となって血の盟約が出来たからで御座います。私の血を介してユキ様のお力を辿れますし、逆にユキ様からでも可能で御座います」

「あつ、わたしからも出来るんだ……」

「はい。クリスマススの時を思い出して下さい。私の中のお力を意識して少し動かす感じにして頂くと……」

「ああ！……近くにいます……」

「……ユキちゃん、目の前にいるわ……」

「あつ、そ、そうですね……」

いや、だって結構ハッキリと自分を中心に把握する事が出来たから……ちよつと恥ずかしい……

「奏音さん、目が……」

「やはり変化しておりますか？ユキ様のお力が大きいからで御座いますね」

「ユキちゃんも目の色が変わってるわね」

「え？」

「少しお力を使われたからでしょう」

「そうなのね。外では気を付けないといけないわね」

「はい」

外で力を使うことが無いように祈ってます。

「あつ、話しの邪魔をしてごめんなさい」

「いいのよ。えつとなんだったかしら」

「元旦の獣型の話しだったかと？」

「そうそう。あの姿になるのは大変なの？」

「……………いいえ？」

もしかして？

「みちるさん、見たいんですか？」

「見たいわね！」

「別に構いませんが……………」

「な、何故いきなり脱ぎだすのよ！」

「服が破れますので」

「貴女には羞恥心がないの!？」

「羞恥心？それを言っつては獣型になどなれません」

……………良く考えたら、おっしやる通りです

「それにしても……………」

「みちるさん、普段はきちんとしてるんですよ。クラスでも浮く事無く過ごしてるって事は、ちゃんと人としての生活に順応してるわけですし」

「ユキ様……一応恥ずかしいという思いはあるのですよ？獣ではないのですから……」

「あっ、そうなんだ」

「ただ、主やそのパートナー……大事にしている方には隠すのは適当でない判断しただけで御座います」

「いや……隠すべきところは隠して下さい。」

話してる間に服を脱ぎ去った奏音ちゃんが、みちるさんの前に立つ。

「何か必要なの？」

「いえ。ではいきます」

急に脱ぎだした事に関しては羞恥心どころで騒いだみちるさんも、裸になる必要があるという事自体を受け入れれば、裸自体は気にならないらしい。

……流石お医者様

ホテルでの時と同じように、輪郭がぼやけたと思った時には既に姿は変わっていた。

「前も思っただけど、大きいわね。まだ成長するの？」

「多少は大きくなるかと。ですが、これでは成体で御座います」

「狼って、このサイズなの？」

「それは、獣の狼を言っておられますか？」

「そうね」

「どうでしょうか……私の獣型の胴長が160cmを超えますから……」

「へえ、狼って大きいのね」

そ、そんな狼がいるの？

「触っても?」

「どうぞ」

「見た目よりも柔らかいのね」

う、羨ましい……

「奏音ちゃん、わたしもいい?」

「ど、どうぞ?」

もふもふ……

なでなで……

「この手触り……癖になりそうね」

「ですね。つやつやのふさふさ」

「尻尾は自分の意志で動かせたりするの?」

「動かそうと思えば可能で御座います。ただ、普段から意識して動かすことは御座いません。普段は獣の狼と同様に感情を表したりするよう御座います」

「犬とかと一緒に?」

「恐らく」

へ……。

なでなで……

奏音ちゃんの尻尾……

うん、撫でられて喜んでるんですね。

「あ、あの……もうそろそろ……」

「小さい時の姿が見たかったわね……絶対可愛いわよ!」

「ですね。想像しただけで可愛いです」

動物っていうのは小さい時が一番可愛い。
それは人間も同じなのだけど、このもふもふは……見たかった！
なでなで……

「じゃ、写真があり、ありますが」

「今、持ってるの!？」

「……持ってます……が？」

「「見せて!!」」

今持ってるなら見ないといけないと思うんです！
なでなで……

「わ、分かりました。では、一旦離れて頂けますか？」

「何故かしら？」

なでなで……

「写真を取り出すことが出来ません」

「……分かったわ」

みちるさんは動物好きなんですね。

凄く名残惜しそう。

「では、人型に戻りますので少し離れて」

「戻るの!？」

「戻りますが？」

「何故かしら？」

「いえ、あの……ですから獣型では写真が取り出せませんので……」

確かに、あの肉球のついた手じゃあ無理ですよね。
……手？

「奏音ちゃん！お手！！」

「お手？……はい」

あつ、やってくれるんだ。

「ユキちゃん？」

「あれ？思いの外ぷにぷにじゃない…？」

「何がかしら？」

「肉球です」

意外と硬い……

「どれ？ああ、本当ね」

「どういうイメージなのでしょう？幼獣では無いのですから、ぷにぷにでは御座いません。硬くないと足の裏を怪我してしまいますし」「確かにそうなんだけど…」

ちよつと、残念……

「あの、では写真を…」

「そうね。では後ろを向いてるから人型に戻りなさい。服を着てから声を」

「奏音ちゃん！獣人型が見たい！！？」

「獣人型？」

「で御座いますか…？」

「そう。元旦の時に奏音ちゃんは獣人型になれるとかいう話が出たから……なれる？」

あの時から、凄く興味があっただんです！！

「可能で御座います」

「そういえば言ってたわね。力が無ければなれないとか……：：： 獣人型は獣型より力を必要とするの？わたしのイメージだと、人型、獣人型、獣型の順で力が必要なのだと思ってたわ」

そうですね。そういわれてみれば、より人から離れる変化の方が力を使いそうな気がする。

「簡単に説明させて頂きます。変異する力を殆ど必要としないのが人型です。人型で居る限り使用できる能力に制限が御座います。当たり前で御座いますが、人型で居る時に獣型の身体能力は出せません。獣型は変異の力を必要とします。能力の低い者は獣型になる事が出来ません。獣型で居る時は人型の時の能力操作等が劣ります。獣人型は変異の力を多分に必要とします。能力の高い者の中でも極一部の中の者しか変異する事が出来ません。簡単に言いますと、人型と獣型の良いところ取りといったところでしょう。人型の時の能力は全て使用出来ますし、獣型の時の身体能力も著しく落ちる事は御座いません。能力操作に関しましては格段に力が上昇致します」

「それだけ聞いてると獣人型で居る方が便利な気がするわね」

「獣人型は確かに能力が高いのですが、獣人型という姿をとっているだけで力を一番使用するのです」

「燃費が悪いということね」

「それで御座いますね。獣人型をとれるwerewolf《人狼》が主従契約をした場合に、獣人型を多用出来るようになるという事でしょう」

「契約守護獣になると力が強くなるとういうことかしら？」

「それも御座いますが、常に主の力を一定量流して頂いているとい

うのがあるでしょう。今は、ユキ様自身のお力が安定しておりますので、私自身の能力使用も控えておりますが、ユキ様はお力が強いので定期的にcolor coating《補色》して頂ければ問題なく獣人型を取れるようになるかと思えます」

「て、定期的に…?」

「定期的に、で御座います」

それは……

「奏音さん、そこは管理するので安心なさい」

「宜しくお願い致します」

「……………」

何故か、奏音ちゃんとみちるさんが結託してる。

いつの間にか、奏音ちゃんがみちるさんにも礼儀をもった言葉遣いになったからいいんだけど……

「さつきから、能力操作っていう言葉が出てるけれど、それはなんなのかしら」

「werewolf《人狼》……だけではありませんが、守護獣と主ヴァンパイアには特殊な能力が御座います。例えば主ヴァンパイアであれば、記憶操作であったり魅了、血液操作であったりしますし、守護獣でも記憶操作は可能です。また、それぞれに自分の特殊能力が御座います」

「特殊能力?」

それは、わたしも知らないですけど?

「あまり広めるべき情報ではないのですが……。例えば私は絶対物質低温度操作を得意として……温度を下げるのが得意で御座いま

す

「「へー」」

なんか、凄い事が出来そうな名前だった。

「ユキちゃんも何か出来るの？」

「えっ？わたしですか？」

何が？血を吸う事とかしか出来ませんが……

「ユキ様は、お力を使うことを意識されてからまだ時間が経過しておりません、特殊能力につきましてはこれからでしょう」

……そんな変な能力いりません。

血を吸うっただけでも抵抗があるのに……

「それで、先程から話しが脱線しているのですが……写真は必要でしょうか」

「見せて頂戴」

「では、ユキ様の御命令ですので獣人型となります」

「そうね。見せて」

いやいやいや、御命令じゃなく御願いですからね？

「だから、後ろを向くまで待ちなさいと……」

人の形に戻る過程を直視したのは初めてだけど、人型から獣型になる時よりも違和感がある。

人型から獣型になるときはぼんやりとした感じで曖昧なままいつの間にか……という流れだったのに対し、獣型から人の形になるのは……

…それこそ変異するという表現が正しい。
実際、変化の時間はとても短いんだけど、全てのパーツが変わって
いくような違和感。

「これは……！ユキちゃん、定期的にColor coating
《補色》するわよ」

「きゃうー！！」

「えっ？あ……」

チャラってない奏音ちゃんでは滅多に聞けないような、可愛らしい
声が聞こえて目をやると、みちるさんがふさふさ尻尾を抱え込んで
た……

みちるさん……奏音ちゃんの毛がばばふになっってお腹側に入ろう
としているからいきなり掴んじゃダメだと思っんです。

「や、矢原先生！手を……」

「みちるさん、尻尾が苦手みたいなんで離してあげましょう」

「そ、そうね。ごめんなさい」

我に返ったみちるさんから少し離れた奏音ちゃんに大きめのバスタ
オルを渡す。

「有難う御座います」

「見た目は尻尾と耳だけが狼？」

「あとは、首筋から尻尾の付け根までの毛、爪と歯には狼の名残が
あると思われれます」

言われて見てみると確かに。

「じゃ、写真ですね」

警戒しながら尻尾を自分で抱え込んでる姿が可愛い。
脱いだ服の手帳から取り出した写真を受け取ったみちるさんの手元を覗き込む。

「可愛いけれど……」

確かに可愛い……よ？

「この写真、人型の奏音ちゃん？」

まだ一歳にもなっていないような赤ちゃんが、写真の中で無邪気におもちやを振り回している写真……にしか見えない。

「いえ、人型なのは奏音で御座います」

「あ、そうなんだ」

「奏音さんの獣型の赤ちゃんの写真は持ってないの？」

「ですから、それです」

「……は？」

言われて、もう一度写真をじっくり……

「……いた」

「えっ、ユキちゃん。どこ？」

いえ……いたんですけど……

「……奏音さんが持ってます」

とつか、握ってます……

「嘘でしょう……。これ、大丈夫なの？」

赤ちゃんって、意外と力強いですよね？
幼獣握ってますけど…？

「大丈夫で御座いますよ」

そりゃ、實際目の前に奏音ちゃんがいるんだから無事だったのはわかってますけど、周りの大人は何してたんだー！。

「何も問題なかったのかしら……」

「しゃぶしゃぶ、にぎにぎは日常茶飯事だったようですが、何も問題なく逞しく成長致しました」

「そ、そう……」

それは、良かったね……

第39話(後書き)

しゃぶしゃぶ、しゃぶしゃぶ……

「♪ 琴音さん、おもちやじゃないのよ……？」

……It is not toy.

第40話(前書き)

お久しぶりで御座います。
活動を再開させて頂きます！

第40話

ザワザワザワ……

爽やかな朝の光をいっぱい浴びた講堂から漏れ聞こえる少女達のざわめきを耳にしながら、履いている下足から手にしていた体育館シューズに履き替える為に壁際に寄る。

「ユキさん」

「はい？」

一緒に登校してきた蘭さんに呼ばれて顔を上げる。

「先週は連日遅くまで有難う御座いました」

「い、いいんですよ」

年度末と年度始まりのこの時期は卒業式や入学式なんかの式典が多く、普段から雑用をこなす人員が不足している生徒会は非常に多忙となる。

もちろん有志の生徒もいるにはいるが、委員会などで行われる行事ではないだけに人員不足の影響が大きい時期だ。

そんな時期に無償で、雑用やります！って人がいたら、どうなるか………
遠慮なく扱き使われました………

「それよりも、蘭さん今日はいいいんですか？」

「今日は始業式ですから、私たち生徒会自体が直接関わるものはないですよ。片付けは担当が決められていますし、今日は平和に過ご

せますね」

「そうですね……」

平和に……平和にね……

「いつまでも立ち話では邪魔になってしまいますね。入りましようか」

「そうですね……」

ザワ……

キャッ

ザワザワザワ……

講堂に入ると少女たちのザワザワが増す……
蘭さん効果ですよね。

「えっと、クラス割が発表されてないから……」

「以前のクラス毎に待機でしたね」

「そうでした」

講堂内に集まった少女たちの群れの中から、一年かけてやっと覚え
たクラスメイト達の顔を探し出す。
なんとなく見覚えのある集団を発見したわたしは蘭さんと離れそち
らに向かった。

というか、クラス割を発表してからクラス毎に集まって移動したら、
こんなに悩む事ないのに何故そうしないのでしょうか？

新しいクラスの発表をよりドキドキさせる為？

前のクラスメイトと交友する為？

うーっ……どっちでもいいけど非効率的だわ……

「遠野さん、こちらの席ですよ」

「……………ありがとうございます」

えっと……………よく覚えてないけど、同じクラスの子……………と思われる。

言われた通りの席に行き座席部分に置いてあった自分の名前の書いてある紙袋を確認してから座る。

さっき声をかけてくれた子の方を見てみたけど同じクラスの子で、なんとなく顔を知ってるなーくらいしか記憶にない。

クラス替えになったら、またクラスメイトの顔がリセットされるわけだ……………

一年の時のクラスは二年に進級すると成績や進学の方角性によってクラス替えとなる。

二年から三年への進級ではクラス替えが無い為、高校生活での最初での最後のクラス替えとなり二年間同じメンバーとなる。

まあ……………今まで通りで、クラスメイトと仲良くするようなこともないだろうし、あんまり関係ないだろうけど？

そう思いながら紙袋の中を確認。

今日の予定とか、年間予定表なんかを無視しながら……………あつた、クラス割符。

「1クラス」

1クラス？

何故に1クラス？

1クラスと言えばあれだ……………進学クラス？

進学希望とか出してないのに？

国公立の大学を狙っているのなら、この1クラスに在籍しているのが当たり前となっている大事なクラス替えで、わたしなんかその

一席を取ってしまったたらまずいでしょう？
進学とかしないよね？

あれ？こういうのは相談した方がいいのでしょうか……？

「ユキちゃん」

「へっ？」

小声で掛けられた自分への呼び掛けに、我に返る。

「移動移動」

「……移……動？」

「式終わったから。ほら立って」

奏音ちゃんに言われて、慌てて立ち上がり早足で移動する。

「ユキちゃん。ちょい待って忘れ物」

「え？」

振り向いたら、追い掛けてくれていた奏音ちゃんがわたしの荷物を全部持ってました……

「……じ、ごめん」

「いいよいいよー」

まるで、わたしが荷物を運ばせてたみたいじゃないですか。
まあ、その通りなんですけど……

「ほい。じゃあ、行こっか」

「はあ……ど、どこへ？」

「教室。ユキちゃん、どうせ1クラスでしょ？」

「な、何故それを？」

「えっ、いや、そんなの誰もが分かってるでしょう……」

そんな、残念そうな目で見ないで下さい！

「ユキちゃんって……」

「……なんですか？」

「……」

「……」

「……じゃあ、行こっか！」

なんなんですか！

「ちなみに、奏音ちゃんは……？」

「ん？」

「クラスですよ」

「1クラスだよね？」

って聞かれても……

「あのねユキちゃん、良く考えてみてよ。一応これでも生徒会とか
やっちゃってるわけだ」

「は、はあ」

生徒会関係ある？

「生徒会役員が勉強出来ない……体裁つく？」

「……」

た、確かに……

「ちょっと、格好悪いですね」

「まあ、あれだよ？勉強だけが大事ってわけでもないよ？例えば、人望とかカリスマも大切だと思うし」

「そうですね」

「その点、蘭さんは完璧だよなー」

「……………は、はあ」

「ユキちゃんも完璧だとは思っただけどねー！。いかんせん人付き合いが悪過ぎる」

「はあ……………」

「あつ、ユキちゃんも人気はあるんだよ？だから、少しだけ努力するとだな」

「しません」

そんなところで努力するくらいなら、Color coating 《補色》の回数を減らす努力をするから！

「まつ、それもユキちゃんの個性だと思うしいんだけどね。ところでユキちゃん」

「な、なんですか!？」

急に顔を近付けたらびっくりするじゃないですか！

「私から離れて行動されないよう御願ひ致します」

「へっ?」

いきなり話し方が変わった事にも、言われた内容にもついていけないんですけど?」

「迷わないよ?」

「……では御座いません！」

ですよ、良かった。

学年が上がったとはいえ流石に校内で迷うとか思われているのだとしたら心外だ。

「今日、何かありました？」

「いえ……どうも匂いが」

「匂い？」

すんすん

「何をなさっておいでですか」

「臭いのかなと思って？」

「ユキ様はいつも通りのお力の匂いです」

「お、お力の……」

匂い？とか分かるんですね……

「ではなく、ユキ様以外の　だから宜しくね」

「えっ？」

ああ、人が来たのか。

この話し方のギャップにも大分慣れてきたわたしがいます。

「あ、あのっ！」

「うん？何？」

「……………」

奏音さんの知り合い？

「……………あ、あの…あの…」

「……………?」

「……………???」

どうもハッキリ言いたい事が言えないタイプのようですね。

奏音ちゃんの方を見たら、奏音ちゃんも困った顔でこっちをチラ見

……………って!!

もしかして、奏音ちゃんの知り合いじゃないとか言いますか???

奏音ちゃんとアイトーク……………

「……………(フルフル)」

「……………(フルフル)」

うん。完全にアイトークじゃないけど……………判明しました!

全く知らない生徒から声を掛けられました。

ネクタイの色は コバルトブルーだから2年生だよな。

つまりは上級せ 違う違う。進級したから同じ学年だ。

「あの……………1クラスですよな?」

「そうだよー」

「あの!わたしも1クラスになりました!」

「あつ、そうなんだ。おめでとー」

「……………」

「はい。ありがとうございます!あ、あの…お二人もおめでとつ!」
「……………」

「うん。ありがとうございます」

「ありがとうございます……………?」

何かおめでたいの?

ああ、進級おめでとつございますって事かな？

「……………」

「……………」

で???

「えっと……………」

奏音ちゃん、頑張れ！

「も、もう行ってもい　？」

「あの……………」

「はい……………」

この子、何!?

「教室まで御一緒しても宜しいでしょうか……………」

「へっ???」「」

そ、それだけを言うのにこんなに時間がかかったの？

「えっと……………（チラッ）別にいいよー」

一瞬こつちを窺った奏音ちゃんだったけど、わたしが小さく頷くと簡単に返事を返した。

「あっ、ありがとうございますー！」

なんでこの子は、こつも緊張気味なの？

同い年のわたしたちと一緒に教室に行ける事がそんなに嬉しい事なのかな？

「あの、奏音さんと遠野さんは仲がいいのですか？」

「えっ？そりゃ……まあ？」

えっ？こつちを見るの？

えーと、うん悪いわけではないか。

「……うん」

「そうですね。遠野さんは東條さんとも仲がいいですから……でも、もしかしてなんですけど、遠野さんは生徒会入り……」

「しません」

そこはハッキリ言つときましよう。

「あははっ！どこからそんな噂が流れてるのか知らないけど、私とユキちゃんの仲がいいのも、蘭さんとユキちゃんの仲がいいのも個人的にだよー？」

「あつ、そうなんですか？」

「そりゃ、生徒会からしたらユキちゃんが入ってくれたら大助かりなんだけどね。おお、ユキちゃんが怖い顔してんじゃん。まあ、そういうわけで、変な噂を流さないように……！」

わたしは元々こんな顔ですよ……！！

「そ、そうですね……入られないのですか……」

な、なんでそこで残念そうなんですか……！？

「あつ、お先にどうぞ」

「ああ、ここだね。ありがとう。ユキちゃん行くよ」

うん？

ああ、教室ですね。

うわあ……聞いてはいたけど、1クラスってというのは明らかに特別
ですよ。

一般クラスの教室でも冷暖房完備は当たり前、業者の清掃が月に2
回というお嬢様学校使用のこの学校の中で角部屋に当たる教室だし、
普通の教室でも広いなーと思うのに……

机にノートPCがデフォルトで設置してあるんですよ???

まあ、このPCに関してはどのクラスでも同じ。

これは、二年に進級したからってわけじゃなく今年度から授業に取
り入れられる事になったからなんですけどね。

「ユキさん」「奏音ちゃん」

はい？

「うん？ああ、琴音。蘭さんも早かったね？」

「早くない！奏音ちゃんが遅いの！！」

「そう？」

ああ……

はい。予想はしてたよ？というか奏音ちゃんが言ってた通り生徒会
ですもんねえ。

それに、もちろん成績優秀者が揃ってるのも知ってましたよ？
だから、必然的に……

「ユキさん。改めまして宜しくお願いします」

「遠野さん。……………よろしく」

はい。奏音ちゃんだけじゃなく蘭さんも琴音さんも同じクラスですよね。

琴音さん……嫌なら挨拶しなくてもいいんですよ？

「よ、よろしくお願いします」

「おーい。ユキちゃん、後ろがつかえてるから進んでくれるかなー？」

「つと、あ、ごめっ!？」

言いながら振り返ったら、さっき一緒に教室に来た女の子が、まだ後ろにいました。

いや、これ教室のドアを塞いでるのは完全にこの女の子ですよね???

というか、いつまで後ろにいるの!?!びっくりするから!?!!

「い、いいえ。あ、あの……」

「はいユキちゃん、邪魔にならないとこ行くよー」

「うっ…うん」

えっと、まだ何か喋りたそうな女の子置いてきてしまいましたか? いいんですか???

「ユキちゃん。あんな感じのミーハーな子とはあんまり仲良くしない方がいいよ」

「へっ?」

ミーハー???

「そうですね……。私もそれに関しては同意見です」
「……………」

蘭さんまで、こんなこと言うなんて凄く珍しんじゃないですか？

「あのね！分かってるの！？ポヤンと聞いてないでよね！……………奏音ちゃんも蘭ちゃんも、遠野さんの事心配して言ってるんだから！！」

「ポ、ポヤンって……………」

言われても……………」

「琴音……………静かにね」

「むー……だつて！」

「ユキさん、あの……………さっきの生徒の名前を知っていますか？」

「えっ？」

そつえば……………聞いてないな」

「知らないです」

「ちなみに、私も知らないからねー」

やっぱり、奏音ちゃんの知り合いでもなかったんだ。

「つまりさ、あの子は顔見知り程度……………でもないくらいうっすい関係の二人に近づいてくるタイプの人間なわけ」

「……………？」

『つまり』と言って説明してくれた琴音さんには悪いけど良く分からない……………」

「だから!!!」
「名前も名乗りもしないで、校内の有名どころにお近付きに……っ
てこと。お近付きになるだけが望みなら可愛いもんなんだけどね」
「誤解を招くような噂を流された事があり、少々不愉快な思いを
しましたので」

あー

確かにそれは困るね。

有名な子のお近付きに……ていうのは分からなくもない。

この学校の生徒会役員っていうのは人気者が揃ってるからね。

チラッと、さっきの子の方を見る。

一年の時のクラスメイトなのか数人の女子に囲まれ、楽しそうに笑
っていた。

その内の一人が、わたしが見ているのに気付いたのか、その子に何
かを言うとその子は嬉しそうにこちらを見ながら小さく会釈をし
てきた。

えっと……これは返さないとまずいか。ぺこり

「ハッ!!!!!!?」

「えっ?」

な、何!?

「……はあー……」

な、何かあった??

いや、分かってますよ?あの子の『将を射んと欲すればまず馬を射
よ』作戦の会釈を返してしまったのは問題かもしれないけど……
そんなに、盛大に溜息をつかれるほどですか?

「ねえ、奏音ちゃん……………」

「何かな…?」

「通じてるの…………?」

「うー…ん。……………難しい質問だね…」

「ねえ、蘭ちゃん……………」

「なんでしょう…?」

「いつもこういうの…………?」

「そうですね。……………答えづらい質問ですね…」

「なんですか、みんなして!!!!」

「……………な、何かな!」

「……………もう、いいよ。うん」

「……………そうですね。はい」

「……………あたしたちが気をつけとくから。うん」

……………はい。ごめんなさい?

「あっ、それより奏音ちゃんに聞きたい事があるんだけど!」

「うん?どしたー?」

「えっとさ……………」

「……………」

「いつまで経っても会話の続きが…………?」

「ユキさん、先に座っておきましょう」

「えっ?」

「ごめんね。蘭ちゃん」

「あ、ああ」

そうか、琴音ちゃんに聞きたい事であって、わたしたちには聞かれたくない事か。

「……匂い……」

立ち去り際に聞こえた琴音さんの言葉。

「出席番号が続いていますので、ユキさんの席はここですね」

「あ、そうですね。ありがとうございます」

言われて、蘭さんの後ろの席に座る。

「奏音さんも琴音さんも席が続いていますし。ほらあそこです」

言われた方を見る。列を挟んだ斜め左前。丁度二人が席に座ったところだった。

そりゃ、苗字が同じなんだから出席番号も続きになるでしょう。

キンコーンカーンコーン…

チャイムが鳴り、入って来た先生が昨年度と一緒に。顔と名前を覚えなおさなくて済む！

ちよっとした喜びと体育祭の苦い思い出が……
今年はやらないよ……！！

「の子ですが…」

そういえば、あの体育祭の怪我のせいで色々周りが動き出したんだよね……

「 珍しい時期…彼女は 」

みちるさんにバレたし、奏音ちゃんもあれで分かったって言ったし……

「 自己紹介で… 」

werewolf《人狼》って鼻が良過ぎでしょう？

「 可愛い子ちゃんwelcome… いつでも受付中 」

「 「 「 「 キャー… 」 」 」 」 」

違うか。純粋な血の匂いで分かったんじゃないんだ。

「 アメリカンジョークで… 」

血の匂いの識別に関しては、ヴァンパイであるわたしの方が断然優れてるに決まってる。

「 冗談じゃないけど ああ、このクラスには可愛い子ちゃん
がいっぱいいるから 」

「 「 「 「 キャー… 」 」 」 」 」

確か、力の匂いって言ってたかな…

「 も、もう自己紹介はいいで 」

匂い……匂いか…

そっいえば確か、さっき奏音ちゃんが何か言ってたなー

「なんでこんなところ」

「会いたかった」

「……はっ？」

「会いたかったんだ。……待たせてしまった。ユキ……」

「……ファイ……」

第40話（後書き）

出たよ！出たー！ー！ー！！！！

ファイっいに番が来ましたよー！！！！

いやー、それにしても鮮烈な再登場ですな……………

第41話(前書き)

主要キャラの一人であるフィー。久しぶりに出てきたので誰だ？って感じですね。
ファンが増えるといいのですが……

第41話

どうしてこんな状態になってるんでしょうか……

「Fiona・Jonesさん、フィオナ・ジョーンズ遠野さん離れなさい」

離れたいよ？見てこれ。一方的に抱き締められてるでしょう？

『フィー……あの、離れて』

『うん？』

更に力を込めるの止めて貰えますか？

『フィオナさん……とお呼びして宜しいでしょうか。ユキさんが困っておられますので、席にお戻りください』

『君は誰？うーんと……ユキの友達かな？』

『そうですか？』

『そう……。とても可愛いね。オレの事はフィーと呼んで良いよ』

『はっ』

蘭さんが助けしてくれたのはいいけど……話しが全く噛みあってないですね。

『フィー、お願い……』

変に目立ちたくないから！

蘭さんも気を使ってか英語で話しをしてくれてるし、フィーの事を知らないクラスの皆は、唯この変な外人のオーバーコミュニケーション

ヨンにキヤーキヤー言ってるだけで済んでるけど、クラス替え早々に騒ぎを起こしたくない。

『……分かった』

そう言いながら渋々離れてくれたフィー。隣の席だけ必要以上にぴったりくつつけるのは何故？

『……………』

『何故くつつけるか……か？なら教科書が無いからと答えるな』

『密着する必要はないのでは無いでしょうか？それに、本日は授業ではなくホームルームのみです』

『なんだ？ああ、さっきの君か……えーと君の名前は？』

『申し遅れました。東條蘭と言います』

『蘭さん、蘭ちゃん、蘭……うん。蘭ね。ちゃんと前を見て先生の話しを聞いた方が良くないかな蘭？』

『……………』

……ごめんね蘭さん。

『フィー……………』

『うん？』

「「「「「……………！！キヤー……………！！」」」」

近過ぎるんですってば。

『朝から気になってたんだが何故このクラスはこんなに騒がしいんだ？』

それは……

『貴女が乱しているのではないのでしょうか？』

『おっ、蘭。前を見なくてもいいのかな？』

『貴女の方こそ前を見てみて認識出来ませんか？この騒がしい状況で先生の話しが進まないのです。最初からずっとこの状態ですよ？先生に何度注意されていると思っっているのですか？』

『騒がしいのはオレのせいだと？』

『自覚が無いのでしょうか？』

『……………』

うわ……蘭さん笑顔のままだけど怖すぎる。ここまで蘭さんと相性の悪い人が居たなんて驚きですよ？

「も、もしかして…… 嵐の予感」

「…………… 三つ巴で 関係」

「……………！！！！！！！！！！キヤーーーー！！！！！！！！！！」

なんか、色々騒がしいクラスですね……………
それもこれも……………

『フイー。教科書くらいいつでも見せてあげるから、少し離れて』
『これくらいの距離でも授業を受けるのに差し障りは無いだろう？
周りが勝手に騒いでるだけだ』

た、確かにそうなんだけど……………いやいや違う違う

『授業を受けるのに不必要に密着する必要性を感じないのですが？
是非スムーズに授業を進める為に協力して頂きたいものですね』

そうそれ!!

『ユキとやっと会えたんだ。邪魔されたくないんだけどな?』

『そのユキさんを困らせるような事をしない方が良いのでは?』

『うん、面倒だな』

『はい?』

何が?

クラス中の視線が、いきなり立ち上がったフィーに集中する。

「少し黙ってても」

「フィオナ・ジョーンズさん!!!!」

「……うん?」

フィーの言葉を遮って立ち上がったのは……奏音ちゃん???

「私の席ってさ、貴女たちの席より前なわけよ」

「……そのようだね?」

「でしょ?でさ、ぶっちゃけた話し、貴女たちのやり取りとかが気になるわけ」

はあ???

奏音さんが、奏音ちゃんの前を小さく引つ張って止めてるけど、この会話ってどこに行きつくの?

「……ひっ」

「いちやこらされると後ろを振り向きたくて振り向きたくて……つてわけで、今の間くらい大人しくしててくんない?」

「……」

助けてくれたのかな？でも、余計に目立った気がするのは何故でしょうか……

『……名前を聞いたところか？』

『その方がいいかもよ？白崎奏音。覚えておいてねー』

「……OK。授業中は大人しくしとくよ」

そう言いながら、距離を離して授業を受ける態勢に一人早々と戻る。何故今のやり取りでフィーが大人しく授業を受ける気になったのか分からない。だって、明らかに蘭さんとのやり取りの方が筋の通った理由だったのに。

まあ、フィーは昔から個性的で天邪鬼だった気がするけど……
昔……昔かあ……

『ねえ、フィー……』

『ん？』

『……』

『……』

『……あとでいい』

『……そうか』

授業を受ける為に、前を向いたフィーの横顔が近くにある。

髪型は昔と変えていないのか、少し長めのウルフカットでくせをつけてセットしてある。フィーの髪色は珍しい白金だから、その女の子にしては少しワイルドな髪型が凄く似合っていて格好良い。

昔はわたしの方が少しだけ高かった身長も、さっき見た感じだと今はフィーの方が高いかもしれない。

性格はあんまり変わってないかな。男勝りで……男勝りで……男勝り……うん。変わってないね。

気が付いたらホームルームの間はずっと、そうやって一つずつ昔の

フィーと今のフィーとを比較していた……………

ホームルームが終わって、後は帰るだけとなっても不必要に絡んで来ようとするフィーだったけど蘭さんと奏音ちゃんがいるせいか、さつき二人に注意されて自重してくれてるのか……………

「あ、あのフィーさんって呼んでもいいですか？」

「あーごめんね。オレの事をフィーって呼んでいいのは限られた人間だけなんだよ」

「そ、そうなんです。すみません」

「だから限られた人間になっってみる」

「……………！！！！！！！！！！キヤーーーー……………」

いや……………女の子たちに囲まれて楽しそうですね。

「じゃ、じゃあフィオナさん！質問なんですけどいいですか!？」

「うん？何かな??？」

「遠野さんは？」

「ユキ？」

「はい。親しそっだし、何より呼び方が……………」

「ユキはオレの特別」

「……………！！！！！！！！！！キヤーーーー……………」

いやいや、さつき蘭さんにもフィーって呼んでいいよって言ったよ??

「なあユキ」

あえて少し離れた所にいたのに何故わたしに振るかな……

「ユキにとつてもオレは特別だよな」

「……………誰がとくべ」

特別……………そうだね。フィーと……………

「なんせユキのファーストキスの相手は」

フィーと……………

「……………ええ……………！！……………！！キヤ……………！！……………！！」

フィーと……………ゆ……………う……………ま？

「ユキ！」

名前を呼ばれてそっちの方向を見る。

フィー……………

「ユキさん？どうされたのですか？」

ああ、視界が違ふと思ったたら無意識に立ち上がったみたいだ。
その足が……………震えてるのがわかる……………

「ユキ？」

フィーが一步こっちに近づく。

わたしは……固まったまま動けない……

何故普通に接する事が出来たの？

おかしいでしょう……

ファイが一步こつちに近づく。

わたしは……固まったまま動けない……

ねえ、だってファイが現れたんだよ？

おかしいでしょう……

ファイが一步こつちに近づく。

わたしは……固まったまま動けない……

ファイは……あの場所に居たんだよ？

おかしいでしょう……

ファイが一步こつちに近づく。

わたしは……固まったまま動けない……

ファイと優真とパパと……ねえ……

おかしいでしょう……

ファイが一步こつちに近づく。

わたしは……固まったまま動けない……

そんなこと全て忘れて接する事が出来るわけないじゃない！……！

『……何をしたの？』

『……ファーストキスか？取り敢えずは座れ』

『冗談を言ってるんじゃないのよ。貴女はなんなの？』

『……………こっちも冗談を言ってるんじゃない。今にも倒れそうな顔色だ。座れ』

確かに、気を抜いたら倒れ込みそうなくらい精神は不安定だと自分でも認識出来る。

『貴女もあいつの』

「ユキちゃん。顔色ヤバいから保健室行こう」

奏音ちゃんの声で自分の力が少しだけ漏れかけていた事に気付いた。ダメだ。ここにはまだ多くのクラスメイトが残ってるのに…………

「……………いい」

「ユキさん、保健室に行った方がいいのではないですか」

「大丈夫。ありがとう……………」

「ダメ！連れてくから！！蘭ちゃんは安東会長から呼び出しでしょ？こっちは任せといて」

「はい。申し訳ありませんが、宜しくお願いします。ユキさん、ちゃんと行って下さい！」

「……………」

今は、一人になりたい。

「で、だ。フィオナさん」

「……………なんだ」

『責任を感じてるなら着いてきて欲しいな』

『奏音ちゃん！なんで！？』

『ユキちゃん、いいからちょっと黙ってて…………』

奏音ちゃんが、わたしの意見を無視する事なんて初めてかもしれない……

『……ユキは着いて来られるの嫌みただけど?』

そんな、傷ついた顔しないで……

『貴女はユキちゃんの傍にいたいんでしょう?』

『そうだ。……そうだね。分かった。ユキには悪いが着いて行く』

『なんで、勝手に話しが ちよつ!』

「「「「……!!!!!!キヤーーーー!!!!!!」」」」

いきなり距離を詰めたフィーに姫抱っこされたわたしは、抗う統べもなく教室や廊下に残る生徒という生徒の視線を集め保健室に連れて来られた。

わたしとフィーの鞆なんかを運んでくれる奏音ちゃんと、一緒に着いてくると言った奏音さんも一緒だったから……目立つ目立つ……

「それで?これはどういう状況なのでしょう?」

「ユキの調子が悪いようで、休ませてやりたい」

「ユ、……遠野さん大丈夫ですか?確かに顔色が悪いようですね」

うーん……いつ聞いても、このみちるさんの話し方に違和感を感じる。

「見たら分かるだろう?横にさせたり出来る場所は無いのか?」

「もちろんありますよ。様子を確認していたのです。遠野さんベッ

ドへ」

『大丈夫かユキ?日本の医者はみんなこんなにとろいのか?』

姫抱っこのままベッドへ連れて行かれそうになっていたけど、その言葉にカチンと来ましたよ！

『おろして』

『まだふらふらだろう？』

『いいから！』

「遠野さん、取り敢えずベッドまでは運んで頂きましょう」
『だそうだ』

「……………」

しづしづ、大人しくベッドまで運ばれる。

『はい。有難う御座います。ベッドまで運んで頂いたら貴女に御付き合い頂く事ありませんし、お帰り頂いても良いですよ』

『おっと、英語は理解できたか。それは失礼。しかし…………』

『フィー……！』

わたしをベッドに下ろしたフィーが、いきなりみちるさんの顎を掴んで顔を近付けた。

『フィー……！！何するの……！？』

『何もしないさ』

寸止め？キスをするのかと思った。

『どうしたんだ？キスするとも思ったか？』

『そういつ冗談は止めて、その手を離して』

『怒るなよ。ほら』

両手を上げながら呆れるように、おどける様にフィーがみちるさん

から手を離す。

『名前は？』

フィーの手から逃れて、不愉快そうに距離をとったみちるさんに対し、フィーが質問するけど……

『貴女の方からどうぞ』

そうですね。普通はフィーの自己紹介が先ですよ。

『失礼。名前は— Fiona・Jones。フィオナ・ジョーンズ 転入生ってやつだね。2年1組に編入。ユキと幼馴染。これくらいでいいかな？ああ、貴女はフィーと呼んでも良いよ』

フィーの中で、どういう分別があるんだろう？

『……そう、幼馴染ですか。わたしは矢原みちる。この学校の……臨時養護教諭です』

『みちるね……』

何を考えてるのだろう……しばらくみちるさんをじっと見てる。観察してる？

『なあ、えっと……奏音だったっけ』

『何かな——？』

これまで静かに様子を窺っていた奏音ちゃんをいきなり呼ぶフィー。

『みちるはユキのなんだ？』

「「……はあ？」」

わたしとみちるさんは綺麗に疑問形でした。

「うーん。難しい質問だね。ユキちゃんは何も知らないし。お互いに無自覚だからさ」

『ふーん。教えてないのか？』

「貴女たちの仕事じゃないのかなーって？」

『……もつともだ』

奏音ちゃんとフィーの間では会話が成立している……なんで？

「か、奏音ちゃん……」

「うん？どうしたの琴音？」

「……な、なんか……ううん。なんでもない……」

琴音さん……なんか様子が変わる。フィーに対して怯えてるみたい。

『うん？なんだ？オレの顔に見惚れたか？』

『……』

普通、何か付いてるか？じゃないの??大体、見てただけだし……

『呆れた目で見るなよ。何故あの子が怯えてるか……か？ならあの子の力が弱いからと答えるな』

『どういう意味？何かしてるの？』

『いや、全くもって何もしてないさ。特に何もしてない』

「出来るなら抑えて貰えないかなーって」

『すまないが断るね。今日はマーケティング中だ』

何？どういこと？

「…………… 琴音。今日は先に帰りな」

「で、でも奏音ちゃ」

「大丈夫だって。私もすぐ帰るから！そうだなー、おやつにパンケーキでも作って待っててよ」

「言われた通りに帰った方が良いんじゃないかな？尻尾がお腹に入ってるぞ」

「フィオナさん。余計な事は言わないでねー」

『失礼』

琴音さんが完全に怯えてるじゃない！フィーのバカ！！

「…………… 分かった……………」

「気を付けて帰りなね」

「あ、あの奏音ちゃんも……………」

「うん。大丈夫大丈夫」

「…………… 矢原先生、遠野さん…………… あの、ごめん。先に帰るね」

「琴音さん、大丈夫？」

「大丈夫。…………… じゃあね」

ぜっんぜん大丈夫そうじゃなかったんですけど……………

『なんでそんなに睨んでるんだ？オレは何もしてないって』

『でもフィーが関係してるんでしょ？』

『勝手に怯えられただけ。むしろオレが被害者では？』

「ユキ様。フィオナ様の言葉は真実です。琴音の力ではフィオナ様の力を受け流すことが出来ないのです」

「どういう意味？」

『オレが力を制限してないから怖いと感じたんだろ。どうでもいい

が、奏音。話し方変わり過ぎじゃないか？」

「こちらが素です」

そんなホントにどうでもいい会話しないで！

『つまりは何が言いたいの？マーキング？なんなの！？だって、あんなに琴音さんが怖がってるのに、みちるさんは平気だなんて！』

みちるさんは不愉快そうではあるけど怯えてはいない。

werewolf《人狼》である琴音さんが怯えて、普通の人間であるみちるさんが平気なのはおかしいでしょ？

「それは、矢原先生の事はユキ様が無意識に守護しておられます。

私も琴音を守れば良いのですが、自分に気を張るのが精一杯で御座いますので……」

『マーキングって言葉の綾だから、怒るなよ。ユキの力の匂いがあちこちにあつたから、誤魔化すためにオレの匂いで上書きしてるだけ』

「それはBox《協会》の判断でしょうか？」

『いや、オレの判断で勝手にそうした。まだ広めるべきじゃないからな』

「分かりました。有難う御座います」

二人で勝手に会話しないで！

というか……！！

「今、Box《協会》って言ったわよね??？」

そう……！

「おや？みちるは何を知ってるのかな？」

「何も知らないわ！だから、ユキちゃんに関係してることなら知る必要があるの！」

「おっと、みちるもか。二面性がある奴多すぎだろうっ？」

「そんなことどうでもいいのよ！」

そうです。

「どうでもいいのか……で、なんだったかな？」

「貴女、Box《協会》の人なのね？」

「……………」

「そうだね」

……………つまりファイは……

「フィオナ様が来るとは想定外で御座います」

「みちるも奏音もファイと呼んでいい。本来ならもっと早くユキの元にはきたかったんだけどね。あの老体どもめ」

「わたしとしては自分より随分年下の子に呼び捨てにされるのはお断りしたいところね」

ファイは……

「なら何も問題ないな。オレはみちるよりも随分年上のようだ」

「はっ？」

「なんせ……あれ？今年で何歳だ？うー……ん？奏音??？」

「申し訳ありませんが、私に助けを求められましても……確か60年前の記録を拝見したことは御座います」

「じゃあ、そんなもんだね。まあ乙女に細かい年齢を聞くのは失礼
つてもんだ」

.....

「..... 貴女は何？マーキングって言ってたわね..... werewolf
f 《人狼》？」

それとも.....

「違うな。オレは」

フィーの目が赤く染まり口元に見覚えのある.....

「ヴァンパイアだ」

第41話（後書き）

キャー——！！！！

ユキちゃんとフイーの関係って……

キャー——！！！！！！！！

第42話(前書き)

予約投稿うまく出来てなかった…
説明回です。ようやく謎部分が分かる……のか？

第42話

「はぁー……」

静まり返った保健室の中で奏音ちゃんがゆっくりと息を吐く。

「フィオナ様、お力を御戻し下さい」

「ああ、悪い。そんなに怖がらないでくれないか」

無意識にみちるさんの身体を後ろに引き寄せていたわたしに手を伸ばす……

これは……誰？

「ユキ……」

「ち、近づかないで!!」

いつもの見た目に戻ったフィーの顔で傷ついたような表情しないで……振り払った手……わたしが悪いみたいな気分させないで……

「ユキ様。ユキ様もお力が……その…御戻し下さい」

「いや、もう少し見せてくれないか」

「は？しかしユキ様の」

「オレの力の匂いで誤魔化せるから」

落ち着けー！。落ち着けー！。ほら、大分コントロール出来るようになってきたんだから。

好きで見せたわけじゃないから！これ以上見せるつもりもないから！

「ハハハ。ユキは天邪鬼だ。でも……自分の目で確認出来て良かった。そうか……分かつてはいたが…覚醒したんだな……」

覚醒？それってやっぱり、わたしは元々ヴァンパイアなの？

「覚醒で御座いますか。では、やはりユキ様はDifferent color《覚醒者》」

はい？何それ？隔世なの？

「いや、違う」

違うんだ。

「……！？それではまさかユキ様は……！」

「……Predominant color《真性者》」

「！？？」

……誰に説明しに来てるの？全く分からない会話が進んでるんですけど？

凄い驚愕の事実！？みたいな感じで奏音ちゃんがわたしを見てますけど、わたしはどういう反応をすればいいの？

「ねえ、貴女達だけで会話をするの止めてくれないかしら。わたしたち……せめて本人であるユキちゃんにはきちんと説明するべきじゃない？」

「し、失礼致しました」

あ、ありがとうございます。

「そうだな。なんでも答えてやるよ、ユキ。その前に、みちるはここに居ていいのかな？」

「みちるさんには聞く権利がありますから」

「聞く権利……ねえ。まあ、いい。じゃあ何から聞きたいんだ？ predominant color 《真性者》についてか？」

そんなことはどうでもいい……わたしが聞きたい事なんて……

「……わたしは死ねるの？」

「ユキちゃん！」「ユキ様！！」

「………ああ。死ねるよ」

「フィオナ様！？」

そう……

「どうやって？」

「その質問をする意味が知りたいな」

意味なんて……

「自分が死ぬ方法くらい知っててもいいでしょ？」

あいつは………どうやって死んだの？

「何より先にする質問がそれか？」

「ヴァンパイアなんて化け物にも死があるって確認したいただけ」

「死……ね。人間が空想するよりもヴァンパイアの死なんて綺麗なもんじゃない」

綺麗な死なんて望んでない……

「灰になるのでしょうか？」

「みちる。ヴァンパイアが灰になるところを見たことがあるか？」

「いいえ。そんな場面に出くわしたことはもちろんないわ。でも、そういうイメージがあるじゃない」

「イメージね。じゃあ、ヴァンパイアは太陽の光で死ぬのか？例えば木の杭を心臓に射されれば？銀の弾丸で？にんにくが苦手でクロスが苦手か？」

「それは……ユキちゃんに限って言うなら太陽の光は大丈夫そうね。にんにくもクロスも……木の杭や銀の弾丸は分らないわ」

「みちるさん。そんなことじゃ死なないですよ。首を切ったところで生きてる化け物です。人間だったら生きる為に必要とする食事なんかを断ったところで、化け物だから生き続けるんです。例えば呼吸をしなくなったら生きてるんですよ……。だから知りたいんです。どうしたら死ぬるのか……」

「……どうして……そんなことが分かるの？」

「え？」

「……そんなことじゃ死ねないなんて」

「試したのか……」

……

「試してなんて……」

「……死……にたいの……？」

死に……たい……

「……やだなあ、みちるさん。死にたいわけじゃないですよ。あくまで知りたいだけです」

「……」

「そうだな。おもしろい例えだが分かりやすい。訂正するなら豹ではなくヤマネコだな」

猫とヤマネコとトラとライオン……
そ、そうなんだ。

「ユキちゃんの Predominant color 《真性者》と
いうのは何になるの？」

「大体的見当はついてるんだろ？」

珍種ってこと??

イリオモテヤマネコの……? ?

「……ライオンなのね」

「間違いなく百獣の王だろうな」

「そう……」

えっと……

だったら、なんでわざわざ豹をヤマネコに訂正したんですか! ?

「ライオンから順に当てはめるなら、呼び名はこうだ。

Predominant color 《真性者》

Primary color 《原色者》

Different color 《覚醒者》

Colorlessness 《退色》

「呼び方に意味はあるの？」

「そうだな、分かりやすい意味に置き換えるなら、一般的にはこうだ

Predominant color 《真性者》 新生ヴァンパイア

Primary color 《原色者》 減色ヴァンパイア

Different color《覚醒者》隔世ヴァンパイア
Colorlessness《退色》ヴァンパイアに非ず」
「なるほどね。それなら、なんとなく意味が汲み取れそうよ」

……そうですか？

「一番分かりやすいヴァンパイアがPrimary color《原色者》減色ヴァンパイアと呼ばれている。まあ、トラだな。親がヴァンパイアで自分もヴァンパイアというパターンだ」

「何故減色と？」

「親の力を超えることはないからだ」

「退化していくということ？」

「矢原先生、そうではありません。もちろん親である主ヴァンパイアの御力を越さぬ以上、進化とは言えませんが越さぬだけであり、同じだけの御力を継承される主が殆どで御座います」

「まあ、殆どつていうだけけどね。みちるの言う様にヴァンパイアとしての種がPrimary color《原色者》だけであれば、間違いなくヴァンパイアとしての能力は低下しているだろうなだからこそ減色ヴァンパイアと呼ばれているのだから」

「一番一般的なヴァンパイアで減色なのね……」

衰える力……

「そうだ。ヴァンパイアから生まれてくる95%くらいがこれかな」
「一般的なヴァンパイアが減色なら、退色とはどういう意味があるのかしら？」

「そのままの意味だ。ヴァンパイアから産まれたがヴァンパイアとしての力を持たぬ者。猫だな」

それは……

「普通の人間になるの？」

「そうだな……怪我が治りやすくて、運動神経が良くて、頭の回転が速くて、少し寿命が長い気がする……人間ってところだな」

そんな恵まれた普通の人間いる？

「それで御座いますね。例えば、人間側で言うと天才と言われる多くの方たちが、このColorlessness《退色》にあたります」

「天才？」

「普通の人間より優れた能力を持っているので、人間世界で共存しようとした場合目立った人物となるのです。歴史的な音楽家であったり美術家であったり建築家であったり……後は経済界で大成される場合や、政治家となられた過去も良く見られます」

「わたしたち人間は知らないだけという事ね」

「過去の偉人と言われる人物……そうだな、教科書にのっているような人物もかなりいるだろうな」

そこまで突出した能力を持ってしまったら、もう人間との共存とは言えないんじゃないかな……

「ヴァンパイアから産まれる残りの5%がこのColorlessness《退色》だな」

……あれ？

「それじゃあ、残りの2つはどうなるの？」

そう。わたしは一体何になるの？

「ヤマネコ……これはDifferent color《覚醒者》
隔世ヴァンパイアだな。人から産まれた野生猫だ」

「それは……親が人間なのにヴァンパイアになってしまふとい
うこと？」

「そうだ。Colorlessness《退色》後、人間との交配
を続けていくとその子孫は当たり前だがより人間としての能力に近
くなる。つまりヴァンパイアとしての能力はなく人間として生きる
事になる」

「先祖にヴァンパイアがいるけれど、自分自身は人間ということね」

「そうだ。その人間が産んだ子が稀にだが先祖返りすることがある」

「つまり、そのままの意味で隔世遺伝ということよね？」

「そうだな」

自分は人間だと思っていたのに化け物を産んでしまうの？

「ねえ……」

「なんだ？」

「その人は知ってるの？」

自分が化け物の血をひいてると……

「ユキちゃん、その人って誰の事？」

「Different color《覚醒者》を産んだ人間の事……
…か？なら知らない者も居ると答えるな」

そんな……

「それってどうなるの？生んでしまった方は？産まれてしまった方
は？ねえ、望まれて……生きていけるはずだったのに……」

「そうだな……自分が産んだ子でも憎めるのだろうな」

「そんなの当たり前だよ。だって化け物なんだから！幸福のまま愛する人との子供を産んだはずが、人間じゃなかったんだよ？愛せないよね？ましてや、自分の血にその化け物と同じ血が流れてるのかもしれない。もしかしたら、愛しているはずの人が化け物なのかもしれないって！！そんなの……酷過ぎる……」

「ユキ様、誰しもがそのようになるわけではありません！愛情を持つて子供を育てる親もいるのです」

「そうよ。人間だって我が子への愛情があるのよ！」

……………

「ユキ様、Different color《覚醒者》はColorlessness《退色》後の5世代までにしか隔世が確認されておりません。ですので、殆どの者が自分の氏素性を理解しております。Colorlessness《退色》した者も、やはりBox《協会》が管理しておりますし、そもそもBox《協会》に関連している職につく者が殆どで御座いますから」

そうなんだ……

「それは、仕方がない事なのかもしれないけど……なんだか人間にはなりきれないですね……」

「ええと……」

「どうして、そう思うのユキちゃん？」

「だって、Colorlessness《退色》っていうのは親はヴァンパイアなんですよ？自分だってかなり中途半端な存在です。完全な人間だとは言えませんよね」

「それは……そうかもしれないわね」

そくだよね。だって、天才とか言ったところで完全な人間じゃないから能力が高いっていうだけ。

「人間にもなりきれなかったColorlessness《退色》がBox《協会》に監視されながらも人間の中に紛れて……普通の人間だって偽って結婚して子供を作って……そうやって繰り返してその子供や孫たちはようやく自分たちの血が人間なのかもしれないと思ってもいつまでも不安は消えない……」

「不安かしら？」

「不安ですよ。だって、普通の人間になれたと思った頃に我が子が化け物になって産まれてくるかもしれないですよ？」

「ユキ。Different color《覚醒者》は普通のヴァンパイアであるColorlessness《退色》とは異なる」

「……生まれ方が違うってことでしょ？」

「そういう単純な事じゃない。Different color《覚醒者》は退色する」

「……………」

はい。一緒にしか聞こえませんが？

「意味が分からないわ。退色ということは一緒ではないの？」

「違う。Colorlessness《退色》で言っているのは名称だ。Different color《覚醒者》で退色と言った場合は現象だ」

分かりやすく説明してよ……

「つまりは、どういふことかしら？」

「現象での退色とは、ヴァンパイアとしての力を失う事を示している」

なに……

「それ……どうということ?」

「Different color《覚醒者》は退色して力を失うと人となり老いて死ぬ」

「それは、Different color《覚醒者》だけなの!?」

「……そうだ」

「そう……」

じゃあ、その方法では死ねない……

「ねえ。質問なんだけれど、退色ってどうすればなるの?」

「ああ、子をつくれればいい」

「子って……自分の子供ということかしら?」

「そうだ。但し、ヴァンパイアだけだね」

そんな……

「……子供はヴァンパイアに戻ってしまうということね」

「そうだな。Primary color《原色者》減色ヴァンパイアに逆戻りだね」

「補足させて頂きますが、Different color《覚醒者》でヴァンパイアとなるお子様は一人です。例えばお子様が3人おられても全員が人間である場合も御座います」

「ただし、その場合は子供が人間である以上、必然的に退色はしていないことになるな」

どうして……

「……て」

「どうしたのユキちゃん？」

「どうして、それで子供をつくろうと思えるんですかね……」

「どうしてって……」

「自分も人間の親から生まれたのに化け物で嫌だったはずなのに、なんで子供に同じ思いをさせようとするんですかね」

「……」

「ああ、自分が化け物じゃなくなるにはその方法しかないからか……」

「そんなことは考えてないと思うけどねえ？」

「そうよ。ユキちゃん」

「ユキ様、子供は大体が親より長生きするもので御座います。少量の血が必要という事は珍しいかもしれませんが、母乳を与えて愛情を注ぐということと置き換えて育てられます。Differe
nent color《覚醒者》は、そもそもヴァンパイアの血脈であるということ
を認識している親より産まれる事が多いのですから、一般の子らと同様の愛情を持って育てられています」

「そうよユキちゃん。そんな愛情をもって育てられたDiffere
nent color《覚醒者》が子供をつくるのに、ユキちゃん
の言っているような目的なんて」

「まあ、Differe
nent color《覚醒者》を産んだ人間
が血脈を知らなければ、大半は我が子を化け物呼ばわりして殺そう
とするんだがな」

ほら……… そうなんでしょ…

「貴女は黙っていて」

「いや、ユキは現実を知らないといけない」

「何故、貴女はそんなに余計な事を言うのよ」

「ジョシュが……Different color《覚醒者》だっ
たからだよ」

第42話（後書き）

ジョシユきたー！

久しぶりの登場ですね。

ホントもう久しぶりすぎて……ジョシユって誰？

第43話(前書き)

ぜひぜひ、ご意見、ご感想を

第43話

「パパが……何……？」

「ジョシュはDifferent color《覚醒者》だと言っ
たんだ」

「う、嘘でしょ！ジョシュ兄さんがヴァンパイア！？」

「ああ、そこからののか。ユキは知っていたか？」

「……………」

「ジョシュから何も聞いていなかったのか？」

「何も聞いてない……ママかパパがヴァンパイアなのであればパパ
だろうとは思ってた」

「……そうか。そうだな」

……本当は、パパもママもヴァンパイアじゃないって言って欲しか
った。わたしは優真にヴァンパイアにされただけなんだって……

「で、でもジョシュ兄さんがヴァンパイアだったなんて……………」

「ジョシュがヴァンパイアで何か問題があるのかな。ユキがDif
ferent color《覚醒者》じゃないのなら、必然的に両
親のどちらかはヴァンパイアなのだからね。茜は出自がはっきりし
ているから有り得ないだろう？」

「そう……なんでしようけど……驚いてはいるわ」

「というか、みちるはジョシュの事も知っているのかな？オレとし
てはそっちの方がおどろ　みちる……もしかして香山陽季の娘か
？」

「……………そうだけれど。父を知っているのかしら？」

陽季様……………！？

「ああ、知っている。あれは元気にしてい」
「フィー！……陽季様にまで何をしようとしているの……！」
「はっ？あ、いや別に何もしない。知り合いだと言っただろう？」
「わたしの周りの人たちに対して勝手に接触しないで……！」
「えっ、あの、だからだな……」
「ユキちゃん、落ち着きなさい。貴女は父とどういってお知り合いなのかしら」
「はぁー。いや、だからジヨシユがあいつに拾われたからな。もう40年程の付き合いになるか」
「あっ！……そうだね……」

そうか。そう言われてみれば、確かにフィーが陽季様の事を知っているもおおかしくはない。

「……ちょっと待ってくれるかしら」
「うん？どうした？」
「40年の付き合いなの？」
「ああ、そんなもんだらうな」
「それはおかしいわよ。文哉兄さんとジヨシユ兄さんは同い年だったはずよ。ジヨシユ兄さんが家に来たのが文哉兄さんが6歳の時だと聞いたわ。そして、もし文哉兄さんが生きていたら今年39歳……」
「……」
「どうして矛盾が発生するか……か？ならジヨシユがヴァンパイアだからと答えるな」
「あ……」

……
「そうだ。ジヨシユは陽季に拾われた時6歳なんかじゃなかった。

オレがジヨシユを見つけたのは60年程前だが、その時点で50年は生きていたよ」

パパは……ヴァンパイアだから……

「……それでも変じゃないかしら」

「何が？」

「40年は言い過ぎよ。文哉兄さんが6歳の時にジヨシユ兄さんが引き取られたのよ？それから単純に計算しても33年しか経ってな

そうということ……」

「気が付いたか？」

そうということ……なのだろう……

「ジヨシユ兄さんは、文哉兄さんが産まれる前から御父様と面識があったのね」

「そうだ。陽季が犯罪の横行する裏町で一人隠れるように生きていた6歳の姿のジヨシユと逢ったのは40年前。ジヨシユは一つの場所に長く住むことは無かった。それは、あいつが人でない事を周りに隠す為だ。もちろん、親しい付き合いの奴なんているわけがない。あいつは、周りの全ての人間を信じていなかったから……」

「フィーはパパをずっと見てたのね？それはBox《協会》の者として？」

「いや、そうじゃな。そうだな……Box《協会》の任務だからと言わなければならない……」

「貴女、この段階でも隠すようなことがあるのかしら？」

「……………」

黙り込むフィーは、少し悩んでから口を開いた。

「……私的な事で動いてはいけない」

「どういう意味かしら？」

「Box《協会》の任務は優先すべき事だ。例えそれが自分の感情と相反する事であっても……」

「それは、つまりジョシユ兄さんの事を監視したくはなかったということ？」

「いや、あの時ジョシユから目を離す事は出来ない事だった。それは間違っていない。出来るなら見守ると言って欲しいがね」

「そう。パパを見守ってくれていたの」

「オレとしては、そのつもりだったよ」

「ねえ、おかしくないかしら？」

「何がだ」

「Box《協会》はヴァンパイアを管理しているのよね？」

「……ああ」

「それなのに、ジョシユ兄さんはBox《協会》の恩恵を受けていないように感じるわ。違うかしら？」

「……」

「さっきの奏音さんの話だと、Different color 《覚醒者》も5世代までにしか確認されていないから、管理出来ているのよね？」

「……みちる。わかっていて聞いているのだろうか？」

「……」

パパは……

「……パパは何も知らない親から生まれたのね……」

「……そうだ」

「……」

パパは……愛された子じゃなかった……

「ジョシユの年齢はハッキリと聞いていないから何世代目の隔世なのか分からないが、5世代までの隔世なのは間違いないだろう」

「ジョシユ兄さんの年齢……ヴァンパイアは好きな年齢の姿でいられるのかしら？ジョシユ兄さんは子供の容姿だったわけだし……」

「通常なら人間と同じスピードで容姿も変化する。ただ、みちるが言った様に自身の任意の年齢で姿を変異出来る……細胞を置き換えると言った方が正しいのかな」

「そうでしょうね。貴女が本当に600年以上も生きているのなら、想像も出来ない姿でしょうし」

「そうだな。オレもそれは想像したくない」

単なる動けるミイラじゃない……

「ジョシユ兄さんは、何故子供の姿でいたのかしら。一人で生きていくには不都合が多すぎると思うのだけれど……」

「ジョシユは……力を使って子供の姿を保っていたわけじゃない」

「……どういうこと？」

「力を使わなければ人間と同じスピードで成長するのでしょうか？」

「普通はな……あいつが周りの人間全てを信じなくなった……その原因が何かなんて簡単に想像が出来る。あいつは……成長を……生きる事をやめたんだ……」

「……つまり」

「つまりパパは……家族に捨てられたのが原因で……」

「小さい時から徐々にヴァンパイアとしての力が覚醒していったのだろうな。自分が人間じゃないかもしれないなんて意識もなかっただろう。ただ、愛されるはずの親からも奇異の目を向けられ……恐れられ成長するしかなかったあいつが、感情と言うものを失うのは当然の流れだった。周りに対して隔離され、覚醒しているにも関わらずColor coating《補色》する事も出来ないヴァン

パイアの身体は……力が暴走する寸前まで追い詰められていたかもしれないな。そして……この世で一番自分を愛してくれているはずの親に殺されそうになって初めて気が付くんだよ。……自分が人間じゃなかったって……」

「そんな……ジョシユ兄さん……」

……

「ジョシユが人間として生きる事をやめ、一人で生きるようになって何十年……まあ50年程だとは思うが……それくらい経った時、やっとオレは……Box《協会》はジョシユを見つけた」

「Box《協会》はジョシユ兄さんの事を知っていて探していたという事かしら？」

「オレが探していたんだ」

「貴女が個人的にということ？何故？」

「ジョシユは200年前に死んだヴァンパイアの子孫だったからだ。

……知り合いのな」

「そう……なの……」

……

「ユキ様。大丈夫で御座いますか？」

「えっ？あ……な、何？」

「ユキちゃん……」

「ユキ大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ？それより、陽季様はパパがヴァンパイアだと知ってて引き取ってくれたって事？」

「ああ、ジョシユも最初は逃げ回っていたんだがな。あの陽季っていうのはなかなか面白い人間で、ジョシユが年を取らない事に気が付いても追いかけてまわしてたんだ。陽季の子供が6歳の年、オレが

引き取るか陽季が引き取るかの二択で迫ったんだよ。ジョシュは陽季といくことを選んだんだ」

「……フィーはパパの事が好きだったの？」

フィーの顔が少し悲しげに見えたからつい口が滑った……

「オレがジョシュを？ああー恋愛的な意味で言うなら無いから！確かに弟みたいだったな……家族にはなりたかったよ。まあ、あいつは野良犬で本当に誰の事も信用してなかったからな。オレには無理だったけど陽季がジョシュの家族になってくれて……良かった」

それなら……

「200年前に死んだヴァンパイア……私の先祖よね？フィーは知り合いだと言ったけれど……」

「ああ、知り合いじゃないな。……親友だったよ」

そんなに辛そうな顔しないでよ。聞きにくくなるじゃない……

「……」

「どうして死んだの？」

「……みちるさん？」

まるで、わたしの責を被る様にフィーに対して質問をするみちるさんが、布団の下でギュツとわたしの手を握る。

「ふんっ、みちるがその質問をするのか」

フィーの冷たい視線。でも怖くは無い。だって……とても悲しい目をしていたから。

興味本位で聞いてはいけない気もする。でも、先祖の死……ヴァンパイアの死という事実を聞いておきたかった。その気持ちを読み取ったかのように、もう一度強く握られた手。

「聞いてはいけないかしら？」

「どうして死んだ……か……それはどっちの質問かな？」

「どっちってどういう意味なの？」

「どうやって死んだのか……か？それとも……何故死んだのか……か？」

みちるさんの質問に対する回答のはずなのに、わたしの目を見て話すフィー……

「話せるなら両方教えて頂戴」

「……………」

みちるさんの方を向く事も無く、黙ったままわたしの目を見続けるフィー

強く握られた手……逸らしそうになる視線を無理やり固定する。

「ヴァンパイアが死ぬ方法は二種類だけだ。共に特殊な血が必要なものだけで、案外簡単なもんだよ」

特殊な……血？

あー、分かってしまった。わたしの血なんだね……。あの薄れゆく意識の中で見た優真の口元を濡らす赤い……。あいつはわたしの血を飲んだから死んだんだね……

「それは飲む必要があるの？」

「いや、体内に入れば問題ない。ただし、採血後すぐの血でなければ

ば意味が無いのと時間がたてば効力は無くなる。更に言うなら直接飲むならまだしも、それ以外で体内にいれるとなると量が難しい所だろうな。ヴァンパイアとして基本的に浄化能力があるから、それを超える分量が必要だ。所謂致死量だな。ヴァンパイアが死ぬなら死ぬ本人が直接血を摂取するか、採取後すぐの血を注射器なんかで直接入れるか、Box《協会》のColor reaper《救済者》《救済者》みたいな特殊な血を持つ者が意思をもってヴァンパイアに血を流しこむかだな」

「Color reaper《救済者》って何かしら？」

「みちるさん、きつとそなままの意味ですよ」

「そうだ。ヴァンパイアにとって死を司る者。特殊な血を持つ者が暴走したヴァンパイアを止める為に処分する……Box《協会》の重要な役割の一部だよ」

「……わたしは、その特別な血なのね？」

「ユキちゃん？」

「……そうだ」

「そう」

「ユキちゃんの血が……？」

「ああ。ユキはPredominant color《真性者》だからな」

「じゃあ、わたし自身が暴走した場合はどうやって止めるの？もう一つの特別な血？」

「別に本人以外の血なら有効だよ。だからColor reaper《救済者》が動くだろうな……優真も……ユキと同じPredominant color《真性者》だった」

「……そう」

あいつは……死を望んでたんだろうか……

「ユキちゃんの先祖は？」

「Predominant color《真性者》の血、それはDyeing blood《染色》でLast color《久遠者》となつた者には効力をなさない」

……………？

「……噛み砕いて言ってくれるかしら」

「噛み砕いて……ね。ユキやオレを消滅させることが出来る特別な血はPredominant color《真性者》の血だ」

「ええ。そのようね」

「Dyeing blood《染色》というのは……なんて言えばいいのかな……」

「番になるための儀式で御座いましょうか」

「奏音……間違つてないけど、もうちよつと柔らかく言えばいいと思うよ。あー、ヴァンパイアが一生を共にする相手と誓いを結ぶ儀式だな」

「私とユキ様が行つた契約守護獣の夫婦版と考えると頂ければ分かりやすいかと思ひます」

そんな罪深い行為……

「そう。それで？」

「Last color 《久遠者》とは、その契りを結んだ二人……まあ夫婦のことだな」

「なるほど。分かつたわ。つまり、一人身にはPredominant color《真性者》の血が有効だけど、夫婦者には効果がないということね？」

「正解。Last color 《久遠者》となつた者に有効なのはお互いの血だ……」

「愛した人の……血……」

「もちろん、通常ならそんなことはない。なんせ、Last color 《久遠者》は通常お互いの血でColor coating 《補色》するのだからな。ただ、お互いが理解し死を望み血を分け与えた場合……その者を殺す唯一の毒となる」

……

「ユキの先祖は……彼女たちは死を選んだ。1人はLast color 《久遠者》の血によって1人は……Color reaper 《救済者》が殺した」

「ちよつと待つて！何故なの？」

「Last color 《久遠者》を失った半身は、必ず暴走するからだ。だからLast color 《久遠者》がいなくなつた場合Color reaper 《救済者》が」

「違うわ、そうじゃない！二人はお互いの血で死ねるのではないの？」

「……」

「変質してしまうからで御座います」

「変質？」

「血を摂取するとヴァンパイアとしての身体から変質するのです。

見た目ではなく能力の問題で。ですの」

「そんなの、さっき言ったように注射器でもなんでも使えばいいと思っわ！」

「言ったはずだ！Last color 《久遠者》は、お互いが理解し死を望み血を分け与えた場合に毒となると……」

つまり……

「直接相手から摂取しないといけないんだね……」

「……そういうことだ」

「そんな……愛した人の血でしか死ねないのに……その機会も奪われるの？」

「そうだな。……だから殺すしかないんだ……親友でも助けられない……彼女たちが死を望むなら……殺してやることこそが救いだっただんだ……」

フィー……

「何故、その人たちはそこまで死を望んだのかしら？」

「時の長さの違いだよ」

「時？」

「彼女たちはLast color 《久遠者》となり6人の子供を産んだ。だけど、何故なのか産まれてくる子が皆Colorlessness 《退色》だった。自分より先に老い、自分より先に死んでいく。Last color 《久遠者》といえどDyeing blood 《染色》するまでは普通の人間だった親友の妻は、時の流れについていけなくなったんだ。段々と生そのものを拒絶するようになる。そんな愛する人を見てた親友は、自分を責めた。普通の人間としての生を永遠に縛り付けてしまった責任を感じていた……やがて6人目の子供が生まれ、その子がColorlessness 《退色》だと分かった時……何もかもが壊れた。子供をつれ行方をくらました彼女が10年後に暴走ぎりぎりの状態で見つかり、そんな彼女に死を与えた親友は……」

「……」

「面白い話でもないだろう？」

「話してくれてありがとう」

「フィーは……その親友の子孫をずっと見守ってるの？ パパもわたしも……」

「……200年前もジョシユの時も何か出来る事があったはずなん

だ。だけど、もう今更だろう？今度は後悔したくない。ユキは守るよ」

……………そう

「Colorlessness《退色》ばかりが産まれるのは体質なのかしら？」

「いや、そうでもないだろう。母体も変更していたしな」

「……………は？」

ちよつと待つて？

「どういう意味？」

「どういう？母体を変更？だが？これ以上砕くのか？」

「母体って……………」

「そこからか？子供を産む者？だな」

「変更？」

「いや、それは分かるだろう」

「……………どうやって！？」

夫婦って普通は、妻が妊娠するんですよね？ヴァンパイアってそんなところも違うの??

「……………どうって」

「フィオナ様。矢原先生もユキ様も、そもそもを御存じありませんので……………」

「ああ、そういうことか。ヴァンパイアのパートナーは必ず女性だ」

「……………は？」

「だから、男性体ヴァンパイアだと母体変更は無理だが、女性体ヴァンパイアの場合はどちらも母体となることが出来る」

「「は??」」

いやいやいや

「そもそも女性同士で子供なんて」

「人間同士でもあるまいし、出来るに決まってるだろう?、そうじゃなきゃ、今頃ヴァンパイアは絶滅してるだろうが」

「……………」

いやいやいや

「そもそも女性同士って」

「男の血なんか吸えるか?おい、ユキ…………お前まさか男に欲情するの?」

なんだろう…………もの凄く痛い子を見るその目…………

一見、まともなことを言っているようなこの空気…………

「い、いや欲情って…………」

「Color coating《補色》と性欲なんて同一だろうが。男の血でColor coating《補色》するヴァンパイアなんて見たことないぞ!」

な、なんだろう…………これって正論なの?

「い、いや…………あの…………」

「大体、ユキはみちるでColor coating《補色》してるんだろ?じゃあ、何も間違っていないじゃないか」

「え!?!はっ!はあ!?!」

思わず、みちるさんの顔を見るけど……真っ赤な顔を思い切り逸らされちゃったじゃないですか……！！

握った手を意識して、それでも離せなくて……
って……！！

「な、何にやにやして見てんのよ……！！……！！」

第43話（後書き）

うんうん。ジョシユパパの過去。

更に先祖の秘密ですな。

フィーは意外とツライを経験をしています。それでも……飄々と流せるフィーがカッコいいです！キヤーーー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1316bd/>

Last color

2016年12月21日07時33分発行